地震体験記録集

— 関東大地震・東南海地震・三河地震 —



東南海地震の被害（半田市）

愛　知　県

地震体験記録集の発刊にあたって

愛知県知事　仲谷義明

日本は昔から地震の多い国であります。そして「地震・雷・火事・親父」という言葉があるように、古来よりしばしば大きな地震に見舞われ大きな被害をうけてきたため、人々に最もおそれられる存在であり、科学文明が進んだ今日においても同様であります。

明治以降一〇〇余年の間で愛知県に大きな被害をもたらした地震としましては、明治24年の濃尾地震があり、その後第二次大戦の最中の昭和19年12月7日に東南海地震が、翌20年1月13日に三河地震が続いて発生しています。この相次ぐ二つの地震については、当時は戦時下という非常時のため被災状況は新聞にもあまり報道されず、記録としても不正確な面が少なくありませんでした。ようやく最近地震の研究が進み、地震の被害の範囲が予想以上に広かった事が解明されてきました。

今回の記録集は統計資料などにはあらわれない地震に遭遇した人達の貴重な体験を永く記録にとどめ、これからの地震対策に役立てることを目的として作成したものです。原稿については、52年6月から7月にかけて実施した作文募集の応募作品から選考したものです。その編集に当っては、本県に直接関係する東南海地震、三河地震の体験談を、なるべく多く載せるように努めました。地震の際の

県下各地の様子を〝なまの体験〟をとおして知っていただきたいと考えたからです。

この体験記録集を、これからの各防災関係機関や県民のみなさんの地震対策の推進に役立てていただくことを期待すると同時に、貴重な体験談をお寄せいただいたみなさんに謹んで御礼申し上げる次第です。

地震体験記録集



目次

東南海地震・三河地震の体験

〔名古屋地域〕

私の地震体験……加藤　鉦一　9
私の地震体験と提案……河原　信雄　11
戦中の地震……板津　秀雄　12
私の地震体験……宇井　留吉　14
私の地震体験……田中　勝　15
私の地震体験……松尾智慧子　17

〔尾張地域〕

私の地震体験……佐藤　みね　20
私の地震体験……菊谷鈴太郎　21
東南海地震……服部　玉枝　22
東南海地震……伊藤　芳子　24
私の地震体験……横井　鈴子　25
私の地震体験……有馬ゑみ子　27
私の地震体験……佐藤　英雄　28

〔知多地域〕

私の地震体験……黒田喜代子　31
地震の思い出と母……中野　穣　33
東南海地震体験記……山上ちさと　35
私の地震体験……吉田　弘　36
私の地震体験……大槻　花子　38
私の地震体験……宮田　珠江　40
私の地震体験……石井　篤子　41
私の地震体験……松下美智子　43
東南海地震……祖父江茂子　44

〔西三河地域〕

地震の体験記と心構え……鈴木　敏子　47
三河地震の思い出……青木　恭子　49
三河地震の思い出……尾崎　光男　51
私の地震体験……大山あや子　53
三河地震の思い出……寺田　鈴代　54

三河地震体験記……近藤　良美　56
三河地震……鈴木　巖　58
私の地震体験……深見作二郎　60
私の地震体験……戸軽　ヒサ　61
私の地震体験……塩谷　都　63
私の地震体験……本郷　幸子　64
地震はおそろしい……高木　栄一　67
私の地震体験……村松　重子　70
東南海地震・三河地震……蜂須賀幸平　72
地震を想い出して……神谷　菊治　74
地震を想い出して……村井美恵子　76
私の地震体験……加藤　たけ　78
私の地震体験から……岡田　倉一　79
机で助かった私の命……磯村千代吉　80
三河地震の体験……高原　源一　82
私の三河地震体験……松本　清　85
私の地震体験……森　治子　86
私の地震体験……澤田　幸雄　88
地震体験記……柵木かづ江　90
東南海・三河地震……西村　キヨ　92
波打つ大地……高村　晃　95
私の地震体験……丹羽　政数　97
私の地震体験……磯谷　清市　99
三河地震と学んだこと……神谷　チヨ　101
地震の思い出……蜂須賀たね　104
地震の思い出……木村　喜代　105
私の地震体験……加藤千鶴子　107
三河地震……宮地　観法　109
私の地震体験……長坂　令子　112
三河地震……杉山小夜子　114
私の地震体験……外山　昭　116
三河地震の体験……金田　一　118
私の地震体験……平井　昭雄　119
中心を外れた体験をして……月山きよの　121
〔東三河地域〕
地震体験談……小林　市助　124
私の地震体験……古井たつ子　125
私の地震体験……吉村千代子　127

私の地震体験……木村　瑛子　128
私の地震体験……鈴木復克児　129
東南海地震……内田　さわ　131
私の地震体験……井土与次郎　133
東南海地震……小林　千代　134
私の地震体験……瀬尾　久子　137
私の地震体験……野村　徳平　138
東南海地震を憶う……伊藤　芙美　140
三河地震回顧……伊与田貴保　142
私の地震体験……伊与田広子　144
三河地震の体験……本多　崇　146
私の地震体験……熊谷可寿ゑ　148
〔愛知県以外の地域〕
私の地震体験……市川　志な　151
地震時の失敗……伴　功　153
私の地震体験……石神きよゑ　154
私の地震体験……氏名不明　156

関東大地震の体験

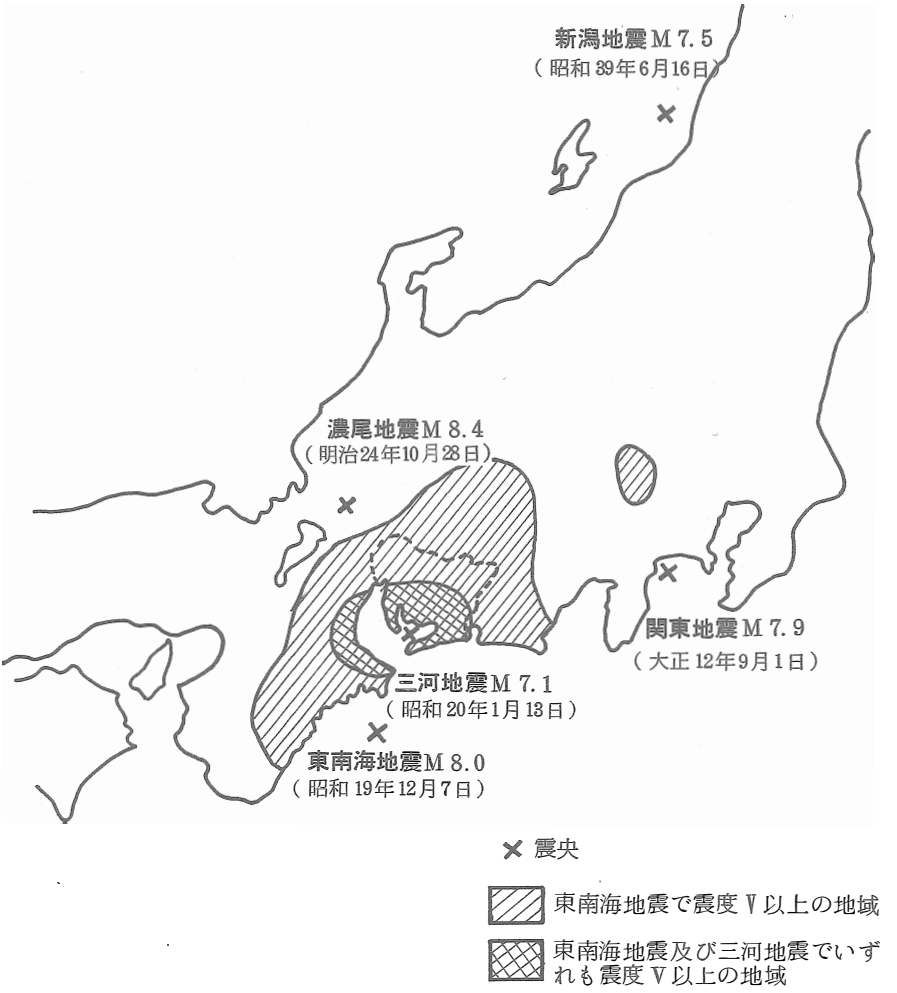
関東大震災の思い出から……榊原　靖子　158
関東大震災のおもいで……柴本　勝弥　159
私の地震体験……濱地　光一　160
関東大震災……井澤　朝次　162
私の地震体験……福田　武夫　164
私の地震体験……伊藤　春生　166
関東大震災体験記……宮地　晴吉　168
関東大震災の体験と意見……渡辺明次郎　171
関東大震災体験記……井上　赳　173
私の大震災体験記……島崎　歳壽　176
私の地震体験……足立知栄子　178
私の地震体験……栗田金三郎　180
関東大震災の想いで……都筑　芳雄　182
私の地震体験……足立　弘　184
私の地震体験……武内　孝　186
関東大震災体験談……宇井　ちゑ　188
大正十二年関東大地震……藤原　とみ　190
関東大地震……伊藤　政吉　191

私の地震体験……川島　秀則　192

その他の地震の体験

私の地震体験……細田　佳世　195
私の地震体験……小田島よし子　197
新潟地震……市川　吉郎　198
私の地震体験……杉山　昇一　200
私の地震体験……栗原　幸子　202

この記録集に載っている主な地震の震央と震度



東南海地震・三河地震の体験

〔名古屋地域〕

私の地震体験

加藤鉦一
（名古屋市瑞穂区）

昭和十九年十二月七日午後一時半頃ではなかったか。もう三十二年も前の事であるから時間は確かでない。私は市役所前から市電東橋行きに乗って熱田駅に向っていた。電車が東別院に止ったとたんぐらぐらとえらく震動した。市電は日中のことでもあり全員腰掛けていたが市電の運転手がブレーキ操作を誤って震動したと思ったが、外を見ると東別院の東門と土塀がゆれている。高い門と土塀とのすき間が二〇センチぐらい空いたり塞がったりしている。これはおかしいと思い反対側を見ると住宅の屋根が波を打っている。これはかなり大きい地震だと思った。市電を降りて歩道の柳の下まで行ったとき又余震であろうかゆれた。私は柳の木を摑んで立っていた。戦争中の事でもあり各々住宅の玄関先に防火水槽が有ったが波を打って外にこぼれ出ている。暫く様子を見て市電に乗ったが当然のことながら停電である。私は学徒動員中で許可をもらっての外出であり職場に帰らなくてはならない。動員先は知多郡武豊町に有る山二航空機製作所である。熱田駅までは歩くしかなかった。市電に沿って歩いた。沿線の商店や住宅の人々が道路に出て興奮さめやらぬ面持で隣り近所の人々と囁き合っているのを横目に見ながら歩いた。駅に着くと貼紙がしてあり地震のため列車の運行見込は立たないと書いてある。さてどうしよう。暫く待合室で思案していた。汽車が駄目なら当然名鉄も駄目である。まさか武豊まで歩いて行くことも出来ずやむなく瑞穂の自宅まで歩くこととした。我が家は平家建の三戸長屋であり地震には強かったのであろうか。壁にひびが入ったぐらいで何ともなかった。翌日市電は開通していたので笠寺駅に行ったが汽車は開通しておらず又家に帰った。当時新聞は戦時体制のタブロイド版一枚

であり地震の様子はほんの少ししか触れられず情報は全くわからなかった。汽車の開通を知って早速武豊町に向った。我々学生の宿泊所であった武豊町長尾の皆満寺本堂は正面から見た限りでは何ともなかったが内陣の裏側は梁が折れ屋根も落ちている。この地震が若し夜であったならば私達は死んだか大けがをしたんだと思った。ここの宿泊が不可能となったので会社はここから約二、三百米離れた蓮華院という寺を宿舎とした。今度は本堂でなく庫裡であった。工場の様子は飛行機の主翼組立工場の組立治具が狂ってしまい組立不能となっている。この治具の水平をやり直すため基礎まで堀出して再据付をすることになった。

蓮華院で年が明け昭和二十年一月十三日午前四時頃であったと思う。突然ゴーという地鳴りがし激しく揺れ動いた。私は寝巻き姿で夢中で境内に飛出した。建具が倒れガラスが破れる音がする。外に出ても立っておれず境内で四つんばいになった。同僚も皆外に出ている。余震が多く地鳴りがしたと思うと東南の方向、碧南、幡豆と思われる方で青白い閃光を見た。閃光のあと遠雷のような音と共に揺れ動いた。とても家の中に入ることが出来ず暫く外に居たが一月という寒い時に何時までも寝巻き姿で外に居る事も出来ず家の中に入ったが朝まで睡ることは出来なかった。

武豊町の中心街とも言うべき師崎街道沿いの商店が一夜にして二階建が平家になっているのが二、三軒有る。これは一階が店舗で柱が少い家が二階梁の下で柱が折れてしまったものである。二階建は一階が危険で二階は安全だということを実感として味わった。倒れないが相当傾いた家もあり危険なので道路の真中を歩かなければならなかった。工場に着くと先月の地震による復旧が進まないのに又地震で組立工場以外の機械基礎まで狂ってしまい機械仕事が出来なくなってしまった。半田市山形新田にある中島飛行機工場では我々と同じ学徒勤報隊が大勢死傷したことを口伝えに聞いたが特高警察や海軍監督官がうるさいから地震の話はするなと言われた。

街には大きな味噌樽が横たわり、むしろを下げて今晩からの仮住いとするようにしてあるのが四つも五つもあった。私達も蓮華院は住むには危険ということで、民家で比較的被害の少い家を会社が探して又も移ることになった。丈の低い二階建であり壁量が多い為か傾きも少く安心感は有った。出征兵士の家で老母とお嫁さんに孫の三人家族の家であり三月の卒業近くまで

ご厄介になったが非常袋は必ず枕元に置いて寝た。

この二度の地震体験から地震には敏感になり少しの振動でも飛起きるようになった。よそで泊るときも出来るだけ二階に寝させてもらうことにしている。特に下が店舗等で柱や壁が少い建物は補強が必要であることを痛感している。

私の地震体験と提案

河原信雄
（豊田市）

地震!!これは非常にショックなひびきがあります。私、六十四年の年月の間に関東大震災、兵庫県の城崎、奥丹後の大地震、三河地震等々、その時その時のこわかった記憶がすぐ浮び上ってきます。

大正十二年九月一日正午前。当時神戸市に在住して居ましたが小学校四年生の時でした。御飯を頂こうと思って、食べかけた時に家がゆらゆらとゆれて来ました。その時は地震ということも知らなかったけれども、これが地震かなと思って表へとび出しました。今の地震の震度マグニチュード二くらいのゆれ方だった。

夕方夕刊を見ると東京が大地震で大火事で大変なことになったとニュースが報じられていました。当時、子供でしたので、お昼御飯を食べていた時、地震があったのに大火事になっているとニュースで報じられたことが何かふに落ちなかった。が翌朝の新聞で判ったことですが、当時はお昼にはお茶をわかす為、薪又は炭火でもって湯をわかしていました。

丁度火をおこした時に家が倒れる。火が燃えつく。火事になるというわけで十万の人が焼け死んだそうです。今では地震の時には「火元を消せ」「ガスの元栓を切れ」、これは子供達にもしっかりと教えておかねばならんことです。

東京の大地震がよい手本でした。その後地震には何度か出あいましたが、先ず火を消すこと、二階にいる場合は、あわてて二階から飛び下りないこと、足を折るから止む迄辛抱すること。

昭和十九年十二月七日午前九時頃三河幡豆地方に大地震があった。この時は三菱電気で仕事をしていました。ぐらぐらっと来た。そら地震だとばかり電源も切りこなしに逃げた人も多くいましたが、大きな機械のそばに居った方が安全だと考えてゆられながらスイッチを切って回ったこともおぼえて居ます。

倒れない様なしっかりした機械の傍で居れば安心だ。丈夫な倒れない様なものにつかまること。その当時、幡豆地方の家の倒れた人達に伺った体験談によりますと、地震の時、敷蒲団や毛布等を頭からかぶった為柱に毛布やふとんをおさえられて非常に難儀をしたから座ぶとん位ならよいが、頭に物が落ちると危いからとて毛布やふとんをかぶるのは考えるべきだということでした。

地震は天災地変と云われております。昔からの伝説では天災地変は神様の残念ばらわれて、人間共に神罰を与え給うとありますから、皆様御一同様今後駿河湾地震説がありますが、これも造化の神様の御神意に副い奉る様な心天の恩地の恩夫の恩妻の恩親の恩子供の恩国の恩世間様の恩あらゆる物の恩に感じて、ひくいやさしにすなお な心にならさして頂きましょう。そうした恩恵に喜びの味わいを感じさして頂かして御神意にかなったならば安心の世渡りがさして頂けるのではないでしょうか。

戦中の地震

板津秀雄
（江南市）

戦争疎開が進んでいるとはいえ、まだ、名古屋の市街地は健在だった昭和十九年十二月七日ひるすぎのことである。

大空襲を予期しながらも、市民は平穏に暮していた。そして、戦勝を期待し、ひたすら兵器増産に汗していた。私もその一人で、東邦瓦斯の軍需工場関係専門であるガス作業職だった。

その日、あと二、三分で本社正門へたどりつく道路上（中区流町通り）で、電柱のゆらぐのを見た。北風が強いけれど、これはおかしい。足もとが不安定になってきた。私の数メートル先を荷馬車が、軍需資材を満載していて、馬がぴたりと停った。そして、四本の脚で大地をふんづけたまま、左右に揺れていた。狭い道路をはさんだ両側の民家、町工場から、人びとのさけび声があがった。「地震だッ。大きいぞッ。」

屋根瓦が波打っている。ずり落ちそうに流れたのもある。軒先へ重なり、雨ドイにひっかかったカワラさえあった。私は、とっさに防空ズキンをかむった。これは、現在のヘルメットと

同様な頭部保護の役目をする。濃尾地震に遭遇したおやじが、常々、私たち息子に戒めていたことばが脳裏をかすめたのだった。いわく。「地震のときは、なによりも頭を用心しろ。カワラが落ちてくるから、座ぶとんをかむって避難しろ。」口ぐせにしていた。そして、万一の家屋倒壊に備えて、いつも枕もとに、ノコギリ、ナタなどを置いて終生これに従っていた。おやじの教訓を活かしたわけである。余震がありそうだが、私はガス会社へ向った。

びっくりした。巨大なガスタンクからは、滝さながらの水が落ちていた。タンク昇降のための継目に満たされている大量の水が、揺れ落ちているのだ。まるで、タライの水を傾けたみたいな有様だ。地震の驚くべき仕掛けを見せつけられた思いだった。ガス供給は、たちまち停止処置がとられた。導管が破壊されては、名古屋全市が火の海になってしまう。都市ガスで生活している男として、当然の心配であった。

私は即刻、自分が担当していた住友金属名古屋工場へとんだ。市電は停まっていて、自転車を漕いだ。災害時での自転車こそは、なによりの脚であった。

工場敷地へとびこんで、私はびっくりしてしまった。構内いたるところで、水が噴出していた。ガス本管からも、濁水が噴き出しているという状態。つまり、埋立地である敷地軟弱の悪条件のため、ガス、水道の太い導管がぶっちぎれ、水の圧力によって、寸断されたガス管へ、砂まじりの水がどっと流れこんだのだ。とても手がつけられぬ洪水ぶりだった。復旧作業に着手しようと、幾日かかるのか、メドは立たなかった。飲み水すらなく、あくる日から、水筒を提げての復旧工事屋になっていた。工場生産も完全にストップし、勤労学徒ですら、仕事に手つかずだった。

天災は、どこまでも意地悪である。

この震災から一か月あまりの翌年一月十三日、またも地震に見舞われた。そのとき私は、松坂屋南側にあった森小児科医院の、奥室で寝泊っていた。ガス会社の寮としてである。

夜明け近くぐらっときた。大きな地震だ。石灯籠のぶっ倒れる音がした。消灯して就寝中だったので、仲間数人もたいそう狼狽したことを憶えている。戸、障子をあけるのに、さんざん苦労して、とにかく屋外へ出たときは、地震はやんでいた。しかし、大地震にはちがいなかった。障子の倒れたのさえあった。

私は、職務上から南部工場地帯へはしった。倒壊した家屋が

随所にある。二階建ての家は、階下がペシャンコでその上に、二階がそのまま乗っかかっている。人間で例えたら、ひざを折った格好だ。地震の際、二階からは逃げださなくても安全だ、という事実を見た。

埋立地を拡張して造成された三菱航空機構内へきて、私は再び目をまわした。壊滅状態の荒れようだ。レベルを生命とする諸機械が、傾いて、使いものにならぬという。地盤のゆるさがこの結果を生んだらしい。いくつかの防空壕がぶっつぶれ、圧死者が出たと教えてくれた。悲惨……。

ここで私は思う。

地震は、人間の思考を無視してやってくる。そして、時期を選ばない魔物である。飛躍していうならば、文明社会を根こそぎ破壊するために、人間の不意を衝くのだ。

現在の市民生活は、電気、石油に依存し、コックひとつひねれば、ガス、飲料水が無尽蔵に出てくるものと信じている。だが、ひとたび大地が大揺れしたら、すべての供給設備は寸断されてしまう。その恐怖が、あすはあるまいと誰が保証しようか。

私の地震体験

宇井留吉
（豊田市）

昭和十九年頃かと思いますが、当時、私は名古屋市中川区愛知町に住んで居りまして地震名ははっきりおぼえて居りませんが、東南海地震とでも申しましょうか。まずドド……と大きな音がしたと思ったら、グラグラと来て、家の中が昼間にもかかわらずかべの土けむりと棚から落ちる音で一ぺんにじごくの中になった。家内は子供二人かかえ、私も子供二人かかえて外へ出るのにもたもたして五分位かかったと言うのは、足を取られて足が進まない。丁度馬のせなかの上をあるくようなふうになって歩けない。やっとのことで夫婦、子供四人が外に出た。隣りのトーローがたおれる。ドブ川の水が波が出来て道路は水びたし。早速自宅前空地に隣組同志が無事を祈って電柱にとらまってふらふらしていると、大声で馬鹿野郎と町内会長。上を見る。今にもトランスが落ちそう。いそいで電柱をはなれ地面にしがみついて居った。今考えれば、戦争と食料がなく追打ちをかけて大地震。日本には神も仏もないものかとつぶやいた。

永かった。三〇分たったかと思いますが、ようやくおさまったので家の中。足のふみ場がない。かたづけるのに二、三日かかりました。後で冷静に考えて見るのに、地震対策として、

(1) あわてずおちつくこと。

(2) 外に出る時は、必ず頭にザブトンか、なければ鍋でも良いからかぶって出る。

のが安全対策の一つではないかと思いました。

私の地震体験

田中勝
(豊田市)

東南海地震

一、名古屋市南区明治聯区内の体験

昭和十九年十二月七日午後一時三十分頃南区明治聯区内に於て南警察署並に明治警防団の計画に依り、防空訓練が実施される瞬間、団員連呼の訓練警戒警報発令を伝達に区内へ出発する。其時、突如、薄気味悪いゴーと云う音と共に土煙が上ると、同時に地面が上下さらに横振れの地震に遭遇し、足場を取られ立って居る事が出来ない有様であった。然し、我々は防空訓練を中止し、防災体制に切替え被害を最少限度にするため、当時、私は当団警護部長並に警察補助員部長でありましたので、補助員を早速南警察署へ災害復旧のため派遣し、残る部員四十五名を聯区内の混乱防止のため交通整理及被害の状況に基き救援に聯区内に出動を命じ、そして消防部は火災の警戒、工作部は負傷者の救護及び倒壊家屋の復旧に当る。然し、当日は聯区内の防空訓練のため各町内会に於ては、その準備に各戸に五斗五升の水槽に満水及び防空に対する用具が完全に用意されていた事と活動に対する服装、男子は巻脚絆に鉄兜、女子はモンペ姿に防空頭巾での出で立ちで待機して居た事もあって、当日の地震により屋根から落下する瓦や其他の物を防ぎ、被害を食い止めた事は、本当に有難いと思いました。尚、私はこの地震に対する被害調査の記憶を思い出しますと、当聯区内の全壊は六戸程度、半壊は傾いた家及び屋根瓦の大部分落下した家、そして傾いた家合計約四百戸を出し、それから死傷者は死者一名、当区二条町の二階建木造住宅で地震と共に二階に居た婦人が驚きの余り、階段を下る途中一階が倒壊し圧死する事故。私は、区内の被害の調査中現場に行きましたが、二階は破損せずにそのま

まだった。然し、死んだ本人も震動の静まる迄待って居ればよかったと思いました。そしてこの度の負傷者は割合に少なく数名だったと思います。

これも偏えに防空訓練の御蔭です。次に警防団本部としては、その夜直ちに罹災者のために食事の炊出しを行い、町内会を通じて分配を行う。その後も余震相変らず、今回の地震に対し矢張り各自の非常事態の心構えが今の時代に昔の様な体制や組織が欲しいと思います。

二、我が家の体験

私は明治区二条町に居住して居りました。地震発生時には私は警防団本部にて防空訓練のため出動して居り、家の事は妻に一任して居りました。当時、子供は国民学校に長男二年生と次男一年生、それに三男五才、四男三才と十二月三日に出産した長女と妻の六名が家に居りました。然し、妻は出産しての五日目、十二月七日予想もつかなかった地震。私は防空訓練のため留守だった。通学中の子供は、その日は昼迄で家にいての出来事。急に起る上下横振の地震。その時の模様を話してくれた時、本当に子供を良く守ってくれたと私は感謝しました。それは次の通り。

突発した地震の時まず上の子供二人は地震と同時に隣組の皆さんの誘導で避難場所へ、そして妻は五才と三才の子供が泣き叫ぶのを抱きかかえ避難所へ、それから生れて五日目の子供を助けるべく家に来た時、屋根の瓦が落下する中に家の部屋に寝て居る子供をふとんに巻つけ避難所へ。幸に子供共々怪我もなく無事に妻と五人の子供が揃ってほっとし、妻は嬉し泣きに叫んだそうです。然し、生れて五日目の子供を助けに家迄来た時、中々家へ入るのに落下物で危険で到底駄目だと諦めたが、妻は子供のためにと自分の身を思わず救い出したそうだ。

それから後私が部下と共に聯区内を被害調査中、我家へ立寄り以上の出来事を妻から聞いた時には本当にその行動に対し心から感謝しました。その当時から早いもので三十年余を過ぎ、現在子供六人と妻も元気に暮して居ります。

三河地震

昭和二十年一月十三日(土)午後七時頃警戒警報下地震勃発当時私は警防団本部の監視所櫓上にて防空監視中の出来事で櫓上が揺れて一寸身体が心配だったが、然し空襲警報を予期し、暫く

場所を離れなかった。燈火管制中なりしも被害が多いと判断し防空監視を部下に交替し被害の状況に基き倒壊家屋及負傷者の救護復旧に対し警防団員を一部本部に待期させ、他の団員に非常事態に対し適切なる処置を行うため区民の混乱を防ぐと共に、被害場所の管制を一部緩め復旧救護に務めることとし、各町内会に協力を願い区民一体となって救援活動を開始す。

今回の当区の地震の被害は倒壊三戸、死者なし、負傷者数名、半壊並に水に浸かった家百五十戸余、火災なし。その内区内で倒壊家屋の中に人と馬が居る事が解り管制下に於て堤灯を使って警防団員の必死の作業に依り、無事救出す。それから豊郷町に於て地盤が沈下し家屋約十戸が九尺程度沈下し、その附近一面水が湧き、道路は一尺以上の水海となり復旧に半月余かかる。そして当地震に於ては、被害は水の方が大きかった。東南海及三河地震共に区民及警防団員の防空訓練の賜ものと私は痛感しました。

私の地震体験

松尾智慧子
（尾西市）

昔から怖いものの筆頭にあげられてきた地震が近くやってくるという。そんな話を聞くにつれ、幼い頃のあの恐ろしかった体験が甦ってくるのです。

何時であったか年代もはっきりとは覚えていませんが確か終戦の一、二年前だったと思います。

まだ小学校の低学年だった私は、その日、朝から発熱して臥っていた姉の傍らで一緒に横になっていました。丁度午后四時頃だったか、突然、グラグラと激しい震動が私達を襲いました。「あ、地震だ」戦争中の事で空襲の時の避難訓練は充分しているものの、地震の時の注意などは聞いたこともない私でしたので、とっさに外に出ようとしました。揺れが激しく、歩く事も出来ません。それでも開けにくくなった障子戸をこじ開け這う様にして外に出ました。

まだ寒い季節でしたので横には煉炭火鉢が置いてあったのを思い出し「誰か火を出して」「誰か火を出して」と大声で呼び、

助けを求めました。大人でも歩くのは困難な位の揺れでしたが、近所の叔父さんが急いで駆けつけて、やっとの思いで火鉢を外に出してくれました。

屋根の上では瓦がガチャ、ガチャ、音をたてて動いていたのが印象的でした。何分ぐらいたったでしょうか、気がついた時には地震は終っていました。長い地震でした。

家の中に入ったら時計は止まり、棚の上の物は落ちて、ちらばっていました。

その日、母は婦人会の勤労奉仕に行っていましたが、夕方暗くなっても帰って来ません。心配していますと夜中の十二時頃くたくたに疲れはてて帰ってきました。母は南区の大同工場に行っていたのですが、その附近は二階建◐家などがバタバタと倒れて居り、地割れもあり、市電も勿論不通になっていたとかで、南区から瑞穂区まで歩いて帰って来たそうです。

その話を聞いて、改めて大きな地震であった事にびっくりさせられました。その上、その日から四、五十日も余震が続き、不安な毎日を過ごしました。

学校では、地震が始まると出口に近い人はすぐ戸を開けて、防空頭巾をかぶって、机の下に潜る指導を受け、又その機会も度々でした。体操の時間で地震があったなら、運動場にある大きな楠の木の下に集り、通学中はなるべく家並みを離れて、竹やぶや大木の下に隠れる様、指導を受けたものです。

夜は夜で何時、襲ってくるか分からない地震に家が潰れて下敷きになる恐れがあるので、トタンで屋根と壁をつけただけの倒れても差障りのない、焚き物小屋で、まだ火の気の欲しい寒さを凌ぎながら、皆んなで転寝をする日が続きました。布団の中から上を見上げるとトタンの釘穴からお星様が見える佗しさが、今でも思い出されます。

あの立っていることも、歩くことも出来ない程大地が揺れる心細さと恐ろしさ。

毎日、余震に見舞れて過ごす日々の不安は、体験したものでなければ分らないでしょうが、せめて地震とはこんなものであるということを少しでも知って貰い、近く起るという地震に備えて、万全の心構えをして戴きたく思い、最後に私なりに気付いている事を連記致します。

一、先ず地震が始まった時は、火の元を第一に気をつける。

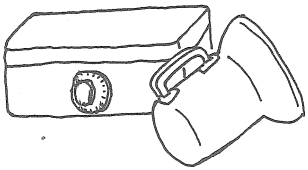
一、二階があれば大きな机の下とか、四方柱のある押入の戸を開けて、布団などをかぶっている。

一、外に走り出る時は、布団、頭巾等をかぶって瓦等の飛ぶのを防ぐ。

一、地割れ等があるので、なるべく足下に軽いものを穿く。（運動靴等）

一、常に、貴重品、電池、ラジオ等の用意をしておく。

一、外出中は先々の指導に従う。





半田市山方新田の被害（東南海地震）　―半田市役所提供―

〔尾張地域〕

私の地震体験

佐藤みね
（津島市）

私の生れた年に関東大震災があり、目だけきょろきょろあけて電気の動くのを一生懸命みていたとか、死んだ父が、母の止めるのもきかず、家の中へ助けにいった話は地震の話の度に聞かされる物語りである。そして成人して三河地震。電気がパッと消えて、ガラガラ、家のガラス戸は全部われてしまった。戸が、ばっしやんばしゃんと倒れて硝子がガラガラ、出て行くにも出ていけない。座っている丈が大変で、出るにも出られない。死んでももうよい。家と共に死ぬんだと主人と共にその場にべったり座りこんでしまった。家が50㎝位前に傾いてしまった。あの頃は人がなくて、なおすのもなおす人がいなくて困ってしまった。二年ばかりほかっておいて、暫くしてから建起しをして貰った。そうそう、その時裏の二階は物凄い音でこわれてしまった。私が北小の先生をしていた時で教室の窓から、外を見ていたら傾きかけていた二階建がめりめりといっぺんにこわれてしまった。そして又東南海地震。今度は店のウインドのガラスが全部われてしまった。そして家は北へ傾いてしまった。又十人ばかりの人で一月位かかったなあ。やぐい家なので、あっちこっち傾いて、地震はもうへいこらです。私の家では貸家から火を出されて、貰い火で自分の家を全焼してしまったので、その恐ろしさが忘れられず、父は何時も御飯時だと、カマドの火にすぐ水をかけるのです。何時かの地震も昼でしたので私が薪で昼御飯をたいていた所へ水を一杯ぶっかけるので私がぶうぶう恐っていたら、よその人がお爺さんの方が偉い。おこる方が間違っていると、意見をいわれました。最近は地震が少なくなりましたが、私の家も全部障子を硝子戸に替えてしまったので地震がおこらないでほしいと思います。

私の地震体験

菊谷鈴太郎
（知多郡東浦町）

私は少年時代西春日井郡西春町で育ちましたが母より明治中年の濃尾震災の模様を次のように聞かされました。母は地震発生と同時に裏の竹藪の中へ避難したが其の直後家が倒れ命拾いをしたが自分の身命を救う一念より他に考えなかった。若しあの時金子などを持ち出そうとしたらきっと助からなかったであろう。又裏の竹藪の中へ逃げたと云う事は竹藪は地震に強く決して地割れしないからだ。其の実証は表の庭は夏の日照りが続くと大きい地割れの跡が見えて来る。あれは地震の際大きく地割れがして地下水が出た所だ。よく見ておきなさいと聞かされたが其の地割れの跡は年に一二度私は見ました。従って私は地震の時は何をおいてもいち早く屋外へ逃げ出す事。竹藪が有ったら其処へ避難する事を念頭からはなしませんでした。これは別の事ですが伊勢湾台風の際半田市亀崎町有協地内の堤が高潮で切れ被害が出ましたが其の堤の内小竹藪の有る箇所だけそのまま現在も残っており竹の根強さを実証しています。

次に私の体験ですが大正十二年の関東大震災の時名古屋も相当強度の地震に見舞れましたが、私は市内の警察に勤務して居りましたが派出所で昼食の弁当を開けたとたん地震が発生。夢中で外へ飛出したが一寸揺れが止まったがもり返しを予想。其のまま停って附近を見ると一度出た人々は皆んな屋内に這入ったままでしたから私は大声で余震が有るから外へ出なさいと呼んだが一人も出られなかったが再度の強震が再発し人々が外へ出られた故私は其の人達を誘導空地に避難させましたが地震は一回より二回目が大きい事を母から聞かされて居た事が念頭に有っていた事が良かったと痛感しました。其の夜警ラに出たとき稍に大きい余震が有ったが一人も外に出られなかった。此の関東地震に付いて書添えたい事は地震の実状が名古屋に知れたのは翌日の正午過ぎで私は非常召集で本署に出動したが如何に当時の通信が不備で有った事が思われます。又召集後市内の警備に当りましたが流言飛語が出て在住朝鮮人の方々に非常な迷惑をかけた事を申訳ないと思います。

次に昭和十九年の県下の大地震の時は津島署の本署詰でしたが、発震と同時に夢中で外に飛出し電柱にしがみ付き、ふと留置場の事を思い出し署内に飛込み留置人を連れ出し避難させた

が重要な責任を持つ者が其れを忘れて自身の安全のみ求める事は実に情けない次第で忘れる事が出来ません。

次に昭和二十年の三河地震の際は丁度知多郡東浦町の自宅二階で一人就床して居たが大ゆれで階段を降りる事が出来ず窓を開けて下の一階建の峯にだき付て下へ早く逃げだせと叫んで間もなく弱震となり下に降り庭に出たが家族は全部無事でホッとしました。

以上が私が体験した三回の大きな地震の体験談ですが、要するに大きな地震に直面した際夢中で自身を守る事のみが一ぱいで他の事を守る事が出来なかった次第を反省して居ります。平時では地震対策を提言し又演習にも参加した者が果して地震に直面した場合、これを有効に利用することが出来るか自信が持てません。何とぞ精神的自信が持てる地震に対する精神対策を教えて頂き度いと存じます。

東南海地震

服部玉枝
（海部郡弥富町）

今日このごろ新聞でもテレビでも今にも地震がおきるような報道がされているのを見聞きするとふと心配事が頭に浮ぶことがある。それは夏になると家にいるときいつも裸でおりそんなとき地震にあって外へ出たらと注意しているが一向になおらない夫でこまりはてている。夫は地震の話になるといつもいや二度も三度も自分の体験を家族に話していることは次のようなことで家族に対して得意顔をしているが家族はうんざりでどこかに私もそのうっぷんをはらすため筆をとったわけです。さて夫の話しは、

今日は二学期末の試験が明日で終るので机に向い最後の試験科目の地理、数学の勉強をしているのだが前の科目の出来なかったことが思い出され、次の通知表が気にかかって頭がいたい。その時机が縦てに飛び上った。とつさに地震ときがついた。何もわからず庭へ出た。灯籠が私の通りすぎると同時にたおれ門先へいそぎ前の畑の中に立ったといいたいが立っていられなく

てすわっていた。その間三、四分であったと思われる。その後家を見た。母屋は萱ぶきのためゆれは見えないが母屋と連なっている座敷は今にも土台から外ずれるのではないかと思われたが、母屋が支えになっているようで倒れなかった。それと同時に二つのことを見た。一つは隣の門が南北にゆれ今にも倒れそうで二、三度ゆれて、もう倒れないと思った時南へゆっくりと倒れた。もう一つは今日のように家はあまり多くなかったので二、三キロ先が見通せる所に軍事工場があり、その工場は佐屋川の埋立地に建てられた工場で砂煙りが上つた、と思うとそこに見えていた工場はなかった。

この体験は私のその後の生活態度に影響をあたえたと思う。この地震は学校へいっても生徒の間では話題になったが先生からは地震のことは話しさえなかった。いつもとかわらぬ時間表でこの地震についてかたることはタブーであったらしい。やがて当地にもB29の姿を見ぬ日がないようになり中学の入学試験の迫ったある日試験は中止の知らせがあった。理由は空襲のために書類選考となり運よく中学へ入学出来た。頭も体もわるく入学はあきらめていたここで、体もわるくと言うのは前年の入試にけんすい5回以上出来ぬものは入学させないと話しに聞き、入試があればそれだけで受からないからである。今日の入試に体育を入れれば入試地獄は何んとかなると思われる。おそらく入試なしで中学へ入った年はこの年昭和二十年この一年であったと記憶している。入学万歳、地震、空襲万歳、地震のおかげで日本は戦力を弱め空襲によって試験場への道もなくなった。おかげで入学出来たのである。この地震がなかったら終戦が遅れ夫の兄同様（戦死）軍へ入隊しないまでも軍事工場にかり出され空襲で死んでいたかもしれない。この地震の体験で二度までの生活態度がかわった。それは大きな恐怖の前に小さな恐怖には何んの変化も心にないと言うことで、現在おこっていることがらはごく小さなことばかりに見えてあまりにもとりこし苦労にすぎないと思われるこのごろで、戦争時代に青年期をすごしたものは大なり小なりこのような心持ちだろうと夫はよく言う。夫の地震の話の中で感心することがある。それは、震度六以下のものは地震の中へはいらないものであり、立っておれないものを中心に対策をしてもらいたい。ガス、石油等器具は自動消火付のものにする。家の戸棚、書類棚、机等は建物と直接固定させる。公共、私有にかかわらず広場はいつでも入れるようにする。これだけは実現しなければならないことでその他の

ことは理想と現実とがあまりあわないことが多く、たとえば東京に何年何月何日震度七の地震があると予知しても東京を出てどこへ行くのかと言うことになる。また予知がはずれた場合の経済的損失はどうなる。予知するのが良いか、しないのがよいかがわからなくなる。私もこの地震にあったが戦時中のことで小学低学年であったこともあるが、私の町にB29の落ちたときの音の方が強烈であり地震の恐怖はあまりない。まして予知がされて夫の話しのように避難場所はないし、あいまいな予知は社会不安をおこすばかりであると思います。

家庭の主婦として防災に多くの注意すべきことがありますが我が家から火を出さないことを第一に心がけています。

東南海地震

伊藤芳子
（中島郡平和町）

思えば昭和十九年十二月東南海地震。私は国民学校高等科二年で学徒動員で工場に働きに行って居りました。何かの都合で当日は休んで家に居りました。丁度二時過ぎかと思いますが姉三人と居間に居りましたが、すごい地鳴りと共にどっと揺れ出し私達は思わず地震だーと叫んで庭に飛び出しました。その時老衰で床に付いていた祖父が、むっくりと起き上がって居りました。不断は食事も抱き起こして食べさす毎日の祖父でした。その祖父がむっくりと起き上がっており私達は、あっお祖父さんを出さなきゃと家の中に飛び込もうとしましたが、すごい揺れで足が前に出ません。やっとの思いで祖父の側まで近づき三人掛りで夢中で引ずって来ました。元来祖父は大思でした。その上捨て身でとても私達には手におえませんでした。どうして引ずって来たかわかりませんが、夢中で縁側まで来ました。早く出なきゃ家の下敷きになると思っても、思う様に動けません。また縁側から庭に下ろすのが大変です。めちゃくちゃ祖父を三人掛りで引ずり下しました。軒下ではあぶないので少しでも家からはなれなければと思い、痛い痛いと叫ぶ祖父の言葉も耳に入りません。やっと安全圏まで来た時には祖父は無言になって居りました。地べたにはいつくばって屋根のひさしをふと見れば丁度大波が押し寄せるが如く大きく次々に波打って居り、私達はあぁ家がこわれると口々に叫んでおりました。十五分か二十分も揺れたかと今も思って居ります。本当に長い長い時間で

した。あぁ助かったと言いました。そうしてふと祖父の所に目をやりましたら、祖父の顔色は真青で口からあわを吹いて目が引きつっているではありませんか。私達は口々にお祖父さん、お祖父さんと、さけんで揺り動かしたり顔をたたいたりしましたが意識がもどりません。父は田に出てるすで姉達にうながされて私は父を呼びにどう走って行ったか覚えて居りません。泣きながらお祖父いさんが死んでしまったと告げました。父も心配して家に帰る途中でした。やっとの思いで家に帰って見たら、祖父は意識がもどっておりました。父もよかったとほっとしました。本当に私達が夢中で引ずり出したのでよほど苦しかったか、大小便まで出て居りました。祖父は後から言いました。濃尾地震には北西に片向いて松にもたれるようにこわれたから、北西の「なんど（居間）はだいじょうぶだから若し地震が起きても外には出さないでくれと…」私の家は北西の角に大きな松がその当時ありました。地震が終って家の中も落ち着きをとりもどし、外には村民がざわめき立ち、所々で地下水が噴き出し地割れが出来、一番ひどいのが幅三十五糎位口があき、地盤がやはり三十糎位落ち込んで居りました。その後余震はひっきりなしに続きました。その一年後祖父は他界致しましたが今でも思う事は若し今駿河湾地震が起きた時病人をかかえた家庭はどの様にしたらよいのか。若し外に出したがために他界する様な事になりかねません。もちろん家の下敷にする様な事は出来ず、救出するため巻添になる事も考えねばなりません。病人のある家族はどうしたらよいのでしょうか。私の祖父は都合よく生き返りましたが、あれから三十三年余私の頭の中には昨日の様にあの時の事が思い出され、子供達にいつも話して聞かせて居ります。くだらない文で申し訳けありませんが、病人問題を検討されたいと思います。

私の地震体験

横井鈴子
（津島市）

あれは、昭和十九年の十二月でした。第二次世界大戦も日に日に激烈となり高等科生徒たちは、学徒動員で工場に働きに行っていた日でした。二階建ての新校舎の二階の教室で学習していたのは、私の受持ちの六年女子西組だけでした。グラグラと校舎が揺れる様な気がしたと思ったら生徒の一人が「地震!!」

と、叫びました。また、グラグラ!!私は思わず「机の下にもぐりなさい。廊下に出て階段の方へ行ってはいけません。」と、指図しました。

後の方の席の生徒は廊下に飛び出そうとしていた子もありましたが、生徒達は机をガタガタさせながら机の下にもぐりました。その中には「おかあさん!!たすけて!!」「南無阿みだ仏!!」と、泣き声で叫ぶ子もいました。校舎は大きくゆれています。

ふと窓から下を見ると全校の先生、生徒は皆運動場に避難して、組毎にかたまっています。校長先生も、教頭先生も下から大きな声で、「生徒を階段の方へ出してはいけないぞ!!」と、叫んでみえます。みんな、かたずをのんでじっとこらえています。やがて、ゆれ方も少なくなって地震もおさまった様です。生徒達も、うれしそうに机の下から、はい出しました。よかった。皆があわてふためいて階段の方へ殺とうしたら将棋倒しになって、けが人が出ていたかも知れない。

職員室に行くと、棚の物がガタガタ落ちたり、壁に亀裂が入ったりしていました。

翌日の新聞には疎開していた児童がお寺の燈籠が倒れ、その下敷になって死亡したりした悲しいニュースが伝えられた。その後も余震があって夜もぐっすり眠ることが出来なかった。「いつもあわてず火の用心だけは気をつけよ。」と父に言われました。

今でも教え子達のクラス会には必ずあの、東南海地震の日のことが話題になり「先生はまだ若かったのに本当に落ちついて、私達が廊下へ飛び出そうとするのを静止して下さり事故を未然に防いで下さった。」と感謝してくれます。

関東大震災の時は地震の被害よりも火災による被害が大きかったそうです。お互いに火の元に注意し、沈着に事を処して行きたいものです。

国や県なども地震にそなえて非常食等を貯えていて下さる事をニュース等でみましたが、常に地震に対する研究を進められ、いち早く避難できる様に情報網を密にしていただきたいものです。

今でも私は水をびんに入れ、塩、梅干し、お米少々、かんづめ等をボール箱に入れて出窓の出し易いところにおいてありますが、願わくば地震が起きないようにと神に祈るのみです。

私の地震体験

有馬　ゑみ子
（犬山市）

昔から「地震、雷、火事、おやじ」と、恐ろしい事の一番に言われている地震。特に日本の様な島国では、地震によって、起る災害は種々雑多です。「災害は忘れた頃にやってくる」と言われますが、全国的に見ますと、なかなか忘れた頃どころか、各地でひんぱんに起っている様に思います。

幸い、私達の尾張地方では、最近大きな地震は起っていませんが、明治時代に、濃尾大震災があります。子供の頃、祖父母に、おそろしかった事、地割れがして畑に大きな穴があいたり、道路が不通になり、家が倒壊して火事になり、大勢の人が焼け出された話を聞き、地震とは恐ろしいものだと思いました。

小学校六年の冬です。授業中に、ぐらぐらと教室がゆれ、窓ガラスが、ガタガタゆれ出しました。その頃は、田舎の学校でも、防空頭布をかぶり、時々、防空訓練を受けていましたが、空襲警報とはちがう地震だと、先生に言われ、全員急いで運動場に飛び出しました。ゆれるのがおさまって、教室に戻り、十分ぐらいたってまたぐらぐらゆれ出しました。二回目は、じきおさまりましたが、小さい頃、地震にゆりかえしが恐ろしいと、聞いた事がありましたが、それが余震だったのです。

私が住んでいる尾張地方は、その時、窓ガラスが二三枚割れただけで、大きな被害もなく、大きな地震だったぐらいですみましたが、それが後になって、東南海地震だったと知りました。三河地方は、大した被害で、大変だったと思います。

終戦前後して、三回大きな地震や、空襲警報と、小学校の勉強も、落ち着いて出来ませんでした。その点、今の子供達は、災害の恐ろしさはあっても、種々な点で恵まれていて、幸福だと思います。

関東大震災にあわれた方の、お話を、お聞きしましたが、地震だと、言って、表の道路へ出た時には、もうお向いの家から火が出て、何も持ち出す事が出来ず、赤ちゃんのミルクとおしめを持って避難するのがせいいっぱいだったと言う、お話を、お聞きしましたが、その奥様は、今でも、夏物、冬物の衣類の入れ替えに、すべてブリキのカンカンに入れてひもをかけ、いつでも持ち出せる様にして見えると、お聞きしましたが、仲々、まねの出来ない立派な心得だと、感心しました。新聞、テレビ

で、近々大きな地震が起きると、言われています。私達も、最低の準備と心構えが必要だと思います。

私の地震体験

佐藤英雄
（津島市）

昭和十九年十二月七日の昼下りでした。その時職員室には、私の外には女学校を出て間もない女の先生三名と、脳卒中のために右半身が不自由な中年の男の先生だけでした。

激しい揺れがやって来て、悲鳴をあげてすがりつく先生たちを一かたまりにして机の下にもぐり込ませ、「さて、火の始末は？」。職員室の隅の煉炭火鉢に火があるが、大やかんがかかっているからまず大丈夫。その他にはこの校舎には何の火の気もないはず。

「私が弱気を見せては…」と、先生たちをもぐり込ませた机に片手をついて突立っていたものの、無気味なきしみ音とともに大きく揺れる校舎。ふくれ上ったと思うと見る間にひびが入り土煙をあげて落ちる壁、すざまじい音をたてて落ちてゆくガラス窓、全く生きた心地もしない長い長い時間でした。

初めて遭遇したこの大地震に、案外冷静に対処できたのは、火事、地震、空襲どんな災害に対しても、学童の生命だけは守り通さなければとの、普段からの職務感が無意識のうちに表れたものと思われますが、その陰には校舎は地震では倒れないもの、万一倒れても火事さえ出さなければ自力で脱出できる、との安心感があったことも事実です。

私の脳裏にこの事を強く焼きつけてくれたのは、昭和二年三月七日夕刻の奥丹後大地震でした。

当時、私は師範学校の寄宿舎生活をしていましたが、その日、夕食を終って間もなく、かなりの地震があり寄宿舎中大騒ぎをしました。ところが、翌日大廊下に張り出された新聞の号外を見た時の驚き、「奥丹後地方に大地震」の見出しで、壊滅した郷里の町の写真が出ているではありませんか。

小学校を終わるまで過した郷里の町が、今も祖母が、母が、兄夫婦が住んでいる郷里の町が、数多くの親戚、知人、学友の住んでいる郷里の町が壊滅してしまった。私はへなへなとそこにへたり込んでしまいました。幸、数日後、家族の無事は知ったものの、学年末の休暇になるのを待ち兼ねて故郷に駆けつけ

ずにはおられませんでした。

福知山から三十キロの山道を歩いて、やっとたどり着いた故郷の町の変り果てた姿を目前にした私は、ぼう然と立ちすくんでしまいました。満足に建っている家は一軒もなく、ほとんどが、大きな力で押しつぶされたようにペシャンコにつぶされていました。そうした中に、母校の建物だけが、ねじ飴のように大きくよじれてはいるものの、ポツンと残っていました。隣の村へ行っても、その又隣へ行っても不思議に学校だけは倒れていませんでした。

私の家は、後の崖にもたれかかって全壊をまぬがれていました。地震の時、土間にいた母と義姉は、奥の部屋に寝ている祖母と赤ん坊を助けねばと、上り口まで行ったものの、二人が折り重なるように手をついたまま、どうしても足が上らなかったと、また戸外にいた兄は、立っているのがやっとだったなど、こもごも話してくれました。

義兄の家では、一階にいた義兄はやっとの事で入口までたどり着いた時、家が倒れ壁の下敷きになったとの事。二階にいた姉とその子たちは家もろともダイビング。庭先に坐った二階に住んでいました。

伯父の家では、家族全員家の下敷きになったが、屋根を破って脱出。奥の間のこたつに寝さしてあった末の子だけは、半ばあきらめていたところ、夜半になって聞える泣声に、あわてて屋根をはがしてみると、落下した鴨居の陰にかすり傷一つなく無事でいたとの事でした。

逆に叔母の一人は、落ちて来た鴨居にはさまれ、もがいているうちに火がまわって来て遂には焼死したとの事でした。数多い親戚の中で唯一人の死者でもあります。先日、五十回忌の法要でいとこに会った時、あの時の母の悲痛な叫び声が、今も耳の底にこびり着いて離れないと、しみじみ述懐していました。

この大災害を目の前にして、少年だった私の心には、①家が倒れるほどの地震では逃げ出せるものではない。②倒れた家の下敷きになっても、梁や鴨居の下敷きにならない限り必ず自力で脱出できる。それほどに瓦も釘もゆるみにゆるんでいる。③地震よりその後の火事が恐ろしい。死者の大部分は火災によるものだ。④校舎は地震では倒れるものではない。など数々の教訓が痛いほど焼きついたのでした。その尊い体験が、初めて遭遇した東南海大地震に役立ったものと思っています。

地震になっても、あわてずまず火の始末をすることが何より

大切です。ガスが普及し、石油ストーブも傾けるだけで消火するようになった今日、火の始末はさして困難ではないはずです。たったそれだけの事で、地震の災害は何十分の一、いや何百分の一に減少させる事ができると信じて疑いません。





半田市亀崎宮越前稲葉酒造付近（東南海地震）　―半田市役所提供―

〔知多地域〕

私の地震体験

黒田喜代子
（豊橋市）

頭の中から、日毎に薄れてゆく過去の出来事、時には忘れ去ろうとしていますが、私達には、忘れてならない悲しい体験です。

今から三十数年前、第二次世界大戦で本土が空襲を受ける様になった、昭和十九年十二月の東南海地震。昭和二十年一月の三河地震についての体験を書いてみます。

日に日に戦況が悪化し、私達も女学校の学業を中ばで、軍需工場に動員されペンをハンマーに代えて、毎日「お国の為・勝利の日まで」との意気にもえ十六才の女学生でしたが、親元をはなれ、半田市の中島航空機工場で力の限りがんばっていました。

十二月の帰省も終り、午前中の作業を終え昼休みに皆日なたに集まり、楽しかった郷里での話も作業開始のベルで終り、職場に付いて間もなくの出来事でした。

今までに地震と言うものは、少し家がゆれる位の大きさしか知りませんでしたが、一瞬天地がひっくり返る様な大きな音と共に、今の言い方で言うと、マグニチュード八ぐらいの上下震で工場がつぶされたのですが、その時誰かが、「ヤッタナ。」とか「逃ろ。」と言う声を聞いたのと、工場がつぶされたのがほとんど同時でした。

大地震の経験のない私達は、工場内にとじ込められた同級生らと話す言葉も忘れた様に、「余震が来るかもしれんから早く出ろ。」の声に、屋根伝いに外に出たのでした。外に出てはじめて生きているんだと言う実感がわきました。先生の「豊橋高女の生徒は集合」と言う声に集まり、点呼を受けて工場から寮に帰るとき、怪我をして戸外に毛布にくるまれている多くの人を見たり、本工場あたりは地割がして海水が吹き出していたり、押しつぶされた民家を見ながら、寮にたどりつき畳の上に坐ると、今まで張りつめていた気持が一度にくずれ、話をしようと思っても言葉にならず、立上っても足はガクガクで皆この世の人とも思われない様でした。

夜になって人づてに、あの人がいない、この部屋ではまだ帰

らない友があると聞くたびにふるえが止りませんでした。又その夜は「大空襲がある。」とのうわさが流れ、二中隊の寮の生徒は、一中隊の同じ部屋です早く避難出来る様に、洋服は着たまま防空頭巾と非常袋は肩にかけたまま、一夜をまんじりともせず過しました。その夜心配した空襲は無く、地震も余震らしいものはほとんど無く、朝になり先生から友達の悲報を受け。私達の工場は紡績工場を改良しての工場でしたので回りをレンガで囲ってあり、そのレンガがくずれた下敷となって多くの友が、又難をのがれる為に作業台の下に入りそのまま圧死した友、又は落ちて来た梁に頭を打ってと言うようにして、友達二十三名が亡くなられ重傷者が四名と発表され今さらの様に皆ただ泣くばかりでした。亡き友の葬儀に豊橋に帰り、家に着くと、瓦のずれた屋根、壁の落ちた所の目立つ我家でしたが、一家の無事を喜び合うと共に、亡き友の家の事を忘れる事は出来ませんでした。

時局の悪化は、友の死を何時までも悲しんで居られませんでした。工場に帰り、本工場に職場がうつり、仕事にもどり、その頃から警戒警報・空襲警報が特に多くなり、昭和二十年の正月を迎える頃には、前戦の玉砕の知らせ・本土空襲と言う悪い知らせが多く、友を亡くした痛手は拭い去る事は出来ませんでしたが、それを打ち消す様な毎日の、突貫作業でした。

二度目の地震を受けたのは、一月十三日、「ゴー」と言う無気味な地鳴と共にやって来る、横揺の地震で、一日に昼夜をかまわず何十回となく起る地震に工場も仕事を休みにし、寮で地震のおさまるのを待ちました。時は一月暖房器具一つない部屋（特にこの年は雪の多い年でした）寒さと、心細さで誰一人話をする人もいませんでした。部屋に一つしかない机に布団をかけて、コタツ代りにして、皆おしだまって、「ゴー。グラグラ。」と揺れる地震に耐えていました。その頃民家では、稲わらで地震小屋を作り夜はその中で家族が肩を寄せ合って過したと母から聞きました。

戦後三十年余り、幸にして愛知県には、取り上げる程の地震もありませんが、戦後世界各国におこる大地震の知らせを見聞する度に、今あの様な大きな地震が起ったならば、都市の密集や高層化している住宅に、どれだけ多くの被害が出るかと思うと不安が一ぱいです。

地震の想い出と母

中野穣
（小牧市）

日時の記憶はないが、記録によれば昭和十九年十二月七日、東南海地震……

その頃私は旧制半田中学の三年生で、まさしく紅顔の美少年であった筈である。

家は知多郡富貴村（現武豊町）、農家の次男坊である。

勿論当時は戦時下であり、私も動員学徒の一員として半田市の中島飛行機乙川工場へ通勤の身であった。

あの朝いざ出勤と、いつもの様に我が家を出て東の空を見ると雲の様子が妙である。

どす黒い赤と濃い灰色をないまぜて棚引く雲の隙間から朝日がもれている。今想い出しても無気味としか言い様のない空であった。

ひょっとすると降るかも知れないな、と思って　当日は終日晴天であった……傘を取りに戻り、その日級友数十人の中で私だけが洋傘をぶら下げていたのを、恥しくも又それだけ強烈な印象としていまだに私の脳裡を去らない。

その瞬間は……私は工場では艦上雷撃機天山の昇降舵と方向舵の取付班に属していた……まだ胴体と尾翼だけの塗装もしてない飛行機の操縦席近くで、操縦桿に鋼索を取り付ける作業をしていた。

「また誰かが機体をゆすってやがる」と、ふと前方を見ると……まだエンジンは付いていないからよく見える……天井から長く下っている電灯が激しく揺れている。

「変だ」胴体下部から這い出し、それこそ飛ぶ様に建物の外へと走った。

壁が落ちる、埃が舞う、皆が何やら喚き乍ら走っている。

怪我をした訳ではないが、そこまでしか覚えていない。

ただこの瞬間に同じ工場でも元紡績工場の方では、煉瓦壁が倒れ多くの級友や女子学生が死んでいるのである。

記憶を辿ろう。名鉄電車は不通となった。

帰りは知多半島南下組が一団を組んで徒歩である。私一人洋傘をぶら下げ、それでも元気よく若者らしくワイワイ言いなが

ら歩き続ける。

道の両側の家がそこここで毀れている。

一般の人達もぞろぞろと歩いている。

と、私の母が妹を背負って歩いているではないか。

そう言えば病弱の妹を乙川の医者に看せるとか言っていた。その帰路である。

私は母に逢ったのをいい事に、恰好の悪い洋傘と持ち物一切を母に託し、手ぶらになって意気洋々と先に家へ帰った。

私が家へ帰り着いた時は未だ薄暗かったが、母が家へ帰り着いた時は私が帰宅してから小一時間も経ってからで、もう外は真暗になっていた。

お互い、無事でよかった。

母は存命中である。母に負われていた妹はそれから数か月を生きて死んだ。

話はこれだけではない。

再び記録によれば、昭和二十年一月十三日、三河地震。今度は夜中である。

激しい揺れに夢中でとび起きた。真の暗闇である。立った瞬間隣に寝ていた弟も立ったのだろう、ふと触れ合って抱き合う様にして外へ……どうやって外へ出たかは解らない。

祖父母、父母兄弟全員が庭に立って呆然と我が家を見上げる。

ああ家は立っている。

祖母が念仏を唱えている。

翌日勤めから帰って来ると、家の東の田圃の中に藁小屋が立ち、今夜からはここで寝るのだと言う。

余震は続いていたし、もうそれで余計に恐さが増幅してしまった。

あの狭い藁小屋で一ダース近い家族が、しかも寒い時期に……だが妙に寒かった記憶はない……よく寝られたものだ。

偶々に必要なものがあって家へ入るにもこわごわ、一分間だって居られない気持で用が済むと藁小屋へ逃げ帰ったものである。

だが家の電灯は妙に眩しく、毎日穴蔵暮しの様な生活をしていると電灯のある部屋が本当に新鮮であった。

たしか三河地震の後であったと思うが、昼休みに工場の外で日向ぼっこをしていると、ゴーという地鳴りがし「妙だ、又地震か」と思う間もなく大地が揺れる、サイロの様に大きな貯水槽の水が踊って乗りこぼれる。

あの地鳴りの無気味さは忘れられない。

また、三河地震の前後であったと思う。夜毎対岸の三河の方で海が光る。いま時花火でもあるまい、漁火にしてはおかしい。本当に青白く閃光の様に光るあの光りは、一体何だったのだろうか。何処で光っていたのだろうか。

今でも当時対岸に住んでいた人々に何かを感じなかったかどうか、聞いて見たいと思う事の一つである。

東南海地震体験記

山上ちさと
（東海市）

昭和十九年私は浜松に住んでいて小学校六年生だった。それは昼休みが終り五時間目の鐘が鳴り先生の来られるのを待とうとした時だった。

さわがしい教室の中、私は席についた。すると貧乏ゆすりの様に小刻みに揺れるので、後の人がいたずらをしているのかと思い「誰れ揺すっているのは!!」大声を出した。教室の中程の人が「地震!!」と叫んだ。と同時にゴウゴウ、ガタガタ、ビシビシ、そして激しく揺れ出した。

入口に一番近い席だった私は顔から血のひくのを覚えながら教室をとび出し階段をかけ降りた。かけ降りると云うより転げ落ちる様な状態で、中途のおどり場に置いてあった二つの防火用水のバケツが倒れんばかりに踊り、水が溢れていた。昇降口から南側の校庭にとび出したとたんに木造二階建校舎の屋根から瓦がガラガラ土煙りと共にすべり落ち軒下に山をつくる。その頃の揺れが最も激しかったのか右に左によろけて放り出される様に、のめり込む様に校庭に転んだ。頭を上げると目の前で稲妻の様に地面が裂ける。もっと大きく裂けて地面の中へ吸い込まれて仕舞うのではないかと思った。この時が一番怖くて助けてと叫びたかったが声も出ない。校庭にも、道路にも人影はなく一瞬にして世の中が滅びてしまったのでは?と不安になる。激しい揺れがおさまり轟音もやんで屋根瓦が一つ一つすべり落ちる音と校舎から生徒たちの声が始めて耳に入った。ああ生きていた。友達も私も助かった。そんな気がした。生れて始めての事で怖く長い時間の様に感じたが教室をとび出してから一分余り、二分も三分もの時間ではなかったらしい。

昇降口から生徒は校庭へぞろぞろ出てきた。皆昂奮しきって口々に怖かった事、家や家族の心配等して泣き、校庭は大きな泣き声の渦の様だった。やがて家人が迎えに来て帰宅した。

窓ガラスが割れ、タンスがひっくり返り、食器戸棚の中のコップや茶ワンが転げおちて割れたりで家の中はめちゃめちゃ。タンスの中の赤チンが畳の上に真赤にこぼれていたのにおどろいた。

暫くはかなり大きな余震が続き又あの様に揺れるのでは?とおののいていた。母からあわてて教室をとび出した事をひどく叱られた。一秒おそければ頭の上に瓦が落ちて死ぬ処だったと、云われてあらためて怖くなりそれからはふとんをかぶったり、チャブ台の下にもぐったりした。学校では地震の話や避難訓練等は受けた事がなかった様に思う。

当時の被害状態は覚えもないが自分の囲りでは屋根瓦の落ちた家は多かったが倒れた家はなかった様に思う。火事がなかったのも幸いだったし、学校を休んで町を歩いていて、手に軽いけがをした級友が一人いただけだった。

この地震のあと、浜松は米軍の空襲を頻繁に受ける様になり、あの敗戦へとつながっていった。私は子供心に、この地震が神の怒りであり神国日本（この様に学校で教わっていた）が戦争に破れる不吉な前ぶれであったのでは……しきりにそんな気がしていた。

私の地震体験

吉田弘（常滑市）

半田市の西方丘陵地にあって、半田市街を一望のもとに見下ろせる雁宿公園は、日曜日とて親子づれの市民でにぎわっていました。

わたくしは、教材用に郷土の童話作家新美南吉のランプを形どった文学碑の写真をとろうとここを訪れたのですが、この文学碑のまわりで親子手をつないでゲームに興じるさまを見て思わずシャッターを切りました。それは、美しいメルヘンの世界そのままの光景でした。近くの展望台から眺めた半田の街も、夏の太陽を受けて平和そのもののように輝いていました。ところが、園内の木立の陰にひっそりと建つ「殉難学徒の像」と題

された地震被災者の慰霊碑を発見し、その碑文を読むうちに、今日のこの平和の礎となった人たちの存在を改めて思い出さずにはいられませんでした。

「歴史は流れています。太平洋戦争の苦しい中でした。学徒は一切の希望を勝利にかけて兵器の増産に身も心も捧げていました。それはいつの日か来る国の栄えと平和への幻を抱く美しい姿でありました。時に昭和十九年師走七日午後一時三十六分中島飛行機株式会社半田製作所山方工場で午后の作業にかかった直後です。東南海地震という痛ましいできごとによってここに刻んだ九十六名の学徒は其の命をおとしたのでした。思うに星は移り雲は流れてもこの尊い清らかな霊は永遠に生きて私達の心に通い私達の魂を飾ってくれることでありましょう。歴史はつくられるものであります。今日ここに合掌する世の人々と共にこの勝れた魂を像として幸せのよすがに遺すものであります。

昭和三十四年八月　戦時動員学徒殉難遺徳顕彰記念像建立委員会　協賛　半田市」

昭和十九年十二月七日、午後一時三十六分、わたくしは、このとき知多郡三和村立国民学校四年生、折からの学期末試験にとりくんでいました。風の強い日で窓ガラスがガタガタ音をたてていたことを覚えています。試験は漢字の書き取りだったかと思います。まだ半分も書き終わらないうちに、先生が大声で叫ばれました。

「地震よ！みんな机の下に入って!!」

わたくしたちはなにが起こったかとっさに判断しかねましたが、先生の冷静な指示に従っていっせいに机の下に身をかがめました。その直後です。窓ガラスが砕け、壁土が机の上に落ちかかったのは。激しい床の揺れと、頭上に音をたてて物の落ちかかる音とに、わたくしは震え上がって、思わず念仏を唱えました。どれほどの時間がたったのでしょうか。

「皆さん、もういいですよ。出なさい。」

先生の声にほっとして顔を出したわたくしたちの目にそれはものすごい光景が写りました。黒板はずり落ち、壁土がはがれ、梁がむき出しになっています。床は足の踏み場もないガラスの散乱です。いまにも落ちそうになって垂れ下がった天井の下をくぐりぬけ、運動場へ出てみると、そこにも大きな地割れができて地の底が不気味な口を開いています。どうにか倒壊はまぬがれたものの校舎の屋根は大きく波打って大蛇のむくろのよう

になっています。わたくしたちは、いまさらのように地震の恐ろしさに身震いしたものです。

心配しながら帰り着いた我が家は無事で元気な両親の顔を見ることもできましたが、近くには、全壊の家もありました。倒れた家の下から奇跡的に救出されたという人の話も聞きました。半田では、学徒動員の人たちが工場の下敷きになって大勢亡くなったというわさも聞きました。それが、この殉難学徒像にまつられている人たちだったのです。戦時下で、このときの被害は、はっきりしないようですが、県下の判明分だけでも死者三六八名、家屋全壊一五、八一〇戸に達していることが県の統計資料からわかります。

また、翌年の昭和二十年一月十三日にも夜の眠りを破る三河地震が起こり、実に死者二、二五二名の被害を出しました。当時は太平洋戦争末期で、本土空襲も激しくなった時です。「上から爆弾、下から地震じゃかなわんわい」「もう、日本もおしまいかのう」

おとなの人たちのそんな会話を子供ごころに恐ろしく聞いたものです。

あれから三十余年の歳月は、実に夢のように過ぎ去りました。「天災は忘れたころ来る」という寺田寅彦の有名なことばがありますが、繁栄におごり、平和に酔いしれるわたくしたちは、いまこそこのことばをかみしめるときではないでしょうか。

半田市雁宿公園の片隅に忘れられたように建つ「殉難学徒像」には、平和のシンボル鳩の群舞を浮き彫りにした台座に、伊藤るり子に始まる九六名の氏名が刻まれています。いまの中学二年生くらいの年令だったかと思います。わたくしは、この若い犠牲者の霊に心からの合掌を捧げ、この人たちの死を無駄にせず、現在の平和を守っていかねばならないことを強く感じて公園の坂を下りました。

私の地震体験

大槻花子
（半田市）

「グラッときたらどうする」最近こんなポスターをよく見ますが、私は昭和十九年十二月七日午後一時三十六分の東南海大地震、翌二十年一月十三日午前三時三十八分の三河地震も半田

市内で最も被害のひどかった、当時の山方新田（現在の源平町）にて体験致しました。当時私は半田勤労動員署（現在の職業安定所）に勤務して居りましたがその日は風邪ぎみで欠勤して山方新田一九一番地の家に家族十人のうち父と私と妹（六女）と三人だけが居りました。

はじめゆるやかな揺れがあり「あっ地震だ」と立ち上った途端ものすごい音響と共にガラス戸やふすまが斜めにねじれ出しと同時に、やはり斜めに亀裂を生じガラスは割れ、ふすまはバタバタと倒れ出しました。

私はあまりのものすごさに初めは、地震がこんなにひどいものとは知らなかったので、アメリカの特殊な爆弾が落ちたと思いました。

ひどい揺れで動く事が出来ず八帖の室の中央の、大きな紫檀の机の下にもぐり込み揺れの収まるまで数秒だったでしょうが、とにかくすごい音響と梁の落ちて来るのが、今か今かという恐怖感の長く感じられた事は、三十年余りたった今でも忘れる事は出来ません。

揺れが収まって家の外に飛び出すと、私の家の囲りの家は殆んど倒れていました。道路を隔てた前の二階建の家は一階がつぶれて二階の窓が地面につき、その窓から妹（三女）が泣きながら這い出して来ました。また私の家の東南の角に鷹羽商店と云う小間物店が、新築して何ケ月もたたない二階建の家でしたが、その壊れ方はまるで積木細工を倒した様で、新しい材木がバラバラになってあたり一面に散らばっていたのが非常に印象的で、今でも脳裏に焼きついて居ります。

そのうち、倒れた家の下から赤ちゃんの泣き声がするので大ぜいで助け出しましたが、まだ幼ない姉が、生まれて間もない赤ちゃんを負ぶったまま梁の下敷となり姉は即死して、梁と梁の間にはさまった赤ん坊（女の子）は奇跡的にかすり傷一つなく助け出されました。また私の家で経営していた銭湯で働いていた女の人は子供を抱えて家を飛び出すと同時に屋根瓦がどっと落ちて来て死んでしまいました。

当時の日誌より抜粋。昭和十九年十二月二十三日晴

「風呂たきのおばさんとふみちゃんが死んでしまった。ついこの間迄一緒にお風呂に入ったりしたのに、もうこの世の人でない。夜になればお星様がきらめき月も照るが、震災前と今と比べると私の心も町の様子も何と変った事だろう云々」

母は妹（五女）をつれて配給物を貰いに行った。帰りに地震

に会い家の近く迄来たが、立っている事が出来ず、子供を胸に這いつくばっていた時、目の前で「バザー」（今ならショッピングセンター）が砂煙りをあげて倒れるのを見て、まるで活動写真（映画）の様だったと話してくれた。そのうち、中島飛行機の山方工場の一部が倒れ、その下敷となった学徒動員の学徒の死傷者が、黄昏の中を我が家の前の道を東から西に次々と担架で中島飛行機の診療所（現在の半田市民病院の前身）に運ばれて行きました。その担架に我が子ではないかと泣き叫びながら大ぜいの人がしがみついていました。

夜に入りて余震はひどく、その度にどうーと云う地ひびきとはげしい音があちこちで聞かれました。また不思議な事に余震のたびに、あたり一面がまるで光り輝く様に明るくなるのです。一晩中不気味な程の明るさと真暗闇をくり返していました。戦争下であった為新聞にも小さく被害僅少なりと報道されたのみでどこからも救援はなく被災者は空地にむしろを敷いて壊れた家の下から布団など持ち出して夜空を仰いで寝ました。

この地震で感じた事は局部的に激しい地震であった事だと思います。山方新田は埋立地でしかも貧しい人々が住んでいたため、安普請の借家であった事も倒壊家屋の多かった原因だとは思いますが、百米余りしか離れていない動員署はガラスが数枚割れた程度で本町通りは殆んど倒壊家屋が無くあまりの差に驚きました。また同じ新田内でも銭湯の高いエントツが倒れずすぐそばの低い安定度がある様に見える平屋の長屋が倒れたりしたのはねじれる様な地震だったせいでしょうか。ただこの地震で火事が一つも起きなかった事は何よりも幸でした。

私の家の囲りが殆んど倒壊した中で二階建の我が家だけが倒れなかったのは一つには普通の家より柱と壁が多かったような気がするがどうでしょうか。今でもそのままで建って居ります。

私の地震体験

宮田珠江
（知多郡東浦町）

三河地震と云えば大東亜戦争の真最中の昭和十九年十二月七日と、翌年の一月十三日。まだその時の事は、はっきりおぼえて居るのに文にしようと思うとうまく書けません。

十二月七日午後まだ小学生だった私は、学校からかえり、妹

のお守りをしながら縁側で本を読んで居ると、突然ごおっーと云う地鳴りとともに家がぐらぐらとゆれ出しました。

地震だっ！　思わず妹を横だきにはだしで外へ飛び出しましたが、もう思うように歩く事も出来ず、その場にすわってしまいました。家も地面も大きく動き、家などは今にも倒れるのではないかと思う程でした。

でもこの時は横ゆれだったので、その割に倒れませんでしたが、翌年の一月十三日夜明けの三時頃、まだ前の地震のほとぼりもさめない時だったため、瞬間ぱっと飛び起き外へ出ようと思いましたが、障子や、からかみが倒れて来るので、あぶないと思い、又ふとんの中へもぐってしまい、ゆれが治まるのを待って外へ出ました。

恐ろしい、いっ時。その後南の方三ヶ根山の方向から青白い光が稲妻のようにうす気味悪く光ると、どどーっ云うにぶい地鳴りとともにぐらぐら。間を置かずひっきりなしの余震、又いつ大きなのが来るかと思うと安心して家の中に居る事も出来ず、それから一ヶ月くらいは、皆外へテントを張ったり小さな小屋など作りそこで夜も眠りました。

地面などあちこちに大きなひび割れが出来、家など大分かたむいて居ました。恐ろしい地震、予告なしに突然来る地震、前もって訓練してもその時にどれだけそれが約立つのか不安です。それと、昔は井戸水の生活でしたが今は水道、ガス、それが切れた時どうなるのか、不安はつきません。

二度とこんな大きな地震等来ないようにしたいと思います。

私の地震体験

石井篤子
（知多市）

今から三十三年前、昭和十九年と云えば、私はまだ小学校入学以前であった。この頃はよく地震が起きた様に記憶して居る。私の家では丁度母屋の西に小高い丘があり、そこに地震小屋と云って、凹形に穴を堀り、天井は丸太の柱を組合わせ、その上は、夜露がしのげる程度に「かや」が、屋根がわりになっていた。出入口は、丁度庭に通じていた。その隣には防空壕があり、私は空襲警報が鳴ると、防空壕に入り、地震の起きそうな夜は、地震小屋から夜空を仰ぎながら過した。この地震小屋が当時の

地震対策の一つであったかも知れない。

十二月七日、あの地震が起きた時、私は家の中で遊んでいた。突然ガタガタと音がした。「あっ地震だ外へ出よ」母が大声で私を呼ぶ。体が左右に揺れて、上手に歩けない。すると部屋堺の、おび戸がペキッと音を立てて折れた。柱時計も止った。玄関まで来た時「つし」の梯子がものすごい音と共に、私の目前に落ちた。恐しさに震えながら安全な場所を求め外へ出たその、時、横屋の雨だれの下にある大きな水がめがまるで「ブランコ」をしているかの様に揺れていた。泣きながらやっと家の前の通りまで出た時が私にとって始めての安息な場所であった。この時の地震の事が三十年過ぎ去った今も尚忘れられないのは本当に恐しかった幼い頃の思い出として心の奥まで印象に残っているからでしょう。

「備えあれば憂いなし」このことわざが幼心にも身にしみていたのでしょうか。藍染の風呂敷に私の財産であるべき赤い花柄の四つ身の着物と羽織を大事に包み毎日防空壕と地震小屋を持ち歩いていた。ある時雨が降り風呂敷包はびっしょり濡れ中から出て来た着物は見るも無残な藍のしみだらけの柄になっていた。父母は何も言わなかったが、今の様に物資に恵まれぬ世の中、小学校へ入学してこの羽織を着なければならず恥しく思った。大失敗の「備えあれば……」だった。この地震が昭和十九年十二月七日に起きた「東南海地震」であった事は後になって知った。

「災害は忘れた頃にやってくる」ものである。今の世代の約半分の人達がこの地震を知らない。そして地震の恐しさを知らない。日頃避難訓練が行われている様であるが、地震時の避難場所や火の始末はどれだけの人達が慌てずに行動出来るでしょうか。国民一人々々が地震対策に関心を持ち災害が最少限度に止る様日頃心掛けておきたいものである。

私には幼かった頃のあの地震がまだ昨日の事の様に思い出されます。

予知なくして起きる地震こそ本当に恐しいのではないでしょうか。

私の地震体験

松下美智子
（半田市）

あれから三十二年……。一才だった下の妹は結局、終戦直前の豊明村前後にて防火用水用の小さな、ため池に落ちて死んでしまったけれど、どうやら残された者、両親、姉、妹、の計五人は無事に年月を越し、今に来るであろうと思われる大地震にヒヤヒヤしていた。あの日、活躍した父は、去る昭和五十二年七月九日午後一時二十三分、中京病院にて永眠し、当時の模様を、くわしく語れる父は、今はいない。

父から生前聞いた話しでは、昭和十九年十二月七日の正月直前で、私は、当時五才でしたが今でも脳裏にはっきり記憶されています。お昼時で、私と姉は、向側の、しょうちゃんの宅に遊びに行っていて家の中が急に、ガタガタ動き出したため皆で「ワーィ電車が動いたゾー」とワイワイ言っていたら、しょうちゃんのお母さんが、台所から血相をかえて「ジシンだジシンだ」と言って、五人程の子供をかかえるようにして、外へ飛び出した事はいいが、ゆれ動く屋根のカワラが飛んで来て「あぶないから早くふとんの下に……」と言う、おばさんの回りに皆集って庭のサオに丁度、乾してあったふとんを、ずり下ろして、その中にふるえていたようです。ふとんの下にいたから良かったようで、飛んで来たかわらが私の頭に当り、そのショックで、イガクリ頭に私の前歯がガツンと当り、多分当時は乳歯ばかりだったと思いますが上の前歯一本が傷がつき、今でも影響を受け、父の死の直前から近くの歯科医にて、治療中です。

……やっと静まって自宅にもどると我家はペチャンコになり煙を出しているではありませんか、びっくり致しました。

父や母の話しによりますと結婚の当時に新築したばかりの二軒続きの二階建は、向って右側に私達家族が住み、となりは人に貸していたそうで、薬剤師である父は薬局を開いていて、二階は商品が積んであったようです。となりの二階に住んでいたSさんには、二階では絶対、火を使ってくれるなと父が申し入れしていたようで、それにもかかわらず自室で、お昼の煮豆を、練炭火ばちでやっていて地震のためグラグラとした時、ヤカンの水で火を消し不足分を下に、くみに来て二階にかけ上りかけ

て家が倒れ、下敷になり、すぐ隣が南警察署の独身寮になっていて大勢の方々が、Sさんを助ける為、ブスブスもえ続ける家を堀り出し（火事のようにパーともえるのでなく）傷をしたSさんを助け出して下さったそうです。一方父は、防火訓練に町内の人と出ていて、母が店番をしていて地震に合い、とっさに奥の部屋で寝ていた二人の妹（三才と0才）を両うでにかかえ裏庭に出たとたんメリメリと柱が折れ家が倒れたそうです。今三十五才の妹はムコさん探しで家中が心配していますが、母の両うでのお陰と申しましょうか。どちらかを後にして一人をかかえていたら……。と母は地震の話題が出るたびに申して居ります。御殿付きのりっぱなおひなさまも焼けあとから黒こげになって出て来たとか。半田に嫁いで来て、やはり薬剤師の主人が薬局をやっていますが、三月のおひなまつりには六才になる長女のために段飾りを出しながら、いつも思うのです。小学校時代にはこんなりっぱなおひなさまもなく、地震の時焼けてしまったおひなさまをなつかしんだ事でしょう……。

昭和十九年の地震が三河地震だとばかり思い込んでいたのですが、この原稿を書くに当って「地震についての体験談・提案募集」の趣旨の中であの時は東南海地震だったらしいと気が付きました。

大地震を経験して夢ものがたりの気がするが、私の前歯が少しかけているのを見れば、まぎれもなく事実なのでしょう。地震がもし来て「お家がガタガタゆれたらお便所へ逃げようね」と二人の子供に時々言い聞かせていますが五才の男の子は、「お風呂でもいいってお父さんが言っていたヨ」と聞かせてくれましたが、いざとなったら自分の二人の子を両うでにかかえて逃げられるかしら……実家の母がしてくれたように。

東南海地震

祖父江　茂子
（大府市）

その日（昭和十九年十二月七日）は、大府町の合同慰霊祭が、現在の共長小学校で行なわれ各方面から多数の人が出席していました。

祭場の木造教室は、三教室の中仕切りを取り除いたところに、裁縫机を積み重ね白布をかけた祭壇には、遺影と戦場から送ら

れた白木の箱が十余名も並べられ、お供物が飾られていました。

参列の人は、ぎっしり居すわり折りしも読経と線香の煙の立ちのぼる中で、国家の勝利を信じて疑うことを知らなかった忠烈の士に万感の思いをこめて冥福を祈り、み魂よ安らげと敬虔な祈りを捧げていました。

その時、静けさをかき破る大きな地鳴りと共に校舎が大揺れに揺れました。

「地震だ。外へ出ろ。」

全く突然の出来事に人々は、狼狽し、恐怖におののく老人の多くは、腰を抜かし、立つこともできず這いつくばっておりました。

「早くしろ。外へ出ろ。」

叱咤と人々の悲鳴、強烈な震動、二か所の入口に殺到したが埒があかず

「窓から出ろ。」

と若者は、次々と窓から飛び出しました。立って歩くことはできず這う様にして避難する後から押しのけられ、ふんづけられやっとの思いで外へ這い出し運動場では、へなへなとへたばり気を失いそうな人も何人かいました。

脱出できたと思う間もなく、自分のいる大地が、張り裂けて来るのです。次々と地割れがしてくるのです。足のやり場のない感じでみんな生きた心地すらせずどの顔もまっ青になって震え、不安気に校舎や、立木の揺れを見やり地割れをさけては、恐怖に戦いていました。

間断なく襲い来る余震も、ややおさまって人々は、我にかえりころげ落ちた祭壇を運動場へと運び出し慰霊祭を続けました。

戸外とは言え、余震に幾度となく心は動揺し、足元の地割れを苦にし全く不安な思いで時を過ごしました。やがて焼香も終わり参列の人々は、我が家を安じて足早に立ち去りました。

初冬の西日が穏やかに人々の背にふりそそぎ、つい先程あの様に驚かせた災害など微塵も感じさせない美しい光景が今でもはっきり甦って参ります。

校庭を出ての帰路は、そこかしこに亀裂が入り、途中農家の納屋が何軒も倒され、屋根瓦がずり落ち、家屋が傾き先刻の災害を実感としてとらえることが出来不安が募ってきました。

職場へ帰り着くと旧い校舎は、各教室とも黒板が落ち教壇の上にたおれていました。井戸やかたも壊れていました。子ども達の帰った静かな校庭だったことが幸いだったと思いそこらの

砂を掃いて帰りました。

外は、すっかり暗くなっていました。校門を出ると途端に今まで忘れていた我が家のことが心配になって来ました。それは、建ってから六、七十年も経っている古い家だからです。きっと潰れているんだろうと踏むペタルも重く途中の東浦町森岡地内の県道も大きな亀裂が何本も入り自転車の輪がその中へ落ちない様にと注意し大きくぼっかりあいているところでは、自転車をかかえ飛び越したりした。新しい家も何軒か潰されているのを見ると、だんだん胸騒ぎがして来ました。家の近くへ来た時二階建の酒屋さんが潰れていたし、東隣りになる鉄工所もぺちゃんこになっているではないか。ああ駄目だろうな。と思いつつ露地を入って帰り着いたらあの古い家がまだ建っていた。よかった。張りつめていた気持ちが一度に抜けてしまう思いがしました。

長い長い一日であった。いや半日なのだが。帰り道で見た様子、今日の出来ごとなど家族と共に話し合った。夜ラジオで知多半島の先へ行く程被害の大きいことを知った。この地震が、マグニチュード八、死者約千人、潰れた家二万六千余、尾鷲で六mもの津波のあったこともずっと後になって知ったことである。

三十年余も前の遠い出来事なのに、ついきのうの事の様に鮮明に甦って来るのは、どういうことなのだろう。かって経験した事のない恐怖感がそうさせるのだろうか。それにつけてもあの激震の中で履物を捜していた多くの老人達の姿は、印象深いものである。

物を大切にしなければならないと言う様ななまやさしい時代ではなかったあの頃の日本は、極度に貧しかった戦争時代、命よりももっと物を大切にした時代であったことを痛感する。

過密都市となった日本、地震対策について色々論議もされている昨今だが、いつ、どこで、どんな状態で災害を受けるのか全く予測はつかないが、冷静に判断し危険から脱出できる様にしたいと念じています。

〔西三河地域〕

地震の体験記と心構え

鈴木敏子
（高浜市）

大東亜戦が愈々たけなわとなっていた昭和十九年十二月七日、お昼前だった。私は近くに住む姉と、乳母車を押して高取と云う所へ出掛けた。晴れ上ったいい日で目的の百姓屋さんは大きな構だった。庭も広くそこで待っていた（それで恐怖感が少なかったのか?）その時グラッグラッと来た。ハッと思って、東の門を見た時、続きの横屋共々、南北に、ゆさゆさ揺れている。アッ、と思った。その中に立っていられなくなりしゃがんだ。右に左に地面がまるでシーソーをやっているように……。手を突いてもまだ転びそう。東を眺めながらアッアッと息を呑む。今にも倒れそうな位揺れている。母屋はギシギシいうが、建物が大きいので割合よかった。ずいぶん長く感じたが二三分揺れていたろうか。芋も買わずに直ぐ帰路についたが所々の古い小屋や職場が傾斜していた。地盤の柔かな所や、川に沿った崖のような所に、亀裂があった。

次にまた一ケ月もたたないうちに三河地震だ!! 前と比べると今度は夜中で、真冬であったから恐怖感は強かった。揺れに起き上った時、まだ電燈はついていた。主人と共に外に出ようとし、足袋を履こうとして主人に叱られた。そんな余裕があった。軒下で様子を窺ったが一向に治まらない。暗夜でも戸外は薄明り。其の頃は、私宅の周囲は東は線路で先は家が殆どない。西は下り坂で、しまいに海に出る。向いは亀崎。今は衣浦大橋があって一跨ぎだが、昔は渡し舟だった。この地震で海沿いの人々が、津波の難に遭われた。前回で緩んだ職場等が倒壊した。私共もこの時、一升壜に入れた醤油がこぼれた（半分程）。土間かタタキだったら割れたろう。それだけの被害だったが、海底が震源地の為、ドッ、ドッと海鳴りに似た音と振動が一晩中続いて、蒲団の中で寝る勇気はなく、家の裏の畑の真中に急造された筵囲いの中で夜を過ごさせてもらった。其の間主人が必要なものを、折をみて、恐る恐る取りに往復した。

夜が明けるまでまんじりとも出来ず、白々と明け初めた頃、揺れも地鳴も、遠のいていった。あの時震度は、前が6とすると、後は5くらいか?、しかし前は午前中、後は夜間、それに

長かったから非常に恐かったし、不安も募った。

高浜は死者は知らないが、西尾のお寺の倒壊で、名古屋の疎開児童が大勢亡くなられたのは前の時だったが、あの頃は乗物は自転車が主で、それに私は妊娠していたので見にいかなかった。戦争の時代でもあったので、余り騒がなかったが、空襲も名古屋にあったりして大変な時代だった。

でもあの程度の地震なら、私は恐るるに足らないと思うけれど!! 今は当時とは全ての面で雲泥の差。都会で!! また食事時!! だったら慄然!!とする。

忽ち火災だ!! 車が溢れている、タンク車注油所等々。危険が一溢だ。人々の避難訓練も大切だが、車の方の訓練を、また取締りを厳重にやって欲しい。街を走る車をみても、片手で煙草を吸い、髪を刺りながらの、ながら族が案外多い。火災の発生がなければ、家の中に居る方が安全。日本家屋は滅多に倒れない事を知りました。台風の直撃の方が恐い。特に家庭の主婦(幼児の二、三人もある人は)一に慌てない、二に元栓(火)三に戸を開けておく、そして普段から沈着に行動出来る、心の準備をしておく。電池、子供用品(子負び帯)、風呂敷、タオル、手拭い(綿製品が一番いい)救急の時に間に合うよう判り易い場所へ。子供も暗夜に馴れさせる。窓のない家は、夜光塗料で扉、東西南北の位置を、飲み水も夜(蓋の出来るものに)入れておく。食物も少し位保存食や、軽食を用意する。早く寝る習慣を子供にもつける。棚や箪笥の上は危険なガラス製品(人形ケース、飾り物、等)、頭になる個所には絶対おかぬよう。裁縫箱も(狭い住宅の人等は特に)。天候が季節外れに寒く、また暑い時も用心する。そんな時必ず、といっていい程、日本列島の何処かで、いや世界の何処かで、地震や、天変地異があったりする。

兎に角日本は、地震国。活火山帯が走っている。これは宿命です。その為に外国より風光明媚で、有名な場所も多く、四季があってほんとうによい国だと思います。

今の時代の子の過保護は!! 社会の様相など!! 憂うべき状態です。辛抱が足りない、難儀をしていない!! 昔の人等の辛かった時代。先人の遺した尊いものを、我が子にも伝えて、このよい日本の国を、守っていきたいと思います。母親の外見より、精神のしっかりした子供に育てる力こそ、今必要な時だと、幼児を持つ世のお母様方にお願いします。『災害は忘れた頃にやって来る』ではなく『天災は忘れないでもやって来る』です。

三河地震の思い出

青木恭子
（半田市）

昭和十九年私は六年生でした。親の反対を押し切って三年生から六年生までの希望者四十名の中の一人として当時碧海郡桜井村の菩提寺に集団疎開していました。お寺での生活が丁度半年過ぎた十二月七日。その日は朝からうす曇りで肌寒く午後いつもなら陽の当る境内の真中で十数名がハンケチ落しをして遊んでいた時です。足元がぐらぐらッとして「地震だっ」と誰かの声。驚いてみんながひと所に棒立ちになり本堂の方を見ると雨樋の水を受けている大きなコンクリート水槽の水が「バシャンバシャン」と音を立ててこぼれ本堂が左右に揺れていました。初めから外に居た私達はびっくりしただけでしたが中で勉強していた子等は顔をこわばらせ素足で飛び出して来て「大きな地震だねえ」と目を丸くしていました。そして戦争が緊迫し寒い冬を一層寒くした二十年を迎えました。七日の地震のあと本堂左棟の善光寺堂は強い風が吹いたり堂の中を走ったりするとどこかが「ギィー」と音がして寺へ来た時からずっと寝ていた男の子達は夜になると気味悪がっていました。ところが虫の知らせとでも言うのでしょうか、一月十三日の前夜、一旦寝床に入った男の子の誰かが、どうしても怖くて寝られないと言い出したら、皆寝ること嫌だと言って、その夜始めて尼さん二人と全員本堂で寝ました。

「ドドドッ」と突上げて振り廻すような大きな地震に思わず飛起きましたが、揺れがひどく立てません。暗闇の中を手さぐりで戸口の方へ這って行った筈なのに、両手を廻しても誰の体にも触れないのです。恐怖に震えながら昨夜いつもと寝床の位置の変った事を思い出したら、ねぼけて方向違いをし本堂の横一番奥に居ることに気付きました。その時更に震度が強くなり本堂の何かが倒れる音や落ちる音がして、続いて一瞬建物の壊れる物凄い大きな音と共に、埃臭い強い風がさっと吹き込んで来ました。誰もが善光寺堂の倒れた事を直感し「わあ」「こわい」と泣き叫びました。もしかしたら本堂も倒れるかも知れないと、そんな不安が頭をかすめた時、「バタン」と音がして、二枚の戸が廊下へ倒れ、まだ暗い外が見えました。若い尼さん二人が歪んだ戸を必死で外してくれたのです。そして庭の一番大きな松の木の幹に、全員集まりましたが、寝巻き姿に素足で

一人も枕元の着類を持っていませんでした。恐怖と寒さで口もきけない程、がたがた震えながら、余震の数を数えて夜明けを待ったあの時間の長かったこと。朝になって、お寺の近くのスミちゃんが、離れが倒れておばあさんと亡くなった悲しい知らせを聞き、倒れた善光寺堂を見ながら、もし地震が一日早かったら男の子全員助からなかったかも知れないと、今更のように地震の怖さを知りました。お寺が半壊した事を知った村の人達は、早速駆けつけて「虫の知らせは仏様が預りっ子を救ってくれたんだ。余震が続く以上又大地震があるだろうから」と私達の為に畠の中へ大きなわら小屋を造ってくれました。

この時村の人から地割れを聞いて、皆で見に行きましたが、道路の真中が二十糎位からひどい所は数十糎巾の地割が長く続いていて、生まれて始めて見た地震の凄さに驚きました。風流なわら小屋生活は思ったより大変でした。地べたにあぐらをかいていると、どんな小さな地震でもよくわかる、尻が廻るからと笑ってた先生も、寝ながら月や星を見てはしゃいでいた生徒も、日がたつにつれ寒さや野天の炊事の水運びにも疲れ、土の夜冷えや雨と雪どけに、布団が濡れたりして、寝むれない日が続き大勢風邪をひいて病人も出ました。この生活をあと十日も続けたら、全員病気になると医師から言われ、先生始め皆大慌てです。取りあえず、卒業真近かの六年生から名古屋へ戻る事になり、四十日間のわら小屋生活と、お世話になったお寺の方達に別れを告げ、二月二十六日一生忘れる事のない地震の恐怖と友との思い出を胸に、九ケ月振りで我家へ帰りました。この時の地震はその後三河地震と名付けられ、空襲の恐しさも伊勢湾台風の怖さも知りましたが、災害は忘れた頃にやって来るの諺通り、予告なく起る災害が地震です。震度も予知出来ません。それだけに日頃の心掛けが大切だと思っています。

地震になったらまず火の元を消し、戸を開ける。就寝中なら着類を持ち、貴重品を身に付ける。生活面では毎日ヤカン一杯以上の飲料水の汲置き、非常食の用意、枕元の家具の上や棚の上に倒れやすい物を置かない。季節によって使っていない寝具類はこん包し、十文字に紐をかけておく。窓下に空瓶や金具の危険物を置いておかない。その他大風呂敷、袋等を丈夫な紐何本かと一緒にしておく。万一戸外へ出す時まとめたりつなぎ合せて粉失を防げる。また預金通帳や証書の番号は手帳に控えて職場で保管する。近い将来関東大震災の二の舞がないと誰も断言出来ない以上、万一の震災は最少限で済むよう一人一人が地

震の恐しさを認識する事です。

三河地震の思い出

尾崎光男
（幡豆郡吉良町）

「ガシャーン!!」

というものすごい音で目がさめました。あたりは漆黒のやみでありました。からだを動かそうとしても、自分の足がいうことを聞きません。私は必死で叫びました。

「おかあちゃーん!!」

母のこたえは、すぐそばにありました。父の声も聞こえます。国民学校（現在の小学校）四年生であった私が、地震によってわが家が倒壊したことを理解するまでに、かなりの時間がかかりました。私には、何がどうなったのかさっぱりわかりません。父の説明で少しずつわかりかけたようですが、なにしろまっ暗なので、かいもくけんとうがつきません。からだの動かせない私にとって、見えないけれど父母がすぐ近くにいることは心強いことでした。わが家の一家三人は、倒壊した家の下じきになってしまったのでありました。

母が手さぐりで私の顔をさぐりあてました。私が

「動けないよお!!」

というと、父が手さぐりでようすを調べてみました。私のふとんの上に母のたんすが倒れ、その上に、二階のかもいがのしかかっていたのであります。母がなんとか私を引き出そうとするのですが、私のからだは動きません。父が手さぐりで私の足にふれてみると、かなりつめたくなっていたそうです。私自身足の感覚は全くなく、下腹がはってくるのを感じました。父は、急いでなんとかしなければと、たんすをこわしにかかりました。桐のたんすでもなかなかこわれません。母が耳もとで、

「がんばるのだよ。」

と何度もいいました。私の意識がもうろうとしてきたとき、ふわあっと急にからだが軽くなり、ふとんの中からやっと引き出されたのであります。

私はたすかりましたが、まだ倒れた家の外には出られません。出口がないのです。父は、外への出口をさがすため、あちこち動きまわっているようです。母が突然、

「父ちゃん、水だよ!!」

といいました。父は、津波がきたらとても助からんぞ、もう自力ではどうしようもない、「他力本願だ」、念仏をとなえようといいました。私も、必死で念仏をとなえました。少し時間が経過して気がつきましたが、さっきの水は、買いおきの酒びんが割れて、ゆかを伝ってきたものでありました。

その時、

「火事だー!!　火事だぞー!!」

と外で叫びながら数人の大人が、東の方にむかって走っていくようすが聞かれました。こんどは火事です。どこが火事なのか、聞くこともできません。父が、

「もし近くで火の手があがっているのなら、もう助からん。」

と悲痛な声でいいました。

少し時間がたって、外が静かになり、だれか近づいてくる足音が聞こえます。

「おい、松島屋のはどうせられたのかのう。」

「トントン音がするで、きっと大丈夫だろう。」

となりのおじさんたちの声です。私たちは何度も、大声でたすけを呼びましたが、外には聞こえないらしく、おじさんたちはいってしまいました。倒壊した家の中の声は全く屋外へは伝わらないようであります。

父は、「他力本願」をかなぐりすてて、またも二階の床板らしい所をドンドンたたきました。まえよりも力がはいっているようです。

「この家はおれが造った家だ。二階の畳の下をいくらたたいても板ははずれないが、押入れならきっとはずれる。」

といいながら必死になってたたきました。突然、つめたい夜気が、スーと私たちのほおにふれました。

「あいたぞ!!　たすかった!!」

とうれしそうに父が叫びました。これまで倒れた家の小さなすき間にとじ込められ、空気がだんだんよごれて、のどがいがらっぽくなってきていましたので、このときの空気はほんとうに、「おいしい。」という感じがいたしたのでありました。

やっとの思いで、私たち家族三人は屋外にはい出すことができました。外は、夜明けの青紫色の空に星がきれいにまばたいておりました。

地震後数か月は畑で寝ました。ふとんの上に雪がつもったこともありました。私の足は約四か月歩行できませんでした。

私の四十三年の生涯で、いちばんおそろしく、そして最もつ

らい思い出は、三十二年前の三河地震でありました。

私の地震体験

大山　あや子
（幡豆郡吉良町）

昭和十九年、あれはすごい日照りの年でした。田植が日照りで出来なくて、水不足で、草も枯れそうになりました。困りはてて社守りの方々が伊勢へ雨ごいに一目竜様のお札を受けに行かれました。村中、駅迄お迎えに行って、お宮様に入られ心経を上げる間、頭の上に黒雲が出て、ぱらぱらと雨が降りました。あの時神様は有難いと若かったけど思いました。でも雨は降りませんでした。仕方無いから穴をあけ、井戸水を、やかんでついで、日照でがりがりで足が熱いから、ぞうりをはいて田植えをした。あれは忘れられない。其の年の十二月七日、何の前ぶれも無く突然東西に、みしりみしりとゆれ出した。あの時八十才になる祖母さんが、早く外へ出れと大声を出された。びっくりして外へ出たが、歩くどころか、はうのが一生懸命だった。地面がぐるぐる廻って腹ばいで表の真中にうつむした。頭を上げたら大きな家がむしりむしりと斜めにゆれ、その内、立真が折れて家が転んでしまった。あの転ぶ時間の長かった事、何分地震があったか知らないけど、斜めでも良いから転ばんでいてくれたらと手を合せて居りました。戦争は一番ひどい時、若い男は全部兵隊に行き、家の兄も出征して居りました。父は死に、母は入院、そして死亡。家は倒壊、祖母と妹と私と三人になってしまい、一時は途方に暮れ、でも戦争に勝たねばと元気を出し、残った別屋を住居にして頑張りました。それから毎日の様に掛時計が休み、電気がぶらぶらする様な余震が一日に二、三回ゆれました。空からは毎日空襲で生きた心地は無かった。そして明けて一月十二日、無気味な程静かな気持の悪いお天気だった。その内、晩方、大きく飛び上る様な地震があった。祖母が今日は地震がありそうだから隣の人と一緒に寝てもらおうと云いましたので、同じ出征家族の女と子供だけの人と家の別家で一緒に寝た。案の定、十三日午前二時半頃、あの三河地震。昨年の暮れの大地震で大分家がいたんでいたので、どこの家も被害が大きく、あの惨事になったのです。今度は残った別屋が土台が一尺ぐらいはづれてしまった。それでも転ばなかったから良かった。

吉田の小さな町は、道が通れない程倒壊し、道ばたに死体がそのまま寝かしてあって、そこをまたぐ様にしておばさんの家へ生死を見とどけに行った。人手が無いから下敷になって居る人を助けるのが一生懸命でした。死んだ人は其のまま一日ぐらい外に寝かしたままでした。火葬場が一ぱいで、火葬場の外へ穴を堀って空襲が来るから明るい内に火葬された。あの年はすごく寒くて、三河湾にうす氷が張った悪い年でした。

こんな話を、戦後に生まれた人に話しても、昔の話になってしまいました。

三河地震の思い出

寺田鈴代
（海部郡弥富町）

三河地震は、太平洋戦争も末期の昭和二十年一月に起きました。

当時、私は小学校の一年生で、その地震に出会いました。けれど最初の大きな揺れが来た時、ガラス戸のガタガタ大きく鳴った音とか、棚の物が次々と落ちて来たとか、少しも歩けず、夢中で何かにつかまって居たというような恐ろしい思い出が全く浮かばないのです。しかし「三河大地震」というと必ず思い出す楽しい思い出があるのです。

私が住んで居たのは、岡崎市の中心地で、家康が産まれた地なので「康生町」とつけられたという町で、住い家が可成り立て込んでいましたが、近くに刑務所が有り、脱獄してもこの辺りに逃げ込めば、決して見つからないと言われた程、迷路のように入り組んだ所でした。

夕方になっても、小さいけれど何度も余震が続くので、組の人々が相談し、近くの材木置き場で寝ようということになりました。

小学校が少し離れた場所に有りましたが、各家に近い材木置き場が避難場所に選ばれました。それはその辺りとしては、可成りの場所を占めておりましたが、戦争中のこと故、材木といっても、うず高く積まれている訳では無く、あちこち少しずつかためて置いてあったようです。片隅に屋根と回りが打ちつけてあるだけの簡単な小屋が建っておりました。その小屋で夜を明かそうというのです。寒いのを我慢すれば格好の避難場所でした。

材木が、布団が敷き易いようにきちんと並べられ、各家々から布団が運ばれて来ました。何しろ召集されていて男手が殆んど無い上に、真冬でしたので、母親達は大変だったようです。湯たんぽを沸かしに行ったり、まだ寒いかと衣類を取りに又駆けて行ったり、右往左往のうちに用意されました。

私と妹は母に、「いつ又大きいのが来るか分らんで、今日はここで寝るでなん」と言われ、そこへ連れて来られました。

辺りを見ると、ほの明るいろうそくの灯に照らされて、毎日毎日、学校も遊びも一緒という、近所の腕白連が居ます。しかも、今夜は枕を並べて寝られるとあって、皆がニコニコ顔の有頂天になってしまいました。いつもなら充分寝入っている時刻になっても、子供達は走り回って遊んでいました。それは大変楽しいものでした。

母親にやっとのことで、布団の中に押し込められましたが「あっ！又」と時折り、ユサユサ襲う地震の時は、さすがに恐いのか、布団を頭まで引き上げ、身を硬くし、じっと回りをうかがっておりました。トタン板のすき間からは、冷たい冬の夜空が見えるし、敷布団の下の材木がコトコトよく動くし、子供達はいっこう寝つかれませんでした。

私の家の隣の住人は御夫婦のみで、大部のお年のようでした。「わしらはやっぱり畳の上で寝た方がいいで。もう年寄りだで、どうなってもいいでなん」と言われ、家へ帰って行かれました。（あの人達、家の中でよう寝られるなァー。心配じゃあ無いのかしらん。）今にも傾いた家の中で押しつぶされてしまうので無いかと子供心に不安でした。

たしか三晩ほど、そこで寝たように思います。

今、私も三人の子の親となり、当時の母親達の、何としても子供だけは助けなくては……と必死だった気持ちが手に取るように分ります。そんな気持ちをよそに、我々は何とのん気であったことか。

「今日学校で避難訓練があってねェ。○○くんと階段の所で肩を押し合っこしていたら三段ぐらい転がって落ちちゃった！」と先日も我が家の小学生の次男坊が、夕食時に言っておりましたが、先生方の（生徒一人でも怪我の無いように）との懸命な御指導をよそに、子供達はいつもと違うプログラムに案外、嬉々としているのでは無いでしょうか。

「弥富駅はねェ、海抜0メートルで、日本中で一番土地が低い駅だそうだし、金魚を育て易いということは、きっと土が水

っぽいということで、地震の時は、特に気をつけないとあかんのよォー」

「まずガスの元栓を締めること、冬だったらストーブの火を消して火の始末ね。それからガラス戸を開けて出口の確保よ！そしたらすぐに机の下にもぐって、落ち着いて回りの様子を見たらいいのよォ」などと、子供にはえらそうなことを言っているけど、（地震よ起きないでおくれ）と願うばかりなのです。

三河地震体験記

近藤良美
（額田郡額田町）

全く、自然の暴威はすさまじい。どんなに防災に意を尽しても、充分だということは無い。時には予想をはるかに上廻る程の大きな災害をもたらすことがある。だからといって、防災は絶対否定できない重要さがある。即ち防災は民心の安定に役立ち、更に復興への意欲をより早めるに効果がある様に思われる。

三河地震の体験を記してみよう。

一番強烈な奴が襲ってきたのは昭和二十年一月十三日の未明だった。今迄私が体験した地震というイメージの外であった。それは丁度、私の宿直の夜だった。その日も午後大きな地震に見舞われた。丁度午后作業中だった。ドドドドーッと来た。俄に空が曇って来、何やら不安な気持ちだった。

夕食も終り、今日の地震の話しなど……夜も更けたので小使さんの老夫婦は孫と共にこの部屋で、そして私は宿直室へ引きあげた。（校舎は二棟で東西に並び北の校舎は一段高い所に在り、その校舎の一番西の端に宿直室があり二教室離れて小使室があった）

夜中、突然ドドドドーッという地鳴り、ついでユサ、ユサ、ユサと来た。あっ、地震だ。あたりは真暗だ、と今度は更に強いのがきた。ダッダ、ダダダダーッ、これは大きい。体が横に振り廻わされる。思わず枕元の机を手さぐりで、その下へ這い込む。まだゆれている。窓から西南の空にパッ、パッと電光が光る（空雷とか）うす気味の悪い夕立雲の峯が見える。次いでドドドドーッという地鳴り。そしてユサ、ユサ、ユサーッとくる。その度に校舎の硝子が割れんばかりにきしみ、ビビビビーッと響き遠のく。今迄何度も宿直はやった。時には物凄い雷にも出会ったが、今夜ほど薄気味の悪いことは始めてだ。あ

たりは真暗だ。小使さんが「先生、先生ッ」と呼んでいる。私も「小使さん、いいですか」としか他に言葉もない。そのうち小使さんが裸のろうそくを手で風がこいをして「えらい地震だったね」「いいですか」と来てくれた。勿論、懐中電燈なども無い。被害の大きさのこと、震源地はどこだろうかなど、話し合っているうちに静かになったので又寝ることにした。

翌日は地震の話しで持ちきりだ。うわさはこれ又すごい。日間賀島が沈んでしまったとか、お伊勢様が津浪ですっかり無くなってしまったとかだ。どれもが皆本当のことの様に聞える。中には今度の戦争はどだい（とてもの意）無理な戦争だ。世界の大国米英を相手にするなんて、大体勝てるわけがない。神様が懲らしめられたのだそうだなど、そんな馬鹿なとは反問しながらも、早く情報が知らされない為の不安で一ぱいだ。

又次々と学校関係からの情報が知らされた。震源地はどうやら三河湾の中らしいと、形原附近では屋根が皆ペチャンコで大勢がその下敷で死んだそうだ。又矢作川の川原では死んだ人を焼く煙がほうぼうで見えるそうだ。又幸田の某小学校では宿直の女の先生（当時は男子のかわりに女教師が二人で宿直をしていた）の一人は敏捷な人でダダダーッと来て、すぐ飛び出したので、落ちて来た瓦にやられて大傷をし、も一人の先生は常々動作も緩慢で部屋の中でうろうろしていて、為に無事だったそうだ。又震源地の近くでは上下動で、ダダダダーッとくると次いでピシャッだそうだ。重い屋根が支えられている梁のほづが抜け、柱が倒れ、その上からドサッと落ちて来て下敷だそうだ。又窓など開けようにも窓がきしんで開けられず、飛び出すこともできなかったそうだ。

その翌日からは、家の中で寝る人は一人も無く岡崎市は勿論、その他でも外に竹竿で風がこいをし毛布をかけ、畳を敷いて俄かの部屋づくりだった。学校でも毎夜、勤務の宿直は皆運動場のポンプ小屋だった。学校長も自転車小屋へ畳を敷き毛布で囲ってそこに寝ておられた。

昔、母親が、明治の濃尾大地震には家の雨戸が開いたり閉ったりしたとよく聞かされていたが、翌日から学校下の酒屋さんの二階で間借りをしていたが、地震のたびにレールの上の硝子障子がガラガラ、ガラガラと左右に動き五～六㎝位開いたり閉ったりするのを見て、まんざら出鱈目のことでは無いなと思ったことだった。

この地震の被害については殆ど知らされなかったが、私の見

た範囲では、滝山寺の石垣が崩れ落ち、又石燈籠の殆どが倒れた。又私の家の墓も根石が動き為に穂が落ち下石が割れた。

この体験を通して考えられる事は、もっと防災は多方面から検討すべきではなかろうか、又これにも増して一刻も早く実際の様子を知らせる事が民心の不安を無くす為にも大切なことではなかろうか。

三河地震

鈴木巖（西尾市）

三河地震が起きたのは私が六才の時のことで、その当時は二ケ月位前から大地震が起きるとの噂があり、小さな地震が数多く発生していました。家族の中でも祖父は用心深かったせいか非常時にそなえ、いつでも避難できるよう心掛けていました。特に夜間の事態発生にそなえ、祖父と私は縁側で睡眠をとり、屋外に避難できるようにしていました。こうしたことが二ケ月位い続いたようです。

残念なことに心配していたことが適中し、昭和二十年一月十三日の夜明け前に三河地震が起こり、我家は倒壊してしまいました。

このときも縁側でやすんでいたが、実際には避難する時間はまったくなかった。家族は奥の部屋に三人、二階の部屋に二人がやすんでいたが、一人も屋外には避難しておらず心配していたが、やがて夜も明け回りが明るくなってきました。すると五人の家族は倒れた家の隙間から這い出てきました。よかったよかったと嬉れし涙を流しました。家は縁側を残し裏側に倒れたので祖父と私は無事でした。助かった家族の話を聞いたところ、寝ていたところが長持のとなりだったことが幸いしたようです。

地震の起きた直後はただ茫然とするばかりであり、闇夜であったせいか祖父は何もすることができず、夜明けを待つばかりでした。

この夜は雲一つなく星はキラキラ光り何事もなかったような、つめたい夜空が印象的であったことを覚えております。

昭和二十年と言えば、我日本国は戦争の真っ最中であって、父は外地へ出征中で母が大変苦労しました。当時は各地で被爆のあった悲しいときでありました。この被爆を避けるため、名古屋から当地の二寺社に数拾名の児童が疎開しておりました。

悲惨にもこの震災に遭遇し、木造建ての二寺社は持ち堪えることができず全壊してしまい、幼ない生命を大勢失なった。今日まで生きておれば、皆んな働き盛りだなあと思い出す度に、目頭が熱くなってきます。ほんとうに残念なできごとでありました。

いま作文を書くに当り思い出してみまするに、この地震は予測されていたように思われるが、何分当時は戦争中だったためか、これの対策はなにもなかったようで、このため犠牲者を多くした原因になっているように思われてなりません。

私の部落は百戸ほどの農村地帯であり、農業経営に養蚕をしていたためか、それぞれの家屋は比較的大きな木造建築の二階建ての家が多くあった。こうしたこともあって被害を多く受けたようです。

被災の状況は凄まじいもので、家々が軒並に倒れた状況は、現代版のテレビマンガの機械獣に襲われた状況と全く同じで、家々は裏側に表側に倒壊し、また二階建ての家では一階の部分が全壊し、二階だけのこっているものなど、とにかく惨憺たるものでありました。

地震は瞬間に起きたものと思われ、私が気がついたときはすでに家は倒れており、倒壊前のゆすっていた時間はなかったようで、このように瞬時のできごとのため、避難する余裕はまったくなく、屋外に避難できた人は一人としてなかったように聞いております。

住家を失なった人々は、工作隊のお世話で藁小屋を建ててもらい、しばらくは藁小屋の生活が続きました。この冬は雪も度々降り、寒かったことを今でも覚えています。

被災時の状況はいまでも忘れることなく、心のすみにやきついています。幼いときの記憶にたどり、当時を思い出しながらペンをとってみましたが、とにかく文面では表現ができないほどであって、体験者でないと理解してもらえないほど悲惨なものでありました。

さいごにこの震災の犠牲者の冥福を祈りますとともに、このような事態発生にそなえ、日頃から注意するよう心掛けたいものです。

私の地震体験

深見作二郎
（豊田市）

昔から云われている人生生活で、こわい恐ろしい事に地震、雷、火事、おやじと云う言葉が有る様に地震は、いつ何時有るかも予測が出来ません。常平ぜいに地震の災害が起きた場合に災害を最少限に、くい止める様心掛けたいと思います。

昭和二十年一月十三日に、三河地震が有った時の思出を反省して見ますと、家の裏の山が地震の大ゆれと同時に崩れて来て、土蔵の角の柱から裏のかべが土砂で埋って、二回目の地震でも又土砂が崩れ落るので、どうしようかと考えた。それからも毎日の様、何回か地震が有った。其度毎に火の用心に注意火の始末を第一にした。今では燃料がガスや電気で簡単になったが、其の当時は、薪や割木や炭火で食事の仕度や風呂沸も、何かと労力がかかったが、地震の度毎に防火の水は常に備えて、火を消す事に家族皆が心掛け、防火に務めた。其他重要な物は整理し整頓して置き、不慮の災害に備えて、非常の持出し物は家族一同が心得て置く事が必要で有る事を充分話し合う。たとえば、食糧、米、野菜、保存食、現金や貯金通帳、印鑑其他重要書類等を整頓して置く。亡父から聞いた話で、地震が起きた時は竹やぶの中が安全だと聞かされて居たので、竹やぶだと一面に竹の根があみの目の様に張って居るので、養蚕用の屋外飼育を行った時に使ったテントが有るので、竹やぶの中、テントを張るだけ竹を切り、枝を払ってテントの長さに切り、地面に竹をならべ古板を並べ、敷藁を厚くひろげて平にして、夜だけ、そのテントの中で寝ることにした。毎日の地震で、心身共につかれ、疲労し、心配して居たが、竹やぶの中が安全だと云う事を聞いて居たので、気分的にも安心して、よく寝むれ安眠が出来て疲労も少くなって楽になった。地震も一ケ月位続いたが、次第に静かになり、山崩も大きくならず、被害も無くなって平常に戻ったので安心しました。

但し、いつ何時地震が発生するかも解りません。大正十二年九月一日の関東大震災も此の地方でも大きくゆれて、丁度昼の食事時であったので、各家庭で火を使って居たので、地震発生と同時に外へ飛出し、火の始末をせずに逃出した事で、東京都の大都市では、各所から火災が起り、大火災となり、死者及び行方不明で十万人近い人が無くなり、家屋も五〇万戸近くの大

きな被害を起した記録を見ても、如何に地震と同時に大火災が起り易いと云う事が実証されますので、日常に心掛けて、不慮の災害に備えて、火の用心と非常の時の備えを家族一同が心掛けて置く事が必要だと思います。

以上私の拙ない体験の思出を記しました。少しでも御参考になれば幸と思います。

私の地震体験

戸軽ヒサ
（豊田市）

昭和二十年十二月ある夜の出来事。一瞬にして目がさめた。「アァ」と叫ぶだけ。真暗な家中を親子がだき合うと、必死に手さぐりではうのだが、振動が激しくはうことも出来ない。ようやくにして手と手を取り、タンスの根本に身を寄せる。真暗な家の中に、ミシン、ミシンと不気味な音をたて、今にも倒れるではないかと思う程。時は丁度空襲でB29がブンブン来襲。下では地震、一時も気の休まる時はありません。

父に誘導され、やっと家外に出た。真暗な外は又どこにいるのやら、隣からは誰々さん、誰々さんどうしている、と大きな声で互に呼び合う。安全な所へ避難し寒空に一夜を明かしました。朝になり食事時ともなり、家の中へ入って支度をするわけにもゆかず、余震の間をぬっては家に飛び込み、必要な物だけ取り出して来て、又入るといった様にして家に入ったものです。土くどにて御飯をたき、一時をしのぐ。私も昔の女学生でしたので、電車で三十分位乗車しなくてはなりません。併し電車は不通、どうしようもなく古ぼけた自転車でギッチリ、ガッタリと友達と学校に行く。其の途中、さまざまな悲劇を目にして、若いながら念仏が出ました。幼い小学校の子供さんが空襲のために、名古屋より田舎の寺へ疎開して来ていました。

人数ははっきりした記憶はありませんが五、六十人位ではないかと。其の寺がカメがはった様に倒れているではありませんか。「マァ」と思わず出る声に自転車を止めて手を合せた。

夜明けと共に下敷になった方々を取出したでしょう。地べたにふとんを敷き、可愛いい子供が、まるでひる寝でもしている如く並んでいるのではありませんか。空襲で命を助けようと手ばなした我が子が、田舎の疎開先で命をとられようとは、どの親も思ってもいなかったことでしょう。

その悲惨な所をぬけて、ようやく学校につく。学校では先生も生徒もただ右往左往するのみ。もう授業どころではありません。尊い先生生徒をなくした私達は、茫然として帰宅してしまいました。其の後学校葬にて涙の葬儀をすませました。

昨日は「おはよう」、「さようなら」、と右に左に別れた友も、今日はあの世の人。人間のはかなさをまざまざと知る。ただタメイキが出るのみ。

さぞかし苦しかったことでしょうね、と自然につぶやく。又目の前に人々の顔が浮ぶ。私の親戚では全壊で父親と子供が、家の下敷になり、死亡したといういたましいこともありました。家族は五人で後の三人は屋敷裏をやぶって外にはい出ました。隣をみても右左見てもただ泣く声だけ。

又部落全体がほとんど全壊に近く死者も大ぜいで火葬場がまにあわず、田んぼの水路で火葬にしたものです。まるで犬か猫でも思わしめるみじめな姿でした。

茫然として家についたものの、家では今晩からの寝る所をつくらなくてはなりません。一生懸命にやっている父と母に、自分みづから手伝いました。父は子供に「一束でいいからはこんでくれ、たのむ」と私達に口づさむのです。その家は藁小屋です。四方まるでかこい、入口のみ開けて、屋根は戸板やらむしろをあてたものです。天気の日は何も感じませんが雨の日はこまったものです。ポタンポタンと雨もりがして、ふとんのぬれたこともあります。だからと言って、わがままは言っておられません。思ったより藁小屋は暖いものです。寒い朝はヒョッコリ顔を出せば目の前は霜で真白です。こうして不自由な生活を一ケ月程つづけました。併しなれというものはおそろしいものでして、自分の本宅のことなんか忘れてしまいます。ドロボウが入ろうがどうしようが、よくも徳もなくなってしまうのです。

一応外で地震には安心の日々を送ってはいましたが、まるで地面に寝ている様なもので、余震が直接ひびき気持のいいものではありません。家族六人がまるで六畳位の部屋に豚の様にくっついて寝るのです。

私の家では母が出産して日も浅いことでしたので苦労しました。其の地震が短命のもととでもいいましょうか、母は病におかされ床につくようになりました。月日は流れ、ついに一命を失ってしまいました。其の子はすくすくと生長し、今は一父親として社会に専念しています。この地震のおそろしさは身にしみ忘れることは出来ません。この地震が起らなかったら、私の

家も平和な家庭が続いたことでしょうに、地震のために平和はこわされ、淋しい生活を送らなければなりませんでした。

ようやく平和がおとづれた今日この頃、新聞、テレビで地震のことを叫びます。三十年前をふり返って、二度とこんな悲劇のないように科学の進歩しつつある時、よい対策があれば何よりと、心より願うものです。

私の地震体験

塩谷都
（西尾市）

うら若き女子挺身隊員とし、碧海郡出身者二十七名、入所式のお祝に卵入と思いきや、とうもろこし入りの御飯。喜びも束の間、職場ですれ違う男性に恋を語る意もなたず、かすかな喜びを持ちつつ、十九年は暮れ様としていた。十二月九日、五時に起き、六時に広場で体操をする。其の時地面がゆれるのです。潮の吹き出ている埋め立地。歌を唄って門を出、五、六分の所の会社の地下室の食堂で、ころとしたさつま芋の味噌汁をたべ、地上へ、一人ではとても歩けない暗い迷路を出てほっとする。技術部青写真室で、黙と製本の下準備の紙を切っている。四時頃がたがた。地震だ。机に頭をつっ込み、十分位過ぎてみるともう大変。床のコンクーはさけ、泥水が流れ、壁は落ち、寮へ帰る。大小のがたつきも整理したけど水が出ない。風呂はわかない。水の出ない便所も二三日で富士山の様。高下駄をはかなければと話しつつ間に一週間程で庭へ大きな便所が十程出来た。どこかでしらみが湧き拾った拾ったと手でつぶす。大豆入りの赤坊の手位のおにぎり二個で一ヶ月過す。それでもやせないのです。一ヶ月一回の休みに家へ帰り、両手に一ぱいカステラ、桃、柿と運び、働いていたのです。あの空襲になれば地下で仕事をすると云った所も、一回の空襲、一回の地震で計算は狂って仕舞った。海岸の埋立地はあの九日の時はひどかった。地震はこわいと本当に思う。自然は残すべきと。水の出ない便所なんて困って仕舞う。都会で今なったら人心の動揺を防ぐ掛りを造っておく。あまり動かない方がよいと思う。

二十年の新聞の記事は、空元気の様子さえみせて居る時、女子挺身隊として愛知航空機の疎開先で、三河の方がひどいらしいと云う事を聞き、五名程で一月十三日四時頃会社を出、桜山、堀田と東海道を東へと非常袋を肩に掛け、月あかりをたよりに、

人波は列をなし、黙々と歩き、一つ木の駅で電車が動いて居て乗り、明け方五時頃米津に着き、別れ一人故郷へ胸さわぎしつつも歩く。お宮さんの前でぺしゃんこになった家で、上で男が一人おかあーが死んだと話す。そこ越して本郷へ。坂の所で四十四軒中八軒建っておるだ。二十六人死んだとおばあさんのつぶやき。早く家へと行くと東のひさしと、西の押入が枯木の様に立って真中がぺちゃんこにつぶれて居た。西のおばあさんがみんな無事でよかった。これでみやこさえ丈夫ならと、母の言葉を話す。母の愛。その母は義理の母なのです。母の話では一時頃西の方からどうどうと音が聞こえ、地震だみんな起きよと叫び、南の障子を倒し、五米先のもみがらの囲ってある棒へとまり、それが持っておれない位、上下にゆれたそうだ。父はその声でとび起き、ひさしで足をはさまれた。弟はミシンのおかげ、姉は長持の陰でけがもなかった由、運がよかったと喜ぶ。一枚の壁で、一本の鴨居で、五人が死んだ家等うわさも。その当時の自己食料事情による物等であった。家の丈四なる棒を持ち出し、合掌造りの様な小屋を立て、むしろを敷き、四五軒の人が入り、がやがやとにぎやかに、夜は早くから寝り、それでもびっくりする様な音が地面をゆさぶり、閃光が夜空を。さくばくたる思いさせ、世の末かと束の間の思いであった。不安と情報もないまま、カンヅメ等、二三個配給があっただけでした。一ケ月家のかたづけを終え、会社へ帰り、日照りの強い夏の最中に終戦であった。思えば強い水不足で田植も七月中頃で、小川のたまり水をバケツで流し込み、田植をしたものでした。一家五人死んだ家等、鴨居の家がなくなり工作隊と遠くの大工さんが泊り込みで家を建て、その時は芋が一メ目三十円で大工さんの費用が一日二十七円位とおぼえています。

私の地震体験

本郷幸子
（幡豆郡一色町）

昭和十九年十二月七日。この日より昼間電気がつくようになり「母ちゃん、電気がつくね。」といいながら、スイッチを捻ると同時にミジミジ、グラグラ。私はその場へ、へたばってしまいました。庭から母が、「地震だよ。早く外へ！。」と叫びました。生まれて始めての地震。夢中で表へ飛び出しました。近所の人達が道へ集り「震源地はどこだろう。恐しい事だ。八幡さ

んの燈籠やこま犬が倒れてしまった。東の崖も崩れた」等ワィワィ話し合っていました。毎月七日は小学生で宮掃除をやっていました。地震がもう三十分早かったならば何人かの負傷者がでた事でしょう。翌日、学校へ行く途中、道路が二十糎位亀裂していました。

今日のような報道機関もなく地震の大きさや被害が分らなかったから「吉田へ津波がきたげな」「もっと大きい地震がくる」等いろんな噂が広がっていました。

昭和二十年戦争は一層激しくなり、勉強よりも農家の手伝いが多くなってきました。

「〇〇教の教祖が地震のお告げがあるといったげな……」学校でも、家でも地震の話でもちきりでした。一月上旬、寒中に跣で水田へ入り株抜きをやらされました。時々地の下で「ドドー。ドドドー」という地鳴りがしました。

皆と「本当に地震がくるような気がするね」と話し合っていました。あの地鳴りは今でも耳の底に残っています。一月十二日、風が吹いて寒い晩でした。十三日未明「ドーン、ミジミジ」「地震だ」祖母の声、辺りは真暗、縁側の方へ出るのを方向を間違えて、中戸を開けていました。ゆれている時は、なかなか戸が開きません。横屋で寝ていた父が、外から雨戸を開けてくれ庭へ飛び出ました。

二度目の大揺れ、立っている事はできません。「ドドーン、グラグラ、ドドーン、グラグラ」その度に北西の空に何本も火柱が上りました。寺島や、木田の方で「オーイ、オーイ」と叫んでいる人達の声が聞えてきます。

横屋の母は、縁側と居間の境の障子が、倒れてきて、弟や妹を腹の下へ入れて、はんでいたそうです。庭の真中に莚を敷き、布団を被って、夜の明けるのを待っていました。

何回も何回も、余震がありました。恐しい恐しい夜があけ、隣近所お互に無事であった事を喜び合いました。

学校は東西に六教室あった校舎が、西の一教室を残し、屋根の合掌の所から柱が折れ、ぺちゃんこになってしまいました。二回目の大揺れで倒れたそうです。

六年生六十人の組で、津平の人ばかり二人も死亡しました。空襲を逃れて東京から来た三枝ちゃん、地震で死ぬなんて本当に可愛そうでした。三枝ちゃんの家は、お母さん、赤ちゃん、妹と四人も死亡しました。私の家も祖母が、寝巻き一枚で飛び出し風邪をひき、肺炎になり、一月二十六日に亡くなりました。

地震の恐しさが身にしみ、三十余年前の事が、つい、この間のように思われます。

幼い日の記憶から地震について、私の考えを述べてみます。

(一) 上・下の揺れと横揺れ。震源地に近い時は「ドーン」と地の下から爆弾が破裂するような音と共に上下にゆれ、雨戸・障子等は開けようとしてもなかなか開きません。シャッターは上へ持ち揚げ、あけることができるでしょうか。二、三年後の南海地震も夜中でした。この時は横ゆれでした。地震の時間が長くガラス戸が「ビリビリ」しても、戸は開き、表へ出ました。

(二) 二階で寝ている者は慌てて、下へ降りてこない事。三河地震では階下がぺちゃんこになり二階が坐った家が沢山ありました。

(三) 震源地に近くても、地盤の固い所(友国、駿馬、宮追、瀬戸等)は、家屋の倒壊は殆どなかったが、震源地より遠くても埋め立て地や、砂地等、軟弱な土地、(西尾、福地、上横須賀等)は家屋の倒壊が多かった。

(四) 地盤は固くても、震源地より条に当る所は被害が多い。津平の文道から北西に伸びた条に当った所は家屋の倒壊が多かった。

(五) 壁の少い建物は倒壊しやすい。津平小学校や、横須賀小学校の倒れた校舎は壁がなく、学芸会や、式の時に板をはずして集会場に使用していた教室ばかりでした。

(六) 「ドーン」という地鳴りやゆれと同時に停電し、真暗の中で飛び起きると必ず方向を間違えるから枕元へ懐中電燈を置くこと。

(七) 冬は寝巻きのまま飛びだし風邪を引かない様に、セーター等日常着を、上着にくるんで枕元へ置いて寝るようにしたい。又、地震で外へ出る時は、毛布か、布団を頭から被るように。

(八) やぐらこたつや、テーブルを居間の真中へ置いたまま寝ないように。もしも暗闇で飛びでる時につまずくと危険です。必ず端の方へ片附けて置きましょう。

以上まだまだありますが各個人、各家庭、みんなが気をつけて被害を最少限に食い止めたいと思います。

地震はおそろしい

高木栄一
（豊橋市）

昭和十九年。そのころ私は、刈谷に住んでいた。

その年の十二月七日。木曜日で晴れでした。

私は、勤め先で昼のいっぷくをおえて、午後の執務をしていたところ、午後一時五十分、突然「グラッ、グラッ」ときた。「あっ」という悲鳴とともに、私は、無意識のうちに同僚職員と庁舎の裏庭へよろけるようにして、われ先にと飛び出した。そして、庭の大木を抱くようにしてしがみついた。

近くの家々が、東西にユラユラ揺れている。その無気味な様相を眼のあたりにして、私たちは、息をつまらせ、蒼くなり、震え上った。このまま大地が割れて、奈落の底へ突き落されるのではないかとの不安におびやかされた。

その状態は、三分位であったが、恐怖感に襲われた時の三分間は実に長く感じられた。

その慄えの三分間は、三十三年後のいまもなお私の脳裡からはなれない。

マグニチュード8の巨大地震はようやく止んで大地は静かになったようだ。私たちは、おそるおそる外へ出て見た。隣のハンコ屋の塀は崩壊している。向いの刈谷一のB百貨店はペチャンコである。道路には、一面にガラスの破片が散乱し、壊れかかった家は、そこここに見られ、また、悲痛に涙している人びとの群に接して、胸をしめつけられる思いがした。

私は急いで帰宅した。

家の中の柱は全部ヒビが入って割れており、壁は崩れ、勝手場は壁の崩れで目もあてられず、瓶やコンロがころころ倒れていた。戦時下でモノの全くない時に、血の一滴にもひとしい貴重品の醤油が、倒れた瓶の口から流れているのを見たときには、呼吸が止まる思いだった。

そして、物置や便所は無惨にも崩れてしまった。

ふと、裏の方を見ると、Sさんと Yさんの家は、全崩壊で、その傍らで涙にくれている家族の姿が痛々しかった。

なにしろ戦時下で全く物資のない時である。

その貧困さにさらにのしかかるように、家やモノを失い、上からは、空襲の戦禍におびえ、地下からは、この震禍で、みんなは、生きた心地はしなかった。

明くる八日。うちの中は、ガラスの破片と崩れた壁土で、ザラザラしていて、足の踏み場もない。それは、阿修羅の巷である。そのあと片付けの仕事があり、また、裏の潰滅状態のSさん、Yさん宅のお手伝いのこともある。だが、私は、この日の勤めを休むことはできなかった。

十二月八日は、大東亜戦争記念日であり、また、大詔奉載日で詔書の奉読式が官庁や学校、会社などで行われる。私たちは、この詔書奉読式に参列した。そして、庁舎の二階から街頭に眼をやった時である。そこには、家が倒れ、モノはなく、食にあえぎ、そのうえ空襲警報のサイレンにおどおどしながら、悲しい表情で右往左往している人びとの姿があった。これは正しくこの世の地獄図絵ではないかと、私は思わず固唾をのんだのであった。

そして、地震の恐ろしさと惨めさを知った。

はっきりいって私は、地震のことなど全く忘れていた。その時に、この自然の大鉄槌をうけて、私は、驚き恐れた。

さらに私は、たとえモノのない戦時下であっても、水や食糧、衣類、重要物などは、つねに身近において、いざという時には、肌身につけて避難すべきことの尊い教えを受けたとしみじみ思うのであった。

マグニチュード7の三河地震は、激震だった。

昭和二十年一月十三日の午前三時五十分。

深夜の静寂を破る「ドド」の無気味な音。

そして、私自体が転がされるような状態になって深い眠りから覚めた。

電気はつかない。深夜の暗の中で妻の悲鳴。

私は、無我夢中で雨戸を開けた。十二歳を頭とする五人の子どもを手当り次第に抱えて、前の畑の中へ連れ出した。妻は、おろおろして、うづくまっているのみ。家族七人みんな寝巻姿。家の揺れ動く音が「ギィッ、ギィッ」と聞えてくる。恐ろしさと寒さで全身がふるえる。子どもは泣く。余震がくり返しやってくる。

近所の人びとの悲痛な声が聞こえる。阿鼻叫喚の巷であり、正にこの世の地獄である。

畑に莚をしいて、そのうえへ布団をならべた。家族七人が団子のように重なって暖をとった。

余震を恐れ、寒さにふるえて、眠れぬままに夜明けを待った。時あたかもB29の空襲時であった。正しく、弱り目にたたり

目である。上からは空襲の恐怖、下からは余震の威嚇、それに寒冷と暗黒世界。すべて手探りの行動である。生きた心地はしない。私自体が、人間の姿ではないようだ。

その日のうちに、畑の中へ藁小屋をしつらえた。余震が激しいので家の中へは入れない。

その藁小屋へ、うらのSさんとYさんが入居の申出。三家族の同居で小屋の中は動きがとれない状態となったがすべてを諦観する。

翌十四日。午後一時半。B29が名古屋を目標に空襲してきた。爆弾と焼夷弾の洗礼である。

刈谷はどうなる。不安感がいやます。

この夜藁小屋にやっと電灯が架設されたが、点灯できない。戦時体制下である。空襲警報が発令されている。サイレンが唸っている。そういう時に寸時でも、小屋の外へ「光り」をもらせば巡回中の警防団員から「電灯を消せ」の怒声が飛ぶ。

困ったことに、つらい藁小屋生活のため、妻がカゼ、長女が頬張れで寝ついてしまった。

余震が襲ってくるので家の中へは入れない。

栄養もとれず、薬も入手困難。嘆息の日々がつづいた。月の明りを頼りに炊事をした。つらいことであったが、とにかく動くことができるのは幸いだと思ってもいた。

このころの近隣との朝のあいさつは「お早よう」ではなくて「ゆんべは、なにもなくてようござんした」と、そんなことばであった。余震も軽く、空襲もないのをよろこぶ声であった。

そして、一つだけ明るい話題があった。それは、さつまいもとタバコの配給だった。タバコは一日分六本。久々でその一本をくゆらし、焼いもを頬張って、人間らしい感覚を知ったのが、藁小屋暮し、一週間のうちのよろこびであった。笑顔はそのときの一度だけだった。

災害は忘れたころにやってくるというが、私は、東南海地震のあと始末もできないうちにまた、三河地震に襲われ、正しく、災害は忘れないうちにやってきたのでこれには驚き狼えた。

そして、いまは、物資不足の三十余年前とは、政治も経済も産業も大きく変っているので、おたがいに地震対策もそれぞれできていることであろうが、しかし、物資が豊富であればそれだけに、また、地震対応策も別の面から大きく考えなければならないと思う。

かっての、東南海、三河の各地震は、いずれも冬期に発生し

ている。したがって、私どもは、一応、冬と火と地震についても考え、そして、地震に火事はつきものであることも忘れずに用心したいものである。

また、建物が木造であり、かつ、このごろは、新建材の利用が多く、引火性の物質が多いのだから、火事対応策、そして、火事による有毒ガスの発生が人におよぼす悪影響なども深く考えておかねばならないと思う。

さらに、月に一度ぐらいは、おたがいに、地震のことを心にする反省の日をもちたいものである。

おわりに、震災時には〝電気はつかない。水道もダメ〟ということを覚悟して、その対策をつねに考えておきたいものである、ということを私の体験からつけ加えておきたい。

私の地震体験

村松重子
（西尾市）

私が未だ二十三才の時、主人が応召中であり、二才を過ぎたばかりの長女と、実家の安城市藤井町に身を寄せて居りました、昭和二十年一月十三日の事でございます。

藤井町は地盤が弱かったのか、今の農協の近所では全壊家屋が多く、隣近所では一軒で二人づつも死なれました。百戸位の農村で七十余名の死傷者が出ましたと聞きました。

私の実家も昭和二、三年建てた家にて、しっかりして、私達子供達も自慢したい様な立派な家でした。中に壁は少なかった様です。屋根の棟瓦も高くかかえる様な太い材木が多く使って有りました。これがいけなかったと思います。立派な母家は倒れ、粗末な物置は全部倒れなくてすみました。

昭和十九年十二月七日の地震の時は屋外に居りましたので、子供を連れに走って行きましたが、転びそうで走れませんでした。其の時、母家の障子は全部破れ家屋は一㎝傾きました。それから毎日の様に小さな地震が有りました。

翌二十年一月十三日の地震の前日は、西風がひゅうひゅうと強く寒い日でした。小さな地震がいくつか有りました。午前四時頃、どしんどしんと物凄い感じに目が覚め、さっと子供を抱えました。起き上らない先に足の上に何かどしんと落ちて、もうどうする事も出来ませんでした。真黒暗にて何にも見えなくて、大きな戸棚が足の上に転んで、動けないのだと思いました。

隣の部屋に寝ていたお祖母さんと、一緒の部屋になってしまって居て、お祖母さんが真黒暗をぐるぐる廻って見て家が倒れて、私と子供が鴨居の下敷になって居る事を知りました。苦しくて苦しくてどうする事も出来ません。長女も小さいから泣きわめきました。

少したって、父と母と妹が天井を唐鍬で破って入って来てくれました。父は一生懸命私の上の大きな鴨居を鋸で切り始め、母は地面について居る二階の屋根からはだしで隣へ走って助を求めましたが、どこの家も皆な倒れて居て、声が一つしないと云って帰って来ました。

お祖母さんは苦しむ私の身体の下に入り台になり、父と母と鍬やかなてこで、私と子供の足に鴨居がくい込まない様に、一生懸命になってくれました。段々苦しくなり足が裂けてしまいそうで、妹は一生懸命足をつかまえて居てくれました。明るくなって村の人達が助けに来て下さいました。午前八時にやっと助け出されました。其の時は身体を少しも動かす事が出来なくなっていました。

戸板にのせられリヤカーにて、米津橋が地震で落ちて通れなくて、鷲塚橋を通って、現在の西尾市民病院が地方病院と言って居り、其の時、地震の災害にて名古屋から大勢御医者様が見えて手当をして下さいました。骨盤が開いてしまい、足は十六針縫いました。キブスの型の中に入りました。私の入りました病室は、部屋の仕切りを取り、二部屋一緒に怪我をした人が、頭を並べて十人位寝ていました。頭をぐるぐるほうたいした人、片手をもぎ取られた人、破傷風で死んで行く人、苦しい苦しい毎日が続きました。

戦争中なのに、二ヶ月間充分手当をして頂きました。一年がかりで、びっこにもならずに丈夫になりました。本当に感謝致しました。

近所の家では倒れた家に少しのコタツの火から火事になり、家の下敷になって居た女学生が焼死されました。私の家では火の気の無かったのが不幸中の幸でした。地震と云う言葉を聞く度に、この様な惨事が起らない様、祈らずには居られません。

東南海地震・三河地震

蜂須賀　幸　平
（西　尾　市）

昭和十九年十二月七日、その日は晴天で十二月にしては暖かい日であった。当時私は小学校五年生。午后の授業は理科であった。授業が始まって三十分程経過した頃であったろうか、突然ドドドドーという地響と共に校舎が揺れ出した。

私が通学していた小学校は愛知県幡豆郡吉田町、吉田国民学校。校門は南向で校舎は東西に延びた木造平家建の古い部類の校舎であった。

胸は大きく動気を打った。皆一斉に立ち上り、一瞬唖然とした。先生が大きな声で〝机の下に潜れ〟と怒鳴った。校舎は南北に大きく揺れ、揺れるたびにギーギーと音をたて、これでもか、これでもかと云わんばかりに揺れ続けた。何時静まるか、天井が潰れて下敷になるのではないか、そんな想が頭の中を駆け巡った。恐怖のあまり体を縮め震え乍も、天井へ、そして窓の外へと目を馳せた。窓の外では揺れるたびに屋根瓦が四、五枚づつ降っていた。それは可成り長い時間の様に感ぜられた。やっと揺れが納まった。先生の号令で外へ出た。あちこちに割れた屋根瓦が点在していた。

急遽各々家へ帰ることになった。私は友達二、三人と校門を出て家路を辿った。当時の私の家は吉田町大字吉田字亥改四十番地。町中では一番賑かな所で通称一区と云った。途中二、三潰れた家が目に入り、自分の家の事が非常に心配になり足を早めた。家へ辿りついてみると、潰れてはいなかったが、南に隣接する糸宗商店に私の家はもたれかかり、土台から柱は浮いて仕舞っていた。

私は母と二人暮し。その後母は家を起し補強しなくてはといろいろ奔走したが、戦時中のこととて儘ならず、何時又起るか分らない地震に戦き乍らも正月を迎え一月に入った。やっと一月十一日に車力が来てくれる事になり家は十一日、十二日の二日がかりで起し、壁の柱と柱との間に筋交を入れ補強が出来た。その晩は安堵し、初めて寝巻に着替えて寝た。深い眠りのあと、ドドドドーと云う何かが押寄せてくる様な音が脳裏を掠めた一瞬、目が醒め地震だと直感した。胸の鼓動は大きく波打ち全身が硬直した。その瞬間下からドーンと突き上げられて宙に浮いたままで、大きく円を画いてぐるぐる回った。そして思い切り

下へ叩きつけられた。十二月の地震は横揺れであったが今回のは突き上げ、回し、叩きつける強烈なものであった。タンスは引っ繰り返えらなかったが、乗せてあったものは落ち、ユコウ等は皆倒れた。隣に寝ていた母と共に飛び起きた。普段建て付けの悪いきつい戸が、地震のせいか、人一人通れる程度開いていた。そこから飛び出し裏の空地に逃げた。恐怖に戦き寒さに震え乍ら母と身を寄せ合っていた。空地の周囲は囲があり、その外は民家に取り囲まれていたので、外の通りに出る事が出来なかった。その外の通りを大声で〝津波だ津波だ小山田に逃ろ〟と叩び乍ら駆けて行く気配が感ぜられたが、私達は逃げ出す事も出来なかった。母の胸にだかれ乍ら〝津波が来たら手を離すんじゃないよ〟と母に諭され覚悟をきめた。幸い津波は来なかった。

間もなく東北方向に火の手が上った。〝吉良屋が火事だ〟と叫ぶ声が聞えた。吉良屋は吉田では一番の雑貨商。大小の火の粉が雨の様に降って来た。あとで聞いたが、店員が一人焼死したとか。

余震は止むことなく引っ切り無しに続いていた。寒さがひとしお身に堪えて来た。何か身に纏うものをと余震を縫って離れに飛び込み押入れに手を突込んだ。持ち出したものは蚊帳であった。しかし恐ろしくて二度と家へ入る気にはなれなかったので、蚊帳にくるまり夜の明けるのを待った。夜が明けた。柱時計は傾き三時四十分を指して止まっていた。家の中に井戸があったが、裏庭に小さな土管の口があり、どうも井戸と通じている様に思えたが、その土管の口から水があふれ出て裏の空地まで水が流れていた。空地には防空壕があったが、そこへも流れ込んだ。

裏の空地から家の中を走り抜けて表の道路に初めて出た。私の家の回りもだいぶ潰れていた。一階だけが潰れて二階が一階に居坐った家もあった。私の家の次に補修することになっていた筋向いの五鈴もやはり潰れていた。私の家は前と同じ様に糸宗商店に凭れかかり土台から柱は浮いて仕舞った。私の家の補修があと一日遅れていたら、私達は家の下敷になった事と、無事を母と喜び合った。

私の家の近くに吉田町役場があった。朝九時少し過ぎた頃行ってみると、役場の前の広場に遺体が並べられてあった。その数ははっきりとした記憶はないが、百体位はあった様に思う。吉田町には火葬場があるが余りの数で手に負えず、火葬場の前

の広場に幾つも幾つも穴を堀り、そこで火葬にした。その煙りは二、三日は続いていた様に記憶している。

農道はところどころ一、二米位の亀裂が出来、十センチ程の落差が生じていた。依然として余震は続いていた。皆それぞれ空地に畳を持ち出し、囲って、その中で寝起する毎日が続いた。私達も裏の空地で畳を囲って生活を続けた。戦時中のこととて、食糧に事欠き、地震に脅え乍ら、希望のない空虚な毎日であった。そんな私達の頭上をB29爆撃機が編隊を組み、北の彼方へ毎日の様に消えて行った。私はただ茫然とそれを眺めていた。この東南海地震、三河地震は一切報道されなかった。

私の地震体験

神谷菊治
（豊田市）

私は地震には度々出あって居るが、私の記憶に残る一番最初の地震は、大正十二年九月一日の、関東大地震でした。田の草を四ツ這いになって取って居ると、突然這って居る田の土が、前後に激しく動き出しました。自分では目まいがしたと思い、一緒に田の草を取って居る父に話しますと、父も目まいがしたと思ったそうでした。父は二人が大地の動くのを見たのだから、大きな地震であろうと申されました。

次に昭和十九年十二月七日昼、二人の男の子と家の中に居ますと、突然大きな地震でした。二人の子供と共にアワテテ外へ走り出ました。私達が家の中より走り出て、五メートル位の距離になった時、屋根瓦が降って来ました。もう少し我々の待避が遅れて居たら、屋根瓦の集中落下を浴びて、即死か、大怪我をした事でしょう。我々の幸運を喜び合ったのです。

家族の者が、家の中に居るのを極度に恐がりますので、やむを得ず、庭の空地に仮小屋（応急のバラック）を建て、其の中で十二月末まで過しました。仮小屋の構造は、杭を打ち、杭に丸木をゆわえ、小屋の骨組みを造り、骨組みに細い丸太や竹を使って、一時しのぎの場所を造りました。三方は稲藁で囲み、一方の出入り口のみ莚を吊し屋根も莚で張りました。下は寒さを防ぐ為に、藁を敷きつめた上へ、莚を延ばした簡単な物です。稲藁は屋敷田にありますので、入用だけ使えます。幸にもお天気続きで雨が降らなかったので、仮小屋生活が出来得たのです。狭い小屋が我々の居室、兼食堂、兼寝室の働をして呉れました。

煮焚きは幸運にもカメトグ（土を焼いて造った物）がありましたので、それを使用して外で炊事を致しました。都会の人々には無理だと思いますが、屋敷の広い人なら出来得ます。

我々の一番恐いのは大きな余震です。昼間ならば良いが、深夜に突然起る大きな余震に襲われた時です。真暗闇の中を避難するので、危険がいっぱいです。私達が仮小屋生活中に、大小合わせて人体に感じた余震は、十二月末迄に、一〇〇回以上あった様に思います。実際はソレ以上に記録されて居ましょう。夜半ドンドンと言う音が聞こえて来ますと、寝て居る私達の体がアチラコチラに転がされます。大きな余震になると体が浮き上がって、下にドスンと落された事も何度かありました。

仮小屋はコワサズに居ましたので、続いて翌、昭和二十年一月十三日の三河地震の際にも、十日ばかり使用致しました。

今時、こんな事を書くのは時代おくれと笑われましょうが、昔の人の言葉にある「地震の時は竹藪に遁れよ」と云うのがあります。これは大きな地震に依って、地割れを生じた時、竹藪の中なれば安全と云う事を教えて下さった、昔の人の体験談でありましょう。

明治二十四年の濃尾地震の時に、岐阜県のある地方では大きな断層が起こり、今でもこの断層は天然記念物と指定されて居ます。

私はよく、亡き両親から濃尾地震の時に仮小屋生活をした話を聞き及んで居ますが、大きな地震の時には、身の危険を守る上に仮小屋生活も大切であると思います。

尚地震発生と同時に外へ遁れるか、六、七分位い待って外へ出るかが安全と思われます。二分三分経過すると、屋根瓦が落ちて来る場合がありますので一番危険だと思われます。

皆さん御注意して下さい。

こんな時代おくれの体験談でお恥しい次第ですが、夜間の大きな地震の際、暗闇（ホトンド電燈が灯りません）の中から外へ遁がれるのに手間取り、怪我のリッが殖えます。仮小屋生活といやしむばかりで無く、身の安全性を考えて励行されてはと考えて文を書きました。

地震を想い出して

村井美恵子
（西尾市）

月日のたつのは早いものです。あの時からもう三十二年余もたちました。あの時、それは昭和十九年十二月七日の午後一時頃のことでした。私は当時、幡豆地方事務所に勤めておりました。おにぎりで昼食をすまして机に向った丁度その時でした。突然に事務所の鉄筋が無気味な音をたててグラグラと揺れ出したのと、同時に、石の門柱がドドッと大きな地ひびきをたてて倒れてしまったではありませんか。アッ！地震と気づきましたので、とっさに机の下に、もぐり込んで身を守りました。ところが地震はいつまでたっても、やむどころか、だんだんと揺れが激しくなってくるばかりです。あまりの恐しさに無我夢中で窓から外に飛び出したのでしょうか。ほっと我に返って気がつきましたら、外に乾してあった芋ずるに必死にしがみついておりました。溺れる者は藁をもつかむという諺がありますが、余りにも突然の恐ろしい出来ごとで、無意識のうちに芋づるに取りすがったでしょう。フトそばにある肥溜を見ますと、ダブンダブンと、ゆれておりました。東の方を見ると、家々がバタバタと、つぶれて壁土がくずれて、其の土煙が、もうもうと空に舞い上り、大空はまたたくうちに黒茶色におおわれてしまいました。この恐ろしい場景をおののきながら、ただ茫然と眺めておりました。

丁度其の頃は戦局は、日一日と苛烈さを増しておりまして、岡崎市が空襲された。其後でもあり、たえず艦載機が当地の上空を飛びまわっており、ピューンピューンと西尾女学校の奉安殿が射撃されたり、道を歩いている人が、ねらい打ちされた事もしばしばありました。大地は揺れるわ、家々はつぶされるわ、空から敵機にねらわれるわと言った、まったく身のおきどころのない様な恐い日々でしたが、それも悪夢のような年は暮れました。

そして新年を迎えました。きっとよい年になりますようと祈りながら。ところが、お正月気分もさめやらぬ一月十三日の夜半でした。突然ドスンと言う無気味な音と共に、上下左右に大きく揺れだしました。アッまた地震だと言うので、家族共々、外へ飛び出しました。寒さと恐ろしさで、ガタガタと震えながら戸外で一夜を明かしました。フト三ケ根山の方を見ますと、

揺れる度毎にピカピカと無気味な光を放っているではありませんか。それは、まるで地獄からくる光のように見えました。三十二年たった今日でも、あの光は忘れることは出来ません。其の夜からは、鶏舎を半分に仕切って藁を敷きつめて、鶏と同居する生活がはじまりました。上を見れば鶏糞が今にも落ちて来そうでしたが、糞の臭いなど全く気になりませんでした。

翌日事務所へ出勤しましたら、友達が「母が在所へ手伝いに行ったまま、未だ帰ってこないので心配だから、一諸に行ってほしい」との事。自転車のペタルを無我夢中でふんで亀裂の道を突っ走りました。やっとたどりつきました。其の部落は無残にも全滅しておりました。目をふさぎたくなるような惨状でした。家族全員が家もろとも亡くなったり、子供をかたく抱きしめたまま、こと切れている人、臨月の大きなお腹を抱えて死んでいる人などなど、お寺の境内いっぱいに遺体が列べてありました。其の中に友達の母も変りはてた姿となっているのを見出しました。

それから二、三日経ってから、また大変でした。遺体を焼いていると、煙をめがけて敵機が襲って来るので、消したり、又火をつけたりと言った、実に悲惨な上にも悲惨な情景で、それこそ地獄絵巻そのものでした。

今こうして地震体験記を、したためて居りますと、当時のことが、生々しく、よみがえって来ます。日常あれこれと、不平不満を言ったり愚痴る事もしばしばありますが、当時の事から見れば全くぜいたくな事だとしか思えません。昨年中国大陸や其の他の国々でマグニチュード7とか8の激震に見舞われて、全市瓦礫の山と化している写真を新聞で見ましたが、他人事ではありません。天災は忘れた頃にやって来ると言われております。三十二年前は家並も、まばらでした。プロパンガスも自動車もありませんでした。今もし、あのような激震に見舞われたとしたら想像を絶する惨状を呈することでしょう。地震はもう、こないよう保証はありません。不断から万が一の心の準備をしておき度いものです。再び天災は忘れた頃にやってくる、と言う言葉を自分に言い聞かせてペンをおく事に致します。

私の地震体験

加藤たけ
（豊田市）

昭和十九年十二月七日、私は中学一年生。

午後一時頃学校の教室で国語のかきとりをしていました。突然教室ががたがた音を立てて、右左にゆれて居る。なんだろうと思っていると、「地震だ外に出なさい。」と先生がいった。外に出ようと思うがなかなか前に進まない。ようやく外に出たが、地めんが大きく廻わって居る。運動場がめりめりと音をたてて地割が出来た。池の水が、だばんだばんと大きく右左にゆれて居る。こわくて声も出なかった。地震もなくなり、先生が「今日は家に帰りなさい。」といった。学校からの帰り道、家が倒れ、かわらが道をふさぎ、通れない所もあった。私の家は大丈夫かなと心配しながら来た。私の家は半分倒れかかって居た。

昭和二十年一月十三日、午前三時頃。お父さん、お母さんと弟は半分倒れそうな家に。私達姉弟とおばあさんは、はしらが土に埋めてある家で寝た。地震で目がさめた。「おばあさん地震だ。」おばあさんが「あわてなくてもいい。はしらが土に埋てある家は倒れないから。」とおしえてくれた。地震がおわるまで頭を両手でおさえ、上から物が落て来ても頭にけがをしないからじっとして居た。外に出た。お父さんお母さん弟がねていた家が倒れて居た。「お父さん、お母さん。」大きな声でよんだ。返事がない。前の家、うらの家も倒れて居る。

前の家の人達、うらの家の人達は、おおさわぎして居る。お父さんお母さんの姿がない。家の下敷になって居る。「お母さん、お母さん」何回呼んでも出てこない。私達はかなしくて泣だした。前のおじさんが「どうした、大丈夫か。」といった。「お父さんお母さんが家の中から出てこない。」「それはいかん。」といって倒れた家にあがり、かわらをはねのけ、のこぎりで木をきり穴をあけてくれた。「おおい、大丈夫か。」とよぶと、「おおい」と返事があった。お父さんは小さな穴の中から出て来た。お父さんは私達に話してくれた。「地震だ」。お母さんは、ふとんの中から飛び出していった。「子供を蒲団の中におきざりに一人で飛び出た」。外に出ようと思ったが電気が消えた。その内に家が倒れた。お父さんと弟は蒲団の中でじっとしていたから助かったそうです。「お母さんがたすけて、いたいよう。」と

さけんで居る。お父さんはふとんから出て声のする方に手さぐりでいった。さわって見ると、大きな、かもいがお母さんの頭と、ふとももにのって居る。お父さんの力ではどうしようもなく、「お母さん、がんばれ。」といっているうちに、お母さんの声が、だんだん小さくなっていく。お父さんが「子供は、おれがりっぱに、そだてるから心配するな。」といったら声が出なくなった。その時お母さんは死んだ。

皆さんで倒れた家を取りのぞきお母さんをだしてもらいました。お母さんの頭は、かもいのあとで半分ぐらいへこんでいる。おばあさんが「お母さん、いたかっただろう。子供のことが心配で死にきれなかっただろうに。お母さん、じょうぶつしておくれ。子供は私が生きて居るかぎり、めんどうをみるから。」といったら、お母さんのはなから、はな水がすうとながれ出た。

私の地震体験から

岡田倉一
（豊田市）

昭和二十年一月。当時勤務していました、三好青年学校の教諭として、安城の青年学校教員養成所で講習を受けて、午前中の講習を終り、十二時の昼食をすまして外に出た時でした。万雷の一時に落ちた様な激しい音がして来ました。敵機の襲来かと思わせました。

前を見ると農家が三軒ばかりありましたが、その中の一軒で家の男の人が、戸をあけ様としてもガタガタしてあくかと思えばまたしまり、又動いたりして家が大ゆれにゆれていました。ほんとうに一生懸命ですが、どうしても戸がはずれません。其の内に家の裏側から煙が出て間もなく火柱が上りました。戸をあけ様としていた男の人は、台所に敷いてあったナガトコ（敷物の一種でイグサで作った）を一枚持って、あかない戸のあいだから外に出て来られました。もう二度目はもう出したいものがあっても家の中は火の海で入れず、ただうろうろしておられるのがよく分かりました。結局、家から持ち出したものは、敷

物一枚だけで、後のは全部焼かれてしまいました。

これを見て私は思いました。地震では戸はめは動かなくなるので、そこで時をすごさず、戸の一本位は破って、大事な物を早くとり出すと云う事が肝心であると思いました。私も学校の校舎の間の渡り廊下に自転車をおいたので、渡廊下がつぶされ、自転車をめ茶め茶にしてしまいました。安城から豊田へかえる途中、焼けた家もありましたが、家がかたむいた為め、入口の戸はめが動かなくなって困っている家が随分ありました。

今云いました様に、先づ地震等では火を出さない様、充分な手配をする事が一番必要事項と思いました。そしてサア地震と云う時、一番考え注意することは持ち出すもの。一番大切な物等をビニールの袋に入れて大きな麻袋に入れ、それを持出せばよいように、常日頃、置き場所も決めて家中の者が承知をして居ると云う事であると存じます。つぎにさあ地震と云う時、家族の者が自分自分の分担を決めておくことです。父は大事な書類とか、母は一時必要な食糧、梅干、家庭薬、兄いさんは家財道具の持ち出しの手配を。各自分担し、時折り食事時等家族の集まった時、話合いをする事が必要であるかと思います。又電池によるラジオを用意して気象情報を注意して聞くことが大切な事と存じます。

以上書きまして三河地震の体験からサア地震と云う時の心構えを考えて見ました。皆様方の御批判を御願いしたいと存じます。

机で助かった私の命

磯村千代吉
（豊田市）

あの時のこわかった事は、私の一生忘れる事は、出来ない。今でも昨日の事の様な気がします。

今から三十年も前、当時、私は幼稚園の年長組でした。昭和十九年暮も押しせまった十二月、最初の地震が有り、家が少々傾きましたが、つっかい棒をかい、何とか持たせ、正月前に大工さんに来てもらい元通りにしてもらった。その後も一、二回小さい地震が有りはしたが、大した事は無かった。

年を明け、二十年の一月十三日、三河地方をおそった三河大地震当時、私は西尾市の市街地に住んでいましたが、その頃西尾の市内よりも、現在の吉良町や一色町の方面が、特にひどく倒れたり、こわれたりした家が多く、死傷者も多く出た様です。

たまたま、私の家は戦前商売を営んでいたため家が道路の角に有り、北側西側共道路に面していたため、ガラス戸も多く、又柱の少い家でした。商売が菓子の製造をしていて、当時父親が戦争に行っていたため、二階建で二階が物置変りになり菓子製造の道具や、商売道具や、ガラクタが置いて有り、下が住いになっていたため、上が重く、下が弱いと云う悪い条件でした。

その日地震の夜二時頃ぐらぐらしたと思い目を開けた。でもその時は大した事は無いと思い、フトンの中に入っていた。うとうととしていたが、いつのまにかぐっすりと眠っていた。明方四時頃、地震だと言う母親の大きな声で目をさましたら、がらがらどしんと言う音と共に、一瞬にしてふとんから出るまでもなく、周囲に柱やかべ、天井の板や、二階の道具等に囲まれ、身動き出来ない情態でした。その上電気は無いから真っ暗。何が何だか判らなかったけど命だけは助かった様でした。

その時、私の左には母親、その向いには二才になる弟が一諸に寝ていて、私の右には父親の妹が寝ていました。母親はわずかなすき間から、弟をかばいながら、時間を掛けて出ていきました。その時、母はすぐに皆に助けに来てもらうから、恐がらずに待つんだよと云いながら出て行きました。父の妹はと見ると、声も有りません。母親が出て行った後、不安やさびしさ、恐怖のため私は泣いていました。

その時母親は無理に出たため、いまでも寒くなると胸が痛む様子なのです。

私は、その年の四月に小学校へ入学するため、母親の実家から、買ってもらった机、机と言っても、現在の様に蛍光灯や時計のついている○○デスクと言う様なかっこうのいい机と違い、しっかりしているが、本を読んだり、字を書くと言うために作られた、しっかりした物でした。今思えば、形は古いが、机を買ってもらったうれしさで、それも一週間ばかり前に届いたため、うれしくて毎日頭の前に置いて寝ていました。その机も普通の高さのが上から、材木や柱でつぶされ三十センチ位になりましたが、机と腰掛が材木や柱をささえてくれた御蔭で、大きな柱が私の頭の上、十センチ位で止ってくれていたのです。

そのわずかな空間のため、私は助ったのでした。でも下手に動けば、柱が落ちてきそうなので、動くに動けず、じっとしていたのです。

間も無く、近所の人達も大勢来てくれました。その内、消防団員の方も、次々に助けに来てくれました。その上で近所の人

が、此の下に子供と女の人が埋まっている、早く助けてやってくれとか、もう少しの辛抱だガンバレとか、消防の方が助けてくれるから安心せよとか、色々の事を言ってくれたのを覚えている。

私はただ助けて助けてと言いながらじっとがまんしていました。

となりの、父の妹はと見ると、無言のままでしたので余計に不安と心配でした。

でも今でも近所の人のはげましの声は忘れません。やっと夜も明け、七時頃私はかすり傷一つ負わずに助かり、寒さのため毛布にくるまり近くの家へ行きましたが、近所の人に口々によかったよかったと言われ、うれしさを味わった。

間も無く、隣の家で父親の妹の事を気づかいながら寝ていたら、消防団員の方が遺体となって見つかったと聞いた時はワーッと泣き出していた。その後も、毎日の様に微震が続いたため近くの空地にベニヤ板で作った小屋を建て近所の人二十世帯位で共同生活をした（一ケ月）事を覚えている。

今でも命の恩人の机の事を忘れないし、地震の恐さは忘れない。

三河地震の体験

高原源一（稲沢市）

『この体験記録は私が勤務する愛知県警察の機関紙である警友「あいち」の昭和五十年四月号に、「三河地震の体験」と題して、三河地震三十年にちなんで投稿し掲載されたものであります。』

地震学者の日本脱出、何十年周期説など、現在色々な地震説がとなえられ、事実この二、三年間に日本列島各地で、たびたびグラッグラッときました。

それでは一体地震はなぜ起こるのでしょうか。それは一口にいえば「地球が生きているからである」と気象庁の地震課長が述べておられます。

現在ではまだ、これという予知方法もなく突然グラッグラッと来るところに、地震の恐ろしさがあると思います。

私は今から三十二年前、三河地震で家が倒れ、一家がその下敷きになりながら、全員奇跡的にも九死に一生を得た体験をもっております。

三河地震のちょうど一ケ月ぐらい前の、東南海地震も体験しておりますので、地震や当時の生活体験なども、あわせて書いてみたいと思いますが、何しろ三十年前のことで、昨今話題の小野田さんたちのように、毎月体験記録しながら生きてこられた人と違い、私の少年時代の深夜、一瞬にして家が倒れ、その下敷きになってしまったことで、手許に当時の何の記録もなく、ただ記憶をたどりながらのものです。

当時私は、幡豆郡西尾町八ツ面（現西尾市）に住んで、〇〇工校夜間部の一年生でした。入学後間もなく「昼間家で遊んでいてはいかんから、どこか軍需工場で働け」と役場からいわれ、近くの昭和航機製作所に、準学徒として働き、月額二十円ぐらいもらって学んでいました。

その年（昭和十九年）十二月七日の昼過ぎ、突然グラッグラッともものすごい地震に、両親などと一諸に庭に出て、今にもわが家が倒れるのではないかと、ハラハラしながら見守っていましたが、この時は、玄関などの壁が大分落ちましたが、幸い家は倒れず、近所でも被害など聞きませんでしたが、この地震の大きさなどをいま調べてみますと、

「震度五、震源地は熊野灘の海底、死者九百九十八人、負傷者三千五十九人、住家全壊二万六千百三十、半壊四万六千九百五十、東海道線は十二列車転覆して、約二週間不通となった」

と記録されており、これが東南海地震で、おもな被害地域は、愛知、静岡、三重で、かなり大きな地震ということがわかります。

その日の午後、村の人から「昭和航機が倒れた」と聞かされ驚いて行ってみると、無惨にも昨日まで働いていた工場が全壊で、背の高い機械がところどころ屋根から頭を出していました。

もし、この日が出勤日なら相当の被害者が出たと思われます。ともかく何百平方メートルの工場が全壊ですから、次の日から全員が後片付けにとりかかりましたが、それでも当時の軍需工場は大したもので、わずか五日か一週間ぐらいで復旧し、生産が再開されました。

明けて昭和二十年は、毎日のように敵機の来襲でした。あのなんとも言えない無気味なB29の爆音や、空襲で焼ける名古屋の夜空を何度も見ていたことなどを覚えております。

三河地震の前日の一月十二日は、確か夜勤で午後十一時ごろまで勤め、帰宅しました。真冬のことで、頭から布団をかぶって寝ていますと、「ドドン」というものすごい音がしました。

びっくりして目を覚ましますと、もう家が倒れていたらしく、隣りの部屋に寝ていた父親が、

「源一、マス子（姉）大丈夫か」

と大声で呼びますが、私は、一瞬何が何やらわからず、近くに爆弾でも落ちたのではないかと思っていますと、

「地震で家が倒れた」と父が大声でどなっていました。

私は暗やみで手を出してみますと天井板や敷居などが触れ、家が倒れたことがわかりました。あとでいろいろ調べてみますと、そのときは一月十三日午前三時三十八分ということです。

倒れた家の下で全員無事であることを父が確かめたものの、兄嫁さんが一人でどうなっているかわからず、心配していましたが、それでも父は一人で一時間くらいかけて天井を破り、瓦をはねて外に出たそうで、外では隣の人と兄嫁さんが心配して立っていたので父も安心し、母と私も間もなく父の誘導で外へ出ましたが、姉は腹が大きいので屋根裏の垂木の間からどうしても出られず、隣からのこぎりを借りて来て、垂木を切りやっと出たような始末でした。

全員がそろって外へ出たものの、真冬の午前五時半ごろのことで、暗さと寒さ、それにひっきりなしに続く余震、三河湾の方で光る無気味な青いせん光、なんとも恐ろしい長い時を過ごしました。夜が明けてから、村の人が見舞いにこられ、村では離れている我が家だけが倒れ、地震帯に沿って三百メートルぐらい東に当る隣村の中原では特に被害が大きく、三十七、八軒中、三十二、三軒が倒れ、死者三十七、八人ということでした。

私の家は南向きで八畳の部屋が下だけで六つもあるだだっ広い二階建てで、南側の仏間に東京から疎開していた姉と二才の甥が、その北側に私一人、その東側の部屋で両親と、合計五人が全員倒れた家の下敷きになりましたが、奇跡的にも全員が無事で、しかも、かすり傷ひとつ負わなかったのです。このほか西側に離れの二階建てがあり、兄嫁さんが一人（兄は出征中）で寝ていましたが、この離れは倒れずに済みました。

豊橋署の黒柳さんが小学校の先輩で中原出身のため、このときのことをお聞きしたところ、被害数などは間違いなく、黒柳さんのところでもやはり実家の母屋と東西の離れ三棟が倒れ、兄と姪二人を亡くしているとお聞きしました。

さて余談になりますが、奇跡といいましょうか、私たち一家が助かったのは、家が倒れたとき仏壇がこの梁をささえていたためだということです。これは「先祖の守りがあったからだ」

と皆がいっておられました。この仏壇は、田舎独特の大きなもので、三十度くらい前に傾き、大きな梁をまともに受けているのだ、わずかに小破にとどまっていました。

父は特に信仰心が強く、先祖を崇拝していた人で、必ず毎晩仏壇に向かって読経後就寝していました。この因果律で、何ものにも換えることのできない一家の生命を先祖が守ってくれたのだ、と今でも思っており、兄、姉、私とそれぞれ今日まで、大した不幸もなく、皆元気で暮らしていることを改めて感謝しています。

ところで、この三河地震は寝入りばなで、どの程度ゆれたのかわからず、家が倒れた音で目が覚め、一家が布団から出る余裕もないうちに倒れたのですから、全くの大地震だと思いますが、その大きさなどを調べて見ますと、震度四、三河湾付近一帯が震源地で、死者一千九百六十一人、負傷者八百九十六人、住家全壊五千五百三十九戸、半壊一万一千七百六戸、陸地に上下の食い違い約二メートルの断層を生じ、おもな被害地域は、愛知、静岡、三重の三県にわたっており、マグニチュードは実に七・五くらいといわれ、その大きなことがわかります。

当時は戦時中のことで厳重な報道管制のためにくわしい状況も知らされずに終っていますが、もしこのような大地震が発生したらいまの生活様式でさて何をするかというと、心構えくらいで何も手につかないのが実情ですが、どこの家でも二台や三台の石油ストーブを使っている現在、グラッと来たらまず何よりも火の元を止めることが一番大切ではないでしょうか。

私の三河地震体験

松本　清
（知立市）

農村は稲の収穫を終り麦蒔きの季節でした。戦争で人手が足らないから親戚（現在岡崎市新堀町）より牛を借りて、耕起整地を済ましたから牛を返しに行った日です。（昭和十九年十二月七日頃）途中安城市で空襲警報が発令されました。大木の蔭で避難して三十分後に解除になり、目的地へ到着し、牛を厩舎へ入れ、御礼をし昼食の御馳走になり、寒い時だから納屋の南で日向ぼっこして一服しておったら、突然の地震。大きい本屋の唐紙、ガラス障子は皆倒れ、仏壇も倒れておったか。家は一寸傾たが倒れなかった。間もなく大声でよね様の家が倒れたと大

騒ぎしておった。早速行ったら、主婦が庇衿に首をはさまれて瀕死の状態。子供等は泣いておる。目もあてられぬ所でした。其の内消防団の人等で救出作業に懸命であったが、不幸其の主婦は即死でした。

それから自宅が心配であったから、直に帰宅。途中山崎部落で東海道線に汽車が立往生しておった。やっと帰宅したら屋根瓦がずり下り、所々隙間から光がさし込んでおったが、倒れなくて不幸中の幸でした。

第二回目は昭和二十年一月十三日でした。空襲警報当直番で牛田農協事務室に集り、灯火管制で暗い灯の下で、四方山の話をして居った。十時頃、空襲警報で手分けして空罐をたたき、空襲警報発令を連呼し、部落を一廻りしやっと当直室に戻り仮眠して居った。突然の地震で早速火鉢を持って広場へ出た。空を見た途端に地震稲妻か二、三度空中を走ったのに慄然とした。西教寺御堂が（七間四面）大揺れに揺れギィギィ音がしておった。やっと地震がすんでも、余震が断続的に起き、恐怖心をそそのかした。交代で自宅におる防空壕の女子供を見に行ったが、皆んな戦々恐々として寝られなかった。翌日早速簡易地震小屋作りに大童であった。

私の地震体験

森　治子
（西尾市）

昭和十九年十二月?日、それに続き二十年一月十三日。それは幼かった私の胸に忘れる事の出来ない恐しく悲しい出来事でした。その頃の日本は戦争と言う大きな重荷を背負って、ほんどまでが戦場になりつつあり、敗戦を目前にして不安な毎日を送っていました。当時私の家も不幸のどん底にありました。父の戦死の知らせと共に、後を追うように幼い弟も病死。のこった者は母と私それに妹でした。おんな子供だけ取り残され途方に暮れ、住みなれた名古屋を後に母の実家（今の西尾市）に移って来ました。

母は毎日洋裁をして苦しい家計をまかない、その頃の私はまだ国民学校（今の小学校）二年生でした。学校から帰ると母のいいつけで、夕ごはんの仕度をよくしたものでした。いま二年生の子を見ると、あんなに幼かったのかとびっくりするほどです。三人暮しの淋しい毎日を送っていたある日（十二月?日）学校から帰り、四～五人の友達と一諸に私は家で遊んでいまし

た。はっきり時間までは記憶に残っていませんが、午後一時から二時頃だと思います。突然大きな地響きと共に家がガタガタとゆれ出しました。母が「地震だから早く外に出なさい」と大声でどなりました。私達はびっくりして友達と外に飛び出しました。ちょうど家の前が畑になっていましたので、家より十メートルくらいはなれた畑で母の指図に従ってみんな坐りました。私達をそこにおいて母は又走り出し、家に入って火の入った火鉢を両手にかかえて、何回も転びながら私達の方へ来ました。母が私達の所へたどり着いたとたんものすごい震動と共に砂煙を上げて私の家がこわれました。私はもう恐しさでそこから立ち上る事も出来ず、しばらく呆然としていました。気が付くとみんなワーワー泣き出しました。友達もみんな泣きながら家に帰って行きました。しばらくして母のいいつけで、私は一キロ半くらいはなれた祖母の家に知らせるように言われ、田んぼ道を何回となく転び、夢中で「おばあちゃん、おばあちゃん」と泣き叫びながら走りました。祖母の家は昔しからの大きな家でしたので、少しかたむいていましたが、倒壊はしてはいませんでした。

二～三日が過ぎ、私達は祖母の家に移る事になりました。祖母の家も叔父さん二人を戦場に送り出して、おばあちゃん一人で暮していました。近くの家々も何軒か倒壊してけが人が沢山出ました。でも幸いにして昼間の地震でしたので、あまり死者は出ないようでした。祖母の家に移ったもののどうしてもあの大きな柱のある家には怖くて住む事が出来ずお百姓の道具を入れたりする作業場でみんな寝起きをする事にしました。又いつ地震が起きるかわからないので、出入口の戸は簡単にあくように一本はあけたての出来るようにし、もう一本は押し倒した時危なくないようにふすま（からかみ）にし、一本の釘で上を軽くとめ、ちょっと足でけとばすと簡単にころぶようにしてありました。これは母と祖母が考えた非常口といったところです。もし地震がいすったら、いつでもこれをけとばして出るよう言われていました。

これが役に立つ日が来てしまったのです。一ケ月あまりたった一月十三日。この前より、もっと恐ろしい真夜中の大地震です。「地震だよ」と言う母の大きな声。私はその言葉に頭から足の先まで電気が通ったように飛び起きました。地震となると神経がピリピリしているのでとても起きるのが早かった。部屋の中はまだ電気がついていました。だれよりも先に、私はいつ

も言われているふすまを足でけとばして外に出ました。夢中で田んぼの方へ十メートル位走った所で、あまりの震度の激しさに一回転しました。暗やみであまりよくわかりませんが、その時に祖母の大きな家が倒壊したようです。母はしばらくして妹を抱いて出てきました。私が一回転した頃に、母は外に出て転び、妹を地面に叩き付けてしまったそうです。妹は唇を切って血をにじませて泣いていました。口の中はみんな砂ぼこりでじゃりじゃりいっていました。私達一家は作業場で寝ていたおかげでみんな助かりました。近所の家々もみんな全滅でした。死者は大勢でました。私の友達も沢山亡くなりました。

子供ながらに味わったこの恐ろしさを、私は生涯忘れる事が出来ません。とてもこの気持ちは言葉に言い表せません。終戦のごたごたと一諸になり被災地の人しか知らなかったような時代で、政府や他人の援助は何もなく、みんな自分達の力でどん底から立ち上りました。あの頃の事を思うと、今日の暮しはどんなに幸せかわかりません。現在二人の男の子を持つ母ですが、地震の怖さだけは子供達にいつも教えています。

私の地震体験

澤田幸雄
（西尾市）

私がはじめて大きな地震を体験したのは、昭和十九年十二月七日の、東南海地震である。その日は木曜日であったが、当時の電力事情に関連して私たちの中学校が木曜休日であり、また大詔奉戴日からの勤労学徒動員を前にした思い出の日でもあった。昼過ぎ、家にいた私は地震で思わず外に飛び出した。まもなく立っていられにくいほどのはげしい横揺れとなり、家が大きな音を立てて揺れ続け、各家に設けられた防火用水の水がほとんどあふれ出していた。

その後、ふしぎなくらい余震も少なく、平静な日夜が続いた。一か月ほど過ぎた翌一月十一日、休校日（木曜日）で家にいたが、遠くで大砲のような音が聞こえ、急激な地震が数回あった。のちに三河地震の前震とされているものである。

三河地震は、この翌日の深夜（十三日未明）に発生した。地震に気づいた時には起きあがれず、やや静まってから倒れた家具の間を通って戸外に出た始末だった。近くの人どうしが広い

道路の片すみに集まり、余震と地鳴りと時々光る空に、不安な気持ちで冬の遅い夜明けを待ったのである。

西尾の市街地は、倒壊家屋も比較的少なかったが、時がたつにつれて各地の家の倒壊、道路、堤防の被害、断層などの状況が伝わってきた。西三河南部にとっては、東南海地震よりもずっと激しく、私たちの動員された工場もほとんど全壊に近い状態で、以降災害復旧の毎日が続いた。戦時のこととて、この両地震ともきびしい報道制限のもと、ほとんどその被害状況が知らされず、三河地震は東南海地震の余震のひとつであると説明されていたが、実感としてどうも納得がいかなかった。したがって東南海地震による尾鷲の津波、名古屋市南部工場地帯、静岡県西部沖積地帯や東海道線など広範囲にわたる大被害を知ったのは、ずっと後のことである。

続く戦後の南海地震は未明で、福井地震はサマータイム実施中の夕方前で、ともに家で体験した。両地震とも、かなり長く家が大きく揺れ動いた。

いま愛知県において注目しなければならない大地震を、その発生地域と性格からみて、次のグループに分けられるように思う。

(一) 東南海・南海地震のように東海、南海道沖に発生する大規模なもの

(二) 三河・濃尾地震のように県内または付近の内陸部を震源とするもの

(三) 関東地震のように相模湾、房総沖に発生する大規模なもの

(四) 福井地震のような日本海沿岸のもの

このうち、愛知県に大被害を生ずる可能性のあるものは(一)および(二)の場合である。

先人の残された記録と、これを並々ならぬ努力で整理された結果、古くからわが国の太平洋沿岸にはたびたび大地震が襲い、戦前すでに東南海地震の近い可能性が考えられていたという。そして昭和十九年東南海地震後、引続いて南海地震が予想されていたと聞く。東南海地震は安政元年以来の、科学的な調査ができるようになって最初の東海道沖大地震であった。しかし、偶然にも太平洋戦争末期というわが国史上まれな異常時と重なりあい、十分な調査発表ができないのはやむを得ないことであった。

東南海地震の震央は熊野灘とされているが、被害地域からみて実質的な震源の広がりは、ずっと遠州灘まで考えられないか。三河地震には、断層付近とか沖積地のほか西尾市東部から刈谷市南部にかけて被害の大きい地域がある。また濃尾地震では断層付近のほか根尾谷から名古屋へ向けて大きな被害がみられたという。この両者の間に関係がありそうにもみえ、実質的な震源のひとつと考えられないか。さらにこれを延長したところに東南海・福井地震の震源が関係づけられないか。南海地震と鳥取地震との関係はどうであろうか。

これらの地震当時から三十年を経過した。マクロ的にみて、二千五十年ごろの冬には、また静岡県から高知県の沿岸にかけて一度あるいは東西二度に分けて大地震に襲われる可能性があると思わざるを得ない。それは太平洋ベルト地帯が高密度社会となって、最初の全域にわたる体験となろう。その間には関東地震や内陸部の地震についても体験、調査、解明がすすもう。

終わりにあたって、東南海地震、三河地震の客観的な記録が早期にまとめられ、宝永、安政年代の東南海地震記録とともに将来の国土計画に反映されることと、一方では大地震の前兆現象の研究がすすみ、大地震を事前に知り、被害をくいとめられる日の一日も早いことを願うものである。

地震体験記

栅木かづ江
（西尾市）

昭和十九年十二月七日、主人は手耕指導員として、福地村へ自転車で出かけました。戦時中の事、食糧不足は勿論、酒は無く、仕事に疲れて帰り、盃二三杯の酒を嗜む父のために、私は中食後、自転車にて、東端（約七キロ位）の知人の酒屋へ一升の酒を買いに行きました。酒屋まで後一キロ位の所まで行った時急に、ハンドルがふらつき、道路脇の草叢へ転び、目が回り立とうと思っても立てず、暫く俯いていましたが、瓦や壁の落ちる音に頭を上げた途端、あちこちで民家が倒れ「あっ地震だ」と初めて気づき自転車を起し、早く家へ帰ろうと急いでも、心臓はドキドキ、足は震え、道路のあちこちで大きな地割が出来て乗れず、自転車を提げ、乗れる所は乗りどの道を通って帰って来たのか解りませんが、小島橋へ来て、家の屋根が見えた時

は嬉しくて泣けて来ました。

主人は福地で、農家に上衣、弁当箱を縛ったままの自転車を預けてあった家が倒れ、同僚の自転車を借りて、西尾の隣保館（幼稚園）へ寄り、長男を連れて帰って来れて「全員無事で良かったネ」と喜こび合ったものです。

其の後余震は相つぎ、又毎日の様に吹く木枯にさえ、高さ一丈八尺、総二階建四十八坪の母屋は、薄気味悪い程、ギッギッと揺れる様になりました。

「早く家の補強をせんといかんナ」と建築大工の父は大変心配していましたが、工作隊として地震で倒れた家へ、次々と仕事に廻され、一日も休む事の出来なかった父は、心に残りつつも我家の補強をする暇はありませんでした。度々揺れる地震に、夜中でもすぐ外へ出られる様にと鍵は全部外して、長靴、地下足袋を履いたまま土間の方へ足を出して寝たものですが。年末も迫って来た頃は、平常通り床につく様になりました。

一月十二日、安楽寺最後の報恩講の日、仕事で遅く帰った父は、寺へ走って出かけ薄暗い本堂で一人合掌して帰り、夕食後、ラジオから流れる浪曲を楽しみ、長男を連れて、二階の寝室へ上って行かれました。これが父の最後となったのです。

翌十三日未明、母屋の北側で庇の様に増築した六帖の部屋に寝ていた、私達親子四人は、大音響と共に弾き出された様な大地震、とっさに子供をかかえました。

昼の様に明るい稲光り。瞬間南側の母屋は南へ倒れ、そこには星だけが冷たく光っていました。私達の部屋は庇だったお蔭で、一本の洋服箪笥に支えられ、子供を連れて出る事が出来ました。

主人は倒れた母屋の二階によじのぼり、私は三才と一才の二人の子供を両脇にかかえて、田ぼを跣で走り、本家へ行きましたが、本家は入口の大ガメ（昔の農家は風呂の落し水及び、小便所として使用するため約一坪位の四角いカメが掘ってあり、子供が落ちない様に割升や板が覆ってあった）の水が表一杯に溢れ、家は倒れる寸前、又戻って駐在所へ子供を頼み、「苦しい早く助けて」と泣き叫ぶ長男や、母の声を頼りに、主人と二人で瓦を外しては田に捨て、又助けを求めて走りました。その内懐中電燈、鋸を持って救援に来て下さった方々のお蔭で、長男、次に母が助け出され、父が遺体となって運び出された頃はもう夜はすっかり明けていました。

死亡者は疎開児童を含めて二十六名、火葬場も一ケ所しかな

く、穴を掘って次々と茶毘されたのですが、父は十五日午後の番でした。

親戚にも充分連絡の出来ないまま又喪服も借着で寂しい葬式を済ませました。

十二月七日の地震後父が仕事を休む事が出来て筋交、其の他色々と補強が出来たら、倒れるにしてもあんなに早く倒れる事も無く、犠牲者も出なかったと悔まれてなりません。

此頃駿河湾地震、東海地震とか、テレビ・新聞等で大変騒がれています。地震には「机の下へ潜ると良い」と云われていますが。私の家の場合、机も全部潰れ、家具は私達の部屋にあった洋服箪笥一本と、運良く壁が外れてその間より西側へ倒れて助かった、お仏壇の二つだけです。

時が経つに従ってもうこんなに大きい地震は来ないだろうと入母屋作りの母屋を建て工場・倉庫等で五〇〇坪の屋敷内も家に囲まれ、池あり庭あり、ブロック塀ありどこに避難して良いか安全な空地はありません。

特に此頃の建築は縁側、窓には「サッシ」となり台風には強いと思いますが、地震の場合ガラス戸がすぐ開くでしょうか、又割れたガラスで出血多量という負傷者が大勢出るではないでしょうか。

昭和二十二年に建てた母屋は、親戚や隣家の人達がタコ足で地を打った簡単な基礎であって、ボルト、筋交等も余り使用してなく、大きな災害に逢い乍らも全く無防備なものです。

時代の波と共に、プロパン・ガソリン・高層住宅・自動車等めまぐるしく増えて来た今日、万一地震の起きた時の事を考える時、背筋がゾッと寒くなって参ります。

災害は「年忌を弔ふ」といいますが、今年は三十三回忌です。どうぞこれからも無事であります様、父の冥福を祈りつつ筆を置きます。

東南海・三河地震

西村キヨ
(西尾市)

東南海地震は昭和十九年の十二月七日頃ではなかったかと思います。日曜日であったのか子供達五人共家に居りました。風の強い日で午后の一時頃だったと思います。五才の次女が下駄のはなおが切れたのですげてくると云って、只一人で家の中へ

入りました。私と四人の子供は家の前の大根畑で作業をしていましたら、突然どどどという様な音と共にゆれて来ました。家の中では「おかあさん、立てない。ころんじゃうよ。」と泣きさけぶ声。私が「今行くよ。はっておいで。」と云いながら、私もどうしても立ち上がれなくて、大根にしがみついて家を見ていたら、マッチ箱を押しつぶす様に右に左にギチンギチンとゆれます。「あっ、家がころぶ。あぁころんじゃう。」等と我を忘れてさけびました。合間をみて、次女を連出し、五人ではったままで東の方を見たら、土煙りが上ったのは、太高さんの横家が倒れたのでした。又西の方で土煙りと大きな音がして高砂園さんの家が倒れました。その時は余震も無かったのか、町内会長さんの指示でころんだ家へ勤労奉仕に行きました。地震小屋を建てる等という事もなく、普通の生活をしていました。

夫は田口航空会社へ勤め、長男は愛知県立西尾蚕糸学校の生徒でしたが、勉強よりも出征兵士の家への勤労動員や、軍の防空ごう掘りや、飛行機の基地作りに行く日が多かったのです。次男は旧制西尾中学生です。この子も勉強の忙しい学校でしたが、幡豆郡吉良町の塩田へ、塩造りに通いました。一米位の四角いあみに、国防色の布を一ぱい結び付けたものを、肌身はなさず持っていて、塩田で空襲警報に入ると、それをかぶって一寸も動かないで、敵機の通過を待って、又作業に付いたそうです。この地震の日は日曜日であったのか無かったのか。夫は田口航空会社で働いていて、工場が倒れて一人の工員さんが亡くなられたと云われました。幼い子供さんが多ぜいいた方の由、本当に気の毒な事であったと思いました。

昭和二十年一月十三日午前四時頃です。その時私はゆめの中で里の母と話をしていました。突然はげしいゆれ方で。大人も子供も一せいに飛び起きて、倒れたふすまをふんで外に出ました。寒さきびしく、がたがたとふるえて抱き合っていました。余震の合間にござやらふとん等持ち出して来て、何とかふるえるのをとめる程度でした。家は半壊でも倒れなかったのが幸でした。こまねずみの様に走り廻って朝食を造り、一家揃って腹ごしらえを済ませ、家の下敷になって、「おーい、おーい。」と呼んで見える方たちを助けに廻りました。

その時地震小屋を建てなければいけないと聞きましたので、我家も板べいをこわしたり、雨戸やら畳やら材料も無いのに苦労して、八畳位の小屋を造り、其の中で雨露をしのぐことになりました。この時私の里の弟が使いに来ました。まっさおな顔

だったので、これは何かと思ったら、住居も別棟も納屋も全部こわれ、母が亡くなったとの報せでした。私は全身の力が抜けて坐ってしまいました。夢の中で逢った母なのに、聞けば夜前はお風呂が済んでから、明日お手伝いに来て下さる生徒さんのおやつにと、さつま芋を洗ってから、ねむられた由。きれいな顔で傷一つ無くて、私はうれしく思いました。里の村は被害甚大で仕方なかったのでした。六十才でした。

さあこれからが大変です。昭和二年以来助産婦を業と致して居ります私は、地震小屋の中でのお産が始まりました。一日に三人生れた日もありました。余りの忙しさに子供達がもう一人家に居るお母さんがほしいと云いました。自転車で往診ですが、田舎道は遠くて、空襲に逢った時は、草色の大風呂敷や防空ずきんで身を守り、じっとして居て、すむと又走りました。夜は灯火管制との戦いです。ある時は農家の広い表に建てられた小屋で、夜のお産でした。介助を致して居るうちに、警戒警報に入り、新産児の生ぶ声と同時に空襲警報に入りました。提灯の明りを消して、昔のソーメン箱の奥の方にローソクを立て、その明りで処置を終えました。又ある時は呼吸器が普通でない男児が生まれました。口をあいて息をする児でした。口をつむると顔も全身も紫色になります。お医者様も応召されて少くやっと見つけた先生でしたが、往診をお願いしたら生れつき病気のある子は助からないですよとのお言葉で。わらをもつかむ思いでしたのに残念でした。でもその子、生后一時間の命でした。小屋の中で扱ったお産十七件。毎年一月はお産が多いのですが、四十日間にこの数は私の開業以来多い数でした。

こうした小屋の暮し。雪は少々降りましたが、雨は全く降らず、先づは恵まれて活動しました。かたむいた家を工作隊の人々に直して貰い、余震も治まり、あの恐しかった打上げる様な音も、いなびかりともちがう青い光りも、出なくなり、四十日目に少し雨が落ちて来たので、我家でねる様になり、空からは相変らずの敵機襲来ですが、「がんばりましょう勝つまでは」を合言葉に働きました。私はこの時三十七才でした。今は七十才の老婆ですがあの時あの頃の事は昨日の事の様にはっきりと頭に残っています。地震はいつ何時おきるか分りません。我身を、我が家族を、我家を守りましょう。

波打つ大地

高村晃
（安城市）

昭和十九年十二月七日。其の日はうす曇りの、風も少ないおだやかな日であった。

昼食もすんで皆んな田畑へ出て二期作の菜種や、麦の床造りに掛った頃だった。

「やっ、なんだか目まいがしだしたぞ」と思う間もなく大きく大地がゆれだした。ゆれが一段と強くなり、立って居られなくなった。父母や近所で仕事をして居た人々も、畝の上や溝の内にしゃがみ込んで地面につかまった。畑のそばの田に居た牛も、足を広げてじっとふんばって居たが、体がゆれる度に鼻が畑の土堤にふれる程だった。

私の居た所は鹿乗川の堤防の東三十米位の田の中だったが、目を西の方に向けておどろいた。川沿の見通は三キロ位きく所であったが、鹿乗川の堤防が海の波のように波打ってこっちに寄せて来るのがはっきりと目にうつった。波の高さは一米前后で、波と波との距離は百米位だった。「大地が波打つ」それは少年の私にとって青天の霹靂と言うべき衝撃であった。

堤防の波は間もなく小波となり、さざなみとなって元の一本の線にもどった。部落まで五百米程もあったろうか。北はずれの方角で黄じんが上がった。父母が「竹様のがつぶれたらしい」と言いながら駈出して行く。近所に居た人々が一斉に人家の方へ走り出した。家へ着いて見ると二階屋の大きな我が家は二三十度も南東へ傾き、瓦もばらばらと庭に散らばり表口の瓶の汚水は底が見える程にあふれ出し。出かけた時の面影は無く、庭の真中に立って。皆んな呆然と眺めるばかりだった。しかし此の東南海地震は倒壊家屋もわずかで火災も出ず、大災害には至らなかったが、此の時の傷が次に襲った三河地震の被害を決定的にしたのだった。

追打は翌年早々強烈に見舞った。一月十三日午前一時十三分。人々が農耕と戦争で疲れ果て眠って居る時を見計って悪魔は襲かかった。至近距離の大地震に「傷ついた我家」はひとたまりもなかった。最初の数秒の強烈な上下動であっと言う間にへたり込んでしまった。逃げおおせたのは豹のように目ざとい父一人だけだった。母と私と弟二人は瓦礫の一番下に閉じ込められてしまった。そして此れが我家の悲劇の発端となった。

私が近所の人々に助け出されたのは澄渡った夜空一面星の輝く夜明少し前だった。

家がつぶされる時は何の音も聞えなかったが、障子がひしゃがれて行くのがはっきり見えた。それは電気の光ではない、なにか稲妻のような光だった。そして気が付いてからは、今で言うと震度三から五の余震がひっきりなしに襲い、其の度、こわれた我家は私達をしめつけた。幸運だったのは家が東の道をふさぎ、南から来る人々が私の所を先に助けてくれた事と火が出なかった事だ。私の家の東の道を北へ行った所で本屋が四軒つぶれ、大人四人、子供二人が死んだが、死んだ人の内には明方近くまで助を呼んで居たとか。戦前の家は土台はすえ石、筋違も無く、其の上柿や野物に太い物をつかい屋根も厚く泥を乗せた家が多かったため、今の家とは比較にならず地震に弱かったと思う。現在の家は形式が複雑になって居るが対震対火では心配無いと思う。大地震以来三十三年になり其の後建った家が実際の地震にどれだけ強いかは、実証されないが心配なのは高層住宅ではないかと思う。外国の例で高層住宅は地震の時に一階二階がくずれる事が多いように思うので、其の点改良が急務であろう。

次に地震の際どうするか。先ず平家建の家がつぶれる事は非常に少ないので先づ火の元を見る。そして気づくのが早かったら家の外へ逃げる。逃げるのがおくれた場合は丈夫な家具のそばか風呂場へ入る。風呂場は三方がブロック又はコンクリートだから家がつぶれても安全なスペースがある。

二階建の場合は逃げ出す必要はない。先づ火の元を見てから丈夫な家具のそばへ身を寄せていれば良いと思う。この事はすでに実験ずみで、つぶれた一階の上で二階だけしゃんとして居て、長く生活出来た人はたくさん居る。又逃げ出す時にじゃまになるのが窓の錠ですが、サッシの場合ワンタッチで錠が外せるのですが、従来の木制建具の場合錠を外すのに時間がかかり過ぎて、此の時が一番危険ですので此の鍵の改良が是非必要です。三河地震の際窓を開けるのに手間取り軒柿にやられた人の話に事欠きません。又年一回九月一日の防災の日とか地元で大災害のあった記念日など当時の事を話し合い、若しもの時はどうするか逃道など話合って置かねばならないと思う。

私の地震体験

丹羽政数
（豊田市）

自然界の現象のうち地殻の変動の地震ほど恐ろしいものはない。第一予測が困難であり、突然のことで強震ともなれば家は倒壊し、山津波起り、岩石土砂墜落し身の置き所なしの有様である。人々は無意識のうちに野外へ飛出してしまう。これ又危険極りであります。部屋の中又は人口過密の場所にいる（都市など）場合、飛出して反って被害を受けることが多いであります。関東の大震災といわれる東京横浜箱根地方を中心に起きた大地震も、外に出て荷物の山となり、人々の集団が陸運の被服廠の広場で火のために焼け死んだ例など各所でありました。

かえって家の中などで、器物を利用し身を防いだ方が安全であるかと思う。

昔から色々と説はあるが、自分の助かることが大切であるが、より大事は他に類を及ぼさないことであります。心掛けるべきことである。

私の体験談の一、二をあげると

大正十二年九月一日のいわゆる関東の大震災であります。私は当時愛知県愛知郡東郷尋常高等小学校の教員でありました。

九月一日は第二学期のはじまりで、始業式で学校をおえて帰途、三好町（当時は三好村）第三小学校教員の柴田某の下宿へ立寄った（三好村打越）。十二時頃突然地震が起り、隣家よりは叫び声が起り、人々は家の前の広場へ飛び出した。そして口々に先生たちも早く外へ出なさいと大声でどなった。何のこれしきの地震にと笑っていましたが、だんだん強くゆすぶり、部屋の壁に亀裂が大きく生じ、水槽の水はだぴんだぴんと音を立てて溢れる有様に、柴田君と二人は思わず外へ飛出し、地面に坐った。まことに恥も外聞もなくぼう然とした。当地方（三好、豊田）にとってもめずらしい大地震であった。

後にだんだん地震の様子が知れるにつれて、東京地方が中心で、大火災が起り修羅の巷と化し、流言飛語がながれて人々を一層不安恐怖の極に至らしめた。駅には避難をする人々が殺到し、実に生地獄の有様であった。

当時東京の拓植大学生の避難民（当時はそういう）の人和歌山県人で小林某が東郷小学校教員として採用されて来られた。まことによい人物であった。東京、横浜、箱根などの惨状をよ

くきかされ、焼け野ケ原と化した地方は目もあてられぬ有様で、地震の恐しさを愛知県在住の小生らも二十一才であったが、新聞や画報などで知り、身にしみて今日まで生長し老齢となった現在でありますが、当時の思い出で恐しさを子や孫達に話して、日常注意を怠らず心掛を喚起しています。

昭和十九年、同二十年に起きた地震も物すごく、当時小生は石野青年学校長として勤務していたが、地震と同時に学校へ駈けつけ守りについた。

学校も休暇のこととて、生徒には害はなかった。新卒の教諭米津某が、西尾市の米津町出身で、本校に着任していられた。休暇中で家にいられたで、地震が起り家は倒れ隣人は死亡。その中を約三十キロもある石野村（現豊田市）まで自転車で来られた。「学校は異状ありませんか」が第一声であった。実に責任感の強い立派な先生と感心し感極まって落涙した。米津さんに家の倒れた様子を尋ねた。先づ第一電線は切れて電燈は消え、真暗やみ。戸は動かない。家の中は歩けない。幸いに倒壊した家の屋根を抜けて出ることが出来ました。地震というものは恐ろしいものですねいと、今更の如く語ってくれました。死なれた方々はあまり多いので部落で委員を作り、合同で一ヵ所へ集めて焼却し、合同葬とした。当時は燈火管制下でやむおえなかったことでありました。

時に大戦争の真最中であり、敵機来襲も多くなり、日本国にとって軍需品生産にも大きな痛手であったのであります。

豊田地方でもこの地震で牛耕をしていた牛も人もたおれ土手に伏した。墓石もぐらぐらとし、神社の灯籠はじめ鳥居までたおれ又は折れ落ちる有様でありました。

祖母も濃尾の大地震の時、野外に蚊帳を吊り、柿の木の根元で眠ったことなど、小生ら子供心に焼付いて、天変地異を恐ろしく考えさせられて常に警戒心を養われたものであります。

それ地震だというと、野外へ無理に飛び出す習慣になっているように思うが、今は野外も少なく広場も近くにない。家の中にいる時での防止法を考える必要があると思う。

机又は器物家具などを利用して避難する。

頭を大切にして頭巾などの方法を考える。

いざと言う時何が出来るか訓練が第一である。役に立たないと言う人があるが、訓練反復練習で身につく効果は大きいと思う。

山津波岩石落石の動きなど地震と共に起る惨状を思う時対策

を考察せねばならない。

① 火気に留意し直ちに消すこと。

② 夜など停電し真暗の時に備えて日頃用意をすること。

③ 戸が開かない時戸をけやぶる場所を作ること。

④ 避難の方法及計画をよく知らせること。

⑤ 水道破裂に備え食生活に心する。

右のこと壁などに地図と共に貼付しをき、時を定めて避難訓練をして、よく動作を身につけておく必要が緊急事であります。

私の地震体験

磯谷清市
（豊田市）

東海地方に地震の勃発が予言されてから久しい。研究機関は地震予知に全力を注ぎ、行政機関は施設資材の拡充整備、地震対策の推進強化、冊子による市民に対する地震対策の啓蒙等が行なわれている。

私はわずかな地震体験しかないが、地震の恐ろしさを知るが故に、あえて禿筆を執ることにした。

ゴーッ、又は大爆発音を伴う地震は、大地震で、家が倒れる虞がある。この場合いかにして身の安全を図るか。強固でない建物の場合脱出時機が問題である。無理であろうが冷静に状況を判断し、機敏な行動をとることである。脱出は初期震動から十秒間くらいと言われている。上下動が来てからでは遅い。

一、関東大震災

関東大震災の時私は十六才で、東海道線御油駅前に住んでいた。ちょうどお昼の食事にかかろうとしていた時のことである。グラグラッと今まで経験した事のない大きな震動に襲われ、家がユサユサと横揺れしだしたので、地震と直感して表路上へ飛び出すと、近所の人々は既に路上で不安そうに家の揺れを見守っていた。余震が小さくなったので、家へ入ると柱時計が止まっていた。

そして、新聞は関東地方に未曽有の大震災が起きた事を報道し、日ならずして駅には、避難民が貨車の屋根まで乗ったり下りの貨・客列車が次々と到着した。そのころ町内には、東京方面から暴徒が来襲するというわさが流れ、遠隔のこの御油駅前でも、部落の要所には棍棒を持った自警団員が、昼夜の別なく警戒に当ったが、デマとわかって警戒が解かれた。恐ろしい

のは正常な判断を失った非常時の行動である。

二、東南海地震

昭和十九年十二月七日午後一時三十六分ころ、熊野灘沖を震源地として、東海地方を襲った強烈な地震は、M八・〇と言われ、三河湾沿岸の幡豆・碧海両郡・衣浦臨海地帯、名古屋港南部に甚大な災害を及ぼしたが、敗色は日毎に深まり、主要都市の空襲も時間の問題とされ、軍民一丸となって防空に明け暮れた戦時中の事として、震災は二次的処理となり、その被害の詳細は明らかでないが、愛知県下の死傷者約千二百人、建物の全半壊約五万棟と言われ。幡豆郡に次いで被害の大きかった、碧海郡の死傷者約百人、家屋の全半壊約一万七千棟と言われている。

当時私は安城警察署の警防（防空・水火消防・その他の警防）事務を担当していた。用務で岡崎海軍航空隊の司令室へ行くため、隊本部の階段を上り切ろうとする時であった。不気味な地鳴りと共に校舎の様に長大な兵舎が船の様に大きく揺れ出したので、手摺りにつかまって前方を見ると、前の兵舎はユサユサと横揺れに揺れ、屋根は波打ちを繰返し、遠くの集落のあちこちで家屋が土煙りを立てて倒れてゆく。司令はこの間自若として机に向かって居られ、さすが隊長だと感じた。

三、三河地震

東南海地震から一か月後の昭和二十年一月十二日の夜、私は安城署の宿直室で仮眠していた。うつつとしたころ爆弾が炸裂した様な大音響と共に重厚な庁舎が震動したので、時計を見ると、十三日の午前三時四十分になろうとしていた。続く余震も強く大地震であると直感した。

管内で最も被害の大きかったのは、矢作川右岸の桜井村で、死傷者約四百人を数え、中でも河岸に近い藤井部落の三十戸程は全壊に近く、その北部の二部落も惨状を呈していた。直下型地震による被災家屋は、つぶれた家の上に勾配を失った屋根が乗りかぶさっていた。そして家の下敷となった家族もあった。

強そうに見えて弱いのは、建築後十年前後以内の新材使用の木造家屋で、M七・一の急激な震動で柱その他が折れていた。

以上述べたささやかな体験は、拙筆で要を尽さないが、防災の要諦は各人の平素の心掛けにあると思う。現今平和に馴れ、平和に酔って惰弱な風潮を生み、軽薄な服装が出現した。これら現代型の人々が万一都会で大地震に遭ったと仮想すると戦慄を覚える。落下物対無帽、捻挫対ハイヒール。一考を要する服

装が目につく。我が家では、ヘルメットと素早く履けて脱げにくいモカシン型靴その他が各人の枕許に置いてある。

軒先き等にピットを設け、これに破壊救出用の掛矢、鋸、金挺子、ロープ等の収納は倒壊家屋から人の救出に役立つ。大地震の時橋は危険である。橋詰めに例外なく大亀裂を生じ交通不能の事例を鳥取で見ている。

当今は、さきの震災時と世相を異にし、憂慮すべき都市の過密、車の氾濫、危険燃料の普及、遵法精神の弛緩、依存心のびまん等の諸問題を抱えている。然し、地震は無言、無遠慮に、油断を衝いてやって来る！

三河地震と学んだこと

神谷チヨ
（西尾市）

持ち上げてピシャッと叩きつけられたといおうか。メリメリ、そしてバラバラとおちる砂埃。家のきしむ音が何とも無気味であった。これが二十年一月十三日未明の三河地震である。運よく覚めていた私はとっさに子供をかかえてとび出したらしいが、その辺の事ははっきり覚えていない。続いて一間もある大きな本箱がぎっしりと本を入れたまま、今ねていた布団の上に倒れた。舅や姑は、それから疎開していた私の母はと大声で呼ぶうちに、暗やみの中をザワザワとよろめきながらガラス障子の破れ目から出て来られた。助かったのだ。若しも寝込んでいたら、おそらくあの本箱の下敷に、そしてこの家がつぶれていたらとしより達もまた・・・と思うと今でもゾッとする。絶間ない激しいゆれと物凄い音に、寒さとおそろしさでふるえは止まない。また大きな地響と共に、土煙が上がった。外はまだ暗いが前の家が倒れたのがはっきりわかる。

町内の被害は大きく死傷者の救出にも困難を極めた。何しろ戦時中で懐中電燈もないようなことでその上道具といえばノコギリと金テコ位。「助けて！」という悲鳴をたよりに死の救出を続けても捗らないもどかしさ。屋根から、床下からとそれでも次々に引ずり出すようにして助け出す。「急がないと」というらだちとあせりが交錯する中での作業である。その中に呼ぶ声も次第に弱まり、とだえがちになって行く。夫婦兄弟親子が梁一つ隔てて生と死の界を異にし、母親が乳呑児をかばって事切れている。どんなにか「苦しい苦しい」と言い乍ら、親は子を、

妹は姉をよびつつ冷たくなって行かれたことだろう。ただ涙と合掌の連続であった。夜の白むにつれてその惨状は益々ひどく予想以上であった。

布団の中で窒息した人。動かなければ助かったのにと思われる人。子供をたすけようと中へはいった人。また俵や長持等の陰に身を寄せて助け出された人。床下を破ってのがれた人等様々である。これは救出に行った主人の話である。

この地震で九十戸中十六名の死者を出し、翌日はこの方々の野辺送りの煙が、火葬場だけでは間に合わず野良のあちこちに悲しく立ち昇った。

その後長い藁小屋生活がつづいた。火の気のない冷たい真暗な原始的な生活が。余震におびえまどろむ暇もなく、今度は逃げ出した豚の来訪を受け、垢に埋まりそうな毎日であったが、皆元気に頑張った。寒中というのに外で冷水まさつもした。そのおかげか風邪もひかず、いやなシラミにも見舞われずにすんだのは何よりであった。空襲を気づかい乍ら野天風呂にはいったのは、しばらくたってからである。あの心地のよかった事は終生忘れられないであろう。こうしてやがてトタン小屋に、門長屋にと、余震のおさまるのにつれて自分達の心もおさまり居を移し替えて行った。空襲は益々はげしさを加えていった頃である。以上が三河地震の概要である。

△その原因と対策

さて一体どうして、またどうしたらとその原因と対策を考えて見たいと思う。

(一)M七・一で震源地が近かった事と矢作川流域の沖積層であること。

この地方は深溝断層の延長線上でもあり西三河地域において地震災害危険度は最も高いといわれているが自然現象で人力が如何とも出来ない。家の建て方に研究工夫をするより仕方がないのではないか。

(二)東南海地震(M八・一)でかなりいたんでいたことと、大きな地震は二度つづいて来ないと信じていたこと。

戦時中で物資が乏しくまた地震に対する知識も持たなかった為で、現在では土台柱梁等の悪い箇所は直ちに補強し老朽家屋は安全の点検をして不安をのぞくべきである。また迷信に惑わされず、講演会等で地震に対する正しい知識を持たなくてはならない。

(三)養蚕の関係で、家の建て方が解放的で壁が少なく、基礎工

事も充分でなかった事。

基礎工事の必要性は痛感した。専門家に依頼し主要な柱の下はコンクリートで固める。最近建つ家で土台の下をすべて鉄筋コンクリートでやられた家もある。屋根は軽い方がよく筋かい、方づえ、火打ばり等斜にも注意のこと。工事は手抜のないよう良心的にやってくれる業者を選ぶこと。柱間仕切りなども多くて太い方が丈夫であることが立証されている。煉瓦ブロックの家屋はこの地方では危険であると思う。

(四)夜間で熟睡時であったことと、停電で逃げる方向がわからなくなったこと。

懐中電燈と必要な物をまとめた袋等は手の届くところに、柱や壁の多い便所とか風呂場或は二階、床下は安全度が高いのでにげおくれた時には一時の避難場所と決めておくとよい。停電或いは懐中電燈がない場合も考えて夜光塗料で方向標示をしておくのも案外役立つのではないか。その他の品物にも夜光テープ等はっておくのも便利と思う。

(五)人命救助が捗らなかった事。

この為には倒れても持ち出せる場所にやはり夜光テープなどはっておいておくことが大事ではなかろうか。ノコギリ、ジャッキ、金テコ、梯子等。そしてこれは一人では出来ないので日常から協力の出来るようにしておくべきである。

(六)二次災害が防げたこと。

第一は火災である。昼食時でなかったことと当時は暖房具もなかった時代であったが、現在はそうはいかない。これだけは忘れないように。ストーブのコック、プロパンの元栓、電気器具のスイッチをきること。火災を起したら人命救助も出来なくなるだろう。洪水や津波は警報や責任者の命に従ってあわてないよう行動する。

これは極く一部の極めて常識的な事ばかりであり、私の体験から考えたこと、話をきいたり読んだこと等からまとめた私の提案でもある。



地震の思い出

蜂須賀　たね
（西尾市）

昭和十九年十二月七日午後のことだった。

出産間近い私は里（同じ町内）でまだ幼い妹と留守番をしていた。突然ドーンと大きな音がして棚の上の物が落ちて来た。ふらつく足で妹と這うように外に出ると隣の家がグラッと傾き土煙と共に音をたてて倒れた。私は胸が高鳴って来るのを感じ妹は、大きな涙をポロポロとこぼして泣く。幸い私の実家は倒れなかったが壁は落ち家の中はクチャクチャになった。この時一部道路に亀裂が出来、倒壊した家も十数軒あったと思うが余震はまったく無く、戦時下の為別に気にもしないで十数日が過ぎたある日私は女児を出産した。半年前に出征した夫と書面で喜びを分かち合ったのもつかの間、明けた二〇年一月十三日夜中の三時頃だった。ドードーと大きな音がしたかと思うと電気が消えゆらっとした。私は地震だと気づきとっさに娘の上に体を伏せるとすぐに天井が覆い被さってきた。もうだめだと思い気が遠くなる。数分たったであろうか。娘の泣き声で我に帰った私は〝生きている生きている〟と自分にいい聞かせ娘を抱きしめ込み上げる涙を堪えることが出来なかった。早く外に出なくてはと闇の中を探ってみたがあせればあせるほど外に出られずぶつかってばかり。暗闇の中で母の私達を呼ぶ声がかすかに聞こえ返事をしたら娘が大きな声で泣き出した。すぐに見つけてもらえたが出ることが出来ない。父と母とでかたずけてくれるのだが一つかたづけるたびに土が落ちてくる。土の落ちるのが少なくなった時小雪まじりの冷たい風と共に星の光が差した中で生きている喜びを新たに感じた。稲光りのような光がしたかと思うと余震は続きあちこちから助けを求める人の声がする。やっとの思いで外に出た時はうっすらと明るくなって来た。ねまき一枚の私は初めて寒さを知り体の震えているのに気がついた。娘もサラシの襦袢一枚だけなので母が胸の中に入れて暖めてくれた。

婚家も倒れ義父は右足を軒にはさまれたのを力いっぱい引っぱって這い出したけど義母を救出したのはその日の昼過ぎだった。内出血の為医者の診察を待たずに逝ってしまった。

婚家も実家も倒れ寺津だけで五十八名の死者が出たという。それぞれの遺体は畑に穴を掘ってだびに付した。

義父は足にばい菌が入ったらしく巡回に来た西尾の勝沼医院（現市民病院）の先生が足首を切断しなければだめだといい、お寺の本堂で手術にかかった。麻酔をせずにメスを入れる先生。義父のものすごい声が今も耳に残っている。幸傷は進行していなくて足首切断はまぬがれたが足の自由を失った義父は一日中小屋で娘を抱いていた。若い男は戦場に行き残された年寄りと私達で後かたずけをするのだが余震はいつまでも続き、むしろを敷いた藁小屋の中で十軒の協同生活が始まった。おむつを取り替えるのに星の光で替えるのです。生後一ケ月もならない娘がかぜもひかずにいたのがふしぎなくらいです。家具は十日間外に置いたままだったが悪さをする人は一人もいなかった。やがて役場から小さいながらも平家の家を作って下さることになり私の家を一番先に作って下さった。あの時の嬉しかったことは今も忘れません。

戦争中のことというだけで被害を公表しなかった。私の夫も母親の死を知らされないままに戦死しました。私にとって当時はどん底の生活でしたが一生懸命生きて来ました。

今また、こんな経験をするとしたならば、いくら夜中の出来事でも地震即火事につながる今日、あってはならぬことの為に個人個人の注意が大切だと思う。

地震の思い出

木村喜代
（西尾市）

突然目まいのような、ぐらつきを感じた私は、鎌を持った手を其のまま両手を地面についてしまいました。十九年十二月七日、其の日私は両親と田んぼで稲を刈っていました。午後三時頃だったでしょうか。

「地震だ！　かなり大きい、何所かで被害が出たな。」と父の声。地面が大きく左右に揺れているのが分ります。二百米程はなれた丘の上の家の雨戸が、外れそうになっては、もどり、ぱかぱかしているのが見えます。時間も長く揺れがおさまる迄には一分位かかったでしょうか。「家を見て来なければいかんかな。」と話し乍らも、近くの家が何ともなかった様子なので、又刈り始めていると、わが家の裏の豊橋二中に駐屯していた兵隊さんの一人が、あんたの家のおばあさんが腰が抜けて動けなくなっているから、直ぐ帰るように、と報らせてくれました。

あわてて跳んで帰ると、言われた通り、祖母が庭石の前で動けなくなり、口も聞けない有様でした。家の中へ入って見ると、時計などかけてあったものが落ちて転り、中の間の板戸がねじれて裂け、鴨居のさし込み口が二糎も口を開いて、これ以上揺れたらと思うと、身の毛がよだつ思いでした。風呂場のタイルも、昔の大きな厚いものだったのに、大分、くづれ落ちたり、ひびが入ったりで散々でした。改めて地震の大きさに驚き外へ出て見ると、道路が大きくひび割れが出来て、自転車がはまり込んでいたり、街部と部落をつなぐ畷堤は、往還道路になっている、しっかりしたものだったのに、全部一米巾位路肩がずり落ちて居り、震源地は？　被害は？　と思いながらも戦争中のこととてあまりくわしく報道されぬまま、震源地は伊良湖南方洋上、そして親戚の娘さんが刈谷の工場へ学徒動員で行っていて、レンガ造りの工場が崩れ落ちて大変だったことを知りました。

それから一ケ月余り経った翌年正月十三日未明、又もや大地震が起りました。先の地震で家がゆるんでいた為か、それ迄地震でとび起きたのを見たことのなかった父が、とび出るのが早かったこと。私は出遅れて座卓の下へもぐり込もうとしていましたら。間もなく母が土間に引返して来て、障子につかまりながら大声で私を呼んでいるのが聞えました。

怖ろしさと寒さにふるえながら、さげ出して来た火鉢で藁を燃し、其の火をみんなで囲む頃、白々と夜が明け、あたりは一面の真白な霜でした。

それにしても戦争に敗けるんじゃないか。と言う不安の中で、この大地震の連続は何やら神の怒りとも思えて無気味でした。この二度目の地震は余震が多く、到底安心して眠れないので、父だけを残して家族全員、隣の人達と一諸に鶏小屋へ寝ることにしました。藁を敷いた上へ布団を敷いて、体をくっつけ合って寝ることの温かかったこと、それはせめてもの救いでした。揺れる度に突き上げるような地鳴りと、何所かで空がぼーっと明るくなるのにおびえながら、そんな日が二週間位続きました。

そして終戦。私は縁あって此の二度目の震源地であった西尾市へ嫁いで来ました。

当時此の部落は四十七戸、死者二十七名。其の中で母屋の倒壊から脱れたのは、大工さんの家一軒だけとのことでした。其の頃村は、地震と戦争のダブルパンチで多くの人を失い、人々は生きる希望を失ったように生気がなく、婦人会と言えばこれら

死者の追弔会のことでした。

姑はよくこの地震の時のことを話してくれ、震源地で上下動だと逃げる余地などない。家をひょいと持ち上げて、ぐしゃんと潰すと言うのが本当だと申して居りました。足をはさまれ、下敷になりながらも、散らばってしまった暖房用の籾ぬかの火を、一粒二粒手で揉み消しながら、火事を出すまいと必死だった。其のうちに隣の人らしい声で、頭の上で、「生きとるか、しっかりしなよ、今出してあげるからね」と聞えた時の嬉しさは忘れようがなかった。とにかく潰れた家の中から布団や衣類を出さねばならず、炊事場も何とかしなければならないのに、井戸水は溢れて使いものにならず、土間に転がり落ちたお蔭で無傷だった祖母をのぞいて死者や怪我人ばかりで何ともならず、随分長いこと軍隊や、親せきのお世話になったそうです。又それぞれ死者を葬らねばならぬのに、どの家も満足な人はないとあって、火葬場の廻りに穴を掘って並べ、油をかけて焼いたが空襲警報が出る度に其の火を消さねばならず、幾日もかかって骨にしたそうです。私が嫁いでからも、両親は寝る時も決して戸締りをすることはなく、押せば簡単にあく開き戸の傍で寝起きしていました。

今でも盆と正月十三日には部落の追弔会が行われますが、こんな災害に会い、地震に弱い沖積層の地盤と知りつつ、又みんな其の上に家を建てねばならぬ人間の宿命を思います。

碑となりて残れる地震の思い出は蟬しぐれする杜に鎮もる

私の地震体験

加藤千鶴子
（刈谷市）

地震の洗礼は、昭和十九年十二月七日の東南海地震で初めて体験した。

現在は安城市になったが、当時は碧海郡桜井村で、私は第二国民学校の六年生だった。

食糧増産の一よくで、全校が落穂拾いをして居た。大地の揺れに気がついて、あたりを見ると、すずみが横ゆれしてお百姓さんが抱きかかえるようにかばいながら、一緒に足を踏ん張って居たのが印象的だった。その時はさして被害もなく、新聞で知多方面の状況を知った程度で済んだ。

然し一ケ月後の、昭和二十年一月十三日未明におそった三河

地震は、ぐっすり眠って居る最中の激震であり、電灯も切れて真暗やみの中で、私達は右往左往して恐ろしさにおののいたのである。

ぐらぐらっと横に揺れては上下にどしんどしんと揺れる最中に、私は寝床を脱け出し。シケの船中のような不安定で頼りない畳の上を踏みしめながら、廊下へたどりついて、鍵を外した。

父はシンガポールへ兄は四国の飛行隊へ出征して、我家は気弱な母と子供三人の留守家庭で、私は長女として何かと母を助けて気丈だった。

跣足で飛び出した親子が軒下でふるえて居ると、東隣の学生さんが

「大丈夫かい。」と、弟に声をかけながら来てくれてとても心強かった。

名古屋から戦災者として来たこの青年は、たまに将棋の相手をする位の交際で、こんな非常時にきてくれて、思いがけず嬉しかった。でも一時間もするとそのおかあさんが迎えに来て、

「この子達が可哀そうだよ。またあとでくるからね。」と言いながら行ってしまわれた。ひどく傾いた家を立退いて、近くの親類へ避難するとかだった。

少し落着いたので西隣を訪ねてみると、母屋が壊れて家中ひとかたまりで、表に立ちつくして居た。

どこの農家でも入り口に下水兼用の肥だめが掘ってあり、それらが地上に流れ出して、跣足の足許はぐちゃぐちゃだが、そんな事を気遣うゆとりもなかった。

「寒い、寒い」と寝巻姿のおじさんが言うので、母は押入れから父の外とうを探して貸してあげた。

我家は分家で新らしく、建ててから七年ほどだった故か、さして被害もなく壁が落ちたり、瓦が少しずれた程度のものだった。

おろおろして居るうちに白々と夜が明けて、三十軒ばかりの集落を同級生と三人して見て廻った。母屋がかたむいたり、納屋が壊れたりして、どこの家でも何らかの被害をこうむり二階が平家のようにつぶれて腰くだけでおばさんが死んだり、一家全滅が二軒あった。近くまで来ると、下敷きになったおばさんが助るかと、消防団が力を合せて屋根を破り、「オーイ、オーイ」と大声で呼んで居た。やがてめちゃくちゃに壊れた家の中から、かすかなおばさんの声がして、柱を持ち上げたり泥をよけたりひとしきり大変だった。傷だらけのおばさんは、たすけ

出されても半狂乱で、「子供が死んだ、子供が死んだ」と口走って居た。おばあさんは便所に起きて無傷で助かり、幼い子供二人が犠牲になったこの家も、出征兵士の留守家庭だった。

十時頃になると炊き出しが始った。壊れた家はもちろんのこと、米びつに泥やガラスが入り御飯の炊けない家が何軒かあった。有りあわせの野菜や肉の持ち寄りで、美味しい五目飯のおにぎりが配給された。

その晩のねぐらは我家はリヤカーだった。余震におびえて人々は、家屋の中をこわがり、小さな小屋を作ったが、男手の無い私の家では為す術もなく、四人がリヤカーの箱の中へ犬ころのように重り合った。

三日めぐらいから学校が始り、久しぶりに先生や、同級生と顔を合せた。温和な烏山ミヨさんが、全壊家屋の下敷となって圧死したが、四十名足らずの六年女子組でただ一人の犠牲者だった。

狭い小屋に一晩づつ泊めてもらったが、そのうちに四軒共同で作られた大きな地震小屋に定着した。田の中へ丸太の骨組みとわらでかこった、古代様式さながらの立体三角形のそれは、床もむしろが敷いてあり、布団を持って夜だけ着のみ着のままで、横になった。

地震のショックで亡くなった老人が、奥に寝せてあって気味悪かったが、皆それぞれ家の復旧や生活の立直しに追われて葬式は一週間ぐらい後だった。

こうして大きな天災を受けた集落も、だんだん落着いてきたが、災害状況も報道されず、敵機の襲来と地震におびえる日が寒い間中続き、春とともに恐怖もうすれて、瓦屋根の下で安眠できるようになったのである。

三河地震

宮地観法
（西尾市）

悲惨な東南海地震の悪夢もさめやらない昭和二十年一月十三日未明、再び三河地方を中心に大地震が発生した。私の家（庫裡）は東南海地震で倒壊したため、私たちは西の座敷で寝ていた。突然頭が上下に揺れ動き、枕がふとんから落ちるほどのはげしい地震だったので、目が覚めた。

「早く出てこい。出てこい。」

と、外から母の怒声が響いた。私たち兄弟（姉・私・弟）は、あまり横揺が激しいので、廊下へ出たものの、前進できず、五メートルぐらいしかない廊下をうろついていた。私たちが外へ出たころには、地震はおさまりかけていた。幸い寝ていた座敷は倒壊しなかったのでよかったものの、もし倒れていたら、私たちは家の下敷になって死んだかもしれない。母は本堂の方を向いて、

「ナンマンダブ、ナンマンダブ……。」

と、いっしょうけんめい祈っていた。私も心の中で、念仏を唱えずにはいられなかった。あの時の本堂の揺れ動く音は、「ギッチン、ギッチン」と、まるで木造船が大海で揺れる如く、無気味な音だった。母が、

「隣の家を見ておいでん。」

といったので、私と弟は暗い中庭を南に回って西の神谷さんの家を見ると、母屋の棟がうすく見えた。そして、東へ回って前の山崎さんの家を見ると、母屋の棟は見えなかった。

「前の家はくっしゃけたよ。」

と、大声で叫んだ。母は

「みんなで前の家へ行こう。」

といった。私たち家族は着の身着のままで、前の家へ行った。前の家の入口まで行くと、何一つ家は立っていない。足もとに気をつけながら、屋敷の中へ入っていった。耳をすますと、

「助けて、助けて……。」

とおばさんの悲鳴が聞こえた。おばさんは、出口の所で足がかもいにはさまって、痛くて泣いているのだ。私は、この悲しい泣き声が今でも頭にこびりついて離れない。

少し経過して、西の家の神谷さんたちがこられた。母は、

「夜が明けるまでほかっとくと死んじゃうかもしれない。だれかのこぎりを持っておいでん。」

といった。その声は勇壮で、女の声とは思えない響きがした。その後、隣近所の男の人たち四、五人で屋根瓦をめくり、かもいを切って、助け出した。この暗闇での救助作業中にも、時々、「ピカッ、ピカッ」と光ったかと思うと、ゆらゆらと余震があるのだった。

その後、私たち子どもは、前の家の東にあるもみ干し小屋に集まって、夜の明けるのを待った。私はその時ほど時間が長く感じられたことはなかった。同じ隣組の、（少し離れている）山崎さんが、小屋にこられて、班の被害状況を話された。

「春さんの奥さんと娘さんが、家の下敷になったが、無事だ。明かるくなってから救助しよう。」

といってこられた。

夜が明けると、大人たちは被害状況を見て回った。私たちも大人の人たちについて村中を見て回った。私の村（二五戸）の被害は、母屋（ほんや）の倒壊一六戸、死者一名、負傷者一二名、その他納屋などの倒壊を含めると、被害を受けない家はなかった。特に、三河地震は真夜中でもあり、東南海地震の復旧も十分できていなかったために、その被害は言語に絶する程甚大であった。

余震が十分か十五分おきにゆするため、家の中へはいれず、私の隣四戸（二一名）は、前の家の東にあるもみ干し小屋（畑）の近くに掘立て小屋を建て、余震が治まるまで共同生活をした。大人たちは余震の合間を見ては、傾いた家の中から米、みそ、しょう油などを取り出して来て、食事の仕度をした。

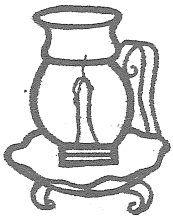
つらかったことは、夜電燈がつかず、「カンテラ」で暗く、早く寝なければならなかったこと、寒中でたびたび雪が降って寒かったことなどである。地震の日の翌日も、また次の日も余震は治まらず、とうとう十日間、小屋の中で原始生活を送った。

余震の回数が少なくなったころ（約十日後）工作隊の人々が多数来て、壊れた家のあとかたづけや小屋を建てて回った。

私の家（本堂と座敷）も傾きがひどく、西尾のしゃりきさんを頼んできて、家の傾きをなおし、すじかいを入れたりして補強した。

私は三河地震を体験して、地震の恐怖が身にこたえ、その後、小さな地震でも、すぐ家の外に飛び出すようになった。地震の被害を最少限にくい止めるために、次のような心構えを身につけておきたい。

- 家の外へまず飛び出ること。（火の用心を忘れずに）
- いつも懐中電燈を枕もとに置いて寝ること。
- 地震の避難訓練を各家庭ごとに実施すること。（年間、最低三回以上）
- 家族会議を開いて、避難通路、避難場所などを話し合って決めておくこと。



私の地震体験

長坂令子
（岡崎市）

最近よく地震の事に付いて新聞やテレビで報道されたり、話題になります。私しは此の地震と戦争と云う言葉を耳にし、■に出すと胸を締め付けられる思いが致します。それは遠い昔の出来事で小さい頃の想い出なのに、昨日の事のように瞼にやき付いて離れないのです。可愛がって下れた父を初め大勢の人の命を奪った戦争、やさしかった母や妹弟が死んだ地震ー。社会が平和で家庭が幸福な毎日を感謝しつつも私しはふと悲しくなるのです。

昭和二十年。我国は敗戦で何かを区切る年になっています。大勢の人が悲しみ、苦しみの多かった時期とも思います。愛知県警の刑事だった父に、召集令状が来て、母と姉妹三人、それに母のお腹の中にも残して出征して行きました。父の実家の三ケ根山のふもとの村へ帰り祖父母達と楽しく暮していました。戦禍を知らぬ静かな部落に突然大地震がおこり瞬間に家が倒れて、その下敷となってしまいました。

私しは叔母と寝ていて暗闇の中を這い廻り何んとか外に出ました。家中で名前を呼びあいましたが母と妹達の寝ていた室から返事が無いのです。「早よう表に出て逃出せようー。」と祖父達がいくら叫んでもー。即死だったのです。ただ私しはぶるぶるふるえて立ちすくんでいました。昭和二十年一月一三日、厳寒の未明、矢作川下流地域で被害が多く出て「三河地震」と名付けられたのは余程後になり知りました。マグニチュード七一で死者が二千人余りもあった事等は数年後の新聞で知りました。お国は戦争の方が大切で、その事は戦地の父達には伝えて頂けなかったとかー。私しは一諸に学校へ行くはずだった友達や、その姉さん達が亡くなったのがとても悲しかったのです。私しの家で三人、村中で二十名近い人のお葬式を川端で合同でやりました。一年生に入学する年だった私しは、ー私の村だけこんなになりなんとひどい事だと悔らめしく思いました。百姓をやりながら銃後を守っていた母に待望の男の児が産れ喜びの面会をする事も無く天災に命を取られさぞ残念だったろうと思うのです。家のかもいや柱で骨を折った人が痛い痛いと云っていたけど、今の時代なら電話ですぐ救急車が飛んで来るのにーと何かと残念な事ばかり記憶にあります。春になり桜が咲いて入

学でした。品不足で学用品は想像も付かない粗末なものばかりだったのに、とにかく嬉しかったのを覚えています。学校も三ケ根山の震源地に近かったので倒れてしまいお寺で勉強しました。震源地だと云われた美しい三河湾に面した三ケ根山は今は素晴しい観光地となりスカイラインが走っています。私達が子供の頃、観音様がおまつりしてある山の頂上まで遠足で登ったり草競馬があると見に行きました。B29が来ると、お寺の裏山へ隠れたりしていた一学期が終り夏休みに終戦を迎えました。秋に父の戦死公報が入り遺骨はおろか髪の毛一本帰らぬ白木の箱に祖父母は泣いていました。私しは焼け出された友達が疎開して来て、にぎやかで毎日遊びまわっていたようです。そして母のようにやさしい回りの人や父もその内に大きなリュックを背負って帰って来て下さるだろうと待っていつつ小学校、中学校と過ぎ去って行きました。今年母や妹弟達の三十三■忌の法要もあって里に親類縁者が集まって当時の事を語り合いました。「もう地震はこりごりだね。又地震がくるとかいっとるけどいやだなあー。」と腹の底から恐れをなしております。我が家では私しが一番地震を心配します。子供達が「お母ちゃんもなまずを一尾飼ったら?。」と云います。災害は忘れた頃にやって来る、と申します。いろいろな対策や予備知識が研究され指導して下さるようです。それらの事を最大限に活用して大難をまぬがれたいものです。地震から火事になる事が心配されておりますが先ず火の元を消す事だと、わかっていても、それが実際の場合に落着いて出来る位の余裕がほしいものです。三河地震では時間的に火は使用していず家屋が倒れたり地割れ等が数ケ所でおきたようです。あれが昼間だったら逃げられて助った人もあるだろうに就寝中の事で犠牲になってしまった方も多いと思います。それに家屋が倒れる程の大地震では必ず余震があると信じます。あの当時もビリビリと小さな地震がいくつも起きてたのを憶えています。「海の様子がおかしいで何んかおきる。」と年寄の人が噂さしていたとも聞きました。「まさか」と云う気持で過し戸外へ避難しなかったのです。下敷となってから数ケ月、表の庭にかやをつって寝たりしました。最近ではなまずを養殖してまで地震に備えているのだと聞きました。動物には天下の異変を素早く察知する超能力があるのでしょう。私しが地震を体験したのは幼い頃の事で悲しみも小さくてよかったのかも知れませんが、常に防災に備えて、二度とくり返しのないよう祈っております。

三河地震

杉山小夜子
（豊田市）

大東亜戦争の真只中、昭和二十年一月十三日午前三時四十分頃だったと思う。忘れることの出来ない日が突然起ってしまった。

此頃のように、新聞やテレビなど地震対策など叫ばれていなかっただけに実際体験者でなければその恐しさはおよそ想像がつかないと思う。当時の新聞紙上では戦争中なので敵に知られたくなく損害軽微なり。震源地は矢作川下流。震度の大きさは私は記憶にない。

私は当時まだ十四才学生中で妹弟両親と七人家族だった。住んでいた所は西尾市矢作川沿の町いわゆる震源地でもある。当時四百戸の町で家の下敷になって亡くなった四十人余の犠牲者大被害であった。天災は恐ろしい。大地震の前日、学校で勉強中、二三回ゆれたのを今でも覚えてある。空襲警報の訓練はよくやったが地震にはあまり関心はなかった。

現在、昼間地震でもあると私は、今夜は気をつけなければと地震には特に敏感である。

私の家の母屋は、平屋建の長い大きな家だった。そのせいか半壊位で助かった。両親の隣の部屋で寝ていて父の「地震だ外へ出よ。」其の大声に目を覚まし起き上った時はもう電燈は消えふすまがパターンと倒れて来た。真暗の中を玄関口へ急ごうとするのだが全然歩けない。必死になって親の後を追うのだが何とか勘で玄関口までたどりついたとたん外へ出ることが出来なかった。一番先頭だったのが四年生だった腕白坊主の弟。さすが早い。次に父。父が外へ出る瞬間前の物置が倒れて来て玄関で頭をはさまれてどうにもならない。後では「早く早く。」大騒ぎ。最初に外に出た弟満身の力を発揮して柱をもち上げ危く父を助けたのだった。家が早く倒れたら全員けがか死んでいたかも知れない。やっとの思いで外へ出られた「あっ八百屋の二階建の家がない。」誰かが叫ぶ。無気味な音、あちこちでお互い呼び合う声、騒々しい連続余震で何とも云えない。家のこわれる音。本当にこんな恐しいことはなかった。

真冬で寒さが厳しかったか全く覚えていない。気が張って寒さなんかふっ飛ばしたかも？暗いのでどうすることも出来なく庭の中央へムシロを敷き避難場所と決めた。父はフトンを持ち

に家の中へ入ろうとするのだが余震でも大きいので心配でならなかった。早速父は家の下敷になっている人達のお手伝いに行った。やがて八百屋さんの家族も九人家族中一人だけ犠牲者が出てしまった。おじさんが眠ったままの姿で死亡した。子供小学一年生。私の家の避難場所へひとまず寝かされた。私は涙がとめどもなく出てしまった。「可愛そうにね。」両手を合せ皆泣いた。怒りをぶちまけるところもない。夜が明けるとお互いに近所の被害など見て回ったが今にも倒れそうな家。全壊半壊が殆ど。道路の地割なども初めて見て本当にあるものだなあと思った。道までこわれた家の材木、瓦が飛び歩けない程だった。実に無惨な姿であった。時間がたつにつれ色々と町内の情報などはいって来た。一度におばあちゃんと子供と四人もなくされて只、呆然としておられる両親。結婚式を目前に控えた娘さん。隣村では百戸のうち、百人が亡くなり、そこでは殆どの家が倒れたので死亡された人が多かったのだと思う。とに角、上下動では外に出る間もない。空襲警報の最中の葬式であった。一度に四十余人の遺体なので墓場の一角に大きな穴が掘られ三列に並べられ埋められたのである。

私の町内は速かに葬儀も終り立派な墓が出来たのでお盆には、明るく提灯がともされ私も実家に帰った折には墓参りをして冥福を祈って来ます。

余震は、なお頻繁におそう。今夜寝る場所の対策を立てる。おそろしさで家には住めない。どこの家も小屋作りが始まった。百姓を少しばかりしていたのでわらがあり隣組は、たる木で作り何とか手造り小屋が出来上った。父と弟三人は防空ごうで寝、私と妹は母と小屋でねた。

物資不足のため炭がないので木を燃やしたりもみぬか火鉢で冬は暖をとったのだった。せまいので寝ころぶのが精一杯であった。

夜中に、「ううん、ううん。」と大きなうめき声に気づくとその声は母であった。早速父を起しに防空ごうへ。懐中電燈で照らすと母の顔は真青、父と二人で外へさげ出す。冷い空気に当るとやがて気がつき始めた。一酸化炭素中毒であった。発見が早くて本当によかった。地震のためにおこったひげきであった。私も多少中毒になりかかったのか中腰でひざに手をやって歩かなければならなくなった。二日間位苦しかった。どこの家も小屋生活が始まった。電燈もなかなかつかなかった。丁度一ケ月間小屋暮しをした。今の様な文化生活でないので外で薪やわら

で御飯をたいた。名古屋の親戚の方がお見舞に来てくれて「名古屋は、大してゆれなかった。こんなにひどいとは思わなかった。」びっくりして帰られた。其の後倒れた家、半壊の家。工作隊が出て、造ったり、起したり。何しろ、全体なので順番が回ってこなかった。もう二度と地震なんかこりごりである。

私の地震体験

外山昭
（幡豆郡一色町）

私は大地震を二度体験しました。最初は昭和十九年十二月七日小学校六年生の習字の時間が始まって墨を摺り太筆で練習を始めようと思った時、西南の方より、「ドーン」と地鳴がしたかと思った瞬間足元より体中が、急に大きく左右に激しく揺さ振られ校舎はムキッムキッ、ガラスがバリバリ。大地震だと直感しました。

担任の禰宜田先生が大声で「机の下にもぐれ」とおっしゃいました。我先にと窓や出口へと急ぎましたが思う様に歩く事が出来ず、今にも倒れそうに狭い出口の柱が左右に揺れ動く中を校舎の前の大きな木の根元へだれ言うとなく体を伏せて地震の終るまで無言で待ちました。突然見舞われた大地震にこわさ恐しさで一杯。先生は皆んな怪我は無いかね・・・と心配して下さいましたがこわかったこわかったの連発で次第に学校中の生徒の声が大きくなりました。下校準備をしていると私の父と原田君の父さんが心配そうに来られ学校が倒れなくてよかったね」倒れて火災になれば大切な子供達が死んでしまうのにとつぶやいていました。父に母や姉さん、私の家の安否を尋ねたら母や姉さんと家はよいけど裏の物置は倒れちゃったよ、「古いから仕方ない、気を付けて帰って来るんだよ」と言い残して門の外へ足速に出てしまいました。余り突然襲った大地震で頭や体が変に落着がなくなってしまいました。

帰宅途中には電線は切れ、トランスは落ち古い家や物置は何軒か倒れ傾き各所に地割、ことに何時も悪臭で困っていた火葬場の赤レンガ作りの煙突は東側へ無惨にもくずれ道路沿の墓石やお地蔵様も倒れ傷つき助けを求めて居る様に私には感じさせられました。

我が家の役柱は全部カモイの所で折れ壁は割れ障子は破れ傾き地震の大きさを物語っています。観音寺の本堂や漁業組合住

宅も数軒倒れ傾き近所の赤ちゃんは家の下敷で死んでしまいました。其の夜は早夕飯を済ませ水害を心配して一Kmも離れた高台の知人の庭に、一寸した藁小屋を作り泊めて頂き、父は家の補強や倒れた家の手伝の毎日です。お年寄の話では大地震の後にしては余りにも余震が少ない。これは戦争の関係か、異常気象かしらと語り始めました。

次に二回目の大地震は母の事情で瞼の兄さんが帰還出来るはずの正月十日頃。隣に嫁いだ姉のお叔さん（八十才に近い）が「昔の人は一日に数回地震が起れば、きっと大地震の前兆と教えられてるから、今夜は以前飼っていた豚小屋で寝よう、豚小屋ならいけ柱だから倒れる心配も無いので」と誘って下さいましたので半信半疑で泊めて頂きましたが何事もなく過ぎました。お叔様はもう一晩ことわざを信じて寝ようよと言う事になり五人で寝ました。

すると夜中に寝ている背中を上下、左右に、ドンドンと激しく揺れ出し、ガタガタ、ムシムシ、ミシミシ、ガラガラ、クシャン、遠く近く悲鳴が聞えて来ました。莚のすき間から、暗夜に稲妻の如くピカピカ無気味に光り大地震に襲われてしまいました。

揺れが小さくなると、お父さんお母さんが「アアこわい大きな地震だ、皆んな大丈夫かね、貴方達豚小屋で寝て居てよかったね、よかったね」息を切っての連発です。私も本当にお叔様のお蔭で助かったと感謝していました矢先、西の方で「ヨッちゃんとお母さんが家の下敷になっている早く助けて、」と叫ぶ声が聞えて来たかと思うと、瓦が道路に山に落ちたり、電線が足をはばんで遅くなったけど、「中根の秀男さんが、家の下敷で足をはさまれているから早く助けてよ」、と親戚の賢治君が余震と暗やみの中から入って来ました。

夜も明けますと、ノリ組合神社、寺住宅物置の倒半壊死者、ケガ人も多数出ていました。

幸にして火災が発生しなかったのが不幸中の幸でしょうかしら。昼間余震の度に今にも倒れそうな我が家を何回も何回も見ました。数日たった日、傾いて家の倒れる時は大きな音と共に黒煙を上げ無残な形になって仕舞うのを見聞きしました。

万一の水害を心配して貴重品や仏様まで懐に入れて高台の沢田家の数に作った藁小屋泊りの生活が始まりました。父は日中倒れた家の手伝、我家の補強修理。食事は火災をおそれ外で炊き多麦飯に梅干漬物やサツマ芋等の粗末なものです。

その後三十日位い過ぎた暖い日中庭に雨戸で囲いして隣近所の人達と久し振り風呂に入った時はようやく自分の体を取戻した感じで疲れも取れました。

大地震の被害は長い停電と新聞には激戦記事ばかりで余り載ってないよう記憶しています。

三河地震の体験

金田一
（西尾市）

「咽元過ぎれば熱さ忘れる」なぜか私は、この言葉が好きでならない。世界の各地で毎年のように、大地震のニュースを聞いたり、日本でも近い将来、大地震が起きるであろうと予想されている今日、そういった災害を想像するたびに、三河地震を体験し、家の下敷となって、運よく生き残ることの出来た私はこの諺の意味と、当時を想い起こすのであります。

三河地震の当時、小学校の四年生であった私は、今では四年生の子供を持つ父親となっている。あれから三十余年過ぎた今でも、つい近日の出来事のように、そのころの様子をはっきり覚えています。

ある真夜中、突然ドカンとベットの下から蹴上げられたような大きなショックで目を覚ましました、何が何だか見当がつかなかったが、暗闇の中で埃っぽい空気匂いを嗅いだような気がした。ちょうどその時が、私が家の下敷になった瞬間であったようです。昭和二十年一月十三日の未明の出来ごとです、

祖母以下六人が一つの部屋で寝ていましたが、一人として外にとび出す時間的な余裕は無かったようでした。私の家は、老朽化した茅葺の母屋で、部落でも古い方の建物でした。その上東南海地震で、かなり痛みがひどかったので、瞬時に倒れてしまったらしい。幸いに寝ていた六人は、怪我ひとつしませんでしたが、横屋で寝ていた弟が一人死にました。

横屋では、母達四人が寝ていて、家の下敷になりました。母は子供一人を抱えて、五、六歩戸口の方へ動いたところで、揺れがひどくて、そこにうずくまってしまいました。そこで家が倒れ抱いていた子供が材木に挟まって死んだのです。あとの二人は、動かずに布団の中にいて、家具のタンスが、突っかいの形となって助かりました。

それから数ケ月、わら小屋の生活が始まったのです。竹と杭

で家の骨組を造って、わらで囲っただけのものでしたが、完成した時は喜しくて、はしゃいだものでした。

徴兵で父のいなかった私の家では、親せきや、隣組の人達の助けが、唯一のたよりでした。小屋造りから、かまど、仮りの便所造りに至るまで、家では何一つ出来ず、隣組や親せきにたよらなければなりませんでした。倒れた家を、ただ茫然と眺めているだけで手のつけようがなかったのです。倒れた家の下から、鍋釜、洗面器を取り出して、土や、埃のまじった米を選り分けて食べ、明るいうちに、夕食をすませて、布団にもぐり込むのです。女手ではこれだけの生活が精いっぱいであったようです。

隣りの部落の被害はもっとひどく、母屋はほとんど倒れ、十数人が死亡した。私の部落では、母屋だけで五棟が倒れ、五名の人が亡くなりました。

五人の櫃が一列に並び、野火によって火葬されましたが、その時私は、その煙の中で目をはらしている母を見て「もし、母があの時あの場を動かなかったら、弟は死なずにすんだものを……」私は悔まれてならない。

半キロぐらいの夜道を、もらい風呂に通ったこと。東京の親せきから太いローソクを沢山もらって、隣り近所に配って喜ばれたこと。電気が灯った時の、明るかったこと。他人の親切の数々の想い出を、私は、一生涯忘れないだろう。

私の地震体験

平井昭雄
（豊川市）

ーあれは、たしか私が、旧制中学二年生だった昭和二十年一月十三日未明の事だったにちがいないと思うのだがー

東海道本線、刈谷駅付近の下宿先で、いつものように夜の急行列車の刈谷駅通過音で眼があいたと思ったとたん、ものすごいゆれでその異状さに気づいた。

すぐ階下へ降りようと思ったが、

「これでは降りる途中で家が倒れるかも知れない。」

と、判断しフトンにもぐった。この間、一秒か二秒しかなかったと思うが、間もなくガラスが猛烈な音をたてて割れ、棚からは物が落ち出し遂には一大音響と共に家が倒れてしまった。

「降りなくてよかった。」

それからの私は、常に屋内にいて机の下にかくれたりフトンにもぐるといった方法を用い決して外へは出ないようにしている。

さて、

「あっという間に」という言葉は、このためにあるようなものだと思いながらシーンとなった部屋からはい出ようとして驚いた。

当時、毎晩のように米機の空襲があり、日本国民は、それに備えて枕元には衣類を必ず置いて就寝していた。その服を探すのだがないのだ。頭を起こすと天井に当たる。

フトンがななめになってしまったのだ。

「やっぱり倒れたのだ。」

と改めて真暗な四方を見廻すとなんと星が輝いているではないか。ギョッとしながらもそこからはい出した。

間もなく下宿のおばさんの声がした。

「おばさんここだよ。」

という私の声で

「よかった、よかった。」

と、近づきカスリ傷一つない私の体をみて安心されたようだった。しかし、朝までどこにいればいいのか、次の不安が始まった。

家の前の土管の中に入るように言われ、直径二メートルの大きい土管へふとんをかかえて飛び込んで夜の明けるのを待つことにした。

何回となくやって来る余震のゴーッという音や、かすかな土管のゆれを不安に感じながらも、もう倒れない、ころがるだけだと妙な安心をした。そして、遠くにいる母や弟、妹、近くの友人、学校の校舎などに心をいため出したのは東の空が明るくなり始めた頃だった。

朝になると、近くの友人、湯浅馨君が

「食事に来いよ。」

と呼びに来てくれたあったかい声が今も忘れられない。

ーそういえば、この三河地震は、我が国が連合国と交戦中だったため新聞には知らされなかったが、ちょうど一か月程前にも前ぶれ的な大きな地震が実はあった。ー

昭和十九年十二月中旬、その時私は、友達と豊橋駅にいたが貨物車が大きく前後にゆれ動いたり、貯水槽の水が、ものすごい勢いであふれ出たりしてびっくりした。

間もなく、名鉄、東海道線などは不通になり、下宿を無断で外出した私は、あわててしまった。豊橋の親類宅で泊まる友達

から自転車を借り、夕方、一目散に刈谷へと向った。

しかし、御油、赤坂あたりで暗くなり、本宿を過ぎる頃には、十二時ぐらいまでに下宿へ着くかどうか不安でたまらなくなった。

「こんなおそくに何だね。」

と、声をかけてくれた人のおかげでその夜、藤川のあたたかい部屋で一泊した。

先生、奥さん、私の三人でテストに○×をつけながら人のふれあいの嬉しさを強く感じた私は、先生になる決心をした。

今、学校で、かわいそうな子に私がやたら手をかすのも私なりの報恩の心がうずくからであろうか。

中心を外れた体験をして

月山　きよの
（豊田市）

大正十二年八月三十一日昼下がり。其の時私は知多半島の新舞子の海水浴場にいました。

夏休み最後の日でしたが、いた人は子供達が多くまばらでした。水中は温かでしたが水面は冷たく立ってはいられませんでした。風は生温るく波の様子に、ただならぬ予感を覚え早々に上がりました。人々は異常を感じ口々に変だ変だと言い乍ら早々に引上げる人が多いのでした。果せるか、翌九月一日午前十一時五十八分、あの忌わしい関東大震災になろうとは神ならぬ身の知る由もありませんでした。

唯柱に摑まらなければ立って居られなかった記憶しかありません。

あれから五十余年、あの時あの新舞子の海にいらした方の幾人かは現存していらっしゃるのではないでしょうか。今も私はあの時肌で感じた模様を歴然と思浮べて、慄然といたします。其の時聞いた話でしたが、豆相方面の山の小動物が、二三日前より移動を開始していたとの事でした。

広小路あたりは避難していらした方々の群が続き、心なき人々はこれを避難民と称し恰も異国の人の如き態度にて見に行った人々も沢山ありました。程なく義捐金の募集等もあり漸く事の重大さを認識しました。私の知人も被災し、「私は今後生涯、衣食住の不足は言わない決心をしました。」と悲壮な誓を話されました。

彼は富裕な家の一人息子でしたが東京で被災し孤独の身とな

った方です。

次は昭和五年十一月9静岡県田方郡丹那の地震、惨害の範囲が狭く、ともすれば忘れられがちの様ですけれど、被災地は激震で大変でした。元箱根とかいう寒村は村全部が山の中に飲み込まれ、数日後漸く其の惨事が発見された程でした。一部落と申しましても七、八戸の村だった様に思いますが。其の時は沼津あたりでも局地的にですが、市の中心の上土では六、七戸の店が倒れ、駅前の大富と云う旅館の近くでは人を飲み込む程の大亀裂が出来て恐ろしさを痛感しました。其の時も、一、二ケ月も前から余震が頻々と起り無気味な予感に悩まされました。にもかかわらず、いざ本震（こんな言い方はおかしいが）となると個人的には申すに及ばず、指導者側も周章狼狽、流言飛語は乱れ飛び、地震の余震よりも其の方が頭を混乱させる始末でした。其の後翌年八月まで余震におびえとおし、ために戸締り等しない事にしました。初震の時家は傾き逃げ出すにも出られなくなり廊下の硝子を破って、やっと出た程でしたから。当時は沼津に在住でした。

東南海地震の折は敗戦色も漸く感ぜられ食料生産に全力投入、為に名古屋と郷里の間を往復、市民と郷里民としての義務を遂行する為に慣れぬ労働に疲労困憊は其極に達し深い印象を止めません。唯台所と井戸の間の六、七メートルの間が歩かれず坐り込んでしまった事を覚えています。

二十年の三河地震はたまたま出名し、空襲と時を同じくしました為、切断された電線の火柱等に異常を認めましたが、毎日の如く爆弾、焼夷弾下にさらされていた時とて、特別の恐怖感もなく、迫り来る死を待つばかりの気持でした。

誠に申訳ない話ですけれど、毎も震源地の中心にはずれ、言わば類焼を免れた近火の如き体験ですが、最も肝に銘じた二、三を挙げて見ますと被災者を目の当りにして、

一、絶対に冷静に行動に移る事（指導者の言も丸のみにするな）

二、持出物は最少限にする事（二、三日生活出来ればよい）

三、食料は三、四食程度用意する事（最軽食に）

四、家族の落合う先を平常より決めておく事

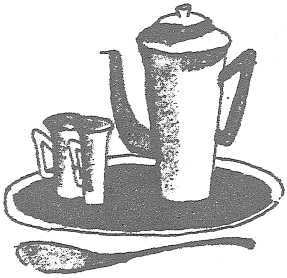
五、訓練は多くの場合実戦には適合しない事をも認識しておく事

六、人を頼らず自分の事は自分でする事を習慣づけておく事

七、極度に死をおそれて死なぬ事

最近は建築様式も、食生活も、殊に精神生活に至ては最も激変していますため、「みみずのたわ言」にもなりませんですけれど。

「無駄に死にたくない」気持だけは変らないと思います。そして自分だけ生き残っただけではまた自分も生きられない事を心に銘記すべきだと思います。





西尾市中町縁心寺（三河地震）―萩原律氏提供―

〔東三河地域〕

地震体験談

小林市助
（蒲郡市）

風の無い静かな晴れた日。昭和十九年十二月七日。増産、強制供出割当にせめられて寸土も余すなく耕して芋掘り麦の蒔付に追われて居る日です。昼食をすましての午後二時頃足に異様の感じがして、整地した畑の表面が丁度小波が打寄せるように動いて来るのです。私は妻に大声で「オイ、目が変だぞ。ヂバ（地面）が波をうって動くように見えるぞ」と云いますと、妻も「そうだのん、変ね」と云いましたが寸時して何もない平穏にもどりました。夕方家に帰ると、母（当時74）が大きな地震があったが知って居たか、用水槽の水が波をうってこぼれる程だったので孫を両脇にかかえて表へ飛出したと云いました。これが東南海地震でした。

年もすぎ、明ければ昭和二十年一月です。六日頃から西の方でドカン、ドカーンと地にひびく何とも為体も知れない響がするのです。前年浜松が艦砲射撃を受けた時の音に似て居るが間隔が遠いのです。どこかに空襲でもあるのかと心には不安でしたが深い詮索も出来ない世でした。

一月十三日午前一時頃です。眠りを破ってどかんと大きな音と共に家がミシミシとして上下に大きくゆれました。地震だと直感して二才と四才の子供と生月の妻と老母をつれて前の空地へ飛出すのがやっとでした。隣家の人と大きいなあ、こんなの初めてだなと語り合い乍ら外に一時間程居ましたが寒くなったので家に這入りました。それから着物を着れるだけきて家中一かたまりになってうづくまって一夜を明しました。時計はとまり棚のものが落ちたりの程でした。墓石が殆ど倒れたので隣同志力をあわせて起しに行きました。朝自転車で豊川海軍工廠へ通う人々が「此処らはいいなー形原や西浦は家が倒れ怪我人は出る、大変な事だ」と言って通ります。

私達は警防団（現消防団）員として西浦形原方面へ応援に行きました。現地に着いて驚きました。大部分の家が倒れ、土地が、モチ上ったり、凹んだりで其の惨状は目をおおわしめる程です。よく地震の時は二階の方が安全と言いますが、丁度鴨居

のさし口（今では長押と言うか）から柱が折れて一階はぺしゃんこになり二階は其の上にチョコンと坐って居る家が大部分です。これを見て二階が安全と云うでしょう。下がつぶれて其の上に落ちた時の衝撃等を考えるとさてどうでしょう。茅葺の家は安全でした。茅葺の家は、普通使用してある木も（柱は別）細く屋根も非常に軽いです。其の後は大変でした。毎日の余震で家の中では眠れないので、海苔瓶（海苔を乾す麦稈でつくった約縦一、四m横二m位の物）を空地に立て其の中で暮しました。この中で妻は二十二日二女を安産した事はなによりでした。当時は空襲もはげしくカンテラを箱の中へ入れて殆ど光なしの恐怖の毎日でした。下旬（この日記憶なし）大雪が降り水滴が落ちるので約二週間で家に這入りました。

私は思います。よく地震の時はガスの元栓をしめて保存食、貴重品を持ち出してと言いますが、それでは駄目と思います。それをする時間があれば家は倒れないでしう。地震と感付いたら、「最初にどかんと地ひびきの音がします。」すぐ家族そろって広場へ出る事です。貴重品、保存食、ガスの元栓等は常時の心掛けですべきです。地震と気付てから前述のものに気をとられたら命をとられます。私は経験と文献等で地震は最初が一番ひどくゆれ余震の方が小さいと思います。これは半田で濃尾地震にあった母から直接きいたと、私と同年輩位のお隣りの人々もききました。

この頃科学者の人もナマズにどうとか、鳥獣の生活変化に気付くとかで、予知にきめてを持たない現在、地震はやはり恐しいものの筆頭です。

私の地震体験

古井たつ子
（新城市）

話しには聞いていても、実際に恐しいと、感じる程の地震を体験したのは、昭和十九年十二月と、二十年一月の二回です。

十二月の時は昼頃で、豊川工廠の、木造でしたが当時の建物としては、高い二階建だった様に思います。書類に目を通していて、ふと、頭を上げた時、西の方からセメントの袋や、紙屑等が、高い所まで舞い上って、巻風となり、東の方に向ってくるのが目に入り、何となく無気味な感じでした。それも一瞬の

間で、建物が「グラグラ」としました。隣の机にいた人が、「地震だぞー」と云って、椅子から立ったので、私も一緒に立上りましたけれど、もう、揺れがひどく歩く事も出来ませんので、その場に四ツばいになりましたが、揺れる度に、十糎ー二十糎位づつ「ザッザッ」と、机も椅子も一緒に左右にずられました。恐しさと、ずられる震動で、頭痛がして本当に、長い時間の様に感じました。一時おさまって地上におりた時、用水の水は半分位になり、何千台あったか知りませんが、自転車が全部たおれていました。

豊橋に住んでいたので帰宅の途中二軒程倒れた家を見ましたが、一軒は自分も入った事のある家で、大きな部屋が多く、柱の数の少ない家だったと思います。私の家はたいした被害もありませんでしたが、向によって障子はビリビリ、壁も亀裂が一ぱいに入っていたり、何ともない所もあり不思議だと思いました。

その晩は雨戸と畳を空地に敷いて寝たのですが、美しい星空と、空襲でB二九が飛んで行くのを、布団の中で見ながらねていました。朝起きて見ると、布団は霜で真白に凍っていましたが、気の張っている時は寒さも感じません。それから一週間はテントの内での生活でした。これ以上どうする事も出来ないと思っても、強い余震がくると布団の上に起上って仕舞います。

一月の時は明方で、今度地震があった時はと思い、毎晩枕元にモンペの上下と、防空ズキンを置いて、何時でも着て出られる様に、用意して寝ていましたが、いざ地震となった時は、何一ツ持たずにねま着の儘で表に飛び出して仕舞いました。持ちに入りたいと思っても、次々にくる余震で入る事が出来ず、外から物干竿で引寄せて着ました。

南の空が青く光って、明るくなると、地なりと共に足元が割れて行くのではないかと思う程地響がして揺れてくるので、柿の木にとまって万一の地割に備えていました。それが同じ間隔でくるので、近所の人達が初めの内は、「日本軍が長距離砲を発射しているのだ」などと云う程でした。おなかがすいても空襲警報が発令されるので思う様に火が焚けず、警報が解除になると急いで焚き、又空襲になると火を消さなければならないと云う暮しでした。

今地震の事に付いて、テレビ、ラジオ、新聞等で、見たり聞いたりしていますが、私が体験した地震の様に、急に激しく揺れてくると、火の元を止める事も、電源を切る事も、出来ない

のが事実です。毎日の生活の中で自分で、地震を一早く知る方法を考えなければならないと思います。

おだやかな日の突然の巻風。雲一ッない美しい夜空に光った青い火。それが私の体験した地震の前触でした。

私の地震体験

吉村千代子
（豊橋市）

忘れもしない地震。昭和十九年十二月の東南海地震。主人は出征し私は長男と二人で私の実家豊橋で世話になっておりました。地震後主人の実家の岐阜に主人の帰る迄お世話になりましたが、現在豊橋におります。其の時の体験。

長男は二階で昼寝させており私はそばで片ずけ物をしておりました。その時グラグラと大ゆれにゆれ、アッと思った時にタンスの上の品物がドタドタと二ケ所から落ちて来ました。室は八畳の間で南に向いてガラス障子、北側の方が入口になっており、東西はタンス棚、西に仏壇と横に棚もあり色々と小物が無数に乗せてあり、真中より少し東の方に長男を寝かせておきましたから、ゆれるたびに色々の品物がドタンバタンと布団の長男の上に落ちて来ました。私はトッサに押入れの布団を取りだし、長男の上にかぶさる様にして布団の下で丸くなっておりました。下で父が呼ぶ声がして今助けに行くから待っておれとの声。いそいで私が階段の上からのぞくと、父は上ろうとするが、階段がくの字にゆれて父はゆらゆらとなかなか上れません。よううやく上に上がって孫を抱き急いで階段をかけおりたトタンに尻もちをついてびっくりしました。其の時父は五十才。男の働き盛り。警防団長として日夜町の人達の為に一生懸命に働いておりました。下におりたらガラス食器が粉々に割れて散乱しておりました。表に出たら近所の人達が家の中は、あぶないからと道の真中、市電のレールの上に皆様かたまつて避難しておりました。

其の父が今年八十三才で元気。長男は一人前になり其の当時の様な子が生まれ、父にとっては「ヒコ」を見ながら当時の地震の事を昨日の事の様に思い出し、あの時はこうだったと年寄りの一ッ話しで何遍も何遍も繰り返しております。あの当時は隣り組がありバケツリレーとか地震であぶないから「いざ」と

言う時に避難場所とかが、きめてありました。

今は個人主義の時代ですが、忘れた頃にやってくるとかと言う事がありますから、非常食、水、避難場所とか、きめておくと良いと思います。いざ地震と言ってあわてない様にしようと思います。

私の地震体験

木村瑛子
（豊橋市）

地震の体験。誰れもが、何度となく経験している事だと思います。

私もその中の一人で別に、人様に話すほどの体験をした訳では有りません。でも……あれから参拾年にもなる事が、こんなにも鮮明に、私の記憶の中にあるという事はいかに私にとっては、強烈な出来事だったと言わせていただいても過言ではない様に私は思い、誰れでもいい、私の小さな頃こんな事があったのよって、聞いてもらいたくて……。

私は、子供の頃、豊川市に育ちました。その当時六才位だったと思う。地震と、空襲のダブルパンチに毎夜、おびえきっていた様に、覚えています。

父の留守に、母と子は、タンスを二つにわけ、長もちを並べ、天井が落ちて来てもつぶされない様にと、布団もかぶりました。

いきりあつい夜は、「今晩くるかもしれないね」なんていいながら、親子よりそって、まんじりともしない日がつづいたものでした。ドンド・・・・・・と地なりがしたかと思うと、縦に次に横に揺れました。

ある晩等は、畑の中に、雨戸を並べ、布団をひき、一枚の布団に親子三人、いっしょに寝た事もありました。

二階の我が家が、ゆさゆさ揺れているのが今も目の前にはっきり浮かんで来ます。

防火用水が、ダバンダバンと波打ち、地面をぬらした事もありました。今の様に、舗装のしてない道路は、地割れのひどい所も、子供の私には、がけぶちの様に思われました。

昼食時など、揺れ出したら大変なもので、火事を心配する母は、ひちりんを、火の入ったまま、どぶにつけこんで、にげ出したり、した事もありました。二才半位だった弟等、ゆっくり

遊ぶと言うよりも母の背中で育ったと言っても過言ではないほど、いつも母の背中でした。「なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。」母の声は、今でも耳の奥で、聞える様です。

父の留守な夜等、泊めていただく、仲井さん、のおじ様は、のん気な人で、私達親子それに、仲井さん親子が、大さわぎして、畑に飛び出した後、揺れがやんで、ホッとした頃、ねむそうな顔で、やって来て、「揺れたのか。」だった。大ものの感がある。今どこで何をしていられるだろうか。とぼけた顔して孫と遊んでいられるだろうか?

この頃又地震で大さわぎをしていますが、二人の子供の母になった私、今ここで大地震が、揺れたら、子供達を、どうやって守れるだろうか?、私より育ってしまった、息子達を、ある学校では、頭巾を、学校に、持って行っているそうだ。それもいいだろう。だが、あれから三拾年、進歩したはずなのに私は、きっと母がした様に、布団をかぶせ「なむあみだぶつ。」しか言えないのではないかと思う。きっと。

私の地震体験

鈴木復克児
(西春日井郡西春町)

昭和十九年一月千三日、大東亜戦争も敗戦の色も濃くなって来た頃です。突然午前三時上下震動の大地震に出会いました。当時住所は愛知県宝飯郡形原町上。年令十一才でした。現代のような立派な報道機関もないため三〇分間隔でドカンと云う音と共に窓ガラスが激しくゆれる状態も町の人だれ一人地震の前ぶれだと伝える事すらありませんでした。当時伊良湖岬に陸軍の射撃場が有ったためでしょうか。だれかが変なデマをとばしたのです。その内容は日本は今マッチ箱一個で町中が飛んでしまう新兵器の実験を行なっているからだとの事でした。だから町全部そのデマを信用していたようでした。当時では無理もない話かもしれませんが、このため町の八〇%が大きな被害に会ったと思います。その頃私の父はある長老よりこの地響は大地震の前ぶれであると知らされ、用心のため家族全員「親子四人」屋敷の片隅の安全な場所に八畳程度の小屋を建て二ケ月程夜

のみ寝起をする事にしましたが、二ケ月間を過ぎてもドカンと云う地響は三〇分程の周期でそれ以上大きくも小さくもなく日夜続くので、父も母もデマの方を信用し私達家族はその夜から小屋で寝る事を断念し家の方でのびのびと一夜を過しました。

ところが三日目の夜の事でした。先にも述べたように一月十三日午前三時頃と私には記憶が有りますが、今ここで紙面に書き表す事の不可能とさえ思えるそれは悲惨な地獄の一ページです。私の家は余り古くない中二階の大きなカモイの入った頑丈な家でした。この家ものすごい地響きと共に上下左右に無差別にゆれました。父は一早く私達兄弟の寝室に飛び込んで来て、地震だと大声でさけびながら身体を引き起してくれましたが、私はどうしてもゆれ動くのが激じくて立ち上る事が出来ませんでした。父は私の身体を脇にかかえる様にして兄の手を引き親子で裏戸を体でぶち破り裏庭のマキの木の根本に避難しましたが、その時の地鳴りは今にも地球の中心へ向って私達親子が吸いこまれて行くようなものすごさで夜空は真青な色、家や工場が余震で倒れる音、もうもうと立ち上る砂ぼこり、あちらこちらから助けを求める悲鳴、高圧線のショートする火花、まさに生地獄と云うより他に表現のしようがない。

やがて冬の夜も明るくなり始めた頃地鳴りもおとろえ、そっと立ち上り周囲を見ると昨日までは立派であった家や工場が全部つぶれて道路へ、のしかかり通行不可能でした。まだ数分毎に大きな余震が来るのでその場所より一歩も動く事は出来ませんでしたが、私達の体がだんだんと寒く冷えてきましたので父が余震の間を見て傾向いた家の中に入って毛布や服を持って来てくれました。食べ物もなくただその毛布で暖を取り近所の人達の顔の見えるのを昼頃まで待ちました。昼過ぎになると配給のカンパンが手元に来たのでそれを食べ元気を取戻しました。近所の人達も顔を出し始めましたがその人達の家族の内一、二名は家の下敷になり死亡したとの事でした。私も死亡した人達を見ましたが、みんな、はいあがろうとして下敷になり身体全体が内出血を起しどす黒くふくれ上っていました。町の中で非常に多くの死亡者が出たので畑に穴をほり火葬しました。道路は数ケ所が二、三米ふくれ上り地下水など吹いているところも有りました。その後家をなくした人を含め八世帯ばかりで私の屋敷の一ケ所に足場丸太と縄で小屋を建て周囲にコモをつけ土間の上で一月二月の寒さを耐え乍ら共同生活をしました。時折B29の通過するをコモの屋根の隙間より見たのもつい先の出来

事にように想い出します。後で気のついた事ですがつぶれた家は四、五〇坪の二、三十年経過した総二階の家がほとんどでした。危険と知ったら少々不自由でも安全な場所でじっと待つ事。色々なデマにまどわされぬ事。この地震の前日お寺の鳩が一羽もいなくなった話も聞きましたが、このような自然の中の生物のかん察も大変必要と思います。まだまだ詳細に書けば色々と有りますがこのあたりでペンをおきます。

東南海地震

内田さわ
（豊橋市）

あれは忘れようとしても忘れられない昭和十九年十二月七日のおひる過ぎ間もない頃でした。私が学校出たての、うら若い女教師として渥美半島の赤羽根小学校にいる時の悪夢の様な思い出のひとこまであります。

時まさに、太平洋戦争もたけなわの頃、大都会は日夜のB29の空襲に見舞われ、次は浜松辺りへ艦砲射撃をやられるという噂に、世の中はおびえ、それでも一億打ちてし止まんのスローガンのもとに、弱音をはいてはいられず、その対策についての職員会議中でした。何だか体にビリビリとした細かい振動を感じたのですが、自分からさわぎ出すのもはばかられて、となりの女教員に「チョット変じゃない?」とささやくと間もなくガタガタ〳〵ガタガタ〳〵と大振動です。そして棚の本もバタバタ落ち出したので、何が何だか分らず、男の先生の「外へ出ろ!」の声に、もう廊下側を廻る余ゆうなど全くなく、皆次々に職員室の窓からの脱出です。そして、窓からとび下りたら、もう一歩も歩く事は出来ず、皆その場に倒れてしまい這う様にして、職員室からはなれました。

中には這って行く男の先生の足首をつかんで離そうとしない女の先生もあり、私はその後に続いた様な気がします。まさか地震とは思わず、てっきり艦砲射撃の振動かと思って、その場に「伏せ!伏せ!」といって、目と耳をおさえて伏せたのですが、実際には、地面がぐらぐらして立っていられなかったのが事実です。子供達は?と見ると、日頃の訓練の習慣で、皆、目と耳をおさえて、伏せをしていました。どの位の時がすぎたでしょうか。はら這いになったまま頭をあげて、村の方を見ると、

西の方から灰色がかった砂塵が空へ舞い上りました。そこで、はじめて我に返って、口々に地震だ地震だと叫び出し、とりあえず生徒は直ちに下校させる事になりましたが、教室の壁は、あちこち崩れ落ち、机は将棋の駒をなぎ倒した様に行儀よく、同じ方向にねていました。学校の後片づけをしていると、村の市場（地名）の辺がひどいという噂さがとんで来ました。

市場には、叔母の家やら生徒の家がいっぱいあるのです。飛んで見に行きました。すると、どうでしょう。叔母の長屋がペッチャンコで瓦を地面にしきつめた様に、しかも道路迄いっぱい、はみ出しているのです。母家ではお嫁さんが乳飲み子をだいて真青です。聞くと、その倒れた家の下から赤ちゃんを救い出し、気絶していたのを、やっと今「生」がついたと云って、ふるえていました。叔母の家の二、三軒、西隣りが又、ペッチャンコです。急いで見に行くと、「ァッ！　悦ちゃんの家だ。」悦ちゃんが、「おかあさんがいない。この下じきだ！　早くたすけて！　早くたすけて！」と泣き叫んで、私の胸にすがって来ました。私は、唯々悦ちゃんの肩をだいて「大丈夫だよ。今に村の人がたすけてくれるから…」と神様に無事を祈るだけでした。悦ちゃんのおかあさんは、日頃から足がわるくて、人並みには歩けない人でした。でもきっと、どこからか、今に帰ってくるだろう……と心に云い聞かせていましたが、私共の願いも空しく夕方には、玄関の側から遺体となって発見されました。悦ちゃんのお兄さん達は、皆その前に出征して、六年生のお姉さんと二年生の悦ちゃんは残されましたが、その後叔母さんに、すくすくと育てられて、今は、幸せな家庭の主婦におさまっています。

それから、余震が何日位続いた事でしょう。昼と云わず夜と云わず、空からはB29の空襲で、下からは、モグラの大あばれで、「いったいどうすりゃいいのさ！」といった感じでした。地震も二、三日もすると、振動の前に予知出来る様になるものです。それは、特に夜など、伊良湖岬の方から、ゴオーッ！という、不気味な地なりがしてくるのです。「ソレッ！又か！」と思って、二、三秒ぐらいの中に振動がはじまるので、その時分には、もう自分の体は、外の安全な場所へ避難していると云った、あんばいでした。その中に、村中が、自分の家に、ワラでほっ立て小屋をつくって、ワラをしとねと、しゃれこんで外泊です。天井はないので、夜など満天にふる様な星を眺め、時には、B29の空襲の行列におびえ、その上、外気の冷めたさに、

ふるえ乍ら、横たわったものです。今だからこそ、風流だったなどと云えますが、当時は、生きた心地はしませんでした。

そして祖父がよく申しました。「七十何年生きているが、こんな悪い世の中は、はじめてだ。きっと、戦死者の怒りだ、戦争はいかん！」と。

あれから、三十余年、私も人並な、人生経験を経て、平凡に暮らしていますが、あの東南海地震は、私の脳裡から一生消える事はありません。が、今ひとつ、とても不思議に思う事は、あれだけの地震にも、かかわらずボヤ（火災）のひとつも起きなかった事です。思い当る事は、当時は、空襲に備えて、隣近所で火災が起きても、自分達で早期に消し止めるだけの、防火の設備と、それに伴う訓練が行き届いていたせいだろうか？と推察します。もし一軒でも火災が起きていたら、もっともっと、大事に至っていただろう……と思うと、ゾッとします。私達も過去の災害の教訓を活かして、ころばぬ先の杖を、しっかりと、つく様にしようではありませんか。

私の地震体験

井土与次郎
（豊田市）

小学4年生の時、授業を終えて掃除をしていると女の子が「ヤー地震!!」といってほうきではくのをやめ教室の出口の方へ走って行った。私は地震の揺れは感じなかったが、窓から外に飛降り1m50位の土手を昇ろうとしたが、便所に通ずる渡り廊下の屋根を見たがまだ揺れも小さく、瓦も落ちてこない様だったので、土手を昇るのをやめ急いで渡り廊下の屋根の下を横切って校門の前の道路に出た。校舎を見ると大分揺れている。運動場は波うつ様に見え、空襲時に行なっていた腹這いをしていた生徒も大分いた。地震が終ってから全員校庭に集合し校長先生から敵の軍艦が近づいているから急いで家に帰る様にいわれ、集団下校になった。地震の事は何もいわなかった様だと思う。まだ膝の震えが止まらない。下校途中5m位のコンクリートの橋が道路と少し段がつき、ゆがんでいたが、渡るには差しつかえなかった。お宮の灯籠の上部も落ちていた。池の堤防の道を

行くと池の反対側の下の田んぼに傘ぐらいの大きさの輪が2ツ見え、清水の様に水が吹き出していた。

家につくと家の中がいやに暗く見え、おじいさんが揺れ返しの余震が来るといったので気味が悪かったので、家に入るのをやめ外へどんな様子か見に行きました。Aさんの家は裏の土手が屋根の高さ迄で有りましたので土手がくずれてカマドの部屋の外壁をおし曲げていた。Bさんの家は納屋が倒れていた。家は古くなかったが建方が悪いのか揺れが東西に対し南北に長い家だったのが原因かなあと思った。豊橋鉄道の線路の方に行くと、飛行機が駅の近くに落ちておると道で合った人が言ったので杉山駅まで見に行った。どうして落ちたのかな。地震で空気が揺れて落たかもと、色々話しながら行くと、道の真中に地割れが所々にあった。駅を少し過ぎた所で架線が切れていたが、飛行機は見あたらず、老津の駅の近くかなと思い、遠いので帰って来た。家は電気もつかず壁と柱のスキ間が出来、気味の悪い家で寝た。余震は無かったように思う?

三河地震は、父が大きな声で「地震だ!!」と叫んで、家の外へ走って行ったので、私もとび起きて後について家の外に出た。家を見るとギシギシと音をたてて揺れていた。西の方を見ると赤い稲妻が遠くで光っている様に見えた。又その近くの蔵王山の上空で、漫画のノラクロの戦場の所で鉄砲の弾がバーンと破裂した絵の形の真中が白くふちが赤味がかった火の玉が、揺れに合う様に、光っては消え、光っては消え4回ぐらい見えた。地震が終ると西の空は暗かった。

又この時の地震は余震が多く、小屋を作って外で寝た。余震の期間も長かった様だった。

東南海地震

小林千代
(豊橋市)

何時までも古歌を唱う様ですが、此の事ばかりは、私にとつて命あるかぎり脳裡を離れる事は出来ない、私の一生を悲しみに追い込んだ大地震です。

時は昭和十九年十二月七日。戦争もいよいよはげしくなり、勝つために国家は総動員で頑張って居る時でした。家にも女学校三年生の一人娘があり、学徒動員として半田の中島飛行機株

式会社に出動して居りました。一人の子供を手離した淋しさは、口にこそ出さなかったが、親として耐えられない思いをして居りました。まさか地震によって吾が子が死ぬとは夢にも思って居らず、戦争中の事、何事も辛抱強く我慢して過して居ました。其の日も病気で人並の仕事の出来ない主人と、防空壕を掘ってると、突然上下にドシンとゆれ、それから横にぐらぐらとゆれたと記憶して居ります。足がガクガクしてまともに歩けない程にゆれる中を、主人と姑と私は這う様にして表へ出ました。意外に長くゆれたので思いは子供の事です。どうか無事で居て欲しいと思い乍ら家へ入って見ると、普段は外れない硝石障子が外れて居るし、お勝手戸棚の上に置いてあった漬物の鉢や醤油の瓶が飛び散つて居りました。階段はタンスで受けて落ちなかつたが、お隣では階段が落ちて二階へ上れない状態でした。苦しい時の神頼みとは此の事です。子供の事が心配でじっとして居れず、氏神様にお詣りに行き、又地震の大きかつた事を知りました。境内にある燈籠や鳥居がひっくり返って見る影もありません。

その頃より誰言うとなく半田の挺身隊が大勢死んだと言う情報が耳にささりじっとして居れない気持でしたが、心配したところで交通機関は跡絶えて居り、どうする事も出来ず一夜を明しました。午前中に学校から先生が見え、行方不明と言う様な話でした。死んだとは言い兼ねて言われたと思いました。姑は海や山へ行ったならともかく、地震で行方不明は腑に落ちぬと、姑はワァワァ泣いてばかり居ます。主人と私は泣くにも泣けない気持ちで学校へ急ぎました。係りの先生の態度で直ぐ子供は死んだと言う事が解りました。会社からはつぎつぎと父兄に来て欲しいと電報が来ましたが、遺族等を乗せて行くトラック一台も無かつたのです。あの痛ましいみじめな戦争に触れたく無いのですが、敗戦前のどさくさの中に起きた大地震だけにどうしても書かざるを得ないのです。

十二月と言うのに火の気のない学校に約一昼夜、死んでから三日目に子供の大好きだった学校に木炭車四台に乗せ運ばれて来ました。物言わぬ吾が娘にすがり、よく頑張ったね。直ぐに行けなくてご免ネと、何回も繰り返して言い、手を合すのが私にとって精一杯の言葉でした。こうして逢えたのも市の計いで、色々折衝の結果、豊橋だけは遺体で渡してくれたと聞いて居ります。子供達の働いて居た工場は紡績工場を急遽軍需工場に切り換えて使って居たため、出入口に大きな煉瓦が積んであり、

先を争って避難する際、煉瓦がくずれ落ちて頭や額をひどく打ち、それが致命傷になったのが殆んどでした。どんなにか苦しい思いをした事でしょう。お母さん、お母さんと絶叫して死んだと聞かされ胸が張り裂ける思いをしました。

会社でも合同慰霊祭をしてくれ行きたがらない主人を説き臥せ励まして半田へ行きました。行けばどうしても子供の最後の場所も見たし恐しの気持ちで見て来ました。工場の建つて居たところは埋立て地のため地盤がいくらか軟いせいか、又建物が雑だったのか、たたきつぶされた様にペチャンコになって居りました。家の子供の居た工場は不思議な事に倒れて居らず、空襲だと思って避難を急いだ為に死んだ様に思います。慌てず家の中に居たなら煉瓦に当らずに済んだかも知れない。何と思っても後の祭でした。

子供が小学校の一年生の時突然私に質問されました。「お母さん地震はいったいどんな形をしているとか。歩いて来るのか、汽車に乗って来るのか。何時来るのか。」等と問われ、私もとまどいましたが、何も目に見える物と違う。グラグラと地がゆれるので家も人もゆれるんだよと教えた事を覚えて居ります。昔から地震、雷、火事、親父と言う言葉をよく聞かされて居りましたが、幼い子供なりに耳にして居たと見え、予報もなくやって来る地震だけに謎の解けぬまま、恐怖心を抱き続けて居たでは無いかと思います。そしてたまたま大地震で命を奪われたので、親はその事に結びつけて仕舞います。

あの頃は地震対策どころか戦争の事で夢中でしたが、今は物資は豊富にあるし働きさえすれば、何でも買える平和ってほんとにいいですね。けれ共天災は忘れた頃にやって来ると言います様に、何時何処で大きな地震が起るかも知れません。毎日の様に新聞やテレビで地震に対する対策が検討されては居りますが、何の前ぶれもない。曲物丈に誰にも予想は出来ないと思います。何処の家でも同じですが、特に大勢の人を使って居られる会社等では、非常口とか出入口を迷わぬ様いざと言う時直ちに開く様に、又重い物を高いところへ積まない様にしたいものです。掛け替えのない貴い命を地震に依って失わぬ様お互いに個人個人で守って行かれたらいいと私は思います。最後に火は必ず消し忘れぬ様に致しましょう。

私の地震体験

瀬尾久子
（名古屋市西区）

所は愛知県渥美郡渥美町大字堀切。あれは昭和十九年十二月七日、私が小学校の六年生の時であった。昼少し廻った時だったと思う。小学校の教室で勉強していた時だった。ゴーと言う音がして同時に「グラッ、グラッ!!」びっくりして、何事が起きたか、とっさには解らず、ただ右往、左往するばかり。先生が「地震だ、外に出よ」と言われたので、我先にと廊下へ飛び出した。校庭の中庭の池の側を通らなければ外に出れないので、池の横を皆んな、立ったり、ころんだり、四つんばいになって飛び出した。池の水が「だぶん、だぶん」と背中にかかり、びしょ濡になってそれは見るも哀れな姿であった。震度6か7であったと思う。とにかく歩く事はとても出来なかつた。家の柱が横に三十糎位右左にゆすったと思う。校庭では先生や、生徒が皆んな大騒ぎ。小さい子は皆んな「ワァ、ワァ」泣いていた。

先生の指示を受けていたら、もう村人達が津波が来ると言って、リヤカー車や、いろいろな車に家財を積んで避難して来た。学校は村でも少し高めの所にあるので皆んな学校へ集って来た。私達は急いで家に帰った。家の近くまで来ると、何んだか急に明るくなった様子だ。変だと思った。それもそのはず家の前に建っていた納屋、2棟がぺっちゃんこになって、つぶれて母屋だけ立っていた。今さらの様に地震の恐さを知らされた。我家でも母がリヤカー車に家財を積んで津波がくるから山へ避難するのだと言って、大さわぎをしている所であった。地震があって間もなく海水が沖の方まで引いてしまった。これは津波の前兆とばかりに村人達は我れ先にと山へ避難したものでした。私は学用品だけをしっかりと持っていた事を今でも思い出す。幸にして津波もたいした事もなかったので夕方家にもどった。海岸の側では地割れがしていた所もあった。

その時の地震で、いたる所の田んぼの真中に大きな穴があいた。それはその昔、井戸であってあとで埋めた所らしい。この時は余震はあまりなかった。

そして翌年一月十三日に三河地震が起きた。この時は真夜中でしたので又びっくりねぼけ顔で飛び出した。

この時は余震が非常に多かった。間なしに「ガタ、ガタ、ガ

タ」とゆすっていた。どんなに神経の太い人でも家の中で寝る人はなかったと思う。多くの家では皆、家外に小屋を建てて、そこで夜は過した。一週間小屋で過したと思う。

その年は又ものすごく雪が多くて、あの南国の渥美にしてはめずらしく十五糎位積ったと思う。雪の中の小屋で何んの暖も取らなかったけれど唯一人として風邪をひいた人はなかったと思われました。それだけ人の気持が張っていたのかと思われます。

頂度、戦争が激しくなってきつつある時でしたので、空襲があると防空壕へ入り、夜には小屋で寝たものでした。このきびしさを今の子供にも教えたいと思います。

何事にも耐える力を養う為に。

私の地震体験

野村徳平
（豊橋市）

私の地震体験。今から三十年以前の昭和二十年。月日時刻は確実におぼえていないが大東亜の戦争当時に、私は豊橋市花田町流川にあった、日出る国豊橋製紙工場で汽缶士火夫を勤めていた。或る日のおひる少し過た時と思われるが、ふとボイラーの上部に取付てある汽缶の圧力計のメーター針が急にゆれだした。長い年月にわたり、こんな事は一度もあった事がない。ボイラーに何か故障でもできたのかと、不安に思うその時に、汽缶室がばりばりと音がして上部のはりにあげておいたパイプが、がらがらと落てきた。スワ地震だと思うまもなく体がふらつき、目がまわる。スコップを持ったなりで、其の場に倒れた。早く外へ出ようにも体が自由にならず、あわててはいだした。外へはい出ると、そとも風がつよくふき、土ぼこりが先も見えぬほど舞上り、きみわるく、うなるような音がして硝子戸は、ばりばり割れるし、建物はぎしぎしとなる。西隣の大星館製糸場の二階建の倉庫が見るみるうちに、屋根からねじ倒されるようになって、ばりばりと音をたて、倒れゆくのがなんとも、言葉では、あらわせない。恐ろしさが今似て目に浮ぶ。おどおどしたのも一分そこそこと思った。すぐ余震がきたけれど心配するほどのゆれ方もなくすんでほっとした。

少しおちつきができて紙工場の様子を見ると、硝子戸が割れ

たり屋根の瓦がずれたりおちて割たりしているぐらいに見えたが、紙すきの機械は全部とまって、工員たちも外に出てわいわい話合っている者もあれば、町の方はどんな事になっているだろうかと走る人もあった。原料の撰別工場に十名あまりの、女子工員がいたが、地震ときがつくと主任者の命令にしたがって丈夫な、台の下や、大きな荷物の横に避難して、負傷者は出さなかったと、いっても、とっさの地震におどろき顔色も青ざめている。

機械も、汽缶場やボイラーの煉瓦積にも少しは故障が生じたので工場全体がやすみときまり、通勤者はひとまず帰宅した。私も羽根井本町から通勤していたので、汽缶場の片付をすましてから我が家や家族の事を心配しながら帰る途中で、へいが半分たおれかけたり、家が半分以上もがたむいている。町の人たちも、子供をおんぶしたり、だいたりして、余震の来るのに心配そうに皆で立話しをはずませながら、外で働いている人の事も案じて、みえる様子であった。一番きにした火事の話しは聞かなかったので何よりとほっとしたとたん、背中や尻のへんが痛むし、ひりひりするので、急ぎ家にもどって、どうだったと内の家族たちに話しかけると、父さんも無事で何より、内の者もみんな元気だけど、近所のおばさんが、外へ出ながら敷居にけつまずいてたおれ、頭や手足に、負傷されたが生命には、さしつかえなさそうとの事だが、まずお見舞にいってきた。

私の借家は大正の初期に建築された古家のため、早くから柱に支を入たり、所々修理していても、今度の地震で大ぶん傾いて、戸立も、うごかなくなり、雨戸や硝子戸も破損したけれども、皆んな無事で何よりと感謝のきもちでいっぱい。世の中にはどんなにか不幸ができた人もあるのにと目頭があつくなるが、余震の事も心配しているうちに日も暮かけ外がうすぐらくなったとき、ごうっと、うなるような音と同時に西の方から何か、ひかりものが、さっと通るのが見えた。とみるまにぶきみな地うなりがした。すわ又地震かと立あがったが、こんどは少しのゆれで、おさまった。晩になっても寝る事もできず、十一時頃に傾いた家の中で、まず子供の三人にふとんを何まいも着せて、夫婦はうつらうつらと寝もせずに考えた。もし今日の地震が過去の関東地震の二のまいであったら、三河地方も豊橋も、大変なことになったと思うと、寝入るどころではない。

ついに夜が明けた。人々の話しやら、いろいろと地方のニュースを聞いた。一ばんびっくりしたのは小浜の大陽航空の飛行

機製作所がぜんかいした事や、西三河の方面で織物工場の若い女工員が多ぜい、レンガべいが倒れて其の下敷になり気の毒な有様になった。女たちもレンガべいの横なら大丈夫と考えたのが不運のものと思う。よく考えてみると丈夫そうに出来ているレンガのへいも、地からゆられる、地震の強力なのに、耐られるものでない事を教えられた。ひとまずかたが付いたので朝食にかかったが、背中や尻が痛みだしたので、はだかになり子供に、見てもらったら、少しはれて赤くなっていると言うので、浅井こうやくを何枚もはってもらった。あとで考えてみると、ボイラーのあつ力計のメーター針がひどく動いたのは地震直前に地が震動してゆれたものと考えられる。又体のいたみは外へ出ようとした時に落ちてきたパイプが当っても、さほどに気付もせず夢中で、いたせいで、其ときは、何ともなかったのが、痛みだしたとしか考えられない。

正午頃ラジオニュースで昨晩の光やすごい地うなりは東幡豆方面が震源地である事を知らされた。体の痛みも五、六日で治ったので、東幡豆の三ケ根山の観音様へお参りにいき、三ケ根山北方の大沢谷から頂上へ登る途中、山の中腹に百米ほどに横に長く、巾は二米位に地割ができて、上からのぞくと中が黒く見えてきみわるい。なるほど幡豆が震源地かと付近の人に聞いてみたら、先日のすごさを話してくれた。

東南海地震を憶う

伊藤芙美
（豊橋市）

太平洋戦争は次第に激しくなって国民学校高等科児童も学業をすてて、動員学徒として軍需工場に挺身することとなった。「今や決戦の重大段階に対処し本県に課せられた航空兵器緊急非常増産の国家的使命を完遂する為、工場事業場へ中等学校低学年生徒及国民学校高等科児童の動員を実施する」というのであった。高等科を担任していた私は毎朝学校へ出ると女生徒を点呼引率しては、町にある工場へでかけた。今までは繭から生糸をつむぐ製糸工場だったのが、軍服をつくる軍需工場に切換えられたからだ。繭も軍服に作られたのだ。ドッチの悪臭と湯気の立ちのぼる工場内で、女生徒達は糸のとり方を教婦さんに教えられて、女工達にまじって終日懸命に作業に従事したので

ある。

十二月七日。寒い風の吹く晴れた日の午後私は午后の操業についた生徒達を確めると用事で学校へ足を運んだ。職員室の敷居をまたいだとたん、足元をとられた。舟にのっているように横ゆれして足が進まず、思わず柱にしがみついた。庭の樹々もゆれている。地震なのだ。物が倒れる音、おちる音、きしむ音がする。電灯がゆれる。地ゆれのやんだあとも電灯はゆらゆらゆれ時計は止まっていた。工場にいる生徒達に思いをはせた。工場へとんで帰った。生徒の側に監督責任者である教師がいなかったなんて、自責と不安に工場へついた時何のけがもなく安堵の胸をなでおろしたが、突如やって来た地震への恐怖は大人にも子どもにも芳ばしくない戦果への不安と共に暗いかげを投げたようだ。

家へ帰った。皆無事であったが、壁に大きな長い亀裂が横にできていた。門口の戸はひずんであかなくなったが父が直したという。畠の隅に作ってあった防空壕に並んでわら小屋が作られその夜はそこで寝た。余震を恐れて、みんなそうしたようである。その夜だけでなく一週間位の間はわら小屋と親しくした人が多かった。この地震は東南海地震と名付けられ震源地は熊野灘沖震域は九州から関東に及んだが三河湾周辺は震度六の烈震で豊橋や名古屋の軍需工場も少なからぬ打撃を打けた。戦時中のため被害の詳細は明らかでないが、死者八七一名、負傷者一、八五九名、住家全壊一三、五八六戸、半壊一一、八五四戸ときく。豊橋の太陽航空の動員学徒豊中三年生の河合勇吉君はぎせい者となり学校葬が営まれたときいている。

震禍による当地方の動員学徒のぎせいは河合君のほか、半田にあった中島飛行機製作所の震禍はいたましく、工場の崩壊によって作業中の市立高女生二十三名、実修高女生三名、当地方のみで計二十六名が殉職したとの悲報が入り、学校葬がそれぞれの学校に於てしめやかにとり行われたという。

これより前十一月二四日にはB29により東京が初めて空襲されて国民は大ショックを受けており、勝つまではと心の帯をしめ直して食糧増産兵器増産に励んだのだが、芳ばしくない戦果、思いもよらぬ地震による工業地帯の大打撃、軍需生産力の低下、神にも見放されたかと誰しもが暗いかげりを持ち、国民の戦意に少からぬ影響を与えたのだった。この地震の発震時刻は午后一時三十六分。正午をすぎていたので大火に見舞われることのなかったのが不幸中の幸といえよう。大地がゆれる、足をすく

われて進退きわまりうずくまるしかない。地震だと心の凍る思い。そんな緊急とっさの時に火を消す、ガス栓をとめるなどの動作がとれるかどうか。訓練ならこそできようが本番ともなれば理性は失せて判断をあやまる事が多いのだ。でもとっさに火元に注意せねばならぬのだ。火事によってより大事に至り災害は倍加するのだから、火元を確める冷静な理性を養う習慣づけをせねばならぬのだ。

私の住居は鉄筋二階、外へとび出す余裕などありっこない。とっさに身をよせる場所は決めてある。居所によってはそこまでいけぬことすらある。大ゆれで釘づけになることだって。そんな時どうするか。心つもりをしておかねばと思う。予知できぬ地震、近い将来きっと起るであろう地震。災害を少くするために避難の方法、心の準備が大切だと思う。



三河地震回顧

伊与田　貴保
（額田郡額田町）

ドドドドーッ!!という音に夢は破れた。と同時にグラグラッ!!と揺らぐ。地震だ！叫ぶと同時に妻と共に飛び起きた。二人の子供は何も知らずに、気持よく寝ている。長女は九才、長男六才、一人宛抱えて裏口から窓越しに飛び出した。

昭和二十年一月十三日午前三時四十分。今迄に経験したことのない強震である。所謂三河地震に見舞われたのである。十一日にも時々気味の悪い振動を感じた。時恰も太平洋戦争の真只中、この日敵がルソン島に上陸を開始したと報道された。あれやこれやで無気味を感じている時だけに、神経はとがっている矢先である。

当時私は、現在の蒲郡市塩津小学校に勤めており、西迫という所にある教員住宅に住まわせてもらっていた。道路沿いで十メートル程の高台で蒲郡の海を正面に眺められる位置にあった。高所だけに心配は倍増した。

子供を抱えた二人は、夢中で裏の藪へ走った。子供は急に運ばれ泣き出した。よく言い聞かせやっとたどり着き腰を下ろすと、急に寒くなった。四人共寝着のままである。子供は頻りに寒さを訴える。まだ揺れている。四人は、固まり体を寄せ合って無言が続く。暫らくして間を見て自分は家に戻った。揺れは止まらない。傾いて完全に開かない戸の間を横になり、潜るようにして、やっとのこと布団と毛布を取り出して再び藪へ走った。

親子は、布団と毛布にくるまって坐ったまま、眠られず明けるのを待った。依然として時々揺れる。その度に雷光のような凄い光が伴ない暗を照らす。全身が固く凍りついた様で胸は高鳴る。子供をしっかと抱く。無気味な光りが、かたまった親子を照らし出す。ビクビクし乍ら子供を守りつつ、一睡も出来ずに夜を明かした。東が白み次第に明け離れると、ホッとして我にかえる。明ける迄に余震は、何十回となく続く。その度に二人の子供は、しがみついて来て震っている。余震は尚続く。どこの家の人も、あちこちの藪や、木の蔭、山の中から様子を覗うような足どりで出て来る。

家へ戻ってみると、戸はきしんで開かない。障子は全部切りさかれた様に、一間残らず、ビリビリに破れ、風にブルブルと鳴っている。棚の物は全部投げ出された様に落ちて、散らばっている。どこからどうしてよいか、只茫然として眺めるのみ。火も焚かず、朝食は名のみ、夕食の残りで済まして学校へいく。

隣の形原では、学校に駐屯していた軍隊を始め多くの死傷者を出したとのこと。倒壊家屋も多数。その日から死者を葬う煙の立昇るのが見える。深溝、幡豆方面もえらかったとのこと。被災地は、後が又大変である。

全く聞いただけで命の縮まる思いである。幸せなことに塩津では、こうした犠牲は一つもなかった。

尚加えて不幸中の幸とも言うべきことは、火災の一つもなかったことである。地震に火は恐ろしい。皆寝ていて火の用がなくなった時であったからであるが、若しこれが火を使っている時であったらと思うと身の毛のよだつ思いがした。

学校は平常通り授業したが落着けない。余震は相変らず続く。その度に、児童は校庭に出て整列する。非常訓練が演習でなく実際に出来た感であった。どこの家も翌日から、防空壕や小屋に寝た。庭の隅に急造のかまどを用意して煮焚き、筵をしいて

の食事が始まる。

新聞によると、三河湾が震源地とのこと。敵機来襲と両方で生きた心地はなかった。この地震は、断層をなし同じ形原町でも帯状であって、被災の度合や無災地の区別がはっきりしているという。

一月十九日、三日程臨時休校していたが本日より全児童登校。余震まだ止まず。

一月二十二日、今日から本格的授業開始。依然として未だ腰を浮かす程の余震あり。専門家が調査に来られたそうであるが、塩津・西浦が陥没して形原が隆起した。塩津は地盤が岩で固いので被害が小さかった。もう三、四十年は、これ程の地震はないから安心してよいとのこと。

一月二十六日、今日から家の中で寝る。まだ少しずつ揺れる。その度に目覚めると明ける迄眠られず。

一月二十七日、余震なくなり、二週間ぶりに初めて風呂を沸かす。生き返ったと同時に人間らしくなってほっとする。

最近地震の問題がとり上げられ、研究論議色々とり沙汰されている。要は来ないことがよいが、そううまくいかない。火山国にある私達は、あることを考え、お互いその対策に万全を期すべく心の準備なりと、しておきたいと思う。

私の地震体験

伊与田　広子
（豊橋市）

忘れもしない昭和十九年の十二月八日の午後であった。米軍の本土空襲も日々激烈となっていった。丁度その日は大東亜戦争の開戦の日で、その日をきっかけに大襲来するのではないかとのことから、学校は休みとなった。

お天気は連日穏かな晴天が続いた。ただ気温だけが十二月というのに熱い程で寒暖計は連日二〇度を越していた。丁度一時を過ぎた頃、ごうごうと無気味なうなりと共に大地が大きく揺れ出した。私は裏庭で薪の用意をしており、爆弾でも落されたとうろうろしていると、台所に居た母が、「地震だ。早く木の下へおいき。」と飛び出して来た。私は行こうとしても揺れがだんだん烈しくなり、立っていることさえ出来ず、這うようにして辛うじて庭の外の柿の木の下に辿り着いた。私は母と一緒に

木にしがみついて体を障えた。ごうごうという地鳴りは丸で地獄の釜の煮えたぎる音の如く聞え、辺り一帯の家は弓なりの如く傾き左右に揺れていた。連日の日照のため砂埃が一面に立込め、目も開けておれない程であった。がらがらがらと瓦の落ちる音がした。私はどうなることかと心配しながら地震の止むのを木にしがみつきながら待った。大地の揺れはその慣性で揺れていた。私が早速木の下を離れようとすると母は、余震があるといけないから、暫らくここに居るように云った。母は、「地震の時は大きな木の下に居るのが安全だよ。地面が割れても木は根を張っているからね。その割れ目に落ち込むような事がないのだよ。地割れがしそれに挟まれて死亡したということもあるからねえ。」と言った。

家に帰ってみると戸障子ははずれ、壁には大きな亀裂が生じ棚の物は方々に散らばっており、地震の物凄さを生まれてはじめて経験したのだった。私は何か家の中に入るのが恐しく、ただ庭にたたずんでいた。母は急いでたいていたかまどの火を消し、蒸かしていたさつま芋をいかけに盛り、「腹がへっては戦が出来ぬという。先づお芋でも食べよう」縁先に置いた。私は家には上がらず縁先に腰を掛け蒸しそこねのさつま芋を母と一緒に食べながら母は、「どうも十二月と云うのに暑いのはおかしいと思っていたが、昔の人はよく言ったものだ。地震の前は暖かいと云われている。濃尾地震の時も暖かい日が続いたそうだ。」と云い、母は芋を食べながら幼い頃濃尾地震があり、子供が多かったので家から外へ飛び出した際一人家の中に残されてしまったことなどの思出を語った。

そのうちに大家さん見て下さいと次々と借家人が訪れた。私の家はその頃近所に少しばかりの家作を持っていた。見に行くとどの家もガラスが割れたり壁に亀裂が生じたり、屋根瓦が落ちたりしていた。これらの家は建ててから十年は経っていなかったが埋立地であるため予想外に被害がひどかったのである。勿論全域水道は断水し、電気は切れた。しかし、それは二、三日で通じるようになった。

その後日照と生暖かさは依然として続き、年を越したある夜がたがたという音で目が覚めた。「地震だ。」「早く外へ出よ。」と母が叫んだ。私は手当った物を持って外へ母と一緒に飛び出した。当時夜は燈火管制で下手に燈はつけられない真暗がりである。私達が外へ飛び出した頃には地震は治まりかけていたが、西の空がぱあっと明るくなったと思うと「ごうー。」と云う地

鳴りが聞え再び「がたがた。」と揺れ出した。数分の間をおいては繰返された。私達は家の中へ入ることも出来ず寝巻のまま寒さに震えながら立すくんでいた。母は「昔から寒は一年の縮図とみてその年の天候を予想する習慣があるが、今の時点を繰ってみると、八月に当る。近頃ずっと日照りとなり凶作の年ではないかと思うと丁度稲の育つ頃に日照りとなり凶作の年ではないかと思う。」と心配そうに私に呟いた。私は開戦日にあのような大地震に見舞われ、又このような地震があるとは天罰のように思われ、前途にもっと不吉な事が起るような気がしてくるのであった。地震の繰返しは次第に間を置き小さくなっていった。東の空は白みかけていた。私は急に体が冷たくなっているのを感じ、腕には枕を抱いていた。母が「かぜを引くといけないから家に入ろう。」と云い、入り早速寝床にもぐり込み一寝入りした。

目が覚めた時は朝日が差し込んでいた。「あーあ、びっくりした。広ちゃんは何か持って出たようだが何だったね。」と母が聞いた。私はまさか、「枕。」とは恥かしくて言えず。「さあ何を持って出たか覚えがない。」と答えた。当時私は次のような話を聞いたことがある。当時空襲に備えて荷物は風呂敷包にまとめて置いたのであるが、いざ空襲になった時物欲から、一番大きな風呂敷包を持ち出したら、ぼろ布ばかりであって家はそのまま焼けてしまったという。私はその時、かかる話を思い出し、自己の教訓とすべき話だと思ったのである。私も当時空襲に備えて教科書類や衣類などが枕元に置いてあったのに枕を持出したことは、今でも人には話せない思出である。

三河地震の体験

本多崇
（安城市）

昭和二十年一月十三日。三河地震はこの日未明に発生した。当時宝飯郡形原町（現蒲郡市形原町）で国民学校二年生だった私にとって、この日のできごとは一生忘れることはできないであろう。

何か異常を感じてふと目をきますと、部屋が無気味な音をたてて揺れ動いているではないか。〝地震だ〟と思ったがどうしてよいかわからずふとんを被っていた。そのうち父の叫び声がしたので、真暗闇の中をどこをどうしてか戸外へ飛び出した。

年老いた祖父母、乳飲み児を抱えた母、私を含めて幼い子供ら一家八人が無事戸外へ避難した。寺である私の生家では普段は庫裡の奥まった部屋で寝んでいたが、二、三日前からドーンドーンという地響きが続いたため玄関続きの部屋に二日程寝んだ。しかしこの前日には地響きが無かったがそれでも万が一を警戒して玄関に近い部屋で寝ていた。

戦争中のことで子供も衣服を防空ズキンにくるんで枕元へ置いて寝るよう躾られていた。それを無意識にもって出たらしく、それを身に着けた。しかし折からの厳寒に、父は間断なく続く、揺れの中を家の中へ飛び込んでは、畳やふとんを持ち出してきて、家族みんなが抱き合って寒さをしのいだ。本堂の屋根越しに三ケ根山の方角で異様な光が発生するのをみて、さらに恐怖をつのらせて、ふとんを頭から被っていたのを今も覚えている。

当時在郷軍人の役員をしていた父は家族の世話もそこそこに町内の見回りに出かけていった。暫らくすると家に立寄り、寺から西の大半の家が倒壊し、亡くなった人や家の下敷になっている人の名前を告げてまた出かけていった。揺れ続ける中をやがて夜も白みはじめてきた。道路の方へ出てみると前の家は屋根がへの字に折れたようになって建っており、その隣の家は道をふさぐように倒れていた。母が外へ出ては危いからというので家に戻った。そのうちに戸板に乗せられむしろを被せられた遺体が次々に境内に運ばれてきて、地割れした地面に並べられはじめた。何でも近くにあるお薬師さんの狭い境内が一杯になってしまったためこちらへ運ばれてくるのだという。あまりの恐さにそこから離れたところで眺めていた。この場所にはそれから当分の間足を踏み入れなかったことを憶えている。

近くの人がもちを焼いて持ってきてくれたので家族みんなで分け合って食べた。

こうして恐怖の一日は過ぎた。しかし次々に発生する余震。半壊した家の中には入れず、数日は寒中の中を戸外で過さなければならなかった。そしてワラ小屋を作って一年近くをここで暮した。こうした中で祖母はこの月末に、また祖父は七月に亡くなった。

暫くして再開された学校で私のクラスでは五人の生徒が亡くなり、次々に葬儀に参列をした。校舎は倒壊し、近くの劇場や神社で授業を受けた。戦争は末期で空襲警報のサイレンに逃げまどい満足な授業が受けられるはずもなかった。

あれから三十年余を過ぎた郷里へ帰ってもこの地震の跡はもうほとんどみることができない。それでも私の生家では傾いた庫裡を水平にするため東端に一米近く石がきを積んだため中二階の高さになってしまっているし、隅が欠けた墓石、火袋の壊れた灯ろう等をみることができる。

幻の地震といわれる程世間には知られていない地震であるが、遠州灘地震の発生が言われている昨今、その対策に、この地方の人々の貴重な体験を活かしていくべきだと思う。

私の地震体験

熊谷可寿ゑ
（北設楽郡設楽町）

「ドド……。」という地鳴りも、ぎしぎしと家の軋む音もなく突然襲った激しい上下動で、「地震だ!!」と四人は立ち上がった。地震には随分敏感になっている私たちは、とっさに外へ飛び出る習慣が身についていた。然しこの時ばかりは飛び出るどころか激しい揺れと恐怖のために立っていることも出来ず、母にしがみつきその場にしゃがみこんでしまった。

「揺れがおさまるまでこのままで。」と、震える母の声を耳にした時はもう何度目かの激しい横揺れに変っていた。声を出すことはもちろん、部屋の中を見廻す余裕などもさらさらなく、ただ、母の腕に力を入れていた。揺れのおさまるのを待って竹薮に行った。路地には瓦が落ちくだけ足の踏み場もない程、しかもまだ落ちかかっているものもあった。座布団を頭にし、足袋はだしであったがどういう状態でそこまで行ったか確かな記憶はない。隣近所の人がまたたく間に十数名集った。初は興奮のあまり言葉にならない言葉でうなづき合っていたが、やがて揺れもおさまり、人心地ついてくると、安全な近道のあったこと、履物をはいてきたが「ざる」など持って来てしまったこと等、自分等のあわてぶりを賑やかに話し出した。だがそれも束の間、海岸近くだったので誰いうとなく津波の心配をしだした。幸いなことに直接津波の被害はなかったが潮位は異常にあがった様に覚えている。

これは、昭和十九年十二月七日午後一時三十六分。多くの人が午後の仕事に取りかかって間もなくの出来事だった。東南海地震、M八・〇、死者九九八名、家屋の全半壊七三、〇八〇戸

津波による流失三、〇五九戸等々の甚大な被害状況を知ったのはあれから何年たってからだったろうか。

年が明け、地震の恐怖もやや薄らぎ、人々があの時の失敗談を一つ話の様に話していた一月十三日、再度の激震に襲われた。やはりこの時も激しい上下動で始まった。名古屋から疎開して来ていた従妹と布団を並べていたが、その上にガラス戸が倒れて来た。一瞬にして停電、身を起した瞬間枕元に柱時計が落ちた。戸棚のものがくずれ落ちる。それがすべて暗闇・激震の中の出来ごとである。

「あぶないから動くんじゃないぞ!!」という父の張りつめた声。やがて懐中電燈を持った父に誘導されて庭へ出た。一間仕切りの多い家、然も真冬、しっかり閉じてある戸や襖を開けるのを待つ間のいらだたしさ。

外へ出ても絶えず揺れは続いていた。「ただ事ではないぞ。一通り廻って来るから家の中へは入らないように。」と、父は余震の続く中、布団を持ち出して、一人一人に渡し町内の見廻りに出て行った。その時「ゴー…」という無気味な音に続いて木のさける音、暫くして夜目にもはっきりと煙だったものを見た。すぐ裏のお寺の本堂が倒れたのだ。土煙とほこりの入りまじった異様な臭いが一そう恐しさを増した。余震は続いていた。時々パッと明かるくなった後、かなり大きく揺れたりした。その後あちこちで、地震の前に明かるくなるということを頻りに聞いたが真偽の程はわからない。

それから一ケ月位、どの家も庭に小屋をかけ、地面に藁を厚く敷きその上にむしろ、更に布団を敷いて寝た。子供達は物珍しさも手伝って友達の小屋を見廻り遊び歩いたりした。雨の日はすぐ飛び出せる様に土間に寝た。

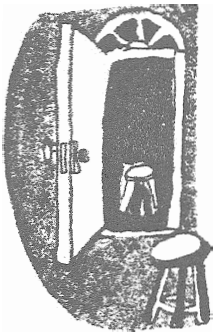
死者が多数で火葬場が間に合わず露天で荼毘に付す煙を遠くに見た。

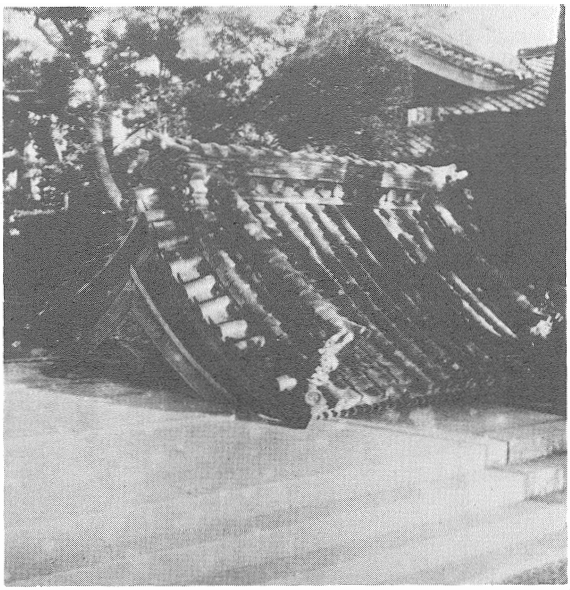
堤防の松は傾きかけた家の支柱にする為に被害調査も待たず我先に切りとられ、抱える程のものまでが運び去られてしまった。緑の美しかった松並木の堤防が僅か数日の間に丸裸にされ被害の全くない様な家のつっかい棒として四本も五本も使われているのを見た時の怒りの気持は今もはっきり思い出す。

当時中学、女学生は倒壊家屋の片付けに今日は吉田、明日は福地へと連日出かけた。被害は帯状に続き押しつぶされた階下に二階がそのまま乗っているもの、倒壊寸前のもの、ねじれた状態で倒れているもの等様々であった。地盤の変化で水位が上

がり井戸水を直接ひしゃくで汲んでいる家、逆に水の涸れてしまった家もあった。小屋に出入りする人の中に松葉杖をつく人、手に包帯をしている人も多く見た。片付けの最中に空襲警報が入り、B29の飛行機雲と機体の光るのを不安な気持で眺めていると、父の言った「ただ事ではないぞ。」という言葉が思い出されて増々不安はつのるばかりだった。戦時体制下のため正確な被害状況は伏せられていたので、目で確めただけが正確な情報であった。

後日、三河地震M七・一、死者一、九六一名、負傷者八九六名、全半壊家屋一七、二四五戸と聞いた時、今更ながらその被害に驚くと共に貴重な体験として生かす術を……と思う昨今である。





西尾市寄近町法厳寺山門の倒壊（三河地震）　―萩原律氏提供―

〔愛知県以外の地域〕

私の地震体験

市川志な
（豊橋市）

大正十二年関東大震災の時私はまだ子供でした。田舎の家の石燈籠の頭が転げ落ち手洗鉢の水が半分程こぼれてしまった事を覚えて居ります。

今思い出しても恐ろしさがまざまざと甦えるあの昭和十九年の東南海地震の時、私達は浜松に住んで居りました。大東亜戦争のさ中で、B二十九と云う厄介な敵機来襲と防空警報の連続で恐怖に明け暮れて居た最中の事でした。当時私は三児の母でした。長男は小学校二年生でまだ学校に居ました。長女と二男は主人が近くのお寺へ用足しに連れて行った留守中の出来事でした。突如起ったあの地震です。グラグラと揺れました。アッ地震。私は反射的に店先にとび出しました一瞬、主人や子供達の事が脳裡をかすめました。店先迄とび出すのにほんの僅かの時間でしたがもう其処では立って居る事も歩く事も出来ませんでした。無我夢中で道路の真中まで四ツン這いで逃げました。震動の合間を縫う様にして、突当りの郵便局の屋根が上下に一米以上も揺れて居ました。私の体もその通りで、大波に揺られて居る様で何とも云えない恐怖感で一杯でした。

やっと収まった時、同じ格好で震え上って居るあの人この人の姿が目に入りました。恐ろしさを語り合い呆然としてしまいました。次に目に入って又々驚ろいた事には向いの邸宅の人造塀の一角が無惨にも崩れ落ちて居た事でした。これは商店街の真中に一軒だけ珍らしく邸宅があったのです。そしてふとお隣りの屋根に目をうつした時ゾーッと全身総毛立つ思いでした。瓦と云う瓦が全部一枚残らず踊ってしまって居たのです。私の家の屋根を見上げました。不思議と外観だけは大した変化はありませんでした。筋向かいの家も同様でした。でもその後は雨の度毎にバケツや洗面器等持ち出さなければならない始末となりました。そして今もその事を思い出して考えるのです。対角線に当る向かいの家と隣とが無惨な被害を受けたのに対し、反対側の対角線に当る筋向いの家と我家との被害が少なかったのが何とも不思議に思えてなりません。偶然だったのでしょうか。

それとも地質学上とか又は地震学上とでも云うのでしょうか。何か原因があったのではないでしょうか。今だに思い出す度謎めいた気持になるのです。

家に入りました。そして其処にも又々不思議な現象を目の前にして驚きました。当時はまだテレビ等ありません。ラジオ専門の時代です。タンスの上に置いてあったラジオがその儘チャンと畳の上にあるのです。帰って来た主人が驚ろきの声を上げて居ました。お勝手に入ってこれ又驚かずには居られませんでした。棚の上に並べてあった醤油瓶、塩の器等がラジオと同じ様に板の間の上にチャンと並んで居るではありませんか。尊い配給の塩や醤油です。安妬と不思議さに私は片付ける事も忘れて暫しそれ等を眺めて居りました。そして又私は考えるのです。あの時は遠州灘が震源地と聞いて居ります。そして震源地に近い程上下震動もひどいのだと聞いて居ります。と申しますとあの時の震動は最初から上下震動だったのだと思います。若し最初多少でも横揺れがあったのならばあの一升瓶等横に倒れてころがり落ちて居たのではないでしょうか。又私が店先迄飛び出したほんの何秒かも上下震動がまだ小さかったから歩けたのではなかったでしょうか。思い出しても何とも恐ろしい何分間かでした。それからは夜昼一日四、五回もの可成大きな余震に一週間余も見舞われて夜もオチオチ眠られませんでした。

地震に続いて起きる火災の発生の恐ろしさを想像しそれ以後はガスを使った都度元栓を切る事を習慣付ける様努力致して居ります。あの時の体験からいざ地震が起きてから元栓を切りに行く心の余裕も時間もない事を痛感致しましたから。ましてや上下震動の場合等第一、一歩も歩く事は絶体に出来ませんから。そしてそれ以後は大事な物の置いてある場所の隣りに大きな丈夫な袋を一つ用意して置く事にして居ります。いざと云う時兎にも角にもほうり込んで持ち出せたら幸いと思いまして。でも事実あの様な場合に直面しました時果して役に立つかどうか自信の程はございません。地震の恐ろしさ、ましてや体験した者のみの知る嘘の様な事実の数々。上下震動の恐ろしさを二度と経験したくない思いを胸一杯に天災よ地震よなかれかしと祈らずには居られません。

地震時の失敗

伴　功
（名古屋市緑区）

大正十二年。関東大震災のとき、私は被災地の東京とは遠く離れた豊橋市の裏町に住んでいました。小学校一年生で二学期の始業式から帰り、居間で昼食を待っていた。母は裏のつるべ井戸へ水汲みに行っていた。その瞬間、グラッときた。私はすぐ戸外へ飛び出し近くの空地に避難した。

別に周囲には被害も異常もなかった。が、船に酔ったように、からだがいつまでも揺れているような気がし、恐ろしさのあまり、二時間ほどその空地にいて家に帰った。

帰宅すると母は「声」もかけず、ひとり勝手に飛び出した私に対し「さいわい、大地震でなくて、大事はなかったものの、おまえがどこにいるか、捜すのに手間どって、親が逃げ遅れたら、どうするのか、大事の際は必ず家族同志、声を掛けあいなさい」と厳しく戒められた。

そして、その夜から、衣類をきちんとたたみ、三尺帯で結び、まくら元に置くことをしつけられた。が、その習慣も一年ぐらい続いただけであった。

昭和十八年の鳥取地震には、転勤早々の大阪の新聞社で出くわした。

会社の二階の窓から外を見ると電柱と電柱が互いに触れ合うほど近づいては離れ、離れては近づく。電線はいまにも切れそうに波を打つ。防火水槽の水は揺れ騒いで地面にあふれている。私はとっさに鉄カブト（戦争中なので通勤にも職場でも常時携帯していた）をかぶって五、六歩駆け出した。「伴くん、どこへ行く。ここが一番安全だ。あわてるなッ」と先輩が一喝。

われに返えって、職場を見る。部屋の中央から、ゆっくり立ち上がったのは、編集局長。「東西（東京・九州）の専用電話線は大丈夫か。震源地はどこか」と静かな口調で担当部署（連絡部＝電話課）へ歩みよる。

間髪をいれず、担当者は東西の会社を呼び、専用線の安全を確認。管内の全支局、通信部への通話を申し込む。かくて、電話が不通となっているところが、電源地域か被災地域であることの推定が可能になる。私は「責任ある立場にある方の、大事に臨む態度」を痛いほど勉強した。

東南海地震は、寄宿先の岐阜市長良川畔で、寝込みを震われた。一瞬、窓下の畑へ飛び降りた。あとで「地震の被害ではなく、畑に足を突き刺すような物体があったなら……」と軽卒さに対するヒヤ汗が出た。

こうした失敗や空襲時代の経験も踏まえてときどきは、家族と地震や災害を語り合う。とは言っても、次のようなありきたりの話である。

二人の子どもが高校生のころは、長男は自転車、二男はバスと地下鉄利用であったので通学、帰宅の途中で地震に遭った場合、家族は必ず指定の避難場所にいる。したがって、まず、自分の身の安全を期すこと。そのためには、通学路の地理的環境をできるだけ掌握する。たとえば、公共施設、公園、空地などの位置を知る。火災が起きた場合は風向きを確認する。なだれを打ったような人波に巻き込まれぬこと。出所の確かな情報をもとに判断すること。一日や二日は何も食べなくても死なないことなどである。

いまは、二人とも社会人となったが、それぞれ最少限の対応力は備えていると思う。

むしろ、私たち老夫婦が、有事の際、足手まといにならぬことが先決である。

したがって、万一の場合の持ち出し品は文箱一つ（わが家の重要書類入れ）屋内の避難場所は押入れの一部と決めている。

それと、就寝前に脱出路の点検（蹴つまずかぬよう部屋の整頓）とガスの元栓を切ってあるか否かの確認は習慣づけています。

また、年よりの冷水式発想であるが、地震直後に火災が起きた場合、防空演習の経験から、バケツ・リレーのお手伝いぐらいはできるのではあるまいか。と、うぬぼれももっている次第です。

私の地震体験

石神　きよゑ
（名古屋市南区）

昭和十九年月日は忘れましたが大阪に激震があり二階に居りました私は階下に降りる事が出来ませんでした。今にも壁がそのまま、はがされて落ちて来そうで、また元に戻る激しい水平

動でしたが危険はありませんでした。火の元栓も這いながら消す事が出来ましたし家の倒壊もありませんでした。震度は5位だったときました。

翌年お産に郷里の紀州新宮に帰りました昭和二十二年十二月二十一日午前四時頃南海大地震が発生。上下動で一瞬の間に軒並家は倒壊しました。吾が家でも壁際に寝させていた零才の子を布団のまま引張り上布団を頭からかぶりますのと同時に屋根の柱が落ちてきました。幸いにしてミシンに支えられて柱で押しつぶされる事はまぬがれました。父は裏の離れに臥床しておりましたが平家建の吾が家は完全に倒壊、父は自力で屋根の瓦や柱を取り除き這い出して私共を助けてくれました。母は度々の地震に遭い慣れてますので起きると同時に戸を明けて表に、とび出しまして無事でした。書くと長い時間のようですが一分とかからない間の出来事です。隣家のおじ様とおば様は朝早く起きて食事をしておりまして、おば様が水屋を背に坐っておりましたので水屋に押しつぶされて圧死なさいました。タンスや水屋本箱の傍におる事はどのような地震の場合にも危険だと思います。二階建の家は下がつぶされて、えんこした形で二階に居る者が助りました。しかし三十年も前に建てた二階建の家でも柱を太くして筋かいを入れて建築にきびしく目を光らせた私の親類の家は倒れませんでした。それで復興の建築は軒並筋かいを入れて地震に強い事を目標に建てました。私宅から三百メートル程離れた薬屋の隠居さんがかまどの火を炊いて消すひまがありませんでしたため町の半分が焼失致しました。倒れた家に押しつぶされても火事がなければ助かったであろう人々が多勢命を失いました。地震のあと材木や建築資材の値上りに人々は家を建てるのに市の配給では足りませず大変苦労致しました。地震のどさくさに紛れて人間の最も醜さを暴露したのは焼けている家や倒れた家の手伝いを、よそおって物を盗む輩の多く出た事です。大八車を持って盗みに来る者もいたときました。

私の体験から先づ上下動の場合は「貴重品必需品薬等」一余り沢山は持てませんから袋に入れて枕元の柱にでも吊り下げてとっさに持って出られるようにする事と頭にかぶるものをぎぶとんでも小ぶとんでも必ず持って外にとび出す事です。家の中に居っては危なく窓をすぐに明けないとゆがんで明けられなくなります。一分一秒を争いますゆえ瞬時に行動する事です。水平動の場合は震度六以上でない限り余り心配は無いと思います。這いながらでも火を消す事が出来ます。ただし外にとび出した

場合地面をよく見る事です。地割れが致しますゆえ足をすべらすと脱く事が出来なくなります。以上貧しい体験を拙文にて恐縮ながら綴ってみました。

私の地震体験

氏名不明

昭和二十年一月、三河大地震。兄は三ツで私はまだ八ケ月。父は裏山へ、母はお勝手場に。突然ドーンという大きな音に私を抱き上げ、表に飛び出したそうです。そして気がついた時には兄が一人、家の中をあっちへ走りこっちへ走り、庭におりようとしても、あがりはながゆれていてこわくておりれずただ「母ちゃん母ちゃん」と泣き叫んでいたとか…表では母が「たけ夫たけ夫」と名前を呼ぶだけでどうしようとも、どうする事も出来なかった母を「本当の親でありながらみずくさい」と今でも兄はおこります。が、これが本当の親の姿だと私は思います。地震にかかわらず、何事においても、とっさの場合には自分自身おろおろするだけで、何も出来なくなってしまうものではないでしょうか。私など五、六才の頃までの事など何も覚えておりませんが、兄はわずか三才の出来事を、ただそれだけを今でもはっきりと覚えているといいます。どんなにこわかったことでしょう。想像するだけでも身震いします。そのこわさが兄の幼心に焼きついてしまったのでしょう。確かに私の小さい頃にはよく地震がありました。眠たい目をこすりながら蚊帳から出たり入ったり、玄関先へ集まって、御堂のゆれるのをこわごわ見ていた事をうすうす覚えております。こんな事もありました。父はある夜五ツになる兄をおしっこに連れて行こうと抱いて立ち上ったとたんにぐらぐらっと…そのままどすーんと尻もちを…その腹の上にまともに兄が落ちたそうです。その時の腹の痛さが今だに腹の中に残っているとよくいいます。その父も今は九十才、まだまだ元気ですが、年老いた両親を残して四十四年私、後がみを引かれる思いで、こちらへとつぎました。それからというもの私の頭からは田舎の父と母のことが一時も離れたことがありません。毎日気がかりでならないんです。こんな私に主人は「在所へ帰って通勤嫁になればいい」と冗談をいいます。四十五、六年にかけてよく地震がありました。テレビでも新聞でも騒ぎ始め私は毎日がこわくてたまりませんでした。眠

れない夜も続きました。「いよいよ大きな地震がくるのかしら。みんな離ればなれに死ぬのはいやだ、どうせ死ぬなら、在所の父や母といっしょに死にたいわ。」こんなことをいって勤めに出る主人の足を何どか引きとめたことも…、これが私の本心でした。父や母がどんな思いでどんなふうににげ出すのか、うまくにげきれるだろうか…などと親の心を思う時、本当にさびしくなって泣きました。こんな幼稚な考えしか出来ない私ですがこれでも二人の母親、いくつになっても親を思う心、子を思う親心は誰もが同じではないでしょうか。日増しに物忘れがよくなり備忘録も用意しました。そしてようやく我が家にも緊急袋を作りました。着のみ着のままでとび出した話しをよく聞きますが、昼間は服を着ているのでいいですが夜の場合は寝巻き姿、そんな時を考え着替えを一枚づつ、それにハンカチ、手ぬぐい、あれやこれやと、だんだん袋が小さいのから大きいのへと変わっております。水筒も入れ通帳も入れ印鑑もあれもこれもつめこんでいるうちにまた入らなくなり一日に何回も出したり入れたり…こんな事をしていると、何日か先には必ず何かが起るような気がして、変な気持になります。それに大事なものを一まとめにしておいたのでは盗難のおそれもありますし、これではどろぼうの手助けをしているようなものです。「地震がこわい、火事がこわい、台風がこわい」と口ぐせのようにいっている私に小学一年になる子供が「お母さん何もこわい事ないよ。真ちゃんがついているから。」と励ましてくれますがまだまだ頼りになる年でもありませんし、みんなそれぞれ家庭内の話し合だけでなく公共の場でいろいろ話し合い教えていただき安心して毎日を送りたいと願っております。田舎だって海もありますし、大きな山だってあります。町のビルのある所だけに地震が起るとは限りません。いざという場合の避難場所ぐらい知っておくべきではないでしょうか。その為にはもっともっと身近な場所での話し合を多く持ち、地震の恐さを知っていただきたいと思います。長い間の人生にいろいろな出来事に会いながら多くの破乱をのりこえ、やっと幸せな平和な時代を送っている父や母のように、日本中の皆さんにもう二度とあんな痛わしい目にあわせたくないような、あってもらいたくないと私はいつも願っております。残り少ない余生を、今のまま、静かな世の中であってほしいと心の底から祈っております。

関東大地震の体験

関東大震災の思い出から

榊原靖子
（一宮市）

私が名古屋市千種小学校六年生の九月一日。当時女学校入学準備のための余科があり、午後からの授業を受ける前お弁当を食べて「おはじき」を机の上でしていると、何遍机の上にあげても落ちるので不思議に思っていると、誰かが地震と叫び教室の外に出ました。その頃、五、六年を受持って見えた男性のM先生（現在八十五才）が大声で「皆、校庭に集まれ」と叫んで見えました。私達はふるえ乍ら校舎を見るとまるで大波の様に校舎が左右にゆれているのを見て恐ろしさに口もきけませんでした。それから東京方面が震源地と云う事をきき、又々びっくりしました。

その後、私の家の近くの千種駅には東京方面からの避難民が着のみ着のまま、今の世相の中では到底見られない恰好で、ぞくぞく到着して、身寄りを頼って行くのを見て、子供乍ら大変な事だと思いました。東京方面の震源が名古屋でもこんなに大きく影響するのを考えると、小さな日本の国の中でどこかで一つ大地震が起きたら、どこもかも大被害を受ける事は否めないと思い、又ここ数年間にどこかで大地震の起こるのも二十年にわたる信仰上から解らせてもらいます。

世界中大地震に見舞われているこの頃です。常に油断なくいざと云う時のために心の準備をし重要書類などいつでも取り出せる様にし、又無暗に外へ飛び出さない事と、外への戸のカギを早くあける事、又机の下などしっかりしたものの下へ入る方が安全の様です。いざとなれば命だけですから家財道具など二の次で放ってしまわねばならないと思います。狭い日本に自動車の洪水で万一の場合は次々と燃え上り、どんな事態になるか空恐ろしい事です。頭巾が未だ百貨店などで売られてありませんので早く売り出して欲しいと思います。それと大きいリュックサックが必要で、手に持って逃げる事は不可能だと思います。

そのリュックサックに懐中電灯、マッチ、重要書類、出来れば非常食などを入れて、夜中でも持ち出せる様にしなければと思いますが、私は未だリュックサックを用意してありませんので早く用意しなければと思っています。

関東大震災のおもいで

柴本勝弥
（名古屋市緑区）

関東大震災が起ったのは私が十二才の時である。今から四十年も前のことではあるが、今だにあの時のことは生々しく私の脳裏に焼付いて居り、忘れることは出来ない。

父は他出して居らず、昼食を終り、母が縫物をしているかたわら旧制中学の受験勉強に必死になっていた時、「ゴォー」何んとも気味の悪い地の底から響いて来るような音と同時に凄まじいゆれが来た。それが上下であったか、左右であったかハッキリしないが、とても立って歩けたものではなかった。幸い、縁端に居ったので咄嗟に母は自分の敷いていた座布団を私のところに投げてよこし、「これを頭の上にのせて外の数に出なさい。這って出るんだよ。」と、大声で叫び自分も仕立中の浴衣を頭にかぶって私の後に続いた。

家は当時静岡の田舎町にあったが、それでも外に出ると、近所の家の屋根瓦が次々と土煙をあげて落ち始めていた。家の瓦の破片が私の頭上にも落ちて来たが、これは母の投げてよこしてくれた座布団で難を避けることが出来た。初震のおさまるのを待って母は家に入り火鉢の炭火を消して再び戻って来た。この時のことを思い出すたびに、非常の中で落着いて次々と事を適切に処理して行った母の姿は、誠に立派であったと今でも自慢に思っている。そして、母は常にこんなことを私に云っていた。「家の中も外も常に整理をし、整頓して置くことが大切で、家具の置き方も生活の便を考える必要はあるが、イザと云う時暗闇の中でも安全に行動出来るまでよく整理を徹底させて置くことは是非やらなければならない。特に、タンスや長持、戸棚等の上に重い物を高く積むことは絶対いけない。地震の場合、後でおこる火災のことを考えると、火鉢の火も周囲に灰をかけ必要以上の裸火は出して置かないこと。そして、五徳の上には必ず常に、水を充分入れたやかんを置くことを忘れてはいけない。」口やかましく云われた母の防災心得は、今考えても簡単

で要を得ていた。

「昔のことを云えば鬼が笑う」と云われているが、種々伝えられて来た古老の教訓は先輩が身をもって体験し、経験して来たものだけに得がたいものを持っている。この科学万能の世の中に鯰（なまず）を使って地震の予知観測が始められて居ることを見てもよく解る。

進歩した社会に過去のものをズバリ取り入れ生かすことはむつかしいとしても、災害に対する日常の心構は変りはない。現在家でも自宅の片隅に物置を建て、非常の場合暫定的に必要な生活物資の貯えと、救急材料の準備存置は完了しているが、何んと云っても大切なことは、緊急の場合の適切な行動処置である。

非常発生の初期は、先づ自分を含めて家族の安全確保で精一杯である。とても他人のことまでは手がとどかない。従って、他人を頼ることも出来ないと云うことになる。そこで、日頃の自主防災の対策が必要になる。防災には万全はない。然し、天の時、地の利も人の和に対し勝るすべはない。我家も、更に、家族協力、努力を重ね防災に万全をはかって行きたいことを心から念願し推進している。

私の地震体験

濱地光一（大府市）

私は大正十二年九月一日の関東大震災を体験した者ですが、当時は小学校の五年生でした。家は東海道線大船駅の西側（山側）の山裾に建っていました。その日は二学期の始業式のある日でしたが、朝からなんとなく気分がイライラし、日頃ケンカなどしたことのない姉と口ゲンカをしたりして、とうとう学校には行かず、その時は八畳の間の壁に足をあげバタバタとさせていたのです。

すると、ガタガタときましたので、やあ地震だ面白いな、と思っているうちにぐらぐらときて足をあげていた壁にズズズズと水平にヒビが入ったのです。子供心にもこれは大変だと思い立ち上ったのですが、そのとき心の奥から「跳べ」と感じピョンピョンピョンとトビ上ってみますと、意外に楽に廊下に出ることが出来ました。廊下に出ますと次の室から母がフラフラと出てきましたが、もう歩くことが出来ず柱につかまって、乱れた髪と共にウネウネとしていました。ほんの一瞬だったのでし

ょうが、その有様は今でもハッキリ目に残っています。「お母さん跳べば大丈夫ですよ」と云いながら、棚から本がバラバラ落ちる中をピョンと跳びながら裏口から外へ出たのです。そのときは一応揺れはおさまっていたと思いますが、すぐにゴーッと云う音と共に揺れ始めましたので、ブランコに飛びつこうと（自然に揺れてさぞ面白かろうと）すると、兄から馬鹿なことをせずに早くここへ来いと云われて止めました。ゴーッと地鳴りがすると、犬や猫は尾を下げて急いで人間のところへ来ますが、鶏はコッコッと涼しい顔で平気です。大船駅のプラットホームには屋根がスッポリかぶさっていて、時々鉄道線路上を人人が列をなして歩いているのが見えました。兄と戸塚方面に食料を買出しに行きましたが、途中土手道は地割れがひどく自転車が使えず私は途中から引き返しました。外出していた兄弟達は帰って来ましたが、父は朝東京へ出たままで安否が気づかわれ、先づ上の兄が東京へ向いましたが、夜になると帰って来ました（理由は不明ですが治安の関係だったのでしょう）次の朝次の兄が登山ナイフを腰に出かけました。

山裾に建っていた私等の部落は倒壊家屋もなく又火災もなかったのですが、家の中は壁土などでガタガタ。それに地鳴りと余震が続くので皆屋外の生活が始まりました。夜になるとドーンドーンと無気味な音と余震のゴーッと云う地鳴り、それに横須賀、鎌倉、横浜方面の空は赤々と半円を画き火災の物凄さを示し、その上朝鮮人が暴動を起し、もう藤沢から此方に攻めよせて来たと云うような流言が流れ、兄は夜警に、私は姉達を守るとて、テントの入口にワキザシを持って頑張っていました。それ、こっちの山に逃げ込んだぞ、あっちだ、と云う声もいつか夢の中に、目が覚めたら夜は白々と明けていました。それからの食糧は戦中戦後に近いものであったと思って下さい。こんな状態が何日ぐらい続いたか思い出せないのですが、かなり長かったように思われます。

多分戒厳令が布かれたのでしょう。二、三日して海兵隊が近所に、それからしばらくして、陸軍の兵隊さんが。そして私の家がその主計本部となり、父は鉄道の開通と共に無事帰宅。流言におびえることも無くなり余震も遠ざかってゆきましたが、翌年一月十五日相当大きな地震がありました。学校は何日頃から始ったか憶えていませんが、校舎は倒壊し一教室ごとに急造のバラックが建っていて、給食にミルクが出たり、ビスケットの缶詰をもらったり、鎌倉八幡の参道でこの缶がヘコムほどの

大喧嘩をして憲兵サンに止められたり、当時の思い出は限りがありません。

さて以上のように幸にして家の倒壊はまぬがれ火災にもあわず、皆無事で私自身恐しい体験ではなかったのですが、当時の体験を見聞きしたことは小都市に住む私に色々なことを教えてくれました。

先づ山裾に建った家は倒壊せず、（しかし其の後の台風で雨水が中腹に出来た地割れの中にしみ込み、私の家の裏山がくづれた）田んぼの埋立地の家は殆んど倒壊していた。木造二階家は下がなくて二階だけがそっくり残っている。天災は変にイライラする時に起るのでは?。相当揺れていてもピョンピョン跳んでいればころばないのではないか。棚には当って怪我するようなものは置かない。地震の大小は初めに判断が出来ないので逃げたり、火を消すタイミングは握めない。道路がみだれ乗物は使えない。災害は場所と人を選ばない。普段考えられないような流言飛語に迷わされる。公民を問わず大半の人は理性を失うのであらかじめ配備された人員一〇〇%は集まらない。尚配置された機材、機器、建物も百%無事であるとは思えない。ガス、水、電気は止るものとする。そこで食料はこれ等を必要としないものを少量でよいから用意しておく。何よりも大事なことは、災害から逃げるよりもこれに立ち向う勇気と覚悟と準備があれば災害を最少限に止めることが出来るであろう。

関東大震災

井澤朝次
（豊橋市）

私は、大正十二年九月一日当時、東京市浅草区■天町十三（旧市町名）に在住して、関東地方の大地震に、罹災した一人です。

すでに、五十有余年を経た今日でも、あの恐ろしかったことは、忘れられません。

当日の正午頃、二階で本を読んでおりました。突然グラグラッと大地震が起き、仰天して、表へ出るべく、階段の降口へ急いだところ、棚の上から品物の落ちる音がこわくて降りられず、二階の電灯も大きくゆれ、今にも落下しそうで危険を感じ、咄嗟の考えで、日頃使用中の座布団を頭にかぶって、二階の窓から外にある、物干台へ出ました。

ところが、建物が密集しており、家屋が将棋倒しに潰れたら逃げようがないので、こわさをがまんして、大屋根へ這い上り、峰瓦へ亀のように、四つ這いになって、地震が早く静まることを、神様に祈りながら命がけで鬼瓦へしがみついて、頑張りました。

私の住所、聖天町は、浅草公園と、吉原遊廓から火の手が上り、一方浅草公園では、名物の十二階が、中央の七、八階辺から、ポキンと物凄い音で、砂けむりと共に折れました。

その状況を、屋根の上で間近に眺めその瞬間、恐ろしくて、いっそ大屋根から、表へ飛び降りようかと思った。

しかし、万一我が家が倒れたり、潰れても気を付けておれば、屋根の上の方がかえって、安全ではないかと考えて、思い止まった。

しばらくして、地震が少し静まったので、急いで屋根から降り、表へ出ました。地震が発生してから、三、四十分すぎた頃でした。

家の者を初め、近隣の皆さんも、表におったので、孤独から解放されてほっとしました。地割れを用心して、市電の軌道上におられるので、私も線路上に腰をおろし疲れを休めた。

突然の大地震で、どこの家も表へ飛出し、昼食の準備もできず、食事抜きでした。

そのうちに、吉原遊廓から、地震と同時に出火した火事は、しだいに広がり、女郎さんたちは、その火事に追われ、近くの待乳山公園へ、続々と逃げてくるので、しばらくその哀れな姿を、眺めておりました。

ところが、時間が経つにしたがって、各所から出火し、水道の故障で水が止まり、消火の方法もなく、火勢は益々強くなり、夕方頃には、我が聖天町も危険になってきた。貴重品を持って安全の場所を求めて、避難することに、腹を決めた。尚余震が心配で、ぐずぐずしていたら、近隣の人たちは、厳重に戸締りして既に避難された。待乳山公園へ逃げて来られた女郎さんの身を案じながら、我が家も戸締りして、浅草公園広場へ避難しました。待乳山公園内の聖天宮が、まもなく延焼し、女郎さんの大半は、そこで焼死された。

昼中真赤に見えた太陽が、西の空に消えた頃は、見渡す限り、文字通り火の海となり、四方から火炎に包囲されました。

浅草公園の興業街六区が延焼するときは、同公園広場は人で超満員、若い者は別の場所へ移動するよう、家族づれの人たち

が、必死になって叫ぶので、私は家の人と別れて、上野公園へ行く途中の、本願寺別院の墓地へ、逃げこんだ。その本願寺もまもなく本堂に火が付き、燃えだしたので、そこをのがれて、上野公園へ向った。もう大変な混雑で、道路は満員電車の中と同様、横から割りこめず、自由に方向も変えれず、転ばないよう気をつけて、人の後について歩くより外なかった。もまれながら、上野公園の西郷さんの銅像附近に到着したときは、もう夜が明けた。

二日目になっても火勢は衰えず燃え続け、前日から、昼食も夕食も今朝も抜きで、腹ペコだ。あちらこちらで、泣き叫ぶ乳幼児の、悲しい声をききながら、恐怖の朝を迎えた。

大地震と火災が突然発生して、それに対してなんの準備もなく、戸惑いと不安の連続で、九死に一生とは、このことだと思った。

地震と同時に火の元に注意は第一。震度の程度を判断し、家の中では特に警戒を要す。

私の知人は、避難する直前、貴重品持出のために家へ入り、金庫を開けながら、天井から落ちた電灯カバーで頭を切って倒れ、手当も届かず、三日目の朝、悲しくも焼死体で発見された。

帽子をかぶる必要を教えられた。

当時は、ラジオもテレビもなかった。新聞社の大半は焼失。郷里豊橋市方面の事情もわからず、そのうえ流言が乱れ飛んだ。

戒厳令が布告され、軍隊が出動し、治安が確保されるまでは、生地獄そのものだった。

地震の予知が至難の現在、災害を最少限に止める対策を強力に進めてほしい。一旦大地震が発生すれば、皆んな表へ出るのは必定。電気や水道が故障。消防活動に支障。流言飛語も心配。これらの状況を適切に判断し、地域の事情に精通し、いつでも最善の方法で、大衆を誘導できる秀れたリーダーが、各地域毎に養成され、その実現の早きを期待する。

私の地震体験

福田武夫
（名古屋市中村区）

地震。字の如く大地がふるい動くことである。その原因と予期に関し、幾多の学者による研究が進められている。明確な答は出ていない。大自然の謎、即ち神秘である。私は現在満六十

二才。大きな地震に接したのは大正十二年九月一日の関東大地震である。

当時一年生。ふる里京都府南部である。残暑のきびしい暑い昼である。一面の田の稲穂が浪打ち石灯籠は崩れ落ち手洗鉢の水は全部こぼれ出た。当時情報機関も乏しく新聞紙上で初めて知った。その時に受けた教訓は地震による火災の恐しさである。それ以後地震があれば「火の始末である」と頭にきざみこんだ。

尋常小学終りの六年生の時である。冬もようやく終りを告げようとしていた。太陽が沈むとまだ寒い時期である。静かな夕暮れ時で、山里の谷間に夕げの煙が立ち、我が家も夕飯の支度の最中であった。窯の残り火をコタツに入れ、ふとんを掛け、ようやく手伝いの用もすむ頃、大きな地響きと共に大地はふるい出し、棚から落ちる物音、歩行は出来ない大地震である。これが京都府北部城崎大地震である。私が一番先に我が家から出した物はコタツであり、次に窯の火を水で消していた。これは以後落ちつきを取り戻してわかった事である。一年生の時地震に対する「火の始末」の教訓はこの時とっさに役立っていた。

同じ京都府でも私は南部。震源地は北部である。火山脈のある如く、私の家より2キロメートル位離れた処にある小山は一瞬にしてなくなり、地割はひどく、この時初めて大地震の恐しさを体験し、自然の恐しさを感じました。この時体験した教訓は歩行出来ない時は、足のかかとをつけず「つま先」で走ることである。体験から教えられる教訓を何時も頭にもち続けて暮していた。

日本が戦争の暗いトンネルに入り、私も徴用令により大阪より名古屋三菱重工航空機製作所に入所しました。連日の空襲でこの時は食する事と、自分の生命が何時消えるかの不安でいっぱいでした。その時、とつじょとして大地震が起り、空襲と間違えて防空壕ににげこんだ人が相当ありました様聞きました。当時は戦時で不利なことは一切報道せられず、自分のまわりだけしかわからない時代でした。私達がおりました処は、地盤の弱い処ですから、建物初め機械の被害はありました。名鉄電車大江駅の電柱が大きくかたむき、電線にてようやく支えられました。終戦後も通る度に当時の地震を思い浮べます。大地震の後には必ず余震があります。この時も何回となくありました。当時私の職場の一角にコンクリートで造った丈夫な一室がありました。工場ですから、中心の柱はほとんどありません。こわれる時は、もろく屋根が一度に落ちてきます。この時コンクリ

ートの一室の空間が大変役立ちました。この様な体験から家の何処か即ち一階に屋根が落ちてもくじけない強い空間をつくり、通路は何時でも退避出来る様障害物をおかない。地震があれば先づ、入口、出口、窓は全部開放し、この強い支えの空間に一時避難して様子を見ることである。それと同時にガスの元栓、火の始末をせなければなりません。普段この様に思っているが、いざ本番となるとなかなか思う様にならないのが常ですが、普段頭の中で思っていれば、ある程度無意識の中に大体出来ると思います。これは私の体験結果をふりかえり申し述べられると存じます。

現在は以前と違い、文明文化の時で便利な世代であると同時に、家庭内には危険物がいっぱいです。自動車もあり、家の外廻りも危険物が数多くあります。一度災害がおきれば、その被害は大きく想像も出来ません故に、個人個人の地震に対する心がまえは重要であります。地震予期が完全にわかる様、災害がおきれば被害を少くする様、皆んなで考え努力して明るい生活をして行きましょう。

私の地震体験

伊藤春生
（豊橋市）

私は横浜市南区大岡町三十二番地で、呉服店を営んで居りましたが、大正十二年九月一日午前十一時五十五分頃、大震災に会い、被災して、無一物で、生れてまもない子供と、老父母と、家内五人で郷里豊橋へ辿り着いたのであります。が、八十二才の今日有るを感謝と共に有り難く、日々を送り御恩を忘れず、皆さんの為にと努力して居ります。忘れた事は有りませんが、拙ない筆で当時の私方の有様を思い出します。

九月一日午前十一時五十分頃、昼食を済ませてから店のお客様と商談後、代金を頂いたと同時位に、南西の方からゴーッと云う音で、丁度列車がトンネルへ入いった様でしたが、続いてドンドンドンと、雷が物凄く音を出す様になったと同時位に、ぐらぐらと上下動から水平動で、とても立っては居られず、此時分から耳がきこえなくなりました。多分恐怖心からと思いました。それ故、我家が番笠をひらいて地面に置いた様に、裏の庇が地面に着いて、仰向けになったので、気が付かぬ程静かな

様でしたので、店に座して居ましたが、つかまり乍ら道路へ出てうずくまって居りました。

やがて小康状態になったので、タンスや仏壇の間に子供を膝にした老母を無事に安全地帯へ避難させてから、南方を見ると二百メートル位先の風呂屋から火が出たが、南西の風故我家は大丈夫と思い、店の商品全部を持ち出し終ってホッとして、裏の住宅地を見上ると、高橋さんと云う大きな旧家で、娘さんの赤い腰巻きを竹竿に旗の様にして軒先高く出した瞬間に、強くなった風が東南に変りましたので倒れ焼けずに助りましたが、風が変ったおかげで安全と思った私宅は遂に焼けました。昔から云い伝えの様にマジナイ、遇然。不思議で、見たのは初めてでした。外にも、屋根上で赤い腰巻を旗の様に振って居たら、三軒、火災から遁れた話も聞いては居りましたが。横浜市街は、大体南北の町ですから、それが南端から火が出て強風に煽られ、ガラスも溶ける程の物凄さで、運河も縦横に有り、広い道路も公園も何んの役にも立ちませんでした。

次に、地震被害二割位火災被害八割位かと思いました。それ故、火で逃げ場を失った方達は運河や橋の下へとび込んだが、林立して居た石油タンクの大爆発で、石油が運河へ流れ込み火の海と化したので、イカダも焼けた有様でしたので、全部の方達は全滅致しましたが、干潮で港へ流れ出ましたが、又満潮で波打際へ無数の人々が打寄せられ目を覆う程でしたが、混乱中で収容もなされずに有りました。

又別に、野毛山と云う小高い山へ道もない所をよじ登ります所を、下から物凄い風火に煽られたので多数の方々は、ばらばらとなだれの様に落ちて来て見るも哀れな場面も有りました。又、ガラス窓の有った高い建物でもガラスが溶けて中は全部だめでしたが、一軒の鉄の扉の銀行で気丈夫な小使さんが窓を全部閉めて中で張番をしたので、無事に銀行を守り抜いた賞として多くの賞金を頂いた由。其他、精神的な被害もかなり有りましたが、流言飛語が盛んでしたので、婦女子に竹槍を持たせ、恐怖心を多少でも静める様にと云う事で、相当効果が有った様でした。

最後に、私事で紙面をお借りする事は誠に心苦しいとは思いますが、八十二才の今日迄、生涯忘れることが出来ない感激のあらましを拙たない筆をも顧ず書かして頂きます。

一、天皇陛下より恩賜金を賜りました事

一、税関の白米倉庫を開放して下さった事

一、郵便局よりどちらも手掛りのないのに口頭で貯金に利子迄付けて頂いた事

一、鉄道も当時被災者に無賃で乗車を頂た事

一、横浜港から清水港迄三万噸の太洋丸で避難させて頂いた事

一、市役所が全滅したので、私が記憶を辿り乍ら作った戸籍簿を提出したら喜んで下さった事

一、被災しながらも町内の皆さんを見るに忍びず、持ち出した反物全部を総代さんを通じて町内の皆さんへ差上げた事が、後に市長さんにきこえ、当時の渡辺勝三郎市長さんから感謝状を送って頂きました事

関東大震災体験記

宮地晴吉
（名古屋市守山区）

大正十二年九月一日の関東大震災は地震よりも火災の被害が甚大で、大火災は二日間に渉って全市三里一物も残さず灰燼に帰し、東京で死者十五万、横浜で十万人を算し、巷に泣く人の子は数知れず、惨状は目を覆う大惨事であった。

私は今七十四歳でありますが、当時二十一歳で東京市芝田村町の病院の勤務薬剤師をしていた時の体験記であります。まず言いたい事は、関東大震災のようなマグニチュード8の地震がくると、文明の機関が一瞬にして停止すると云うこと。

その影響の大きさ重要さを考えておく必要があると思います。当時も、停電、電話不通、水道断水で全く暗夜に光を失った状態に陥ったのであります。今、この原稿を書いている七月一日の新聞によると、米原駅構内でポイントに関する電気系統の故障で新幹線が止まり、三万五千人の乗客に影響を与えたと報じておりますが、この一事をもってしても文明の機関が止まると、その影響が如何に大きいものがあり、重大さを持っているかを再認識しておく必要がある。今日災害時に於ける自衛隊の活動は十分認めますが、それは局地的の小部分の場合の事であって関東大震災では、昔の軍隊の力は今日の自衛隊の比ではない大きい力をもっていたにかかわらず、近衛師団、麻布三連隊の精鋭をもってしても、この大天災に対し救援の力は九牛の一毛にも足りなかったというのが私の実感である。自衛隊への依存度に認識を変える必要がある。

次に、震災対策ポスターをみると柱の下、机の下にかくれる

図が書いてあるが、着想スケールがあまりに「小さい」という感がする。私が見た新橋、銀座あたりの日本家屋は全部絵に書いたように将棋倒しで、屋根が地にはって人間は全部圧死しました。ドンと来る強震で家屋は80%傾き、続く強い余震で家は倒壊するのではないでしょうか。私は一刻も早く機をみて戸外へでよと叫びたい。今避難所に近くの空地を指定し指導しているようだが、私の体験だと芝公園（名古屋の鶴舞公園ぐらいの広さ）を安全地帯とみて、当時荷車やリヤカー、大風呂敷で家財道具を運んだ人の何万人もが（私もその一人）集ったのであるが、あの時東南の銀座方面からと東北の赤坂六本木方面の両面から大猛火、大旋風が渦を巻いて襲い芝公園増上寺境内には大樹があったにもかかわらず火の粉と煙で焼死寸前の有様であった。でも大火焔にかかわらず、芝公園におった人は死をまぬがれたが、浅草被服廠跡に避難した何万の人達は退路を絶たれて隅田川へ飛びこんだ人は水死、残った人々は集団で焼死を遂げたのである。被服廠跡の惨事は避難所に逃げ道がなかった事に原因すると思うので、指定した避難所には第二次大地震、大火災に備えて逃げる道のある処でなければならぬ。又それを一般に周知徹底させておく必要がある。

今都市の中心を避難所としている場合、震災が第二次へ移り予想より拡大されると判断される時は、名古屋で言うならば都心をはなれた東谷山の緑地公園とか、長久手の青少年公園という広大な山野を第二避難所に用意し、そこへ送る対策を考慮に入れておくべきではないだろうか。避難所に逃げ道があること。そして、第二次大型災害に備えて都心に遠い所に第二避難所を考慮してほしい。

今一つ関東大震災では重要幹線であった東海道線が箱根トンネルが潰れて静岡以東全部不通、中央線も山崩れやトンネル破壊で不通、東北本線はまた利根川鉄橋が墜落して舟と徒歩連絡で「大宮に通ず」こんな有様であった。

愛知の場合で言うなれば木曽川の鉄橋墜落で名古屋と岐阜の交通は遮断、中央道の恵那山トンネル破壊で不通、国道153号線に山崩れで落石不通、こんな場合を想定して対策を講じておくべきではないだろうか。

次に関東震災は九月一日の正午に起きたが、当時私の遭遇した場合をお伝えして参考に資したい。病院長の長男は早稲田の学生で夏のことで千葉の海岸へ海水浴に、次男は慶応に在学。その日授業はなかったが登校していた。長女は三越へ買物にで

かけていたのである。処が正午震度六の大地震を境に家族はバラバラになって連絡音信不可能に陥入ったのである。家族の安否はどうなったか不安と焦燥はつのるばかり。そんな中で病院の長女は三日目の朝、次男も三日目の夕方、そして長男は汽車が不通になったので千葉の海岸から東京まで歩いて来たのであるが、自宅まで辿りついたがそこは焼野原。火焔は尚くすぶっていて「あちこち」の土蔵からは尚火焔が吹いている。家族のものの生死は。もし生きていればどこかにいるのか。何処で誰れに聞くのか途方にくれたのである。近頃のサラリーマンは相当遠隔の地から通勤しているのが常である。出張や旅行中の場合も多い。こうした場合、家族の安否連絡にあなたならどうしますか？

五、六日たってのことである。芝公園増上寺の空地に警官が蔦で焼死した人間を運んでくる（当時は無惨であるがしかたがなかった）。次から次へどこの誰だか見わけがつかない。私は今戦時中国民が胸に住所氏名血液型名札をつけていた事を思い出す。金属製のそんなものを身につけていたらと痛感する。いつか誰れかが称えた国民の一人一人に番号があるならこんな時簡単で解り易いと思うがどうか。

私は二日二晩飲まず食わずで芝公園を抜けだし三田の慶応の通りまで辿りついた。つかれが重なって所持の柳行季を枕にまどろんでしまった。目がさめてトイレを催し一寸荷物をはなれて戻ってみると、見知らぬ男が私の行季を担ごうとしている。「荷物泥棒」である。都心をはなれて被害のなかった土地のものが、東京の焼野への火事泥棒に来たのであろう。今日は自動車時代である。相当遠隔から自動車でくるにわか泥棒をたくらむ不心得ものがないとは云えない。被害地の外で無用のもの被害地に入る可らず。検問尋問を厳重に行なって貰いたい。私は九月七日午後七時新宿からでる中央線第一号で郷里の愛知に向ったのである。処が浅川駅と「上の原」の大トンネルが墜落し徒歩連絡である。一里の山道を小走りに歩く。早く上の原駅に着いたら汽車の座席にありつける。女子供連れは悲惨であった。山道の峠を越さねば上の原に着けぬ。当時は仕方なかったと思うが、今こうしたことがあったら、地方の人達を動員して連絡救助に全力をあげてほしい。

関東大震災の体験と意見

渡辺明次郎
（豊田市）

地震が震度が大きく時間が長い程被害は甚大となることは事実である。去る大正十二年九月一日午前十一時五八分。忘れもしない。大地は揺らぐ。関東地方一円と東京を中心に、震度6～7と言う大地震が遠方からゴーゴーと地鳴を立てて発生した大惨事は、衆知の通りである。

私は当時十八才で有楽町数寄屋橋際の印刷工場秀英舎本社植字課勤務でした（現大日本印刷）。脚気のため八月中欠勤していて、東中野の下宿で外へ飛び出て無事避難できたのである。東中野より市中方面を遠望すれば、黒煙立昇り大火災発生十ケ所位から一気に立上る煙を見て、実に胸のつまる思いであった。当日の夕方には新宿方面は焼け尽され、実に見る影もない悲惨な状態と化し、五日の日には元気を出して東京湾から伊豆下田行の汽船の発着時間確認のため、脚気足を引きづりながらレイ岩島から築地方面を歩いて見たが、つかれはてて帰宅した。

まず印象に残るのは焼け野原と化した東京。累々たる被災者の遺体、市電自動車の焼失残骸が実にむごたらしく見られ、言語に絶する阿鼻叫喚の巷と化した。又建築物で残ったのは丸の内ビルディング旧新館と、他に保険ビル数社であった。そのビルの三、四階の外壁は全部揺れ落ちていた。当時有名だった浅草のレンガ造り十二階建の塔、凌雲閣も三階の位置当りから倒れた。この建物は一本の鉄筋も使用せず只レンガ積みだけで仕上げた建物で、あの大揺れでは倒れるのは当然と考えられた。同じレンガ造りで東京駅は余り被害はなく、今も健在で駅として立派に任務を果している。長方形でどっしり根が張ったような丈夫な建方で、あの大地震に耐えられたものと考える。

私は昭和十六年九月四日トヨタ自動車本社工場へ入社三十六年二月九日停年退社まで鋼材、鋼板の材質検査を主として行っていたため、超高層ビル建築には大地震に対し次のような点が気掛りとなる。現在新宿に五〇階建の住友ビルと五五階建の三井ビルの超高層建築が完成している。もし震度6～7位の地震が襲来したとなれば、この超高層ビルが果して無事に耐えられるか、いささか疑問視させられる。大地震時の揺れ方から判断して、基礎上の揺れが建物に対し、15～45度位まで傾くとするなれば、その中間の30度位傾けば上層部の自重により、倒壊に

近い恐れは多分に出てくる。しかし現超高層建築方法は、近代技術の粋いを尽した方法であり、決して倒壊の心配無用と建築技術陣で言われているとしても、関東大震災の体験から判断して、五〇階からの建造物は心配になってくる。もし15～20度位傾いたまま止ったとなれば後の始末が大変である。そこで柱、桁材に採用する材料の材質が重視される。主柱、主桁材を現在一般建築構造用型鋼を使用するとすれば、二〇階以上の高層建築には少々軟かいのではないかと考えられる。

一例としてもっと三原素の多量に含有した材質で、S55C位の炭素鋼か又は弾力性の強い発条鋼SSI5のような硅素、満俺の特に多量に含有した、材料を力学的に応用して適当に割振って使用する必要があると考えられる。大揺れに対しスプリングバック性に富んだ材料を、五〇階の建築を一階から三段階に分け地下三階地上二〇階計二三階までを、SSI5の材質材とS55C材とを半々位に抱き合せ、主柱、主桁に使用し、二〇階から五五階までを、現在の一般建築構造用型鋼材を使用する。狙いは地震により揺れた時点でのスプリングバック性を、最も効果的に発揮させるがためである。中層建築から一般住宅用建築は手抜きさえなければ、基礎から全体について昔の建築方法より遙かに進歩をとげている。震度6～7位になればまず全壊はまぬかれるのではないかと考えられる。

倒壊率の心配もさること乍ら、同時に起き易い出火が最も問題視される。各所から出火が発生すれば大事となりすべて終りに近い。地震後の出火は何よりも第一に防止策をねり上げる必要がある。

大地震発生と同時に大都市道路上での車の交通と、避難者の集団との交通混乱が心配される。都市人口過密と益々増加する車。これを安全地帯へ誘導避難させるには、都市民の多くがよくその地域の正しい状況判断から、最も有利な統一的行動が、しかも敏速に行われるよう日頃の心掛けが必要となる。非常時の殺到混乱の緩和、緊急中にも落着いて行動ができるよう指示訓練が必要となる。

発生し易い出火となる原因を日常注意し合い、都市民が一致団結し一ケ所の出火も出さぬ方法を真剣に考え未然に防ぐことが重要である。火災が発生して石油系燃料、塗料、新建材、家庭用品等から発生する有毒ガスによる中毒犠牲者の多発は、どうしても防止せねばなるまい。これ等を防ぐ方法は地震火災に対しての各地域による規定と、これに基ずく訓練が必要となり

大地震の揺れ、倒壊時の恐しさ、加えて大火災の残酷さを都市民は勿論、国民全体も再認識せねばなるまい。

関東大震災体験記

井上赳
（春日井市）

九月一日大正一二年の関東大震災の五十周年を迎えた。当時筆者は東鉄局運輸課庶務掛勤務で、東京駅ビルの二階で、この世紀の大地変を迎えた。この地震の次の周期がすでに訪れているなどと噂されている折柄、体験記を録して御参考に供したいと思う。

当日は朝から余り暑くはないが、どんよりと曇った重苦しい気分の日であった。

恰度省教高等部生のK君が、夏休みの宿題の仕上げのための資料を求めて来訪、応接室で対談中突如として震幅一二CMという劇しい水平動を主とした地震に襲われた。K君は慌てて応接卓の周りをクルクルと廻る。こちらはこの頑丈な建物が潰れる様なら、東京中の建物は皆潰れると、案外落着いていた。室は降車口の八角塔が本館と繋がるところに在り、外を見ると宮城内で建物の壁か土塀が壊れたと見えて、真黄色の土煙がもうもうと立登る。窓際によって見ると、これはまた何たる壮観？遙かに見下す丸ビルの東と南の出入口から避難する人の波が、堤を切った水の様に、扇の地紙形に道路に向って流れ出ている。建物の高さと同じ距離を逃げねば安全でないと思ってか、皆死にもの狂いである。余震が次々とやって来て室内は危険であるので、自分の机の上を片付ける間も遅しと駅前の広場に出る。

東京駅は四面の乗降場の内、二面の上家が鋳鉄製の柱が折れて倒潰、下敷となって負傷者も出たらしいが、改札口から乗降場に行く通路が沈下した位で、余り被害はなかった様である。

彪大な被害が予想せられるものの状況は全く不明（ラジオ放送開始は二年後）、差当り手の施し様もなく、土曜日でもあり局員は一応退庁して、自宅の安否を確かめることとなった。

約四粁を距てた三田四国町にある宿所（親戚宅）に帰るべく宮城の堀端に向う。丸ビルの外壁には無数のき裂が走っており、建築中の内外ビルの三階辺りに鉄骨に挟まれてぶら下がっている人の姿が二、三見える。東京会館の四階がいびつになって上、下の階がずれている。日比谷公園内のレストランが調理場のフ

ライパンの油に火が入って、早くも火災が発生している。虎の門以西の商店街も軒並みやられていて、商品や家財類を道路に搬出してごった返している。道路には地割れ等は余り見当らない。消防自動車か救急車のサイレンの音が遠く近くに聞える。

家に着いて見ると、唐紙が外れたり茶箪笥が引繰り返ったりした程度で、被害は瀬戸物の破損位に止まり、夕刻までには取片付けも一通り済んだが、勿論停電である。切れた電線からの漏電を慮って電源を切った為である。

銀座神田方面に火災が多発していると見えて、空が真赤に焼けて見える。水道が断水していて大火となる恐れがあり、近所に寝た切りの娘さんとその母親の二人暮しの親戚の家があり、早目に安全な箇所に移すべく、十八になる娘さんを背負って高台の屋敷町に避難させた。

火の手が次第に近まって来るので、貴重品や身の廻りの物だけを持って、町内の人達と一緒に芝公園の芝生の所に避難する。

こうなると逃げるが先で、防火に手を貸す人は勘なかったが、浜松町駅を焼いた火を、幸い夜明け前には近くで喰止めることができたので、一応自分は先に家に帰った。

二日の午後に起きたのが朝鮮人騒ぎである。朝鮮人暴徒三千人が押懸け、残存家屋に放火する。現に街の角々にはチョークで連絡の符号が書いてあるという流言である。皆それぞれ自衛手段を講じて前夜と同じ公園に集まって厳重警戒し、市内及び近郊に戒厳令が布かれた。家を無人のままにして置くのもどうかと思って、自分だけは帰って、枕もとに野球のバットを忍ばせて寝たが、案外よく眠れた。翌朝判ったことであるが、街角の符号は新聞配達人が順序を示すために書いたものであり、何も被害はなかったが、場所によっては日本刀を持った自警団員が一々通行人を誰何し、怪しいと思うと、都々逸を歌わせて朝鮮人でないことを確めたという話もある。撲殺された朝鮮人が多数あったと伝えられている。

三日の朝は近隣も漸やく冷静を取戻したので、異臭紛々たる焼跡の街を通って出勤して見たが、新橋、上野、両国の運輸保線事務所とも全焼していて、本局もまだ体制ができていない。東京駅のコンコースは避難者が一杯で、余震の度にウオーッと唸る様な声を挙げる。呉服橋上には四〇才前後の丸髷の奥さんがお鼻さんと二〇才位の男の子の手を引いて倒れている。少しも苦痛の色はなく、奥さんの頬にはほ笑みの相さえ見える。衣類は表面に出た部分は焼け焦げている。恐らく猛炎による旋風

のため酸素が欠乏して絶息し、街路を舐めた火炎により衣類を焼かれたのであろう。本所の被服廠跡で同じ状態のため窒息し、下積みとなっていたため辛じて息を吹き返した人の体験談によると、真空状態となって身体中の空気が吸い取られる時には、キューッと締め付けられる様で、全身に何とも言えぬ快感が流れたという。

呉服橋交叉点には半焼けの市電二台がエンコしており、中には共に数人の焼けただれた遺体が腰掛けの上に横たわっていた。神田駅構内には累々たる焼死体があったという。隅田川駅の構内で、貨車から降ろしたばかりの馬が、電柱に馳け登るのを見たと言う人があるそうだが、これも恐らく旋風で巻き上げられたものであろう。日本橋通りの丸善本店の鉄筋三階建ての洋館が、逸早くペチャンコになっているのが注目されたが、これは洋書の重みに因るものと思う。

四日も出勤する。勿論利用できる交通機関はないので徒歩である。各課の出勤者で文書課に集まるものが二、三〇人居たが、まだ体制は整っていない。出勤先その他から徒歩で辿り着いた人が、途中見聞して来たことを報告してくれるのは有難かったが、その範囲は極めて狭い、夕方になって旅客主席のS氏から、取纏めのできる人がないので君今夜の責任者になって呉れ、と言われてその任に就いたが、当時二五才の筆者として、異例なことであったとあとで思った。以後一〇日まで局で寝泊りを続け、机の上にクレップシャツだけで睡眠をとったが、寒さなど感じなかった。

東北、常磐線用の客車が、上野駅の客車収容線に到る線路上に沿線の罹災者が荷物を一面に搬出したため引出すことができず、空しく類焼したのは避難列車編成に大きな支障を与えたが、日暮里駅から出る避難列車には、二、三日坐り込まねば乗車の順番が廻って来ず、列車は機関車から客車の屋根まで鈴なりの状態で、跨線橋に頭を打付ける人があるため駅員が橋上から柄の長い竹箒を振り廻わして防いだという事実もある。

猛火に追われた罹災者が家財道具を運ぶのにリヤカーや大八車が多く使われたが、下町方面では道路に充満して焼かれた所も尠くなかった。まだ軽トラックなど普及していなかったが、今後再び同程度の地震が東京を直撃した場合、当時の六百倍近い台数になっているというトラックや乗用車が使われるとしたら、可燃性の荷物の外にガソリンが積まれていることを思うと、まるで火の種を街頭に蒔いている様で、恐ろしい結果が懸念さ

れる。

関釜連絡線の高麗丸が、救援材料や食料品を積んで二日逸早く芝浦港に向け下関港を出帆したのは好手廻しであったが、鉄道公報が復活刊行されたのは一四日付からであった。

結びに私事にも触れて恐縮であるが、筆者の両親は当時郷里熊本に在り。長男、次男である兄と筆者とが東京に住んで居たが、震災直後一流新聞にも、礁氷峠から東の方を見ると波頭ばかりで外には何も見えぬとの記事を掲げたものもあり、二人のことは半ば諦めていたところ、一二日になって「フタリトモブジ」との電報一送達紙ではなく有合せの煙草の包装紙の裏に鉛筆で書いて頼信したものが、そのまま空輸されたものを受取った時は、危うく尻餅をつくところであったという。

私の大震災体験記

島崎歳壽
（豊田市）

私は一九一一年の横浜生れの浜育ちでありまして、今から五十四年前の一九二三年、あの関東大地震に、でくわしたのであります。

大正十二年と云えば当時私は十二歳の少年でした。唄でご存知「野毛の山からノーエ」の野毛の街では老舗と云われた書籍店で、ここは私の叔父の家であり、私はここから学校へ通わせて貰っていたのです。

おりから九月一日とて学校は二学期の始まりと云うのに、夏休みの宿題はまだ残しているし、私は店で参考書と取組みつつ昼飯のお呼びが掛るのを待っていたが、店の時計は正午少々前を示していました。

真夏日の大通りは人通りもなく、照返しの熱風がいやおうなしに店内へ吹き込んでくる物憂いひとときであった。とその時カタ、カタとこまかい揺れが来た。「地震だ」。いつもより、ちょっと長いようだし地鳴りも大きいぞと思っていた。ところが次の瞬間には耳がジーンと鳴るような風圧を感じた。そして身体が宙に浮いた。ふらついて物に捉ることもできないでそのまま地面にたたきつけられるように、転がされていました。図書陳列棚が一枚壁となって頭上に覆いかぶさってくる。咄嗟に私は陳列台の島と島の間に転げ込んだが、忽ちあたりは真暗闇となってしまった。

一体何が起ったと云うのだ。何が何だか分らない闇の中の数刻だったが、目を凝らすと僅かに外光が差込んでいるではないか。もう無我夢中で頭上の羽目板を突破り、外へ飛び出したが、そこは丁度隣家の郵便局との境であり、障害物が何も無かったことが幸いした。私はそこから空地を目掛けて、一気に駈けおりた。

そして崩れ落ちた家の方をふり返ると、羽目板の間から、土埃にまみれて叔父夫婦とその一人娘、それに同居の叔父の義兄が這出てくるのが見えた。ともかくも着の身、着のままの姿、家財はおろか何一つ持たずとも、一家五人はこうして、生命からがら脱出することが出来たのであったが、気が顛倒しているのか、既に大通りを隔てる薬種問屋の倉庫から、物凄いばかりに火の手が上り、火の粉が降り注いでくるのに、大人たちは地面に坐り込んでしまっているのである。子供の私はもう気が気ではない。叔父の手を引張ると「桜木町、桜木町」と喚いたのであった。

この場合、風向きからみて北東に当る桜木町駅広場へ出るより他はないが、行手の道は地割れして、処どころに気味悪い口をアングリと開けている。そこをどうやら駈け抜けて駅前広場へと出て来た。五百平方米もの駅前には既に相当数の避難民の群が集っていて、市電は空車のまま停留場中心に数珠つなぎに停っている。繁華街の伊勢佐木町の方向から、関内（横浜港税関を中心に北西の日本商社、南東の外国商社の地区を併せて関内という）方向にかけてははや火の海となっている。

私たち五人は群集の間をぬって、一散に桜木町駅隣接の東横浜駅構内へと逃込んだのである。ここは少年の私にとっては、日頃の遊び場所の内のひとつであり、云わば勝手知ったる俺んちの庭でもあり、貨車は最適の退避場であることを知っていたので、桜木町高架線を防火壁にした一台の貨車の空いているのを見つけ早速これに乗り込んだのであった。

ひとときの間に乗員仲間は二十名くらいに殖えてきて、私たちは車台の一隅に五人ひとかたまりになって陣取っていた。時時襲ってくる余震は貨車を烈しくゆすぶった。そのたびに貨車の外には悲鳴のような叫び声が上るのだった。

やがて時は午後三時頃か。ガード向うの火勢は一段と烈しくなって、すさまじい爆発音と共に、地獄の業火の熱風が貨車を包み込んだ。とざした鉄扉の隙間からはバラバラと火粉は容赦なく飛込んでくるし、まったく生きた心地もないと云うの

は、このことだと思った。

こうして何時間かの間断なき熱風攻め、火の粉攻めの恐怖のうちに陽はやがて西の方に傾き始め我等の貨車の影も幾本かのレールを跨いで伸び、あたりの火勢もようやくに、衰えを見せはじめた様子である。やれやれどうやら生命だけは助かったと、まったく蘇生の思いで貨車の外に降り立った時、私たちの砦とも頼んだ貨車はところどころ焼焦げを見せながらも毅然として夕闇の中に立っていた。

私の体験記の序章は以上でピリオドを打つのであるが、マグニチュード七・九という関東大震災では地震による死者よりも火攻めによる死者が多かったと云うことは、パニック状態になって、精神の平衡を失った結果がこの悲惨を招いたのだと思います。

私は少年時代の体験から、自分の居住地附近は、すべて自分の家の庭のように、隅から隅まで知っておくことだと、家族の者に言っており、現在でも半径2キロの地理地勢は頭に入れると同時に、脚で確めている次第なのであります。

私の地震体験

足立　知栄子
（豊明市）

当時十六才の私の思いも新たな恐ろしさを語りたいと思いペンを執りました。

住所は横浜市花咲町で野毛山下でございます。大正十二年九月一日午前十一時五十八分。昼の食卓に就こうと思った時に、物凄い轟音が地中から我身の方へ直進するかと思えてハッとして坐り直す暇もあらばこそ上下動の凡そ三十センチも上下へドシンドシンとしたかと思う直撃に此の世の終りかと肝をつぶし座すも横になるもできず箪笥の引手に母と共にしがみついた。箪笥の小引出が抜ける。棚の品が転り落ちる。手元にあった夏座布団を頭に被り其の上下動の永かった事。次に左右に振り動かされ忽ち家の隅が開き空が見えた。少し納った時にやっと人心地がつき、今夜此の家に寝れるかなと思った。玄関の傾いた家は格子戸の開くべくもなく唯、家の中をうろたえて大切な物を取り出す等思ってもみず「火事ダッ」との外の声に驚き母と手をつらね裏口より外へ飛出しました。其の時母はとにかく足

袋を佩かなくてはと申し家の中へ取って返し足袋を佩き財布が手元に転がっているのを急ぎ内懐に入れ再び外へ飛び出しました。

何処へ行く当もなく、唯避難民の一団と火を避けどんどん逃げて、倒れた家も乗り越え辿り着いた所が市内ではありますが山の頂の原でもう其処には多数の人々が来ておりました。

着のみ着のままで中には下襦袢だけの方や又余裕の有った方でしょう十二単の様に着重ねた人もいました。薬籠の蓋で水を頂きやっと胸の動悸も静まりました。

夜に入り下の町々の火災爆発、昼の如く赤々として火災現場では竜巻が起り真赤に焼けたトタン板が宙高く舞い上がり急に落下する物凄さ。山の上では尋ねる人の名を呼ぶ声があちらこちらから聞え心細い限りでございました。

私達の山には皆手に持てる位の荷物でしたので火の粉からの類焼もなく恐ろしながら一夜を過しました。

東京の被服廠跡の避難民は荷物を大八車等で運び込み、其の荷と共に身動きもできず廻りの火災の為に逃場も無く大多数の焼死者をだしました。

九月二日未だ火の燃る中を（この様に申しましても度々大小の地震に襲われ、その度に又も大地震かと肝を冷やした事でございます。）山を下り貯水場のあたりに辿り着きました。囲の中に入り一息入れておりますと其の時、種々の流言飛語に迷う女子供を山の中程に集め中壮会の方々が早くも自警団の様なものをつくり焼残りの家等から窓格子等を壊し手に手に持ち行き合う度に「山河」の合言葉。殺気だった声々に私達は呼吸をひそめ唯々小さくなって夜を過しました。夜通しで「山河」の合言葉の響が胸に染みついております。

無事に九月三日となり、我家の焼跡に立ち唯々呆然と見渡しました。見渡す限りの焼野原も色々な人がたどたどと歩き、立止まり、佇み、或は瓦の下敷きになって怪我をした人、火傷を負った人、家が潰れても大きな机の下で助かった人などの話。命の永らえた事の喜びだか、又は箸も持たない乞食の様な哀れな自分に泣けるのか話の度に涙が出る人達ばかりでした。

大震災からやっと命を取り留めたと思った時初めて飲まず食わずで三日間過ぎ空腹が身に染みました。其の時叔父が安否を気遣い捜しに来て下され洩船を持っている人なので、船は焼けなかったから来る様に云われやれ嬉れしやと共々大変な廻り道をして船に辿り着きました。橋も多数焼け落ち船も焼けた残骸

が河中に有りました。税関の倉庫から焼けた缶詰が拾ってありましたので其れを食べました時の美味しかった事。船中でやっと落着いて母と三日振りに寝ました。ところが臭気が満ちて寝られなくなり船の窓から河を見ますと、海川等へ飛込んで水死した方々が満潮となって、プカプカと筏の様に浮いてくるのを目のあたり見て大変なショックでした。唯合掌するのみでした。私も娘の事故、月の物が終ったばかりなのに此の大震災の色々のショックで又々月のものを見ました。大変困りましたが、叔父が船中から紙其の他の物を下さいましたので助かりました。船中の水桶（浴槽位の大きさ）の水は船がゆれ動くので腐らないから飲んでもよいと云われました。焼跡から木々を拾い湯にして飲みました。焼残りの親類に一週間位かかって落着き皆無事を喜び合いました。庭が広いので雨戸を並べ布団を敷き蚊帳を吊って住居とし、雨降りには傾いた家の中で怖々寝起き致しました。其の後も余震が度々あり夜等は稲妻の様に空が光り怖い思いを致しました。

飲料水等は店の者も焼出された人々が集っておりましたので遠く迄清水を汲みに行き、それはそれは大切に使いました。風呂等は二ケ月位後に蓮田の水を汲み初めて震災の垢を落した事でございます。数日後、戒厳令が出て軍隊が各処に駐屯して下さいまして治安維持も出来、心安らぎました。自警団も組織されほぼ安泰となりました。余日が無いので之でとどめます。

私の地震体験

栗田　金三郎
（名古屋市中村区）

ふる里の村はずれの田畑の真中にある小学校で、陸軍予備兵補充兵の観閲点呼がありました。当時は国際的軍縮の時代でありましたが、我が大日本帝国は軍国主義であり、男子は兵役に関係のある者は定められた年まで軍務に服する義務があった。残暑でありましたが、とても暑い晴れたお昼の十二時、小学校の職員室からばたばた大勢の人が運動場へ飛び出してきました。其の人々は町役場の兵事課員、在郷軍人分会長他二十名位の人が、一同びっくり顔色がありません。ただ口々にどえらい地震だが震源地はどこかと、顔を見合せ何となく心配そうでありました。小学校の運動場の片すみの大木のかげで、持ち物を整理していると、突然体がふらふらと倒れそうになりました。私は

生を受けて初めての大きな出来事で、関東大震災の恐ろしさは半世紀余り過ぎ去った今でも、小地震があると身が縮む様な気持ち。今なお其の恐ろしさは、忘れる事が出来ません。

其の日の晩までに勤め先の名古屋の綿布問屋の青年店員であったので、どうしても帰らねばなりませんでした。私のふる里は名古屋の西方二十四キロはなれた静かな農村。又四キロ程徒歩で尾西線森上駅にきますと、駅前には大きな看板に大文字で出来たことが表示してありました。東京方面で大地震があったとか。被害の程度は通信機関の不通で全くわかりませんでした。森上駅で待ち人はほとんど心配顔。相変らず余震は引き続きあるので、生きた気持ちはありませんでした。名古屋駅まで来ると関東方面大地震被害甚大。ほかのことは相変らず不明。

二日目をむかえた私の勤め先では特に東京方面には商取引関係、親戚、知人がたくさんあるので、当時三十才の若主人が慰問隊長となって、店員五名、計六名一同がリックサックの中に薬、食料のパン、米、梅干、ビスケット一ぱいつめこんで、汽車で行ける所まで行く、あとは徒歩でどれ程かかっても目的地までと元気で出発しました。

日時が過ぎると、だんだん東京方面の情報がはいる様になった。被害は益々大きく、家屋は倒れ各所で火事が発生死傷者多数とのこと。次から次とはいる情報。東京市は焼け野原。元被服しょう跡へ家財を持ち込む人、避難して来る人で満員となった所、四方から発生した火事で家財に火がつき、人は逃げる所はなく、家財の下にもぐりこんでも丸焼きの生き地獄。当時の発表では死者十万といわれました。

引き続き情報。東京では不定の朝鮮人の暴動が起きたとの事でありました。陸軍は東京市内に戒厳令がひかれました。其の時点で社会主義者の大杉栄と妻、子供三人は甘粕憲兵大尉の命で陸軍歩兵加茂下上等兵が銃刀でつき殺しました。陸軍軍法会議の結果無罪と決定されました。其の理由は上官の命令は事の如何を問わず服従すべしとあったからです。後日、甘粕憲兵大尉は大日本帝国の主導権を持つ満州国陸軍に赴任されたとのうわさでした。

大混乱となった東京市内の経済も次第に落ち着き、日本銀行は焼失通貨推定三億円。それをみかえりにして震災手形三億円保証すると発表されました。引続き余震はありました。

名古屋においては、名古屋駅頭で関東地震の避難民が続々やって来る。婦人会、女学生が毎日おにぎり、お茶の接待の奉仕

がしばらく続きました。名古屋市内においては各町内に自警団を組織出来まして、徹夜警戒を始めました。一ケ月も過ぎて、次第に人心経済も平隠になると、東京市場の物資が焼失のため、被害のなかった集産市場は関東方面、又東北方面から仕入客が名古屋へおしよせてきました。売れる売れるの各倉庫は空っぽになった。今迄売れ残り物も売り尽すと云う好景気がやってきたので、私の勤め先商店では意外の収益であまりの嬉しさで地震の恐さを忘れて喜こびと変った様なことでありました。老主人の初言で商店一同の名義で関東震災の罹災者に御見舞金を初め、日用物資多量贈りました。

私は生を受けてから初めて受けた大地震でも何の用意もしてなかった。今は亡き母親の娘の時代に濃尾大地震の恐しさは聞いていましたが、直接地震に出合っていませんから、あう地震はそんなに恐しいものか思うくらいのことで、予備知識もありませんでした。

現在は誠に行き届いた行政指導がありますので、地震に関する心の準備は十分に出来、いつ発生しても関東震災の様な驚きはしない幸せな時代だと思うと共に、心から感謝をしております。満七十五才の老いたる男。

関東大震災の想いで

都筑芳雄
（豊橋市）

関東大震災は私が満九才、小学校三年の時でした。家は東京都墨田区緑町二丁目（当時は本所区緑町）米屋が家業でした。大正十二年九月一日、午前十一時五十八分それは昼食が始まろうとした我が家でも食卓に料理が運ばれ、さあ一同で食事をとしかかったその瞬間です。ズシンと異様な音と共に床が突きあげられ、あっと思う間もなくぐらぐらと揺れだしたのです。家族は祖母、両親、十五を頭に八月に生れたばかりの赤子までの五人の子供、それに店員一名の九人家族でした。揺れの激しさに誰れも立つことができず、タンスや柱にしがみついてただ震えてばかりいました。

父は「伏せろ!!　伏せろ」と二、三回言ったと思います。大きな揺れが一、二回あり続いて小さな揺れが何回も続きました。「さあ外に出るんだ、早くしろ。」父の大声でフラフラし乍ら店に出ました。米俵が五、六ケ崩れて入口をふさぎ外に出られません。父と浅やん（店員）の二人でそれを押しのけ、やっと

家族一同表の通路に出たのです。家の中からぞろぞろ出て来る人で道はいっぱいです。

裏の家で、二、三軒潰れた。電車通りでも数軒潰れた。などと話しが聞えます。子供達は恐しさにかたまって震るえておりました。あちこちで昼食が外の道路上で始まりました。

でも口にする人はごくわずかで、小さい子供達は父や母にしがみつき泣くのみでした。

三十分、一時間過ぎた頃、誰れかの「火事だ!!」と叫ぶ声、そしてまた別の方で「火事だ!!」の声、父は大通りの電車道へ飛んで行きました。「駄目だ。あっちもこっちも火の手が上っている。逃げるのだ。」廻りが急に騒しくなりました。家に入り荷物を出す者、子供を背おう者、二階から物を投げる者、荷車やリヤカーに荷を積んで電車通へかけてゆきます。「被服しょうだ」「被服しょうだ」、口々に叫んで人と荷は十万坪もあると言われる本所被服しょうへ向っています。

父の知りあい人が飛んで来ました。「相生警察の巡査達が本所被服しょうへ逃げろと指揮している。火事はもうそこ迄来ている。さあ被服しょうへ行こう。」と申します。被服しょうは私の家から十分程です。隣近所の人達もさあ行きましょうとさそってくれます。が父はチョットの間考えていましたが、「反対方向だ。深川へ逃げよう。荷物は捨てろ。」一家は近くの二の橋を渡り深川に入りました。人、人、人、そして火の粉が降りそそぎます。火の渦にまきこまれ一家はバラバラに別れてしまいました。

父は祖母と二人どう逃げたのか上野の山に来ていたそうです。九才の私は一人きりとなり、大人にもまれながら逃げる途中、いま橋という橋の上にとり残された市電があり、その乗り降りのステップに足をかけ、髪ふりみだして叫んでいた女の人、それが離ればなれになった母だったのです。生れたばかりの赤子と別れた母は、父に申し訳けないとそこを離れようとしません。

私は無理に母の手を引っ張り火の粉を浴びながら、やっと隅田川の川岸につき、今岸を離れようとした船に二人は飛乗ることができました。十五才の姉は十一才の妹と七才の妹二人の手を引き、赤子を背おってやはり隅田川につき、浅瀬の中に飛込んで、火の粉がくれば水にもぐり、頭の毛を焦しながらやっと助かったそうです。でも赤子はグッタリとしており、三日目に人から戴いた梨の汁を飲ませた処、始めてオギャーと泣いて生き返ったそうです。

私達一家は七日目に亀戸の親類の家で一同会うことが出来たのです。九月一日が来る度に、私を可愛がってくれた女教師の長尾先生始め、クラスの約半分三十名程、そして近所の人達があの本所被服しょうで亡くなっているのが想い出されます。この不幸な方々にくらべ、九人の家族がバラバラに別れながら一人も怪我もなく無事に会えたのは、父の強い言葉「深川へ逃げろ」でした。おそらく皆にさそわれて被服しょうに逃げていたら一家は全滅していたでしょう。

父は日露戦争の体験から気付いたそうです。戦火の中で大きな物を持って逃げる人は敏しょうさに欠け、荷物が多く集まれば飛んでくる火の粉が避けられない。一ケ所にあまりにも多くの人や物が集まると火災がおきると逃げようがない。地震に備えて非常用物出しを用意するのは結構だが子供に持たせたり、大きな物、重いものは絶対に避けてほしい。身軽さがなにより第一だ。ただし水だけは絶対に持って逃げてほしい。こう話す父も今は亡き人ですが、我が家では家訓のようにして水筒だけは常に用意してあります。

私の地震体験

足立弘
（春日井市）

愛知県下の関係した震災として、震度(4)以上のものとしては明治弐拾四年十月の濃尾地震、震度(6)を最大として大東亜戦の末期に三件を記憶して居るが、今回は大正十二年九月一日の東京大震火災だけは忘れることの出来ない大震火災であり、充分体験しているので、その体験談を発表することにしたい。

その当時、私は東京赤坂の近衛歩兵第三聯隊第九中隊の週番上等兵として勤務中であった。九月一日、土曜日愈々明日の日曜日週番勤務を無事に修了したことから、例の浅草方面へと計画して居った矢先、午前十一時五十八分、練瓦造りの四階建兵舎が、急邊爆発音と共に大きく動揺し始めた。途端に、あっ地震だと感ずると共に、事務室の各火元を消し兵舎の外へ飛び出した。間もなく市内方々に黒煙が吹上った様子が見える。

その時、近衛第二旅団司令部から当聯隊宛命令があった。

旅団命令（歩兵通信班を構成し、当旅団司令部を起点として摂政の宮殿下の下まで有線電話（回線を構成すべし）

これを受けた近歩三聯隊は聯隊命令として、

足立上等兵は構成班長として部下七名を引いて…（以下旅団命令文と同じ）

と下命された。依って直に週番職務を次の者に引継ぎ戦時用機材を一通り受領して第一通信班を編成し、直ちに我が第三聯隊本部と隣接する近衛第二旅団司令部に急行、此処を起点として一路宮城に向け発進し、宮城正門衛兵司令に対し摂政の宮殿下のご所在を尋ねたところ、只今赤坂離宮にご避難あらせられたとの回答。依って急遽赤坂離宮に布設替を開始した。午后一時半頃赤坂離宮正面玄関で、摂政の宮は何処かとの問に対し、目下この奥の広芝のお茶席にご避難中であらせられる旨答えた。お茶席の場所は本館の裏、奥の林の中にある。とても広大な芝生の入口。お茶席なるが故に極めてせまく、民間のお茶席と何等変ることなく、その廊下に辿り着き、お附武官に摂政の宮は何処かと尋ねたが口を閉して返事なし。その筈武官の向う側に秩父の宮とお話しておいでだった。秩父の宮は演習その他で時折りお話したことがあるので「よう歩兵通信か。」とのお言葉。依って命令文を御報告申上ぐると共に、通信所設置の位置を尋ねた。折返し此処で良い。此の廊下で。ここはせまいから外に場所がないとのお言葉。電話機の備付を終って、直ちに近歩三聯隊長に完成報告をすると共に双方の通信所から保線兵を出して、関係架線の保持対策に努めた。時に午后二時半であった。

夕方当通信所の保線兵が謄写版刷の夕刊をもって来た。市内の惨状、それに戒厳令の発令も見えた。秩父の宮殿下が「おいそれは何か。」とお尋ね。「はい、謄写版刷の夕刊です。どうぞ。」「一寸拝見。」と他の方々とご覧になり、ありがとうとお返しになるが、もう必要ありませんからと申上げた。

夜に入り広大な離宮の敷地内は、平常であれば外灯、庭園灯等で相当明るい筈なのに、今日の災害によって総ての電源が停止され、只市内の火災焔に依り、夕焼けの状況を現すだけ。芝生の周囲は総て夕闇。それに霞が懸ったように見え出した。近づいて見れば近衛師団の護衛兵が静かに押し寄せ、朝明けともなれば知らぬ間に水の引いたように居なくなった。我々通信班は廊下と屋外に仮眠する程度で、宮様方と一晩を過した。

翌二日は引続き電話当番と保線の業務を担当したが、市内の交通通信は何一つ使用出来ない実情。依って中野電信隊が早朝から、戦時半永久線の架設作業。夕方までに完成したのでこれに我が通信班の任務を引継ぎ目的を完了した。

翌三日からは、宮城を中心とした軍用電話の布設替から保線

業務に従事した。しかし民間の通信機関は未だ回復の見通しもたたない状況である。急ぐ用件で困る場合、たまに通る自動車に手を上げると停車してくれる。行先を尋ね途中までもと頼むと、心易くのせてくれる。今の車と異り、ドアを開けないで踏台に立つのみ、殆んど皇華族の方の車が多かった。近衛の兵隊で出来るだけ便宜を計って下さったと感謝した。

避難する市民の多くは、手押車で家庭内の被服その他必要荷物を積んで広場に逃げる者で、場合によっては積荷に火がついて火災を起す例が多く、被服廠跡に集った市民参万四千人が惨死した事実がある。その他日本全国から移住した市民は、市内に落着く先もなく数日後だったと思うが、国鉄が地方へ向け発車する鉄道は乗客が殺到して、客車貨物車の区別なく、車の屋根まで乗客が乗って走る様を、現今の国民では想像も出来ないだろう。中央線勝川駅ですら東京発の列車に乗った乗客に焚出を何日も続けた事実があると承った。

此の大震火災は時間的に昼食時期であり、各家庭で使用中であったガスの不始末が原因で、此の大火災を招いたものと断定し得る。

将来の対策としては地震と感じた場合は火事を連想し、何事も打捨て発火原因となるガス、電気の始末を第一とすることを習慣づける必要がある。

私の地震体験

武内　孝
（名古屋市北区）

「地震」私の場合この言葉は世間で云う関東大震災を指します。最早五十余年も昔の事ながら、あの時の出来事は昨日の事のように思い出されます。今回愛知県の募集に際してその一端を記して見ました。

一、時。大正十二年九月一日正午二分前。

一、当日私の居った所。千葉県安房郡丸山町の生家。位置は房総半島の先端白浜と外房鴨川市との中程位の所で、太平洋岸より一キロ程入った海岸段丘上。海抜二〇メートル位の農村地帯。

一、当時の私の年令。八才、小学校三年生。

一、父の職業。従業員五人の零細瓦工場主。

一、附近の状況。県道沿いにある七軒程の農村集落の内の一

軒で、二〇〇メートル位行くと大体何でも揃う田舎の商店街があり、その中程を幅三〇メートル位の丸山川が横切って流れている。その先一キロ程の所に小学校があり、更に一キロ先の本籍地に祖母と叔父が住んでいました。

前日の大雨が止み、晴れ上った一日は二学期の始業式の日でした。式だけでしたので十時半頃には帰宅していました。その日、母の実家の村のお祭りに行く為、十一時過ぎに他出中の父を除いて昼食を済せました。凄く暑い日でしたので素裸になって座敷で寝転んでいますと、ドーンと地響きがしたと思うと家がグラグラ揺れ出しました。母は、皆早く外へ出よと云って赤ん坊の弟を背負い台所へ火を消しに行きました。私は兄と二人で瓦を干す広場迄逃げ出しましたが、直ぐに立っておれなくなり腹ばいになって揺れ動く家を見ておりました。波の様に動く大地につれて大きな茅ぶきの家がギシギシと音を立てて揺れていると、屋根の重みで柱が梁のつけ根の所から折れドドッと土煙りをあげて倒れてしまいました。揺れ出してから五分位かと思いましたが、後で母に聞くと火を消して裏から外へ出るのがやっとであった由、三分位だったかも知れません。気がついて見ると隣り近所の家も全部倒れていました。暫くして近所の人達が集って来て安否を確め合いましたが、幸いどの家にも怪我人はありませんでした。その場での話し合いで全部の者が近くの竹藪の傍の大木の下へ集りました。そして倒れた家の雨戸を持って来て並べ上に莚を敷いて野宿する事にしました。

三時頃叔父が真青になって走って来ました。村も町並も全滅で倒れた家の下敷きになった人も沢山おり、学校でも残っていた高学年の女生徒が七、八人亡くなった由。来る途中の橋も落ち町の中は道路に倒れ込んだ人家の屋根を踏んで漸く来たとの事でした。夕方には千倉町に行っていた父も無事帰りました。道路は何処も通れず線路沿いに歩いて来たとの話しでした。隣村にある県立農業学校が燃えて煙も見えるのに誰も消しに行く気配もありませんでした。夕食は倒れた家の下から堀り出したと云う近所の人からお握りを頂きました。そうしているうちにも休みなく余震が続き十分か十五分おきに、遠くでドーンと音がすると一分位経った頃グラグラと揺れる。これが夜になっても続き子供でも眠れぬ程でした。この余震は段々と少くなり二、三日後には一日数回程度に減った様に思います。

夜が明けて、二日になり真赤な太陽が上りました。普段なら日の出の時だけ赤い太陽が十時になっても昼になっても真赤な

のです。池の水は半分にもなり魚も放り出された程地面が揺れ、道も田圃も剄る所で亀裂が走り、住む家もこわれた上にも、見上げてもまぶしくない太陽を見て、未だこれから何が起るのかと不安で一杯でした。後での話しでは家々の倒れた時に舞い上ったホコリの為との事でした。その後も色々な事がありました。館山方面では津波があり海底が隆起したので外海も危いとの噂で近くの小山に避難したが嘘だった事。何処の家でも廃材でバラックを作った事。朝鮮の人が井戸に毒を入れるという嘘で、大人は見張り小屋を作りお寺の半鐘を持って来て吊り下げ昼夜交代で詰め、皆は半鐘が鳴ったら田圃の稲の間に隠れろと云われたが、半鐘が役立った事は一度もありませんでした。その時は何が嘘で何が本当なのか解らず群集心理は恐しい事だと思います。昔の田舎の事で子供には物資の不足等は左程感じませんでしたが、愛煙家の父の煙草が切れて、仕事にも何にも手のつかない様子を見て可哀想でなりませんでした。

学校は九月の末から始まりました。授業が再開されても学校は使えず、学年単位で分散し、近くの倒れたお宮やお寺の庭での青空教室でした。黒板と即製の腰掛けだけの教室で、授業中に夕立が来て直ぐ解散し裸足で雨の中を走って帰る途中の落雷の恐しかった事。秋頃赤十字の天幕の診療所が出来たり、又夜は着剣した兵隊が要所要所に立った事等色々と思い出されます。あの地震で我家の最大の損失は、色々の面での過労の為か父が体を損ね早死した事。私達の運命も大きく変った事。延いては人生観等にも影響を与えました。

関東大震災体験談

宇井ちゑ
（豊田市）

私は只今満七十一才の老人です。私が十七才の娘盛りの時、大正十二年七月十七日夜、憧れのまだ見た事もない東京へ坂口医院田舎の方の奥様につれられて、夜行列車汽車に乗りて十八日の朝、京橋の坂口病院へ見習看護婦として入りました。坂口博士は京橋と本郷とに病院を持って居られました。私は京橋の方に御世話になりました。病院内もまだわからない九月一日の正午時です。第一回の大地震が起り、治療所の医療電気機械、消毒した医料器はみんなひっくり返り、重い機械もいざり出て室の壁はめりめりと取れて立って居られませんでした。初めは

遠い所の火の手を三階から見て居りましたが、すぐ目の前に火の手が上り危険になり、院長先生初め奥様も看護婦達もみんな水閘舎に逃げましたが、橋が有り、其の橋を馬を引いて居る人荷物を背負って居る人、もう人々の波。足も地に着いて居ないほどの逃げまどう人の為、みんなばらばらにはぐれて私達東京を知らない者ばかり三人になりました。ただ人の波におされて水閘舎までたどり着きました。

其の時はもう川の向うは火の海で大きな建物は唸を立てて燃え次々と倒れて、もうここは危険だから浜離宮に避難せよとの事で、人の波、人を呼ぶ声、泣き叫ぶ声、只火に追われて逃げまどうばかりです。私は病院の奥様が顕微鏡を前にすえ、これだけは焼きたくないと言って居られたので、大きい方を手にさげて逃げ歩くうちに持つ所の金が手に喰い込んで我慢が出来なくなり、自分の帯をほどき帯で顕微鏡を背負いて逃げました。浜離宮の門は常には閉ざされて居るのを其の時は避難民のために門を開き、避難民は家財道具なぞ荷物を持ち込んだためそれに火の粉が飛んで来て燃え、つむじ風が起き、火の粉はまるで花火のように舞い落ちて焼ける物はみんな燃えてしまいました。私達は海の入江の岸の土手にはり付き、ござを水びたし手拭をぬらして口にあて、ござをかむりて二時間位は息するのも苦しいほどでした。

風も静まり朝になりました。日比谷公園に行けとのことで、日比谷公園では一日一回おむすびが配給されました。避難民が一列に並び一人一個のおむすびもトラックで運んでもたちまちなくなってしまい、一人でも列を乱すものなら大変でした。水がのみたくても水道は断水。買う物もなし。

京橋の病院の焼け跡に立退札が立って居て、本郷の病院に居るとの事で私達は喜んで本郷の方に行きますと言いましたら、警察の方は本郷も大部分は焼けて居るから、此に居れば一日一回の配給もあるからと言われましたが、なんとしても死んでも行ける所まで行きたいと日比谷を後にしました。京橋から本郷までは電車で行っても時間が掛るのに、それに橋はみんな落ちて一つ橋と言う橋まで行かなければ渡れませんので、焼野原になった町には警察官がところどころに立って道しるべをして居て下さいました。聞いては歩きして一つ橋までやっと歩きました。木の所は全部焼けて、中の鉄管だけ丸い鉄管を一列になり一人づつ渡るのです。下の川には水死体が上向の人伏せた人等重り合って、川の流れも出来ないほどでした。やっと鉄管を渡

り電車通りと思われる所に来ますと、真黒に焼けて男女の区別も分らない死体があっちこっちに見られ無残な有様でした。

一軒も残った家のない焼け野原に道を聞いては歩き、本郷の病院の少し手前に菊坂と言う所がありましたが、もう少しの処まで来て安心したのと二日二夜のまず食わずの身体に一度に疲れが出て、一歩も歩けなく地にすわりこんでしまいました。でも最後の力をふりしぼりて病院の門まで来ました。先生や奥様が玄関まで出て迎えて下さいまして、先生や奥様の顔を見るなり挨拶も忘れて泣き伏してしまいました。でも無事でよかった。お腹がすいたろう。早く食堂に行きごはんをおあがりと言われて食堂に行きましたら、もう玄米食でした。本郷の大きい病院に来て驚きました。京橋の方は三階建てでも地盤がやわらかいし立ちが高くて横がせまいから、ゆれがはげしくて立って居られないほどゆれましたのに、本郷の病院は真白い壁に一ケ所のひびもありません。それに地盤がかたいためゆれも少なかったとの事でした。京橋の病院から残った物は私が最後まで背負った顕微鏡だけでした。院長先生や奥様に大変喜んでほめて頂きました。

突然に起る出来事ですから常に非常時にそなえて鰹節とか氷砂糖の様な物を用意して、火で煮るとか焼かなくては食べられぬ様な物はだめです。其の点鰹節なぞは其のまま少しづつかじり付いて食べれば一本でも幾日かしのげるとの事です。

今私は若い時には病弱な夫のため苦労した時もありましたが、老いて居りますが若夫婦孫に守られながら舞踊、小唄、短歌と自分の気ままにさしてもらい幸福な日々を送って居ります。山里の田舎に生れて、我が一生ふり返り見て、私は自分ほど幸せな者はあまりないと思います。これもあれもおばあちゃんの作品だと後に残して置きたいと思います。書道、短歌、舞踊は舞台場面はビデオに取っていつでも写して見れる様にしてあります。

大正十二年関東大地震

藤原とみ
（豊橋市）

私は地震の起る前空色で体験。朝さわぐ声で外へ出て見ると、空一面火の色、灰も降っている様に見える。だんだん濃くなって行く。昼頃になると今にも何か起きそうな無気味な空となる。

誰となく火山爆発だ、いや太陽の変化だ。さわぎは大きくなる。外に出ていては危ない。皆部屋に戻る。間もなくだった。パンと大きな音と共にゴウゴウドンドン音立てて地がうなってきた。ガタガタ家がゆれる凄い音。地震だ、無我夢中ではって道路へ。波の様に音立ててゆれる。ゴロゴロころぶ。亀裂だ、水道破裂。どなる声は聞えるけど一歩も動けない。それ今のうちだ。裏の広場へ行け。夢中。はって行った。アア助かった、うれしい。涙。まだ油断するな。今からゆり返し。津波もくる。頑張れの声。もう至る所で火事。又耳をつんざく音にびっくり。石油タンクの破裂だった。見る間に、海は真赤。一週間野宿でした。食物よりも一番飲水がないのがつらかった。下手な文句と字。恥い。お役に立てば。

関東大地震

伊藤政吉
（名古屋市瑞穂区）

私は神奈川県横須賀市で大正十二年の関東震災に出合った。大正十二年九月一日正后二分位前でした。突然ぐらぐらと震度七以上の大地震で有りました。丁度鉄道の線路上でしたので、見る見る内に鉄道の線路はあめの様にぐにゃぐにゃに曲り、目前にあったレンガ造りの教室は崩れ落ちて、私の友人約三十名位下積みに成り、全員死亡すると云ういたましい事態が生じました。私は線路上をはいながら一生懸命海辺に到着致しました。

岸辺のコンクリーと堤防は一米位割れ目を生じ、満潮で有った海水は瞬時にして轟々と音を立てて、下の方に引きました。約三米位でした。其の中海軍の船で一時地震の治まる迄と海に逃れたのです。

処が海軍の大きな重油タンクが轟音を立てて燃え上り、たちまち大焔と成って海面に燃え広がり、延々十粁位迄及びました。危険を感じて再度陸に戻り其の間約二時間位だと思います。

我が家に帰る途中、町の家々は倒壊して足のふみ場も無い有様でした。私の家は隣りの家が先きに倒れた為、御蔭で四十五度位にかたむき難を逃れました。直ぐ横は劇場が立つ広場で有りましたので、大勢の人が集合して度々余震が来るので第一夜を明かしたのです。

御互に助け合い約一ヶ月位経ちました。水道は止まり、電気は破壊され、とぼしき食物を御互に持ち寄り約二ヶ月が過ぎま

した。

其の中、他府県より慰問品がぞくぞくと運ばれて来たので、やれやれと一安心致しました。

其の頃、朝鮮人が暴動を起すと流言飛語が有り、夜は夜警をした。海軍の巡回が始まり治安が維持され一安心致した。

地震が起きてから三月位で少しづつ片付けて、どうやら一日一日を過す事が出来る様に相成りました。

私の地震体験

川島秀則
（名古屋市緑区）

大正十二年九月一日。この日は朝から真夏のように暑い日であった。東京深川の下町に住んでいた。小学一年生の私は、学校へ夏休みの日記帳を持って行き家に帰って来ると、母親に小遣いを一銭もらうと駆けだすようにして菓子屋の店先に立った。その時、突然グラグラ、グラグラと大地震が来ると同時に、家並の屋根瓦がザザーア、ガラガラと土ぼこりをあげながら落ちてきて、道路の両側の軒下に山のように積りかさなった。私は菓子箱にしっかりつかまって立って居たが、菓子屋のおばさんは顔色を変えよろけながら家具につかまって仏壇の前に行き手を合わせてお題目を唱えていた。しばらくユラユラとゆれていたが、地震がやむと母は頭に何かをかぶりながら「秀ちゃん、秀ちゃん」と私を探しに来たが、私が瓦礫の山を踏みながら出て行くと、「秀ちゃん、大丈夫だったの」とホッと安心したようだった。母に手を引かれて家に帰ると、父は「怪我しなかったか」と私を見まもった。

その頃はテレビもラジオも無い時代で、何も聞くことは出来なかった。遅めの昼食を食べて近くの電車通りへ出てみたが、地震で停電した街は電車も通っておらず、勤めに出ていた姉は仕事を半日で終え、電車の止った道を歩いて帰って来た。電車通りの街角にあった銀行で二階へ上げてもらい、窓から四方を見渡したが、はるか遠方に又それより少しへだてて左手に黒い煙がモクモクと立登っていた。火事になったのである。しかし停電して水道の出なくなった町は消火のしようもなく燃えるがままであった。消防自動車は宮城の広場へ集り、皇居を守ったと云う。消防車の避難のためもあったのかも知れない。

午後三時半頃から私の家の前をゾロゾロ、ゾロゾロ、ゾロゾ

ロと人々が通り出した。背中に、両手に荷物を持って。避難する人々は、ますます数を増していった。母はオニギリをこしらえ重箱に詰めると、風呂敷に包んで「しっかり持つんだよ」と私に持たせた。私達も多勢の人波に混じって歩き出した。私は町角で物につまづいて転ぶと持っていた包を投げだした。すると町角のつぶれた家の屋根の下に白いオニギリがころげ出た。母は「いいよ行こう」と云って手を引いた。越中島の原っぱに大勢の人々が避難し、自転車がずらりと沢山並んでいた。布団、家具などの山もあちこちにあった。

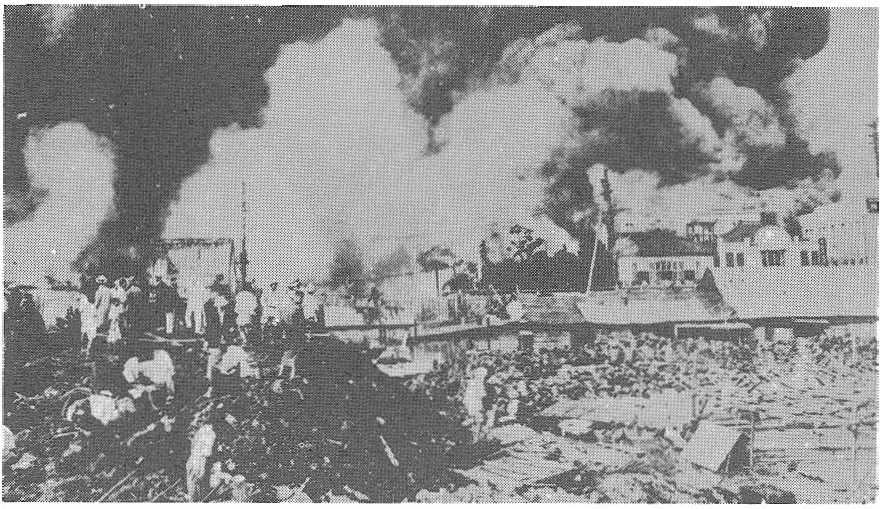
間もなく誰が云うともなく「あそこなら大丈夫だ」と陸軍糧秣廠の広場にゾロゾロと行き始めた。早く行った人は家財道具を奥の方に積んでいた。私達は遅かったので門のすぐそばより中へ入れなかったが、しばらくすると奥の家財道具に火がついたらしい。ワーッと云う声と共に群衆は我先に逃げようとして門の方へ殺到して来た。私は父と母に手を引かれて門を出たが、争って押して来る力に女性が数人ころんで踏みつぶされてしまった。

私達は越中島の練兵場へ逃げたが、火の粉を伴った熱い風が吹いてくる。葦の生えた泥水の上に坐り込み側に落ちていた掛布団を拾って来て、泥水につけてはかぶり、つけてはかぶりしてうずくまっていた。熱風がパッパ、パッパと顔に吹き付け呼吸が苦しくなり息が詰りそうになったが、その時急に風向きが変ったのか涼しい風が吹いてきて助かることが出来た。私の前に若い女の人が二人横たわって死んでいた。火災が消えると、真暗な闇の中に鍋や金物をガンガンたたきながら、「○○ヤーイ」「××ヤーイ」と我が子を、我が妻を呼ぶ声があちらにもこちらにも聞えた。

夜が明けるとあたり一面、焼け野原に変っていた。父と母は相談して麻布に行って見ようと決めたらしい。私は両親に手を引かれてトボトボと歩いた。焼けた家の横を通ると、へッついとお釜だけが残っていた。永代橋は焼け落ちて渡れず、電車の線路だけが曲って残っていた。若い男の人は線路をはって渡っていた。隅田川に小舟の渡し舟が出ていた。長い行列の後について待った後、渡し舟に乗ることが出来た。舟が静に出て川の真中に来ると、船頭は舟を止めてしまった。そして「皆さん一人一円づつ出して下さい。さもなければ、向う側へつけられない」と云った。皆は驚いた顔をして一円づつ出し、無い人はとなりの人が出し合って向側へつけてもらった。

二日の午後麻布の親類にたどり着いた。伯父さんは「ウチでも皆学校へ避難しているのだから一緒に来て呉れ」と云われ、学校の講堂へ入った。そこで乾パンを一包づつ配給された。三日の午後になってスイトン（すまし汁に小麦粉の団子の入ったもの）を一碗づつ配給を受けたが、其の時の美味しかったこと。

後で聞いた話ですが、深川公園に避難した人は四方の民家が焼け、逃げ場を失い殆んどの人が焼死したと云う。公園の池の水はお湯のように熱くなったと云われています。



内幸町から見た東京電力付近（関東大地震）

その他の地震の体験

私の地震体験

細田佳世
（名古屋市北区）

伊豆沖地震の時、私は主人の仕事の関係で下田市武ケ浜に住んでいました。わずか三年前のことなのに記憶力の弱さに情けない思いですが・・・。

その日、丁度朝八時十五分からのテレビ番組を見終えて湯茶を沸すべくガスに火をつけ、お湯の沸く四～五分の間に玄関そうじでもと庭に降りた途端に、ゴォーとあの地震が来たのです。大きな横ゆれ二～三回、すぐに縦ゆれに代り一歩も動けず、立っていることも困難でゆれる我が家にしがみつきました。

五～六分のゆれだったと思います。ゆれが収って家の中に入り、ガスの火のことを思い出し台所にとびこみました。幸いなことにガスの火は静かに青く燃えています。家の中も何ごともなく風呂場の棚の上の化粧ビンが落ちてコッパミジンにわれていただけ。強い恐怖を感じた割にはひどい地震じゃなかったのかなーとその時は思いました。

三～四十分後に二人の子供が小学校から帰って来ました。

「お母さんったら迎えに来てくれないんだからー、みんなお父さんかお母さんが学校へかけつけたんだよ。」

「学校はカワラが落ちて大変だったんだ。そこ迄先生が送って来て下さった。」

「橋の所の家三軒みんな一緒にかたむいて、○○食品の鉄筋の家もころんじゃった。」

「後の山（武山）見てごらん。くずれて自動車も通れない。港橋も通行禁止さ。」

「八百半（スーパー）なんか野菜がごろごろころがってガラスもわれて見て来てごらん。」

こうふんさめやらぬ子供達の報告です。

お昼前買物カゴさげて家を出ました。なる程子供達の報告通りです。瓦の落ちた屋根がずい分眼につきます。どの商店もこ

ろげ落ちた商品や割れたガラスケースの後始末でてんてこまいです。スーパーも休業、空の買物カゴで家に戻りました。

伊豆沖地震での下田の被害は多数の犠牲者の出た南伊豆にはくらべようもありませんが、大なり小なりの被害はどの家も受けました。ゴォーと地鳴りと共に来た最初の大ゆれ以後三～四日は昼夜の別なくゆれ通しオチオチ寝れない風で、それが一日十五～六回のゆれから十二～三回、七～八回と除々にへりながらも一ケ月近くゆれつづく毎日でした。この余震で最初無事だった家も瓦が落ち壁がくずれ、家がゆがみ始めました。バラックまがいの我家（だからこそ無事だった?）も例外ではありません。戸が締らなくなり壁もくづれました。地震では全部の余震が終ってみないと本当の被害はつかめないんですね。

小学校では前々から避難訓練がされ、当日もゴォーと来た途端先生が窓と出口を開け放ち、子供は机の下にもぐり、ゆれがおさまってから鞄を背おって運動場に整列父兄の迎えを待つ、の手順がキチンと出来たそうです。火のことも忘れ家にしがみついていた私とは大違いです。頭でよんで覚えるより身体で訓練でしょうか。

すぐ傍に二級河川の稲生沢川が流れ前は海なのに他者の悲しさ、地震の後には津波等と思わずのんびりしていた私。地元の方の中にはすぐさま荷物をまとめて避難された方もありました。幸い津波はありませんでしたが、市の広報者が津波の心配なしと流したのは地震から一時間以上も後のこと、本当の津波が来たら間に合いません。役所云々より自分の安全は自分での心がけが第一かと思います。

二階の方が安全とはよく云われます。でもタンスが倒れ、本箱が倒れ危険を感じて外にとび出た人の話は二階以上の方ばかりでした。自分の持ち家なら重く大きい家具は一階の方へおいた方がと思いました。倒れた家具では細い脚つきテレビが多かった。テレビは台座の上に乗せた方が安全です。

商店は地震後三日は完全に休業、その後も手持ちの品を売るだけの状態がつづきました。交通がだめになったからです。二～三日は何とか食べていかれるだけのストックが常時必要なんですね。よく云われる非常もち出しの品物の準備はもちろんですが・・・。

私の地震体験は悲惨なものでなく軽度のものです。初めのわずかな一瞬ですべてが決ってしまう地震に対しては無力感の方が強いのですが、今後の私の心がけとしては、

1. 火を使っている時は火の近くに居ること。
2. 地震の大小にかかわらず火を消すこと（ようすを見てから等と火を消しそびれないように。）
3. その為にも地震のゆれの中でも動けるように練習すること。

と思っています。

私の地震体験

小田島　よし子
（蒲　郡　市）

先日の事、夕方主人が帰宅し、子供達が待ちかねたように食卓についた。一家四人の水入らずの夕食が始まりました。長男の範和が口いっぱいに食べ物を含み「あのね、今日保育園で主任先生がマイクで地震が来ました。と放送してね。僕机の下に隠れたんだよ。」おもしろかったなぁー！。と思い出し笑いをして口から吹き出しました。避難訓練の出来事を説明しようとしたのでしょう。子供は逃げ隠れしたその時の友達の慌てふためいた恰好のおかしさ、おにごっこ遊びのような楽しさのみで、恐怖のない避難訓練のようでした。私はその時、ふっとあの新潟地震の事が頭に浮びました。私は右手におはしを持ち、あの恐怖の思い出を話し始めました。

私が高校一年生の時、五時限の授業前そろそろ席に着かないと先生が見えるわよの掛け声で、皆席に着きました。その時ぐらっとしました。ねえー地震じゃない。天井の蛍光灯を見たら少しゆれていました。と同時に、又ぐらっと来ました。キャー助けてーの悲鳴と恐怖、階段が揺れ、壁が落ちて来てそれでも必死で屋内体育館まで逃げてゆきました。体育館は外へ出ようとする人でいっぱい。戸が重いのと変形したのと、又出口が狭いのにだれも広く開けようとせず、押せ押せと早く出てようの怒鳴り声のみでした。人にもまれて、やっとグランドに出たら足元から地面に亀裂が入いり、ぎくっとして立ちすくみました。目の前を蛇が這うように地面が割れて行くし、園庭の池の鯉が打ち上げられ地面に放り出されました。今思えば私の背丈より高く池の水が上下に揺れていました。もうどこへ逃げればよいのか茫然としてしまいました。その内、昭和石油のタンクが燃えあがり、まだ真昼だと言うのに黒煙で暗闇と化しました。それから少したって、先生から下校して下さいとの説明があり帰宅の途につきました。帰りも、道路が割れ、物が倒れ、凄まじさを

物語っていました。十年以上も経過したのにいつまでも、地震の話をする時はこの体験が鮮明に浮びます。

子供が「お母さん、その話本当の事」と聞きました。「嘘じゃないわよ。」私もあの時の怖さが身にしみたようにむきになって言い返しました。「じゃお母さん地震が来た時は、どうすれば一番安全なの。」それはねと主人が話し始めました。「机とか丈夫な物の下にすばやく、くぐって地震の揺れが終るまでその場を離れない事。わかった。」「なんで外に逃げたらいかんの。」「それはね、屋根から瓦が落ちて来たり、建て物が倒れたりするからだよ。」「ふうん」と子供も納得したようでした。理屈では分っていても、いざ地震が来るとみさかえもなく逃げ廻った事が反省させられました。これからは災害に際しては常に冷静に対処して行きたいと思いました。

短かい夕食のひとときでしたが、我家も地震に対して子供の話のお蔭で再認識をしました。

夕食はとても充実した楽しい雰囲気で食事が進みました。

新潟地震

市川吉郎
（犬山市）

昭和三十九年六月十六日午後一時二分、突如として強震に見舞われ、市内至るところに地割れ、陥没、隆起を生じ建物の倒壊、土砂を含む地下水の噴出で床上、床下の浸水ひどく惨状極に達し、何回となく続く余震におびえながら、瓦斯・水道・電気のない原始的な生活を余儀なくされた当時の不安な気持は未だに忘れることはできません。

新潟に転勤して丁度三年目、漸く土地の生活にもなじみ、恵まれた四囲の環境に毎日の生活も楽しいものでしたが、予期しなかったこの災害に新潟市民の一人として凡ゆる困苦欠乏に耐え、互いに励まし助け合い、そして復旧に協力した過ぎし日を想うにつけ、今更のように当時の色々な体験が思い出されますが、最近特に話題となり真剣に考えられている地震対策の何にかにお役にたてば幸いと考え、思い出のいくつかを選んで書いてみました。

(1) 非常用品は最少限度確保しておこう！

現在どの家庭でも瓦斯を使用していますが、この供給が一旦停止すると炊事は勿論、家庭の生活が実に暗いものになってしまいます。新潟地震発生のとき我家で一応、非常用として保管していた懐中電灯、ローソク、燐寸等は僅かではあったが多少の心強さはありました。しかし、当分復旧の見込みがないことが判るとこの手持だけでは不安となり、早速近所の店に飛び込み当座必要と思われる日用品や非常食の代用になるものを買うことにしたが、ここで新潟市民の良識ある姿を発見しました。というのは、自分が飛込んだこの店にも、まとめ買いをする客で混雑していましたが、店の人は「一人でも多くの人に差し上げたいので、協力願います」ということで、例えばローソクは一人で三本まで、ビスケットは一人何瓦迄という具合で、この良心的な販売は極めて好評であった。この店に限らず、市内の各店が協力して売り惜しみや価格のつりあげはなかった・・・。災害時に特にこの点はお互いに理解し、協力すべきことだと思います。

(2) 水の有難さを知る。

水が如何に大切なものか、有難いものかをこの地震でほんとうに知ることができました。

地震の翌日、勤務先の取引先がトラックで水を届けてくれたとき、地震後はじめて生き返った喜びをしみじみと味うことができました。コップ一杯の水が自分のノドを通過したとき、初めて水のうまさを知りましたが、これは経験者でなければ知ることのできない素晴らしい味です。その後関係当局のご努力で一日に何回となく給水トラックで巡回給水をうけましたが、その都度各家庭から手に手にバケツをさげて給水車の囲りに長い列を作ったこともむしろ懐かしい思い出になりました。この日から一度使用した水はすぐ捨てることなく、次から次へと有効に無駄なく使用することをお互いが自発的に実行したことも、地震で学び得た生活の知恵ではなかったでしょうか。

(3) 火を消せ！ 火事出すな！

地震の発生と同時に誰からともなく、ごく自然に、しかも大きな声で叫ばれた言葉である。一人の不注意。一寸した不用意から一旦火災が発生すれば防火用水もその機能を失しているときであるから、地震の災害は更に大きなものとなり文字通り収拾がつかない大惨事になることは実に明白であります。

火を消せ！、火事出すな！、実に短かい言葉ではあるが、新潟市内の民家から一件の火災も発生しなかったことは災害防止

に対する切実な叫びを一人一人が忠実に実行した成果だと思います。

(4) 災害時の車の運行に思い切った制限を!

災害時にはその規模、状況にもよりますが、救援、警備、復旧、通信、医療その他、緊急活動を必要とするものが多々ありますが、これらの適切な運営とその処理に支障をきたさざるよう、必要な公用車（借上げも含む）の確保と、その他の車の通行制限も緊急に対処すべきものの一つではないでしょうか。そのため災害地区内を走行する公用車には災害時のステッカーを交付し、これを貼付していない車の走行は一切禁止する等は必要な措置でしょう。

(5) 防災体制の確立と機動性を望みます

防災体制はどの市町村でも平素から組織されていますが、災害発生と同時に、その状況と程度に応じて、十分に行政機能が発揮され臨機応変の措置がとれるものでなければ意味がありません。災害時に設けられる災害対策本部は、平素から十分に練られて作成された防災計画に基ずき、機敏な活動体制に切換えを行ない被災地の住民に徒らに不安、焦慮を与えず一ときも早く復旧と救援に立上り、明るい郷土の建設に卒先、協力が得られるよう万全の方策を講じていただきたいことを切望いたします。

私の地震体験

杉山昇一
（名古屋市北区）

話しは三十三年前の昭和十九年のことです。そんな古い体験でも恐怖と凄まじさに私の脳裡より消え去ることなく昨日のように思われてなりません。

昭和十九年九月一日、志願兵として十八才で名古屋にあった中部第二部隊陸軍歩兵隊に入隊しました。三ケ月で当時の軍隊は第一期を終了して各部門に別れて配属されることになっていました。私は下士官候補生として豊橋にあった陸軍教導学校に入校しました。

終戦も間近い昭和二十年四月頃だったと思いますが、演習（訓練のこと）のため静岡県三ケ日町方面に行ったときのことです。

いまでもある二俣線の阿知波という駅の前を通りかかったと

き突然道路が横ゆれしました。地震である。指揮官が全体止まれの号令とともにあとは号令をだす指揮官も号令を受ける兵隊も驚きと恐怖に包まれて自分自身の避難でてんでばらばらに散りました。

教官も百戦錬磨の強わ者で至るところの戦場を駆け巡ってきた人でも地震には勝てないとみえ、慌てふためき道路わきにあった竹やぶにと向っておりました。揺れは一層強くなる一方で約三、四分も続いたと思われるが、今度はゴーと云う音と共に上下に揺れるようになってきたと思うと、道路に亀裂ができ地元の老人が足を挟まれ悲鳴をあげていましたが助けることもできず、這って竹やぶに向かうのが精一ぱいでした。道路に亀裂ができた直後だと思いましたが、今度は道路東側に建っていた二階建の一軒家が道路側に大音響と共に倒壊しました。私もやっとのことで竹やぶ迄行きました。音の人や父母より話の中で地震が起きたら竹やぶに行けといわれていましたが、確かにその通り竹やぶに入ったら揺れは少く立つこともできるようになりました。しかし、道路は依然として揺れ動いていました。

約十分位だったと思いますが止みました。二、三時間のように思われました。

地震が終り私達は目的地に向い再び隊列を組んで前進しようとして前方を見たところ、二俣線の線路が曲り電車が西側に傾むき地震の凄さまじさを物語っておりました。

電車の中の人はさぞ驚きどのようにして避難したか。又負傷者等はなかったか。私達は心配しつつ命令どおり前進してゆきました。

後日聞いたことですが、震源地は私達がいたところより約二千米東の浜名湖底であったそうです。私もたびたびそれ以前にも以後にもあい、体験もしましたが、あれ程強力な地震はありませんでした。私の体験やその時の模様からみて感じたことは次のような点に気を付け行動すれば被害を最少限度に止めることができると思われます。

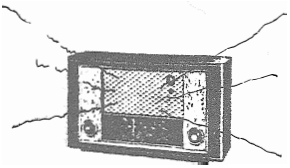
先づ常に避難場所、最も地盤の堅いと思われる一番最短距離で避難できる場所を探して家族及び近隣の人に知らせ、お互いに意見の交換をして置くことです。次に沈着冷静に行動すること。今新聞とかいろいろの資料で持出し物等準備するように云われていますが、命があってのことです。先づ火の用心と避難訓練が先決問題です。なまじ非常持出の救急薬品、食料品等を準備して置くと、その方に気を配って動作は遅くなり、例えそ

れを持出したとした場合避難動作は緩慢になり命を落すことにもなります。何を置いても先づ一早く避難して自己防衛に努力することです。

私の地震体験

栗原幸子
（一宮市）

私はまだ、大きな地震の体験はしておりませんが、昭和四十九年の一年間、主人の都合にて栃木県で過ごしました。その時震度4位の地震にあいました。この地方は、こちらとは違って、絶えず小さな地震があり、最初のうちは、多少の揺れでも脅え、落着きませんでした。数揺れる事に自信が付き、脅えていた私でしたが、この地震の時には、回りが広い空地でしたので、一時は飛び出そうとも考えましたが、慌てる事なく、じっと我慢出来る様にまでもなり、これ以外の小さな地震で炊事などしている時にでも、きちんと火を消すまでにもなりました。今考えて見ますと、以前にもちょいちょい地震にあいましたが、その時にはまだ人に頼り、自分でどうするという事を思ってもおらず、何が何でも外に飛び出してしまう事しか考えませんでしたし、こんなに地震がなかった為に、地震に対して何の関心もなく、学生時代にはよく、地震の訓練も行ないましたが、やはり同様でした。こちらに帰った現在、地震地震と騒がれていますが、帰ってからは、殆んどといっていい位、地震にあっていませんので心配ですが、栃木県で実際予行演習を試みる事が出来、私はここで初めて地震に深い関心を持つ事が出来ました。これからもこの時の事を忘れず、普段から心掛ける様、努力が出来ます。



編集後記

原稿の文章については、編集者が字句等について一部修正を加えたところがありますが、できるだけ原文のままとしました。

編集の方法としては、まず東南海地震と三河地震が愛知県に大きな被害を出した地震として特に関係深いので、これを最初にまとめました。そして、それを体験した地域別に区分して、地域ごとの特性を見出すように努めました。次いで、関東大地震についての体験談をまとめ、最後に新潟地震等をもってきました。なお、各項目の中における体験談の順序は、原稿の受付順に整理しました。

地震体験記録集

―― 関東大地震・東南海地震・三河地震 ――

昭和53年1月

編集　愛知県総務部消防防災課
発行　名古屋市中区三の丸3丁目1－2

印刷　東海プリント社
名古屋市西区白塚町3－2